

Oracle® Identity Manager

デザイン・コンソール・ガイド

リリース 9.0.3

部品番号 : E05091-01

2007 年 4 月

Oracle Identity Manager デザイン・コンソール・ガイド, リリース 9.0.3

部品番号 : E05091-01

原本名 : Oracle Identity Manager Design Console Guide, Release 9.0.3

原本部品番号 : B32453-01

原本著者 : Don Gosselin

Copyright © 1991, 2007 Oracle. All rights reserved.

制限付権利の説明

このプログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。

独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りが無いことの保証は致し兼ねます。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段（電子的または機械的）、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software--Restricted Rights (June 1987). Oracle USA, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このプログラムは、核、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションへの用途を目的としておりません。このプログラムをかかるとして使用する際、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性 (redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。万が一かかるプログラムの使用に起因して損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

Oracle, JD Edwards, PeopleSoft, Siebel は米国 Oracle Corporation およびその子会社、関連会社の登録商標です。その他の名称は、他社の商標の可能性があります。

このプログラムは、第三者の Web サイトへリンクし、第三者のコンテンツ、製品、サービスへアクセスすることがあります。オラクル社およびその関連会社は第三者の Web サイトで提供されるコンテンツについては、一切の責任を負いかねます。当該コンテンツの利用は、お客様の責任になります。第三者の製品またはサービスを購入する場合は、第三者と直接の取引となります。オラクル社およびその関連会社は、第三者の製品およびサービスの品質、契約の履行（製品またはサービスの提供、保証義務を含む）に関しては責任を負いかねます。また、第三者との取引により損失や損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

目次

はじめに	ix
対象読者	x
ドキュメントのアクセシビリティについて	x
関連ドキュメント	xi
ドキュメントの更新	xi
表記規則	xi
サポートおよびサービス	xii
オンライン・ヘルプ	xii
1 Oracle Identity Manager のアーキテクチャ	
概要	1-2
利点と主な機能	1-2
Oracle Identity Manager の3層アーキテクチャ	1-3
第1層: クライアント	1-3
第2層: アプリケーション・サーバー	1-4
第3層: データベース	1-4
2 Design Console の起動	
起動方法	2-2
3 Design Console のメイン画面	
概要	3-2
Design Console のメニュー・バー	3-3
「File」メニュー	3-3
「Edit」メニュー	3-3
「Toolbar」メニュー	3-4
「Help」メニュー	3-4
Design Console のツールバー	3-5
Design Console のショートカット	3-6
Design Console エクスプローラ	3-7
Design Console ワークスペース	3-8
4 Design Console の基本機能	
特殊フィールドとフォーム・タイプ	4-2
データ・フィールド	4-2
「Lookup」フィールド	4-2

「Date And Time」 フィールド	4-3
ボックス	4-4
Notes ウィンドウ	4-4
フォーム・タブ	4-5
Assignment ウィンドウ	4-6
検索（問合せ）の実行	4-6
検索（問合せ）フィルタの作成	4-7
検索の結果	4-8
問合せ結果セット	4-8
問合せのパフォーマンス最適化	4-9
結果セットでの制限超過	4-9

5 ユーザー管理

概要	5-2
「Organizational Defaults」 フォーム	5-2
「Policy History」 フォーム	5-3
「Policy History」 タブ	5-4
グループ権限の割当て	5-5
用意されているグループ	5-6
「System Administrators」 ユーザー・グループ	5-6
「Operators」 ユーザー・グループ	5-6
「All Users」 ユーザー・グループ	5-6
「Self Operators」 グループ	5-6
「Administrative Queues」 フォーム	5-7
管理キューの作成	5-8
「Administrative Queues」 フォームのタブ	5-8
「Members」 タブ	5-8
管理キューへのユーザー・グループの割当て	5-9
管理キューからのユーザー・グループの削除	5-9
「Administrators」 タブ	5-10
管理キューへのユーザー・グループの追加	5-10
管理キューからのユーザー・グループの削除	5-11
「Reconciliation Manager」 フォーム	5-11
リコンシリエーション・イベントの表示と管理	5-14
「Reconciliation Manager」 フォームのタブ	5-15
「Reconciliation Data」 タブ	5-16
Processed Data	5-16
Unprocessed Data	5-16
未処理フィールドのマッピングまたは修正	5-17
プロセス一致ツリー（ターゲット・リソースのみ）	5-18
プロビジョニング・プロセス・インスタンスのリコンシリエーション・イベントへの リンク	5-19
「Matched Users」 タブ	5-19
ユーザー・レコードのリコンシリエーション・イベントへのリンク	5-20
Matched Organizations	5-20
組織レコードのリコンシリエーション・イベントへのリンク	5-21
Reconciliation Event History	5-21

6 リソース管理

概要	6-2
「IT Resources Type Definition」 フォーム	6-2
IT リソースのテンプレート (リソース・タイプ) の定義	6-3
「IT Resource Type Definition」 フォームのタブ	6-3
「IT Resource Type Parameter」 タブ	6-3
「IT Resources」 タブ	6-4
「IT Resource Type Definition」 表	6-4
「IT Resources」 フォーム	6-5
IT リソースの定義	6-5
IT リソース・インスタンス・パラメータへのアクセス権限の設定	6-6
「Rule Designer」 フォーム	6-6
ルール作成	6-9
「Rule Designer」 フォームのタブ	6-10
「Rule Elements」 タブ	6-10
「Usage」 タブ	6-13
「Rule Designer」 表	6-14
「Resource Objects」 フォーム	6-15
リソース・オブジェクトの作成	6-17
「Resource Objects」 フォームのタブ	6-18
「Depends On」 タブ	6-19
「Object Authorizers」 タブ	6-19
「Process Determination Rules」 タブ	6-21
「Event Handlers and Adapters」 タブ	6-22
「Status Definition」 タブ	6-23
「Administrators」 タブ	6-25
「Password Policies Rule」 タブ	6-26
「User-Defined Fields」 タブ	6-27
「Process」 タブ	6-27
「Object Reconciliation」 タブ	6-27
サービス・アカウントの管理	6-31

7 プロセス管理

概要	7-2
「Email Definition」 フォーム	7-2
電子メール・サーバーの指定	7-3
「Email Definition」 フォーム	7-3
電子メール定義の作成	7-4
「Process Definition」 フォーム	7-7
プロセス定義の作成	7-9
「Process Definition」 フォームのタブ	7-10
「Tasks」 タブ	7-11
プロセス・タスクの追加	7-11
プロセス・タスクの編集	7-12
プロセス・タスクの削除	7-12
「Data Flow」 タブ	7-12
プロセス・フォーム・フィールドへの親リソース・フォーム・フィールドの マッピング	7-13

子プロセス・フォーム・フィールドへの子リソース・フォーム・フィールドの マッピング	7-13
リソース・オブジェクトのデータ・フィールドとプロセスの間のマッピングの解除	7-14
「Reconciliation Field Mappings」 タブ	7-14
ターゲット・リソース・フィールドの Oracle Identity Manager へのマッピング	7-15
マッピングの削除	7-17
「Administrators」 タブ	7-18
プロセス定義へのユーザー・グループの割当て	7-18
プロセス定義からのユーザー・グループの削除	7-18
プロセス・タスクの変更	7-19
「General」 タブ	7-19
プロセス・タスクの一般情報の変更	7-21
「Integration」 タブ	7-23
プロセス・タスクへのアダプタまたはイベント・ハンドラの割当て	7-24
アダプタ変数のマッピング	7-25
プロセス・タスクのアダプタまたはイベント・ハンドラの削除	7-25
「Task Dependency」 タブ	7-26
先行タスクのプロセス・タスクへの割当て	7-26
プロセス・タスクからの先行タスクの削除	7-26
プロセス・タスクへの依存タスクの割当て	7-27
プロセス・タスクからの依存タスクの削除	7-27
「Responses」 タブ	7-27
プロセス・タスクへのレスポンスの追加	7-28
プロセス・タスクからのレスポンスの削除	7-28
生成タスクのプロセス・タスクへの割当て	7-28
プロセス・タスクからの生成タスクの削除	7-29
「Undo/Recovery」 タブ	7-29
取消しタスクのプロセス・タスクへの割当て	7-29
プロセス・タスクからの取消しタスクの削除	7-30
リカバリ・タスクのプロセス・タスクへの割当て	7-30
プロセス・タスクからのリカバリ・タスクの削除	7-30
「Notification」 タブ	7-31
電子メール通知のプロセス・タスクへの割当て	7-31
プロセス・タスクからの電子メール通知の削除	7-32
「Task to Object Status Mapping」 タブ	7-32
プロビジョニング・ステータスへのプロセス・タスク・ステータスのマッピング	7-33
プロビジョニング・ステータスからのプロセス・タスク・ステータスのマッピング 解除	7-33
Editing Task ウィンドウの「Assignment」 タブ	7-34
プロセス・タスクへのルールの追加	7-36
プロセス・タスクからのルールの削除	7-37

8 Design Console を使用した Oracle Identity Manager の管理

概要	8-2
「Form Information」 フォーム	8-2
Oracle Identity Manager のフォームまたはフォルダの追加	8-3
Design Console エクスプローラの変更	8-4
「Lookup Definition」 フォーム	8-4
参照定義の作成	8-6

「Lookup Code Information」 タブ	8-6
参照値の作成と変更	8-7
参照値の削除	8-7
「User Defined Field Definition」 フォーム	8-8
ユーザー定義フィールドのターゲット・フォームの選択	8-9
「User Defined Field Definition」 フォームのタブ	8-9
「User Defined Columns」 タブ	8-9
「Properties」 タブ	8-13
「Administrators」 タブ	8-14
「System Configuration」 フォーム	8-15
プロパティ定義のインスタンスの作成と編集	8-16
プロパティ定義のインスタンスへのユーザーまたはグループの割当て	8-17
プロパティ定義のインスタンスからのユーザーまたはグループの削除	8-18
「Remote Manager」 フォーム	8-18
「Password Policies」 フォーム	8-19
パスワード・ポリシーの作成	8-20
「Password Policies」 フォームのタブ	8-20
「Policy Rules」 タブ	8-20
「Usage」 タブ	8-24
「Task Scheduler」 フォーム	8-25
スケジュール済タスクの作成	8-27
タスク属性の追加	8-28
タスク属性の削除	8-28
カスタム・スケジュール済タスクの削除	8-28

9 開発ツール

概要	9-2
「Adapter Factory」 フォーム	9-2
「Adapter Manager」 フォーム	9-3
「Form Designer」 フォーム	9-3
フォームの作成	9-5
「Form Designer」 フォームのタブ	9-6
「Additional Columns」 タブ	9-6
データ・フィールドへのフォームの追加	9-10
フォームからのデータ・フィールドの削除	9-11
「Child Table(s)」 タブ	9-11
フォームへの子表の割当て	9-12
フォームからの子表の削除	9-13
「Object Permissions」 タブ	9-13
ユーザーが作成したフォームへのユーザー・グループの割当て	9-14
ユーザーが作成したフォームからのユーザー・グループの削除	9-14
「Properties」 タブ	9-15
データ・フィールドへのプロパティおよびプロパティ値の追加	9-16
カスタマイズされた参照問合せのプロパティおよびプロパティ値の追加	9-17
データ・フィールドからのプロパティおよびプロパティ値の削除	9-20
「Administrators」 タブ	9-20
ユーザー作成フォームのレコードに関する管理権限のユーザー・グループへの割当て	9-21
ユーザー作成フォームのレコードに関するユーザー・グループ権限の削除	9-21

「Usage」タブ	9-22
「Pre-Populate」タブ	9-23
「Default Columns」タブ	9-23
「User Defined Fields」タブ	9-23
フォームの追加バージョンの作成	9-24
「Error Message Definition」フォーム	9-24
エラー・メッセージの作成	9-25

10 ビジネス・ルール定義

概要	10-2
「Event Handler Manager」フォーム	10-2
「Data Object Manager」フォーム	10-5
「Data Object Manager」フォームのタブ	10-6
「Attach Handlers」タブ	10-6
データ・オブジェクトへのイベント・ハンドラまたはアダプタの割当て	10-7
イベント・ハンドラまたはアダプタの実行スケジュールの構成	10-7
データ・オブジェクトからのイベント・ハンドラまたはアダプタの削除	10-7
「Map Adapters」タブ	10-8
「Reconciliation Rules」フォーム	10-8
リコンシリエーション・ルールの定義	10-9
ルール要素の追加	10-9
ルールへのルールのネスト	10-11
ルール要素またはルールの削除	10-11

11 Oracle Identity Manager のロギング機能

概要	11-2
ログ・レベルの設定	11-2

A リファレンス

表	A-2
ルール要素	A-2
電子メールの変数	A-9
データ型	A-12
システム・プロパティ	A-17

B サービス・アカウントの管理

概要	B-2
サービス・アカウントの変更	B-2
サービス・アカウント・アラート	B-2
移動したサービス・アカウント	B-3
API	B-3
サービス・アカウント管理の動作	B-3

C フォーム・バージョン制御ユーティリティ

FVC ユーティリティの有効範囲	C-2
FVC ユーティリティのコンテンツ	C-2
FVC ユーティリティの説明	C-3

リリース・ノート C-3

索引

はじめに

この章では、『Oracle Identity Manager デザイン・コンソール・ガイド』の対象読者および表記規則について説明します。Oracle の関連ドキュメントの一覧も示します。

注意：これは、オラクル社による Thor Technologies 社の買収に伴う暫定リリースです。一部の製品およびドキュメントでは、依然として旧社名（Thor 社）および旧製品名（Xellerate）が使用されていますが、今後のリリースで変更される予定です。

対象読者

『Oracle Identity Manager デザイン・コンソール・ガイド』は、Oracle Identity Manager Design Console のユーザーを対象としています。このガイドでは、の、日常業務と管理業務に関する基本的な機能について説明します。Oracle Identity Manager の開発ツールの詳細は、『Oracle Identity Manager Tools リファレンス・ガイド』および Oracle Identity Manager SDK を参照してください。

このガイドでは、Oracle Identity Manager Design Console の動作についてのみ説明していません。Oracle Identity Manager 管理およびユーザー・コンソールの機能と使用方法の詳細は、『Oracle Identity Manager 管理およびユーザー・コンソール・ガイド』を参照してください。

ドキュメントのアクセシビリティについて

オラクル社は、障害のあるお客様にもオラクル社の製品、サービスおよびサポート・ドキュメントを簡単にご利用いただけることを目標としています。オラクル社のドキュメントには、ユーザーが障害支援技術を使用して情報を利用できる機能が組み込まれています。HTML 形式のドキュメントで用意されており、障害のあるお客様が簡単にアクセスできるようにマークアップされています。標準規格は改善されつつあります。オラクル社はドキュメントをすべてのお客様がご利用できるように、市場をリードする他の技術ベンダーと積極的に連携して技術的な問題に対応しています。オラクル社のアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility Program の Web サイト <http://www.oracle.com/accessibility/> を参照してください。

ドキュメント内のサンプル・コードのアクセシビリティについて

スクリーン・リーダーは、ドキュメント内のサンプル・コードを正確に読めない場合があります。コード表記規則では閉じ括弧だけを行に記述する必要があります。しかし JAWS は括弧だけの行を読まない場合があります。

外部 Web サイトのドキュメントのアクセシビリティについて

このドキュメントにはオラクル社およびその関連会社が所有または管理しない Web サイトへのリンクが含まれている場合があります。オラクル社およびその関連会社は、それらの Web サイトのアクセシビリティに関しての評価や言及は行っておりません。

Oracle サポート・サービスへの TTY アクセス

アメリカ国内では、Oracle サポート・サービスへ 24 時間年中無休でテキスト電話 (TTY) アクセスが提供されています。TTY サポートについては、(800)446-2398 にお電話ください。

関連ドキュメント

このマニュアルは、次のドキュメントを読んで理解していることを前提にしています。

詳細は、Oracle Identity Manager ドキュメント・セットに含まれる次のドキュメントを参照してください。

- 『Oracle Identity Manager JBoss 用インストール・ガイド』
- 『Oracle Identity Manager WebLogic 用インストール・ガイド』
- 『Oracle Identity Manager WebSphere 用インストール・ガイド』
- 『Oracle Identity Manager ベスト・プラクティス・ガイド』
- 『Oracle Identity Manager グローバリゼーション・ガイド』
- 『Oracle Identity Manager 管理およびユーザー・コンソール・ガイド』
- 『Oracle Identity Manager 管理およびユーザー・コンソール・カスタマイズ・ガイド』
- 『Oracle Identity Manager Tools リファレンス・ガイド』
- 『Oracle Identity Manager Audit Report 開発者ガイド』
- 『Oracle Identity Manager API 使用法ガイド』
- 『Oracle Identity Manager 用語集』

ドキュメントの更新

オラクル社は、最新かつ最適な情報の提供に努めています。Oracle Identity Manager 9.0 のドキュメント・セットの更新情報は、次に示す Oracle Technology Network のサイトを参照してください。

<http://www.oracle.com/technology/documentation/index.html>

表記規則

このマニュアルでは次の表記規則を使用します。

規則	意味
太字	太字は、操作に関連する Graphical User Interface 要素、または本文中で定義されている用語および用語集に記載されている用語を示します。
イタリック	イタリックは、ユーザーが特定の値を指定するプレースホルダ変数を示します。
固定幅フォント	固定幅フォントは、段落内のコマンド、URL、サンプル内のコード、画面に表示されるテキスト、または入力するテキストを示します。

サポートおよびサービス

次の各項に、各サービスに接続するための URL を記載します。

Oracle サポート・サービス

オラクル製品サポートの購入方法、および Oracle サポート・サービスへの連絡方法の詳細は、次の URL を参照してください。

<http://www.oracle.co.jp/support/>

製品マニュアル

製品のマニュアルは、次の URL にあります。

<http://otn.oracle.co.jp/document/>

研修およびトレーニング

研修に関する情報とスケジュールは、次の URL で入手できます。

<http://www.oracle.co.jp/education/>

その他の情報

オラクル製品やサービスに関するその他の情報については、次の URL から参照してください。

<http://www.oracle.co.jp>

<http://otn.oracle.co.jp>

注意： ドキュメント内に記載されている URL や参照ドキュメントには、Oracle Corporation が提供する英語の情報も含まれています。日本語版の情報については、前述の URL を参照してください。

オンライン・ヘルプ

Oracle Identity Manager Design Console のオンライン・ヘルプにアクセスするには、「Help」メニューから「Administrator's Guide」を選択します。

Oracle Identity Manager のアーキテクチャ

この章では、Oracle Identity Manager のアーキテクチャ、利点および主な機能について説明します。次の内容について説明します。

- 概要
- 利点と主な機能
- Oracle Identity Manager の 3 層アーキテクチャ

概要

Oracle Identity Manager プラットフォームは、アクセス権の管理、セキュリティ、および IT リソースのプロビジョニングを自動化します。Oracle Identity Manager は、ユーザーが生産性向上のために必要とするリソースへの即時の接続を提供にし、不正なアクセスを失効させ制限して、機密性が高い企業の情報を保護します。

利点と主な機能

Oracle Identity Manager のアーキテクチャは、様々なビジネス環境に素早く統合できるように設計されています。次のような機能があります。

スケーラブルなアーキテクチャ : Oracle Identity Manager の J2EE アプリケーション・サーバー・モデルは、スケーラビリティ、フェイルオーバーおよびロード・バランシング機能を備え、固有の Web デプロイメントを実現します。オープンな標準ベースのテクノロジと機能に基づいており、3 層アーキテクチャ (クライアント・アプリケーション、Oracle Identity Manager がサポートする J2EE 準拠のアプリケーション・サーバー、および ANSI SQL 準拠のデータベース) を特長としています。Oracle Identity Manager では、LDAP 対応のアプリケーションと LDAP 非対応のアプリケーションの両方に対するプロビジョニングが可能です。

広範なユーザー管理 : Oracle Identity Manager を使用すると、ユーザーの組織階層やユーザー・グループを無制限に定義できます。継承、カスタマイズ可能なユーザー ID ポリシー管理、パスワード・ポリシー管理、顧客の変化するビジネス・ニーズを反映するユーザー・アクセス・ポリシーがサポートされます。また、管理者によるアプリケーションのパラメータと権限の管理、リソース割当て履歴の表示、ユーザー管理に関する包括的な権限設定ができる委任管理が可能です。

Web ベースのユーザー・セルフサービス : Oracle Identity Manager には、カスタマイズ可能な Web ベースのユーザー・セルフサービス・ポータルが含まれます。このポータルでは、ユーザー情報の管理、パスワードの変更と同期、忘れたパスワードの再設定、選択可能なアプリケーションのリクエスト、選択可能な権限の確認と編集、およびワークフロー・タスクの開始と対処を行うことができます。

強力かつ柔軟なプロセス・エンジン : Oracle Identity Manager では、使いやすいアプリケーション、たとえば、Microsoft Project や Microsoft Visio で、ビジネス・プロセスやプロビジョニング・プロセスのモデルを作成できます。プロセス・モデルには、承認ワークフローとエスカレーションのサポートが含まれます。イベントの現在のステータスやエラー・コードのサポートなど、各プロビジョニング・イベントの進行をトラッキングすることができます。Oracle Identity Manager では、複合的で分岐を含む自己修復プロセスや、データ交換および依存関係を含むネストされたプロセスがサポートされます。プロセス・フローは完全にカスタマイズ可能で、プログラミングも必要ありません。

監査証跡アカウントの詳細レポート機能 : Oracle Identity Manager は、すべてのプロセスの、詳細な状態情報を含むリアルタイム・レポートおよび最新のステータス・レポートを提供します。Oracle Identity Manager に備わった完全な OLAP 機能は、非常に複雑なレポート、分析および動的問合せをサポートしています。

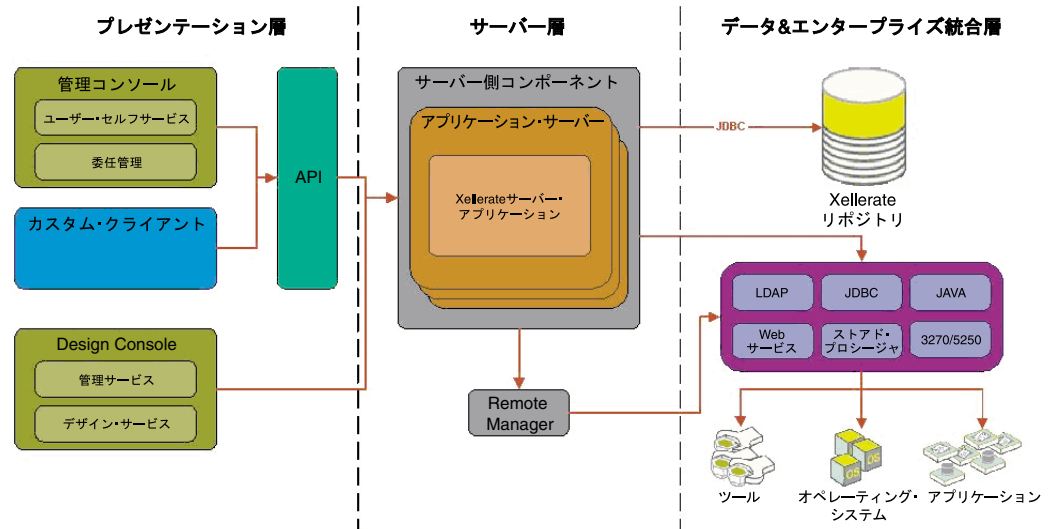
Adapter Factory を使用した統合 : 手作業でコーディングしたアダプタですべてのシステムをサポートしようとするのは非現実的です。Oracle では、アダプタの自動生成ツールを開発しています。Adapter Factory と呼ばれるこのツールは、広範囲のインタフェースと、事実上すべてのアプリケーションやデバイスをサポートします。アダプタは Oracle Identity Manager サーバー上で実行され、ターゲット・プラットフォーム上でのエージェントのインストールや更新は必要はありません。ターゲット・アプリケーション・リソースがネットワーク対応のインタフェースを持っていない状況では、UDDI/SOAP ベースのサポートを使用して、リモート統合を作成できます。Adapter Factory を使用すると、実装に数か月かかる統合を、数日で完了できます。多数のアダプタを短期間で生成することができます。Adapter Factory を使用すると、既存の統合を最新の状態に維持し、新しい統合ニーズに簡単に対応させることができます。Oracle Identity Manager には、リモート・マネージャを使用して、外部のサード・パーティ・システムでプログラムを実行する機能があります。

ビルトインの変更管理 : Oracle Identity Manager を使用すると、新しいプロセスのパッケージング、既存のプロセスのインポートとエクスポート、およびシステム間のパッケージ移動が可能です。

Oracle Identity Manager の 3 層アーキテクチャ

Oracle Identity Manager のアーキテクチャを構成している 3 つの層を図 1-1 に示します。

図 1-1 Oracle Identity Manager の 3 層アーキテクチャ



第 1 層: クライアント

第 1 層には、Design Console（このガイドで説明するインターフェース）と、管理およびユーザー・コンソールの 2 つのインターフェースがあります。ユーザーは、Oracle Identity Manager サーバーにユーザーのログイン資格証明を提供する管理およびユーザー・コンソールを使用して Oracle Identity Manager にログインします。管理およびユーザー・コンソールを使用して、ユーザーは Oracle Identity Manager データベースの情報の検索、編集および削除を行うことができます。

注意： このマニュアルでは、Oracle Identity Manager Design Console についてのみ説明します。Oracle Identity Manager の管理およびユーザー・コンソールの詳細は、『Oracle Identity Manager 管理およびユーザー・コンソール・ガイド』を参照してください。

第 2 層 : アプリケーション・サーバー

第 2 層は、Java Data Objects にあるビジネス・ロジックを実装します。これらのオブジェクトは、サポートされている J2EE アプリケーション・サーバー (JBoss アプリケーション・サーバー、BEA WebLogic、IBM WebSphere および Oracle Containers for J2EE) によって管理されます。Java Data Objects は Oracle Identity Manager アプリケーションのビジネス・ロジックを実装しますが、外部のメソッドに公開されることはありません。Oracle Identity Manager のビジネス機能にアクセスするには、J2EE インフラストラクチャの API レイヤー (参照および通信のメカニズムを提供) を使用できます。

Oracle Identity Manager がサポートしている J2EE 準拠のアプリケーション・サーバーだけが、データベースとの対話を行うコンポーネントです。次の機能を提供します。

- **Oracle Identity Manager へのログイン**: アプリケーション・サーバーは、Oracle Identity Manager クライアントをデータベースに接続します。
- **クライアント・リクエストの処理**: アプリケーション・サーバーは Oracle Identity Manager クライアントからのリクエストを処理し、リクエストの適切な情報をデータベースに送信します。また、サーバーはデータベースからクライアントへのレスポンスも提供します。
- **スケーラビリティ (接続のプーリング/共有)**: アプリケーション・サーバーは、Oracle Identity Manager クライアントに対して透過的な、単一または複数のアプリケーションの使用をサポートします。接続プーリングは、データベース接続のパフォーマンスを向上させ、リソースの最適化によって接続プールのサイズを動的に変更して、使用のスケーラビリティを実現します。
- **システム・レベルのデータ (メタデータ) のセキュア化**: Oracle Identity Manager では、システム・レベル情報 (システム・メタデータ) を誤って削除または変更することによるユーザーの不正アクセスが防止されます。権限のないユーザーがシステム・レベルの情報の追加、変更または削除を試みると、次のようなメッセージが表示されます。

「The security level for this data item indicates that it cannot be deleted or updated.」

第 3 層 : データベース

第 3 層はデータベースです。これは、Oracle Identity Manager の内部でデータ・ストレージを管理しているレイヤーです。

Design Console の起動

この章では、Design Console を起動する手順について説明します。次の内容について説明します。

- [起動方法](#)

起動方法

次の手順は、Design Console の起動方法について説明しています。

注意： Oracle Identity Manager の管理およびユーザー・コンソールを使用すると、Oracle Identity Manager の基本機能にアクセスすることもできます。Oracle Identity Manager の管理およびユーザー・コンソールの機能の詳細は、『Oracle Identity Manager 管理およびユーザー・コンソール・ガイド』を参照してください。

Design Console を起動するには、次のようにします。

1. デスクトップの **Oracle Identity Manager** クライアント・アイコンをダブルクリックします。

ログイン・ウィンドウが表示されます。

2. ユーザー ID とパスワードを入力します。

セキュリティに配慮して、パスワードはアスタリスク (****) で表示されます。

ユーザー ID とパスワードに、特殊文字は使用できません。たとえば、パーセント (%)、プラス記号 (+)、等号 (=)、カンマ (,)、円記号 (¥)、二重引用符 (")、小なり記号 (<)、大なり記号 (>) およびスラッシュ (/) は使用できません。

3. 「Login」をクリックします。

Design Console のメイン画面が表示されます。

Design Console にログインした後で、システムの設定を変更できます。この設定は Oracle Identity Manager のシステム全体に関わる動作を制御するため、システム・ユーザーに影響を与えます。この設定の詳細は、第 8 章の「[「System Configuration」フォーム](#)」を参照してください。

Design Console のメイン画面

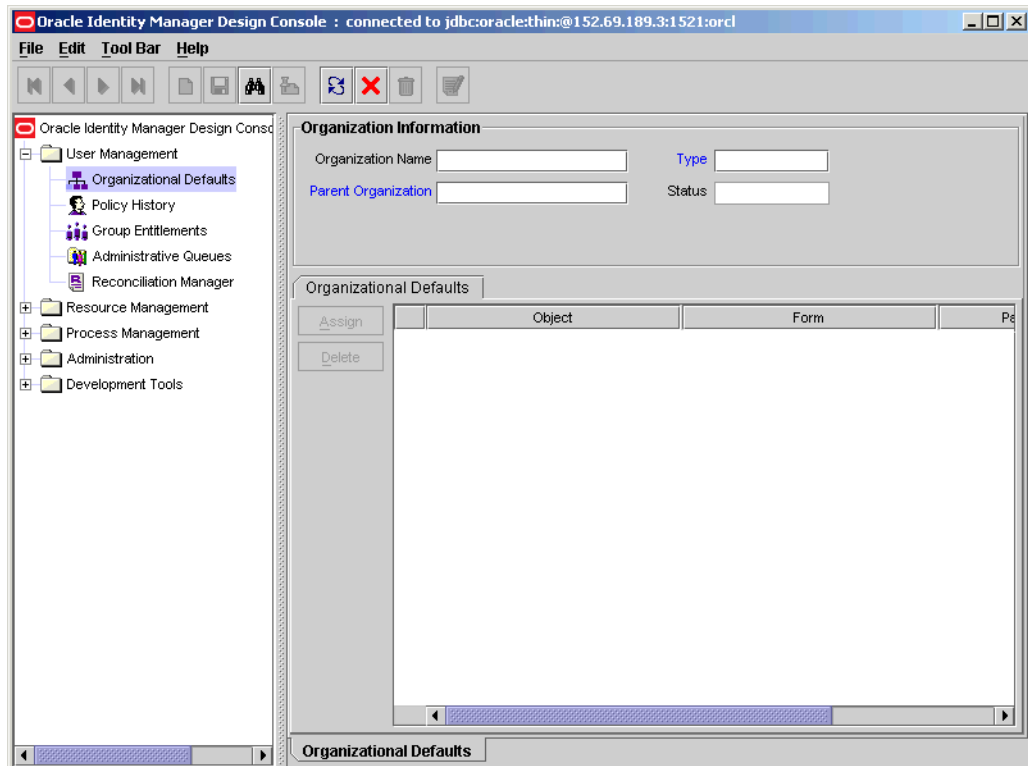
この章では、Design Console のメイン画面について説明します。次の内容について説明します。

- 概要
- Design Console のメニュー・バー
- Design Console のツールバー
- Design Console のショートカット
- Design Console エクスプローラ
- Design Console ワークスペース

概要

Design Console のメイン画面（[図 3-1](#) を参照）を使用して、ビジネス・プロセスの作成、トラッキングおよび分析を行うことができます。

図 3-1 Design Console のメイン画面



Design Console のメイン画面には、次の 4 つの領域があります。

- Design Console のメニュー・バー
- Design Console のツールバー
- Design Console エクスプローラ
- Design Console ワークスペース

これらの領域について、次の各項で説明します。

Design Console のメニュー・バー

メニュー・バーは、メイン画面の上部に表示されます。メニュー・バーのメニューを使用して、Design Console ユーザー・インタフェースのすべての操作を実行できます。

メニュー・コマンドの実行手順：

1. コマンドを含むメニューをクリックします。
メニュー項目のリストが表示されます。
2. コマンドを含むメニュー項目をクリックします。
たとえば、アクティブなフォームの内容を印刷するには、「File」メニューから「Print」項目を選択します。

マウスを使用するかわりにキーボード・ショートカットを使用することもできます。たとえば、**[Alt]** キーを押しながら **[F]** キーを押すことで「File」メニューを開いたり、**[Ctrl]** キーを押しながら **[P]** キーを押すことでアクティブなフォームを印刷できます。キーボード・ショートカットとショートカット・キーは、メニューに黒色で表示されます。無効なショートカットおよびキーはグレーで表示されます。

Design Console メニュー・バーには、「File」、「Edit」、「Toolbar」および「Help」の各メニューがあります。ここでは次のトピックについて説明します。

- [「File」メニュー](#)
- [「Edit」メニュー](#)
- [「Toolbar」メニュー](#)
- [「Help」メニュー](#)

「File」メニュー

「File」メニューには次のオプションがあります。

メニュー項目	動作
Print	アクティブなフォームの印刷。
Login	Design Console からのログアウトと次回の再ログイン。
Exit	Design Console を終了します。

「Edit」メニュー

「Edit」メニューには、次のオプションがあります。

メニュー項目	動作
Cut	選択されたテキストを編集可能なフィールドから切り取り、システムのクリップボードにコピーします。
Copy	選択されたテキストをシステムのクリップボードにコピーします。
Paste	システム・クリップボードから選択されたフィールドにテキストを貼り付けます。
Clear	選択したテキストを消去します。

「Toolbar」メニュー

「Toolbar」メニューの動作について、次の表で説明します。

メニュー項目	動作
New	アクティブなフォームの内容を消去します。
Save Changes	アクティブなフォームに加えられた変更を保存します。
Query	アクティブなフォームの間合せを実行します。
Notes	アクティブなフォームにアタッチされているメモを表示します。
Refresh	アクティブ・フォームのレコードをリフレッシュします。
Close	アクティブなフォームを閉じます。
Delete	現在のレコードを削除します。
Next	間合せ結果のレコードが複数ある場合、次のレコードを表示します。
Previous	間合せ結果のレコードが複数ある場合、前のレコードを表示します。
First	間合せ結果のレコードが複数ある場合、最初のレコードを表示します。
Last	間合せ結果のレコードが複数ある場合、最後のレコードを表示します。
Close All	開いているフォームをすべて閉じ、Design Console ワークスペースを消去します。

「Help」メニュー

「Help」メニューから、Oracle Identity Manager Design Console のヘルプ・システムおよびコピーライト情報にアクセスできます。次の表を参照してください。

メニュー項目	動作
Administrator Guide	『Oracle Identity Manager デザイン・コンソール・ガイド』と同内容のオンライン・ヘルプを表示します。
About	Oracle Identity Manager Design Console のコピーライト情報を表示します。

Design Console のツールバー

ツールバーとは、メニュー・バーの下にある一連のボタンです。これらのボタンをクリックすると、頻繁に使用する機能を、シングルクリックで呼び出すことができます。ツールバーのボタンは、常にアクティブなフォームに適用されます。

図 3-2 に Design Console のツールバーを示します。

図 3-2 Design Console のツールバー



ツールバー・ボタン上にマウス・カーソルを数秒間置くと、ツールチップにそのボタンの説明が表示されます。

次の表に、ツールバーのボタンの説明を示します。

ボタン	動作
First	問合せ結果のレコードが複数ある場合、最初のレコードを表示します。
Previous	問合せ結果のレコードが複数ある場合、前のレコードを表示します。
Next	問合せ結果のレコードが複数ある場合、次のレコードを表示します。
Last	問合せ結果のレコードが複数ある場合、最後のレコードを表示します。
New	アクティブなフォームを消去します。
Save	アクティブなフォームに加えられた変更を保存します。
Query	アクティブなフォームの問合せを実行します。
Notes	アクティブなフォームにアタッチされているメモを表示します。
Refresh	アクティブなフォームをリフレッシュします。
Close	アクティブなフォームを閉じます。
Delete	現在のレコードを削除します。
Prepopulate	指定されたフィールドにデータを移入します。これらのフィールドはユーザー定義で、事前移入アダプタがアタッチされています。 注意: 事前移入アダプタの詳細は、『Oracle Identity Manager Tools リファレンス・ガイド』を参照してください。

Design Console のショートカット

Design Console には次の様々な機能をすばやく実行するキーボード・ショートカットが用意されており、メニュー・コマンドを簡単に呼び出すことができます。

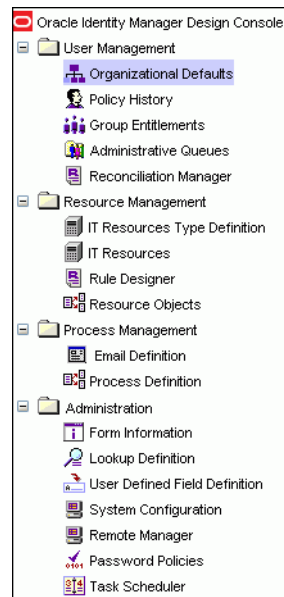
ショートカット名	キーストロークの組合せ	説明
「File」メニュー	[Alt]+[F]	「File」メニューをアクティブにします。
「Edit」メニュー	[Alt]+[E]	「Edit」メニューをアクティブにします。
「Toolbar」メニュー	[Alt]+[T]	「Toolbar」メニューをアクティブにします。
「Help」メニュー	[Alt]+[H]	「Help」メニューをアクティブにします。
Print	[Ctrl]+[P]	アクティブなフォームを印刷します。
Cut	[Ctrl]+[X]	選択されたテキストを編集可能なフィールドから切り取り、システムのクリップボードにコピーします。
Copy	[Ctrl]+[C]	選択されたテキストをシステムのクリップボードにコピーします。
Paste	[Ctrl]+[V]	システム・クリップボードから選択されたフィールドにテキストを貼り付けます。
Clear	[Ctrl]+[Del]	選択したテキストを消去します。
New	[Ctrl]+[N]	アクティブなフォームを消去します。
Save Changes	[Ctrl]+[S]	アクティブなフォームに加えられた変更を保存します。
Query	[Ctrl]+[Q]	アクティブなフォームの問合せを実行します。
Notes	[Ctrl]+[Shift]+[N]	アクティブなフォームにアタッチされているメモを表示します。
Refresh	[Ctrl]+[R]	アクティブなフォームをリフレッシュします。
Close	[Ctrl]+[W]	アクティブなフォームを閉じます。
Delete	[Ctrl]+[D]	現在のレコードを削除します。
Next	Num + [+] (プラス)	問合せ結果のレコードが複数ある場合、次のレコードを表示します。
Previous	Num + [-] (マイナス)	問合せ結果のレコードが複数ある場合、前のレコードを表示します。
First	[Ctrl]+[F]	問合せ結果のレコードが複数ある場合、最初のレコードを表示します。
Last	[Ctrl]+[L]	問合せ結果のレコードが複数ある場合、最後のレコードを表示します。
Prepopulate	[Ctrl]+[U]	カスタマイズされたフォームの指定フィールドにデータを移入します。
Help	[F1]	アクティブなフォームの状況依存のヘルプを起動します。
Explorer	[F3]	Design Console エクスプローラの最上部に表示される Design Console アイコンを強調表示します。
Lookup	[F4]	選択された参照フィールドに対応する Lookup ウィンドウを表示します。
Menu	[F10]	「File」メニューをアクティブにします。

Design Console エクスプローラ

Design Console エクスプローラには、アクセスする権限があるフォームを表すアイコンのリストが表示されます。

図 3-3 に、Design Console エクスプローラを示します。エクスプローラは、システム管理者がカスタマイズできます。エクスプローラに表示されるアイコンは、権限によって異なる場合があります。表示されないフォーム・アイコンにアクセスする必要がある場合は、システム管理者に問い合わせてください。

図 3-3 Design Console エクスプローラ



ヒント: システム管理者が権限を変更した場合は、次に示す手順に従って、エクスプローラ・ウィンドウをリフレッシュすることをお勧めします。

フォームの起動手順:

1. 起動するフォームを含むフォルダの左側にあるプラスのアイコンをクリックします。
2. 目的のフォームに対応するアイコンをダブルクリックします。

Design Console ワークスペースに、対応するフォームが表示されます。

ヒント: 分割バーを左右にドラッグして、Design Console エクスプローラのサイズを調整できます。分割バーは、Design Console エクスプローラと Design Console ワークスペースを区切る縦線です。

フォームのリストのリフレッシュ手順:

1. Oracle Identity Manager エクスプローラ・ウィンドウの最上部にある Oracle Identity Manager ロゴをクリックします。
2. 「Refresh Explorer」メニュー・コマンドがポップアップ・ウィンドウに表示されます。
3. このコマンドをクリックします。

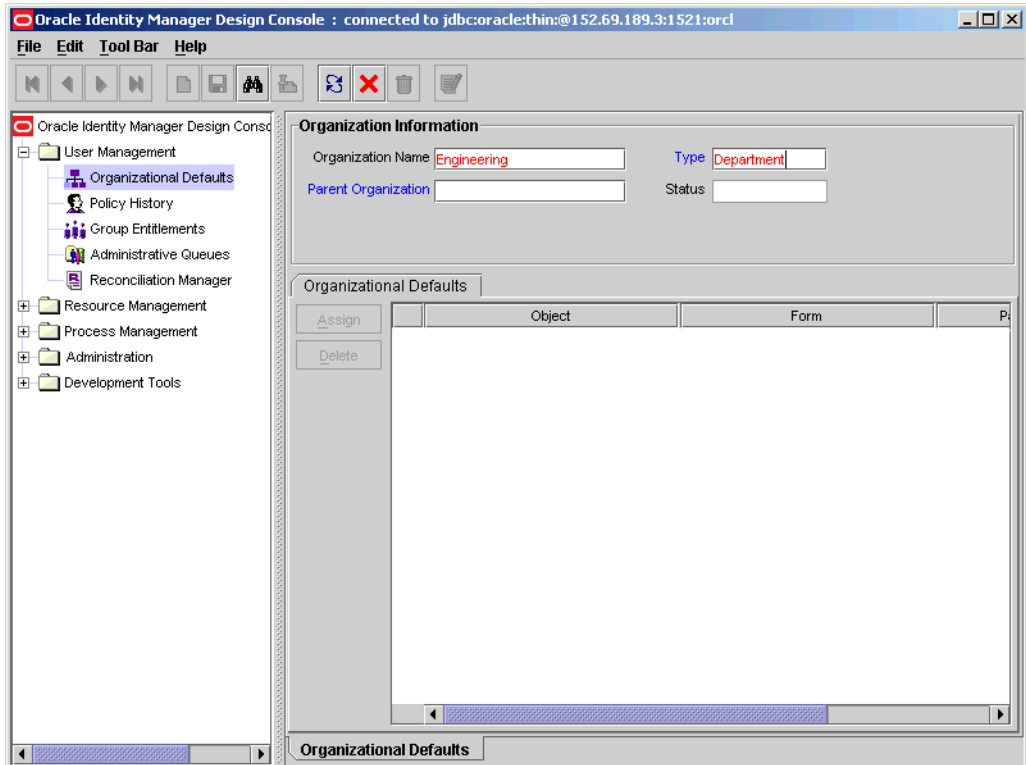
エクスプローラと、アクセスできるすべてのフォームがリフレッシュされます。システム管理者によってアクセス権限を最近付与されたフォームもすべて含まれます。

Design Console ワークスペース

Design Console ワークスペースは、エクスプローラを使用してアクセスするフォームが表示されるメイン画面の領域です。

図 3-4 にワークスペースを示します。

図 3-4 Design Console ワークスペース



複数のフォームにアクセスする場合、Design Console はアクティブなフォームを一番手前に置き、その他のフォームを重ねて、メイン画面の下端にタブとして表示します。フォームを切り替えるには、フォームの最下部にある、目的のフォームのタブをクリックします。

Design Console は、フォーム・ビューと表ビューの 2 つのビューでフォームを表示できます。それぞれのビューで表示される情報の違いについて、次に説明します。

フォーム・ビュー

フォーム・ビューでは、1 件のレコードの詳細情報が表示されます。フォーム・ビューは、エクスプローラを使用してフォームにアクセスしたときに最初に表示されるビューです。たとえば、問合せを実行する前に表示されます。

表ビュー

表ビューには、フォームの複数のレコードに関する一般的な情報が一覧表示されます。1つ以上の結果が得られる問合せを送信すると、Design Console には、その問合せに一致するレコードを含む表が表示されます。

たとえば、「Organizations」フォームの問合せでは、複数のレコードが返されます。「Organizations」フォームでは、フォーム・ビューと表ビューのどちらも表示できます。図 3-5 に、Design Console エクスプローラの表ビューを示します。

図 3-5 表ビュー

	Organization Name	Parent Organization	Type	Status
1	Engineering		Department	Active
2	Human Resources		Department	Active
3	Marketing		Department	Active
4	Professional Service		Department	Active
5	Public Relations		Department	Active
6	Requests		System	Active
7	Research Developm		Department	Active
8	Sales		Department	Active
9	Shipping Recieving		Department	Active
10	Statewide - HR		Department	Active
11	Statewide - IT		Department	Active
12	Statewide - Investm		Company	Active
13	Statewide - Medicin		Department	Active

Organizational Defaults Organizational Defaults Table

次の説明は、すべての表ビューに当てはまります。

- 表ビューでレコードを選択するには、レコードをクリックします。
- レコードに関連付けられたデータが、複数のセルに表示されます。
セルは、フィールドとも呼ばれます。
- フォームには、**列ヘッダー**（各列の上にある、列名を示すグレーのボックス）があります。
列ヘッダーには列の名前が表示されます。列に「Lookup」ダイアログ・ボックスがある場合、列ヘッダーは青色で示されます。
- Design Console フォームには**行ヘッダー**（各行の先頭にある、数字を示したグレーのボックス）があります。
1件のレコードの詳細なフォーム・ビューを表示するには、その行の行ヘッダーをダブルクリックします。1件のレコードをフォーム・ビューで表示するには、表ビューで目的のレコードを選択し、ワークスペースの最下部にある、適用できるフォームのタブをクリックします。
- ワークスペースに表示できる範囲を超えてレコードが返された場合、表ビューの右端に垂直スクロールバーが表示されます。
垂直スクロールバーで**上矢印**または**下矢印**を使用すると、表のレコードをスクロールして表示できます。
- 表ビューに、ワークスペースに表示できる範囲を超える列がある場合、表ビューの下端に水平スクロールバーが表示されます。
スクロールバーで**左矢印**または**右矢印**を使用すると、始めはワークスペースに表示されていなかった列が表示されます。
- 表ビューの個別のセル（フィールド）では、レコードの情報を編集できます。
特定のフィールドで情報を編集するには、フィールドをクリックして変更します。
- 青色で示されたフィールドには、「Lookup」ダイアログ・ボックスがあります。
そのフィールドをダブルクリックすると、「Lookup」ダイアログ・ボックスが開き、目的の値を選択できます。いずれかのフィールドの値を編集すると、対応するレコードの行ヘッダーが黒色に変わります。これは、そのフィールドのデータが変更されており、保存する必要があることを示しています。

- 連続するレコード行を選択するには、**[Shift]** キーを使用します。
- 連続していない複数のレコード行を選択するには、**[Ctrl]** キーを使用します。
- 1 件のレコードをエクスポートするには、行ヘッダーを右クリックします。
複数のレコードを選択するには、**[Shift]** キーを押して、行ヘッダーをクリックします。
ダイアログ・ボックスがポップアップします。
- **「Copy to Clipboard」** を選択すると、選択したレコードがクリップボードにコピーされます。
コピーしたレコードは、Microsoft Excel スプレッドシートまたは Microsoft Word 文書に貼り付けることができます。
- レコードをタブ区切りファイル形式で保存するには、**「Copy to File」** を選択します。
- 表ビューのレコードの表示順序は、ソート機能を使用して制御できます。
表示されたレコードのソート順を調整するには、レコードをソートする基準にする列のヘッダーをクリックします。列ヘッダーのテキストの脇に三角形が表示されます。これは、ソートされたレコードが昇順に並んでいるか降順に並んでいるかを示しています。

Design Console の基本機能

この章では、Design Console の基本機能の使用方法について説明します。後の章に進む前に、このセクションを確認しておくことをお勧めします。

この章の内容は、次のとおりです。

- 特殊フィールドとフォーム・タイプ
- Assignment ウィンドウ
- 検索（問合せ）の実行
- 検索（問合せ）フィルタの作成
- 検索の結果
- 問合せ結果セット
- 問合せのパフォーマンス最適化
- 結果セットでの制限超過

特殊フィールドとフォーム・タイプ

Design Console の基本機能の動作は、すべてのフォームで使いやすさを実現するための標準です。ここでは、Design Console のメイン画面での標準的な動作と、フィールドおよびウィンドウのタイプを説明します。

データ・フィールド

データ・フィールドは、特定のレコードに関連する情報を表示するフォームにある表示領域です。たとえば、「**First Name**」は「**Users**」フォームにあるデータ・フィールドです。

あるフィールドのラベルが、黒色や青色で表示されることがあります。

- 黒色のラベルは、このフィールドが標準のフィールドであることを示します。
このタイプのフィールドでは、情報の問合せ、作成、変更または削除を行うことができません。
- 青色のラベルは、このフィールドのデータが **Lookup** または **Date & Time** ウィンドウを使用して入力された値の事前定義リストから得られたことを示します。

このタイプのフィールドをダブルクリックすると、該当する **Date & Time** または **Lookup** ウィンドウが表示されます。そこで、日付、時刻または参照値を選択できます。

フィールドの値が黒色または赤色で表示されることがあります。

- フィールド値が黒色で表示される場合、このフィールドのデータはユーザーが入力しています。
このタイプのフィールドでは、情報の問合せまたは編集を行うことができます。
- フィールド値が赤色で表示される場合、このフィールドのデータは **Oracle Identity Manager** が提供します。
このタイプの値は読取り専用です。これにより、ユーザーが重要な情報に上書きすることはできなくなります。

「Lookup」フィールド

参照フィールドを使用すると、値を検索できます。次の手順では、フィールドを参照する方法について説明します。

参照フィールドの使用手順：

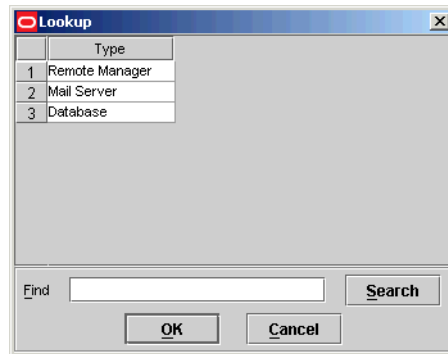
1. 「**Lookup**」ダイアログ・ボックスにフィールドのリストが表示されている場合は、フィールドをクリックし、「**OK**」をクリックします。

別の方法として、フィールドを選択して **[F4]** キーを押す方法もあります。

Lookup ウィンドウを閉じるには、「**Cancel**」をクリックします。

図 4-1 に「Lookup」ダイアログ・ボックスを示します。

図 4-1 「Lookup」ダイアログ・ボックス



- 「Lookup」ダイアログ・ボックスに長い値リストが表示されている場合は、目的の値の最初の数文字に続けてワイルドカード (*) を入力して「Find」ボックスに入力し、「Search」ボタンをクリックします。

「Lookup」ダイアログ・ボックスに検索条件に一致する結果が表示されます。

「Date And Time」フィールド

Date & Time ウィンドウを使用すると、月、年、日および時刻を選択できます。このウィンドウは、それが設定されているフィールドをダブルクリックすると表示されます。

日付および時刻を選択するには、次の手順を実行します。

- 日付と時刻を入力するフィールドをダブルクリックします。
目的のフィールドを選択して [F4] キーを押しても Date & Time ウィンドウを表示できません。
Date & Time ウィンドウが表示されます。
- ボックスをクリックします。
プルダウン・メニューから、目的の月を選択します。
- 「Date」スクロール・ボックスから、目的の年を選択します。
- カレンダーで、目的の日付をクリックします。
- 「Time」スクロール・ボックスから、目的の時間を選択します。
- 「OK」をクリックして変更を保存します。

Date & Time ウィンドウが閉じます。手順 1 でダブルクリックしたばかりのフィールドに、選択した日付と時刻が表示されます。

保存しないで終了するには「Cancel」をクリックします。

ボックス

ボックス・フィールドには、事前定義の値リストがあります。ボックスをクリックすると、値が表示されます。同時に表示できる範囲を超える値がリストに含まれる場合、リストの右に垂直スクロールバーが表示されます。

値を選択するとリストが閉じ、選択された値がボックスに表示されます。

Notes ウィンドウ

Notes ウィンドウを使用すると、レコードの補足情報を入力できます。また、アダプタとともに使用する場合は、アダプタをコンパイルしている間、Design Console により生成されたコードがこのウィンドウに表示されます。

ヒント： アダプタの詳細は、『Oracle Identity Manager Tools リファレンス・ガイド』を参照してください。

注意： 次の手順で、「Notes」ボタンが赤色で表示されている場合、現在のレコードにはすでにメモがあります。メモを表示するには、ボタンをクリックします。このレコードに補足情報を入力できます。各エントリには、日付、時刻およびユーザーを記した一意のスタンプが表示されます。

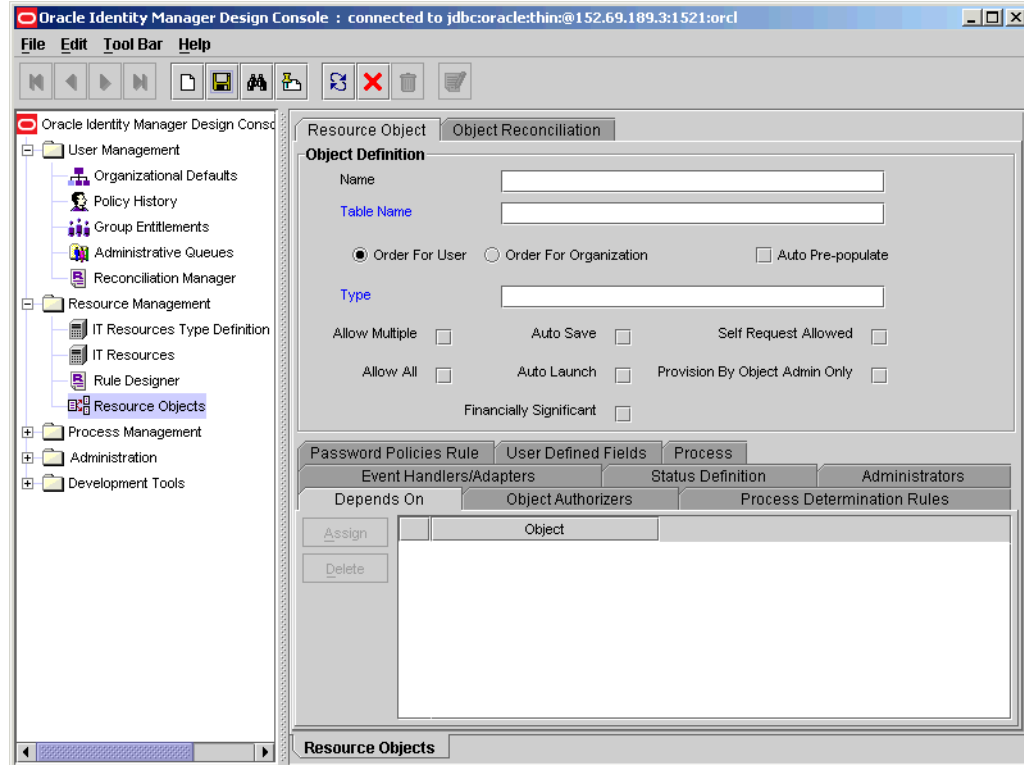
Notes ウィンドウを使用するには、次の手順を実行します。

1. 目的のレコードを問い合わせます。
2. 「Notes」ボタンをクリックします。
Notes ウィンドウが表示されます。
3. Notes ウィンドウのテキスト領域に情報を入力します。
4. 情報を Notes ウィンドウに格納するには、人の形のアイコンをクリックします。
または、「Close」をクリックして、保存しないで Notes ウィンドウを閉じます。
5. ツールバーから「Save」ボタンをクリックします。
Notes ウィンドウに入力された情報が保存されます。

フォーム・タブ

大部分の Design Console フォームには、複数のタブがあります。タブは通常、フォーム下方の領域にあります。タブには、ある組織で雇用されているユーザーなど、レコードについての追加情報が表示されます。図 4-2 を参照してください。

図 4-2 Design Console - フォーム・タブ



各タブには、独自の表および機能ボタンがあります。通常、フォームの上部にある情報が保存されるまで、タブ上のボタンは有効になりません。表のタブでは、そのタブ項目に関連付けられているレコードの表示および編集が可能です。

タブの表で行の情報を変更するには、編集する情報が含まれるフィールドをダブルクリックするか、または関連付けられている行ヘッダーをダブルクリックします。

Assignment ウィンドウ

User Form の Assignment ウィンドウを使用すると、用意されているエンティティを選択してレコードに割り当てることができます。「Assign」ボタンをクリックすると、Assignment ウィンドウが表示されます。

このウィンドウの左のパネルには、レコードに割り当てできる項目（組織など）がリストされます。右のパネルには、すでにレコードに割り当てられている項目がリストされます。左右のパネルで選択できる値は、割り当てられている値、または割り当て解除された値に応じて固有ですが、ボタンおよびこのダイアログ・ボックスの一般的な使用法は、アプリケーション全体で同じです。

次に、このウィンドウで作業する方法を示します。

- 連続していない複数の項目を選択するには、**[Ctrl]** キーを押したままマウスで項目を選択します。

たとえば、「Process Definition」オブジェクトを選択せずに、「User Group」、「IT Resource Type Definition」オブジェクト、「Form Information」オブジェクトを選択できます。

- リスト上で連続している複数の項目を選択するには、**[Shift]** キーを押したまま、最初と最後の項目をマウスで選択します。
- 1 つ以上の項目を割り当てるには、項目を選択して強調表示し、右矢印をクリックします。



- すでに割り当てられている 1 つまたは複数の項目の割り当てを解除するには、項目を選択し、左矢印をクリックします。



完了したら、「OK」をクリックします。「Cancel」をクリックすると、行ったすべての割り当ての変更が破棄されます。

検索（問合せ）の実行

Design Console を使用すると、データベース内のレコードに対して検索（「問合せ」とも呼ばれる）を実行できます。Design Console のすべてのフォームに検索機能があります。検索機能は、参照フィールドでも選択可能です。

検索を実行するには、ツールバーで双眼鏡アイコンをクリックします。



検索（問合せ）フィルタの作成

フォームのフィールドで検索条件をフィルタすることができます。これにより、返される結果は、入力した条件が一致するレコードだけに制限されます。検索を実行する前にすべてのフォーム・フィールドを空欄のままにしておくと、表のすべてのレコードが返されます。

検索ではワイルドカードを使用できます。ワイルドカード文字のアスタリスク (*) は、特定されていない検索条件の部分を表します。ワイルドカードは、フィールドに入力する値の先頭、途中または末尾で使用できます。たとえば、Design Console フォームの「Location」フィールドに「B*」と入力して検索を実行すると、文字 B から始まる地名を含むすべてのレコードが返されます (Burbank、Boston、Bristol など)。文字 * が検索する値の途中にある場合、たとえば「Br*on」では、Br で始まり on で終わるすべてのレコード、たとえば Brighton、Boston などが返されます。文字 * を検索する値の先頭に、たとえば「*A」のように置いた場合、A で終わるすべてのレコード、たとえば Philadelphia、Tampa などが返されます。

図 4-3 では、「Organizational Defaults」フォームで問合せが実行され、「Organization Name」フィールドを使用して検索条件がフィルタされます。フィルタ「Statew*」を使用すると、確実に「Statew」で始まる名前の組織だけが返されます。

図 4-3 検索問合せの結果表示

The screenshot displays the 'Organizational Defaults' form. At the top, there is a section titled 'Organization Information' with four input fields: 'Organization Name' (containing 'Statew*'), 'Type', 'Parent Organization', and 'Status'. Below this is a section titled 'Organizational Defaults' which contains two buttons, 'Assign' and 'Delete', and a table. The table has two columns, 'Object' and 'Form', and is currently empty. At the bottom of the form, there is another section titled 'Organizational Defaults'.

検索の結果

条件を問合せフィールドに入力した後、双眼鏡の記号をクリックするか、**[Ctrl]+[Q]**を押します。



結果は次のいずれかになります。

- **返されたレコードがない。** データベースのレコードに、このフォームの検索条件に一致するものがありませんでした。検索するレコードがもうデータベースに存在しないか、検索条件を変更する必要があるかのどちらかです。
- **1件のレコードが返された。** データベースの1件のレコードが検索条件に一致しました。そのレコードがフォーム・ビューに表示されます。
- **複数のレコードが返された。** データベースの複数のレコードが検索条件に一致しました。表ビューが表示され、検索条件に適合するすべてのレコードがリストされます。返されたレコード・セットの最初のレコードは、フォーム・ビューに表示されます。[図 4-4](#)を参照してください。





図 4-4 複数のレコードが返された状態

	Organization Name	Parent Organization	Type	Status
1	Statewide - HR		Department	Active
2	Statewide - IT		Department	Active
3	Statewide - Investm		Company	Active
4	Statewide - Marketir		Department	Active

Organizational Defaults Organizational Defaults Table

問合せ結果セット

データベース内の複数のレコードが検索条件に一致した場合、各レコードの詳細を参照できます。それらのレコードをフォーム・ビューで参照する際には、いくつかのボタンを使用できます。これは VCR ボタンとも呼ばれる方向ボタンで、ツールバーにあります。次にそれについて説明します。

ボタン	説明
	このボタンをクリックすると、結果セットの最初のレコードがフォーム・ビューに表示されます。
	このボタンをクリックすると、表ビューの表示順で1つ前のレコードが表示されます。レコードはフォーム・ビューの結果セットに表示されます。
	このボタンをクリックすると、結果セットの、表ビューの表示順で次のレコードがフォーム・ビューに表示されます。
	このボタンをクリックすると、結果セットの最後のレコードがフォーム・ビューに表示されます。

問合せのパフォーマンス最適化

大規模な結果セットを返す問合せの実行には、多くの時間が必要になり、コンピュータのリソースを消費することがあります。パフォーマンスを最適化するには、次の検索方法を使用します。

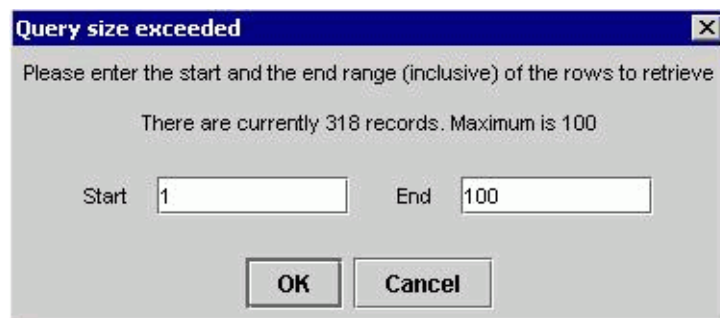
- 検索の範囲を、可能なかぎり正確に定義します。
問合せを作成する際に、最も具体的な情報を入力します。たとえば、問合せ先の名が JOHN、姓が JACKSON である場合、単に姓が JACKSON である問合せ先を検索するのではなく、どちらの情報も入力します。
- 可能であれば、ワイルドカード文字 (*) を使用します。
ワイルドカード (*) をアルファベットの先頭に置くと (たとえば、「*A」)、指定されたフィールドを空白にしておく場合と比較して、返されるレコードが少なくなります。

注意： 索引の詳細は、システム管理者に問い合わせてください。

結果セットでの制限超過

Design Console の「System Configuration」フォームで読み書きアクセス権を持っている場合 (つまり、システム管理者である場合)、検索の結果セットに表示されるレコードの最大数を設定できます。その値を超える数のレコードが返された場合、Design Console には、「Query Size Exceeded」ダイアログ・ボックスが表示されます。図 4-5 を参照してください。

図 4-5 「Query Size Exceeded」ダイアログ・ボックス



表示する結果セットについて特定の範囲またはサブセットを入力するように求められます。図 4-5 では、結果セットの最大値である 100 を超えています。このダイアログを使用すると、1 ~ 100 のレコードだけを表示することができます。

関連項目： 「System Configuration」フォームの詳細は、8-15 ページの「[「System Configuration」フォーム](#)」を参照してください。

ユーザー管理

この章では、Design Console のユーザー管理について説明します。次の内容について説明します。

- 概要
- 「Organizational Defaults」フォーム
- 「Policy History」フォーム
- グループ権限の割当て
- 「Administrative Queues」フォーム
- 「Reconciliation Manager」フォーム

概要

「User Management」フォルダには、会社の組織、ユーザー、ユーザー・グループ、リクエスト、フォーム・テンプレート、場所、プロセス・タスクおよびリコンシリエーション・イベントについての情報をシステム管理者が作成、管理するためのツールがあります。

このフォルダには次のフォームがあります。

- **Organizational Defaults:** このフォームは、組織の内部構造を反映するレコードを表示したり、これらのエンティティに関連する情報を指定するために使用します。
- **Policy History:** このフォームは、従業員が必要とするユーザー・レコードを表示するために使用します。
- **Group Entitlements:** このフォームは、共通の機能を割り当てたユーザー・グループのレコードを表示するために使用します。
- **Administrative Queues:** このフォームは、他の Design Console フォームのユーザー・グループ用にまとめて割り当て権限を作成、管理するために使用します。
- **Reconciliation Manager:** このフォームは、Oracle Identity Manager でリコンシリエーション・イベントを管理するために使用します。

「Organizational Defaults」フォーム

「Organizational Defaults」フォームは「User Management」フォルダに表示されます。このフォームは、組織の構成を反映するレコードを表示したり、組織のエンティティに関連する情報を入力および変更するために使用します。組織のレコードには、企業階層、たとえば、会社、部門、または支店における組織単位についての情報が含まれます。サブ組織は、別の組織のメンバーである組織、たとえば、会社の部門などです。サブ組織が属する組織は親組織と呼ばれます。

「Organizational Defaults」タブは、現在の組織に対してプロビジョニングできるリソースの、カスタムのプロセス・フォームのデフォルトのパラメータ値を指定するために使用します。各プロセス・フォームは、その組織に対して許容されているリソース・オブジェクト、または関連する「Resource Objects」フォームの「Allow All」チェック・ボックスが選択されているリソースに関連付けられています。

「Process Defaults」タブに入力した値は、組織のすべてのユーザーのデフォルト値になります。

図 5-1 に「Organizational Defaults」フォームを示します。

図 5-1 「Organizational Defaults」フォーム

Organization Information	
Organization Name	Type
Parent Organization	Status

Organizational Defaults				
Assign	Object	Form	Parameter	Value
Delete				

次の表は、「Organizational Default」フォームのデータ・フィールドについて説明しています。

フィールド名	説明
Organization Name	組織の名前。
Type	組織の分類タイプ（「Company」、「Department」、「Branch」など）。
Status	組織の現在のステータス（「Active」、「Disabled」、「Deleted」のいずれか）。
Parent Organization	この組織が属する組織。親組織がこのフィールドに表示される場合、この組織は、親組織の「Sub Organizations」タブに表示されます。このフィールドが空の場合、この組織は最上位の組織です。

「Policy History」 フォーム

「Policy History」フォームは、ユーザーに対して許可または拒否されているリソースについての情報を表示するために使用します。

Oracle Identity Manager では、ユーザーのタイプは2つあります。

- **End-User Administrators:** このタイプのユーザーは、Design Console や、管理およびユーザー・コンソールにアクセスできます。システム管理者は、エンドユーザー管理者が Design Console でフォームのサブセットにアクセスできるように権限を設定します。
- **End-Users:** このタイプのユーザーは、管理およびユーザー・コンソールだけにアクセスでき、一般にはエンドユーザー管理者より少ない権限を持ちます。管理およびユーザー・コンソールを使用してリクエストをプロビジョニングする場合に、「Object Allowed」タブでセルフサービスとして定義されているリソース・オブジェクトだけを使用できます。

図 5-2 にこのフォームを示します。

図 5-2 「Policy History」 フォーム

次の表は、「Policy History」フォームのデータ・フィールドについて説明しています。

フィールド名	説明
User ID	ユーザーの Oracle Identity Manager ログイン ID。
First Name	ユーザーの名。
Middle Name	ユーザーのミドル・ネーム。
Last Name	ユーザーの姓。
Email	ユーザーの電子メール・アドレス。
Start Date	ユーザーのアカウントがアクティブになる日付。
Status	ユーザーの現在のステータス（「Active」、「Disabled」、「Deleted」のいずれか）。
Organization	ユーザーが所属する組織。
User Type	ユーザーの分類ステータス。有効なオプションは、「End-User」と「End-User Administrator」です。Design Console へのアクセス権があるのは「End-User Administrators」のみです。
Employee Type	親組織でのユーザーの雇用ステータス（たとえば、フルタイム、パート、研修生など）。
Manager ID	ユーザーのマネージャ。
End Date	ユーザーのアカウントが無効になる日付。
Created On	ユーザー・レコードが最初に作成された日付と時刻。

「Policy History」 タブ

このタブは、次の基準に基づいてユーザーに対して許可または拒否されているリソース・オブジェクトを表示するために使用します。

- ユーザーが所属するユーザー・グループのアクセス・ポリシー
- ユーザーが属する組織によって許可されているリソース・オブジェクト

「Policy History」タブには「Display Selection」領域が含まれます。このタブの内容を整理するには、次に示すように、この領域の一番上のボックスのメニューから項目を選択します。

- **Resource Policy Summary:** ユーザーの組織および適用されるアクセス・ポリシーに基づいて許可または拒否されているリソース・オブジェクトを表示します。
- **Not Allowed by Org:** ユーザーの組織に基づいて拒否されているリソース・オブジェクトだけを表示します。
- **Resources by Policy:** ユーザーがメンバーであるユーザー・グループのアクセス・ポリシーが含まれる 2 番目のボックスを表示します。

アクセス・ポリシーに基づいてユーザーに対して許可または拒否されているリソース・オブジェクトを表示するには、このボックスからアクセス・ポリシーを選択します。

トラッキング・システムを使用すると、ユーザーがメンバーである組織と、ユーザーに適用されるアクセス・ポリシーに基づいて、ユーザーが許可または拒否されているリソースを表示できます。

ユーザーに対して許可されているリソース・オブジェクトは、「Resources Allowed」リストに表示されます。このリストは、そのユーザーに対してプロビジョニングできるリソース・オブジェクトを表しています。そのユーザーに対してプロビジョニングされているリソース・オブジェクトを表しているわけではありません。

そのユーザーに対して拒否されているリソース・オブジェクトは、「Resources Not Allowed」リストに表示されます。

このトラッキング・システムを表示するには、次の手順を実行します。

1. 「Policy History」タブに移動します。
2. このタブにある「Display Selection」領域を確認します。
3. 「Policy History」ボタンをクリックします。

User Policy Profile History ウィンドウが表示されます。

このウィンドウから、次に示す手順で選択したユーザーおよび日付と時刻について、許可または拒否されているリソースを表示できます。

- 「History Date」ボックスから、希望の日付を選択できます。
- 「Display Type」ボックスから、ユーザーがメンバーである組織と、ユーザーに適用されるアクセス・ポリシーの、いずれかまたは両方に基づいて、ユーザーが許可または拒否されているリソースを表示できます。
- 「Policy」ボックスから、そのユーザーに対してどのリソース・オブジェクトが許可または拒否されるかを決定するアクセス・ポリシーを表示できます。

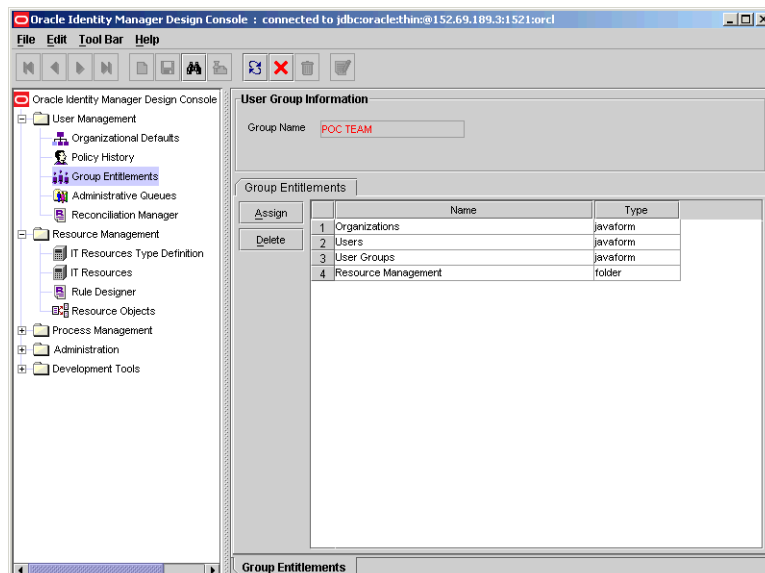
グループ権限の割当て

「Group Entitlements」フォームは「User Management」フォルダに表示されます。これは、フォームの作成と移動、およびユーザー・グループのメンバーがエクスペローラを使用してアクセスできるフォームおよびフォルダの指定を行うために使用します。

「Group Entitlements」フォームで作業するには、次の手順を実行します。

1. 「Group Entitlements」フォームを開きます。
「User Group Information」ダイアログ・ボックスが表示されます。
2. 「Group Name」フィールドに、ユーザー・グループの名前を入力します。
3. 「Assign」をクリックします。
User Form の「Assignment」参照表が表示されます。
4. 参照表から、このユーザー・グループに対するユーザー・フォームを選択します。
矢印ボタンを使用して、「Assigned Forms」リストに対する追加や削除を行います。
5. 完了したら「OK」をクリックします。

「User Group Information」ダイアログ・ボックスが表示されます。



新しく追加したユーザー・フォームは「Group Entitlement」表に一覧表示されます。「Group Entitlement」表には、選択できるすべてのユーザー・グループが表示されます。この表には、ユーザー・フォームの名前とタイプが表示されます。この例では、javaform と folder の 2 つのタイプがあります。javaform は、Java ベースのグラフィカル・インタフェースです。folder には、1 つ以上の javaform が含まれています。

用意されているグループ

Oracle Identity Manager には、4 つのデフォルトのユーザー・グループ定義があります。

- System Administrators
- Operators
- All Users
- Self Operators

これらのユーザー・グループに関連付けられた権限は変更できます。他のユーザー・グループを作成することもできます。

「System Administrators」ユーザー・グループ

「System Administrators」ユーザー・グループのメンバーは、Oracle Identity Manager でレコード（システム・レコード以外）を作成、編集および削除できる完全な権限を持っています。

「Operators」ユーザー・グループ

「Operators」ユーザー・グループのメンバーは、「Organizational Defaults」フォームや「Policy History」フォームを表示したり、制限された機能をこれらのフォームで実行できます。

「All Users」ユーザー・グループ

「All Users」ユーザー・グループのメンバーの権限は最小ですが、自身のユーザー・レコードにアクセスできるなどの機能があります。デフォルトでは、各ユーザーは自動的に「All Users」ユーザー・グループに所属します。

「All Users」グループからユーザーを削除することはできません。

「Self Operators」グループ

「Self Operators」グループは、デフォルトで Oracle Identity Manager に追加されます。このユーザー・グループには、XELSELFREG という 1 人のユーザーが含まれます。このユーザーは、Oracle Identity Manager 管理およびユーザー・コンソールで自動登録操作を行う際、ユーザーが持つ権限の変更を担当します。

重要：「Self Operators」ユーザー・グループに関連付けられている権限の変更や、このグループへのユーザーの割当ては行わないでください。

「Administrative Queues」 フォーム

プロビジョニング・リクエストを管理するためのユーザーのグループを割り当てるには、キューと呼ばれるエンティティを使用します。キューは、グループ定義の集合です。キューは、他のキュー内にネストできます。

「Administrative Queues」フォームは、キューの作成と管理のために使用します。キューをリクエストに割り当てるには、「Requests」フォームの「Queues」タブを使用します。

管理キューを使用すると、リクエストの効率と管理性が向上します。管理キューを使用することにより、同じ操作を少ない回数のマウス・クリックで実行できます。リクエストに割り当てたキューは、他のリクエストで再利用できます。

リクエストでは、キュー内の各グループに対して異なる管理権限を指定できます。たとえば、3つのユーザー・グループを持つキューをリクエストに割り当てる場合を考えます。3つのグループのメンバーは、リクエストに対してそれぞれ異なる管理権限を持つことができます。1番目のユーザー・グループは、リクエストの読取り、変更および削除を許可されています。2番目のユーザー・グループは読取りと変更だけを許可されており、3番目のユーザー・グループは、リクエストの読取りと削除だけを許可されています。

「Administrative Queues」フォームを図 5-3 に示します。このフォームは「User Management」フォルダに表示されます。

図 5-3 「Administrative Queues」 フォーム

	Group Name	Write Access	Delete Access
1	SYSTEM ADMINISTRATORS	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
2	OPERATORS	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
3	Senior Management Staff	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>

次の表は、「Administrative Queues」フォームのフィールドについて説明しています。

フィールド名	説明
Queue Name	管理キューの名前。
Parent Queue	この管理キューが所属するキュー。
Description	管理キューについての説明情報。

管理キューの作成

親キューおよびネストされたキューを作成できます。次の手順は管理キューを作成する方法を説明します。

管理キューを作成するには、次の手順を実行します。

1. 「Administrative Queues」 フォームを開きます。
2. 「Queue Name」 フィールドに、キューの名前を入力します。
3. 「Parent Queue」 参照フィールドをダブルクリックします。
「Lookup」 ダイアログ・ボックスから、このキューがメンバーであるキューを選択します。キューが別のキュー（親キュー）に所属しない場合は、次の手順に進んでください。
4. 「Description」 フィールドには、キューに関する情報を入力できます。
5. 「Save」 をクリックします。

「Administrative Queues」 フォームのタブ

「Administrative Queues」 キューを起動してキューを作成すると、このフォームのタブが使用可能になります。

「Administrative Queues」 フォームには、次のタブが含まれます。

- 「Members」 タブ
- 「Administrators」 タブ

「Members」 タブ

「Members」 タブは、現在の管理キューに対するユーザー・グループの追加や削除を行うために使用します。「Members」 タブを、[図 5-4](#) に示します。

図 5-4 「Administrative Queues」 フォームの「Members」 タブ

The screenshot shows the 'Administrative Queues' form with the 'Members' tab selected. The form contains the following fields:

- Queue Name: User Group Permissions for Requests
- Parent Queue: Xellerate Permissions
- Description: This queue will set the permissions for user groups in relation to requests (creating, modifying, deleting requests).

Below the fields is a table with the following data:

	Group Name	Write Access	Delete Access
1	SYSTEM ADMINISTRATORS	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
2	OPERATORS	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
3	Senior Management Staff	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>

図 5-4 では、「User Group Permissions for Requests」 キューが次のように設定されています。

- 「SYSTEM ADMINISTRATORS」 ユーザー・グループは、リクエストの情報の読取り、変更および削除を行うことができます。
- 「OPERATORS」 ユーザー・グループは、リクエストの情報の読取りと変更ができます。「Delete Access」 チェック・ボックスが選択されていないので、このユーザー・グループはリクエストを削除できません。
- 「Senior Management Staff」 ユーザー・グループはリクエストを削除できます。「Write Access」 チェック・ボックスが選択されていないので、このユーザー・グループはリクエストの情報を変更できません。

管理キューへのユーザー・グループの割当て

キューにユーザー・グループを割り当てるには、次の手順を実行します。

1. 「Assign」 をクリックします。
「Assignment」 ダイアログ・ボックスが表示されます。
2. ユーザー・グループを選択して、管理キューに割り当てます。
3. 「OK」 をクリックします。
ユーザー・グループが「Members」 タブに表示されます。
4. ユーザー・グループが管理キューにより割り当てられたリクエストの情報を作成および変更できるようにするには、「Write Access」 チェック・ボックスを選択します。
それ以外の場合は手順 5 に進みます。
5. ユーザー・グループが管理キューにより割り当てられたリクエストの情報を削除できるようにするには、「Delete Access」 チェック・ボックスを選択します。
それ以外の場合は手順 6 に進みます。
6. 「Save」 をクリックします。
ユーザー・グループが管理キューに割り当てられます。

注意： デフォルトで、「Members」 タブにリストされたグループは、キューが割り当てられているリクエストの読取り権限を持っています。

管理キューからのユーザー・グループの削除

キューが割り当てられているリクエストの情報をユーザー・グループが読取り、変更または削除できなくなった場合、管理キューからそのユーザー・グループを削除します。

管理キューからユーザー・グループを削除するには、次の手順を実行します。

1. 削除するユーザー・グループを選択します。
2. 「Delete」 をクリックします。
ユーザー・グループが管理キューから削除されます。

「Administrators」 タブ

このタブは、現在の管理キューを読み取り、変更および削除できるユーザー・グループを選択するために使用します。図 5-5 を参照してください。

図 5-5 「Administrative Queues」 フォームの「Administrators」 タブ

The screenshot shows the 'Administrative Queues' form with the 'Administrators' tab selected. The form contains the following fields:

- Queue Name: User Group Permissions for Requests
- Parent Queue: Xellerate Permissions
- Description: This queue will set the permissions for user groups in relation to requests (creating, modifying, deleting requests).

Below the description, there are two tabs: 'Members' and 'Administrators'. The 'Administrators' tab is active, showing a table with the following data:

	Group Name	Write Access	Delete Access
1	SYSTEM ADMINISTRATORS	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>

Buttons for 'Assign' and 'Delete' are visible on the left side of the table.

図 5-5 では、「SYSTEM ADMINISTRATORS」ユーザー・グループに対して、「Write Access」および「Delete Access」チェック・ボックスが選択されています。これにより、ユーザー・グループは「User Group Permissions for Requests」管理キューの読み取り、変更および削除を行うことができます。

管理キューへのユーザー・グループの追加

管理キューにユーザー・グループを追加すると、グループのメンバーに管理権限が与えられます。

管理キューにユーザー・グループを追加するには、次の手順を実行します。

1. 「Assign」をクリックします。
「Assignment」ダイアログ・ボックスが表示されます。
2. ユーザー・グループを選択して、管理キューに割り当てます。
3. 「OK」をクリックします。
ユーザー・グループが「Administrators」タブに表示されます。
4. 関連付けられているユーザー・グループが現在の管理キューの読み取りおよび変更を行えるようにするには、「Write Access」チェック・ボックスを選択します。
それ以外の場合は手順 5 に進みます。
5. 関連付けられているユーザー・グループが現在の管理キューを削除できるようにするには、「Delete」チェック・ボックスを選択します。
それ以外の場合は手順 6 に進みます。
6. 「Save」をクリックします。
これで、このユーザー・グループは管理キュー内の管理グループになりました。

管理キューからのユーザー・グループの削除

現在の管理キューをユーザー・グループが読取り、変更または削除できなくなった場合、管理キューからそのユーザー・グループを削除します。

管理キューから管理者ユーザー・グループを削除するには、次の手順を実行します。

1. 削除するユーザー・グループを選択します。
2. 「Delete」をクリックします。

管理者ユーザー・グループが管理キューから削除されます。

「Reconciliation Manager」 フォーム

このフォームは「User Management」フォルダにあります。このフォームを使用すると、ターゲット・リソースおよび信頼できるソースから受け取ったリコンシリエーション・イベントの情報の表示、分析、修正、リンクおよび管理ができます。指名されたユーザーは、リコンシリエーション・イベントの情報を、手動で分析およびリンクすることができます。分析やリンクを、定義したアクション・ルールに基づいて Oracle Identity Manager が自動実行することもできます。そのルールは、イベントが既存のレコードに関連付けられているかどうか、新規アカウントを表しているかどうか、またはイベントの情報のリンクを手動で開始できるかどうかに基づいています。

ユーザーにより定義されるリコンシリエーション・クラスは、ターゲット・リソースおよび信頼できるソースを定期的にポーリングします。これらのシステムに関する変更はすべて、リコンシリエーション・マネージャに書き込まれたリコンシリエーション・イベントを生成します。Oracle Identity Manager は、関連するプロビジョニング・プロセスで定義されたマッピングに従ってイベント情報を分析します。

図 5-6 に「Reconciliation Manager」フォームを示します。

図 5-6 「Reconciliation Manager」 フォーム

The screenshot displays the 'Reconciliation Manager' web interface. At the top, there are several input fields and buttons for managing an event. The 'Event ID' is set to 20, and the 'Object Name' is 'Xellerate User'. The status is 'Event Closed' and the event date is 'November 12, 2003 8:24:44 PM'. There are buttons for 'Close Event', 'Re-apply Matching Rules', 'Create Organization', and 'Create User'. Below this is a tabbed interface with 'Matched Users', 'Matched Organizations', and 'Reconciliation Event History'. The 'Reconciliation Data' tab is active, showing a tree view of attributes: 'gschargecode [String] = 0001000T269', 'gsguid [String] = 700024567,700024568,700024566', 'gsidentity [String] = Yes', and an expanded 'Unprocessed Data' section containing 'minguid = minGuid <FIELD NOT FOUND>', 'roomNumber = 180M/239034/4938493MN <FIELD NOT FOUND>', 'gskerberosid = eleventest <FIELD NOT FOUND>', 'gssexclusion = No <FIELD NOT FOUND>', 'gsdepartmentname = ET App Dev Core Systems <FIELD NOT FOUND>', and 'cn = Eleven, Test <FIELD NOT FOUND>'. The bottom of the window shows the 'Reconciliation Manager' title bar.

注意： Design Console の「Task Scheduler」フォームを使用すると、スケジュールを定義し、リコンシリエーション・クラスの実行頻度を管理するタスキング・パラメータを設定したり、サード・パーティのスケジューリング・ツールを使用してポーリング頻度を設定できます。

「Reconciliation Manager」フォームの機能は次のとおりです。

- イベントの情報が既存のユーザーまたは組織のレコードに関連付けられている場合、このフォームを使用して、イベントのデータを手動でレコードにリンクすることができます。
自動的にユーザーまたは組織に関連付けられた情報の場合は、それを確認できます。
- イベントが、信頼できるソース上での新規従業員の作成（ユーザー検出）、または既存の従業員に対する新規リソースのプロビジョニング（アカウント検出）である場合、このフォームを使用して、新しいデータで Oracle Identity Manager を手動で更新できます。
自動的にユーザーに関連付けられた情報の場合は、それを確認できます。信頼できるソースの場合、イベントのデータは新規ユーザー・アカウントを作成するために使用されます。ターゲット・リソースの場合、イベントのデータは、関連するリソース固有のプロセス・フォームにデータを移入するために使用されます。
- イベントが、信頼できるソース上での新規組織の作成（組織検出）、または既存の組織に対する新規リソースのプロビジョニング（アカウント検出）である場合、このフォームを使用して、新しいデータで Oracle Identity Manager を手動で更新できます。
自動的に組織に関連付けられた情報の場合は、このフォームを使用して確認できます。
- イベントが、ターゲット・システムまたは信頼できるソース上のアカウントの削除である場合、このフォームを使用して、Oracle Identity Manager に特定のアカウントの削除や、自動的に削除されたアカウントの確認を指示できます。
信頼できるソースの場合、ユーザーの Oracle Identity Manager アカウントが削除され、ターゲット・リソースでそのユーザーに対するプロビジョニングの際に使用されたすべてのアカウントが失効します。
ターゲット・リソースの場合、Oracle Identity Manager は、そのシステム上のユーザー・アカウントが失効したことを認識します。

「Reconciliation Manager」フォームの上部には次の項目が含まれます。

フィールド名	説明
Event ID	リコンシリエーション・イベントの数値 ID。
Delete Event （「Yes」 / 「No」 フラグ）	このフィールドは表示専用で、これが削除イベント、つまり対応するレコードがターゲット・リソースまたは信頼されたソースから削除されているかどうかを示します。値が「Yes」なら削除イベントです。 このイベントがターゲット・リソース上のユーザー・アカウントに関連付けられている場合、アカウントには失効済のマークが付けられません。イベントがユーザー・アカウントに関連付けられると、アカウントは削除されます。 注意： このフィールドは Oracle Identity Manager により設定されます。
Object Name	このリコンシリエーション・イベントに関連付けられているターゲット・リソースまたは信頼できるソース。信頼できるソースの場合、これはユーザーです。
For User/For Organization	リソース・オブジェクトのイベントがユーザーのレコードに関連付けられているか、組織のレコードに関連付けられているかを示します。

フィールド名	説明
Status	<p>リコンシリエーション・イベントの現在のステータス。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Event Received: ターゲット・リソースまたは信頼できるソースから変更を受け取ったこと、たとえば <code>CreateReconciliationEvent</code> メソッドがコールされたことを示します。イベントは、ターゲット・リソースまたは信頼できるソースから実際のデータをまだ受け取っていません。 ■ Data Received: ターゲット・リソースまたは信頼できるソースから情報を受け取ったデータ。 ■ Users Matched: イベントは、リコンシリエーション・ユーザー一致ルールに基づいて、1つ以上のユーザー・レコードに一致します。 ■ Organizations Matched: イベントは、リコンシリエーション組織一致ルールに基づいて、1つ以上の組織レコードに一致します。 ■ Processes Matched: イベントは、1つ以上のプロビジョニング・プロセスに一致します。たとえば、イベントにあるキー・フィールドのすべての値が、プロセスのフォームにあるそれらのフィールドの値に一致します。 ■ No Match Found: プロビジョニング・プロセス・フォームのキー・フィールドの値も、いずれのユーザーまたは組織の一致ルールも、イベントに一致しません。イベントはユーザーまたは組織のレコードに関連付けられていません。 ■ Rules Reapplied: 「Reapply Matching Rules」 ボタンがクリックされ（前回の一致は削除された可能性があります）、このリソースに関連付けられているすべての最新版の一致ルールのロジックが適用されました。 ■ Event Linked: イベントが、特定のユーザーまたは組織レコードに一致し、リンクされました。 ■ Event Closed: ユーザーが「Close Event」 ボタンをクリックして手動でイベントを閉じました。イベントのデータは Oracle Identity Manager のレコードにリンクされていません。一度閉じたリコンシリエーション・イベントを再び開くことはできません。 ■ Required Data Missing: 1つ以上の必須データ要素がありません。リソース定義上のいずれかの必須フィールドのデータがイベントで使用できない場合にこのメッセージが表示されます。
Event Date	このイベントを受け取った日付と時刻。
Assigned to User	このイベントが割り当てられているユーザー。
Assigned to Group	このイベントが割り当てられているユーザー・グループ。
Linked To (領域)	フォームのこのセクションのフィールドについて、次に説明します。
User Login	イベントがリンクされているユーザー・レコードの Oracle Identity Manager ID 。
Organization Name	イベントがリンクされている組織レコードの Oracle Identity Manager ID 。信頼できるソースを持つ組織検出を実行する場合、ユーザー検出の前に実行することをお勧めします。 Oracle Identity Manager のすべてのユーザー・レコードは、組織レコードに関連付けられている必要があります。
Process Instance Key	イベントにリンクされたプロビジョニング・プロセスの数値インスタンス。
Process Descriptive Data	「 Process Definition 」 フォームの「 Map Descriptive Field 」 ポップアップ・ウィンドウで定義されているプロビジョニング・プロセスの、インスタンス固有の記述データ。

フィールド名	説明
Close Event	このボタンにより、リコンシリエーション・イベントが閉じます。イベントが終了している場合、それ以上の一致試行やリンクが行われることはありません。
Re-apply Matching Rules	このボタンにより、リコンシリエーション一致ルールが再適用されます。これには、プロセス・データと、リソース・オブジェクトが関連付けられているユーザー一致ルールまたは組織一致ルールの両方が含まれます。Oracle Identity Manager が十分な一致を生成していない場合、リソースのリコンシリエーション一致ルールを修正して再適用するか、プロビジョニング・プロセスのマッピングを修正できます。これらのルールを編集した後で再適用すると、異なるレコードが「Processes Matched」、「Matched Users」または「Matched Organizations」タブに表示されることがあります。リコンシリエーション・ルールは、プロビジョニング・プロセスの一致が生成されない場合にのみターゲット・リソースのリコンシリエーション・イベントに適用されます。これは、プロセス一致の方が質が高く、正確であると考えられるためです。
Create Organization (信頼できるソースに関連するイベントでのみ使用可能)	このボタンは、Oracle Identity Manager でリコンシリエーション・イベントの情報に基づいて組織レコードを作成する際に使用します。このボタンは、リコンシリエーション・イベントが信頼できるソースでの新規組織の作成であることが確実なときのみクリックします。
Create User (信頼できるソースに関連するイベントでのみ使用可能)	このボタンは、Oracle Identity Manager でリコンシリエーション・イベントの情報に基づいてユーザー・レコードを作成する際に使用します。このボタンは、リコンシリエーション・イベントが信頼できるソースでの新規ユーザーの作成であることが確実なときのみクリックします。

リコンシリエーション・イベントの表示と管理

次の手順は、リコンシリエーション・イベントを表示および管理する方法です。

注意： リコンシリエーション・アクション・ルールの定義によって、信頼できるソースでの一致が1つのみの場合、または一致がない場合に、Oracle Identity Manager はリコンシリエーション・イベントのデータをユーザー・レコードまたは組織レコードに自動的にリンクすることができます。

リコンシリエーション・イベントを表示および管理するには、次の手順を実行します。

- 「Reconciliation Manager」フォームにアクセスします。
- 問合せ機能を使用して、目的のリコンシリエーション・イベントの位置を確認します。
「Object Name」フィールドに関連付けられているリソースや、「Status」フィールドのステータスを基準にして、リコンシリエーション・イベントを問い合わせることもできます。
問合せ対象が削除済イベントの場合、つまり、対応するレコードがターゲット・リソースまたは信頼できるソースから削除されている場合、「Delete Event」フラグに対して「Yes」オプションが選択されています。それ以外の場合は「No」オプションが選択されています。
- 目的のリコンシリエーション・イベントの位置を確認したら、このフォームのタブを使用して、次の操作を行うことができます。
 - 未処理データの修正
 - 一致するプロビジョニング・プロセス・フォーム・インスタンス、またはユーザー・レコードや組織レコードの候補の参照やリンク
 - イベントの監査履歴の表示

各タブの情報については、「Reconciliation Manager」フォームのタブに関する項で説明します。Oracle Identity Manager が生成した一致を評価する際は、次のことができます。

- **特定のプロビジョニング・プロセス、ユーザーまたは組織へのリコンシリエーション・イベントのリンク**：このとき、イベントは既存のユーザー・レコードまたは組織レコードに関連付けられていると想定されています。

この操作を実行するには、該当するタブの「Link」ボタンをクリックします。または、検出された一致が 1 つだけの場合に Oracle Identity Manager が自動的にデータをリンクするようにルールを定義している場合もあります。

- **信頼されたソースとのユーザー・ベースのリコンシリエーションの場合**：イベントが、信頼できるソースでの新規ユーザーの作成であれば、Oracle Identity Manager で新規ユーザーを作成します。

この操作を実行するには、「Create User」ボタンをクリックします。または、一致が検出されなかった場合に、Oracle Identity Manager が自動的にユーザーを作成するようにアクション・ルールを定義している場合もあります。

- **信頼されたソースとの組織ベースのリコンシリエーションの場合**：イベントが、信頼できるソースでの新規組織の作成であれば、Oracle Identity Manager で新規組織を作成します。

この操作を実行するには、「Create Organization」ボタンをクリックします。または、一致が検出されなかった場合に、Oracle Identity Manager が自動的に組織を作成するようにアクション・ルールを定義している場合もあります。

- **リコンシリエーション・ルールの精度を上げる**：このリソースに関連付けられたルールです。その後、より正確な一致を生成するためにルールを再適用します。

この操作を実行するには、適用できるリコンシリエーション・ルールの精度を上げ、保存してから、「Re-apply Matching Rules」ボタンをクリックします。

注意： リコンシリエーション・ルールの精度を上げて再適用するか、作成を選択するか、ユーザー、プロビジョニング・プロセスまたは組織をリンクすると、これらのアクションは「Reconciliation Event History」タブに記録されます。リコンシリエーション・イベントで実行されたアクションのログを表示するには、「Reconciliation Event History」タブをクリックします。

「Reconciliation Manager」 フォームのタブ

調べるリコンシリエーション・イベントが見つかったら、タブを使用して次の操作を実行できます。

- イベントでの処理済または未処理のデータの表示
- 一致するプロビジョニング・プロセス、ユーザーまたは生成された組織の表示
- 適切なレコードへのイベントのリンク、または新規ユーザーの作成

「Reconciliation Data」 タブ

このタブのデータは、「Processed Data」と「Unprocessed Data」の2つのブランチのいずれかの下に表示されます。

Processed Data

「Processed Data」ブランチのフィールドは、関連付けられているリソースの「Reconciliation Fields」タブ上で定義されます。リコンシリエーション・イベントで、これらのフィールドは正常に処理されています。たとえば、データ型要件に違反していません。正常に処理された各フィールドには、次の内容が表示されます。

- 「Reconciliation Fields」タブで定義されている、関連付けられたリソースのフィールド名（たとえば、**field1**）。
- 調整されたフィールドに関連付けられているデータ型（たとえば、**string**）。可能な値は、**Multi-Valued**、**String**、**Number**、**Date**、**IT resource** です。
- リコンシリエーション・イベントで受け取ったフィールドの値（たとえば、**Newark**）。これはターゲット・リソースまたは信頼できるソース上で変更され、リコンシリエーション・イベントで開始されたいくつかの値の1つであることがあります。

処理済データ・フィールドは、たとえば次のように表示されます。

```
Location [String] = Newark
```

注意： データ型が **Multi-Value** のフィールドの場合（信頼できるソースでなく、ターゲット・リソースでのみ可能）、値を持ちません。ただし、コンポーネント・フィールド（サブブランチに含まれる）に、それぞれ独自の値を持ちます。

Unprocessed Data

「Unprocessed Data」ブランチにリストされたフィールドは、処理できなかったリコンシリエーション・イベント項目です。これらはたとえば、定義されていない項目や、関連付けられているリソースの「Reconciliation Fields」タブで設定されているデータ型と矛盾する項目などです。各未処理フィールドについて、次の情報が表示されます。

- フィールドの名前、たとえば、**user_securityid**。
- リコンシリエーション・イベントで受け取ったフィールドの値（たとえば、**capital**）。これはターゲット・リソースまたは信頼できるソース上で変更され、リコンシリエーション・イベントで開始されたいくつかの値の1つであることがあります。
- ターゲット・システムから受け取ったデータを自動処理できなかった理由（たとえば、**<Not Numeric>**）。次の理由コードの1つが、未処理フィールドの横に表示されます。

エラー・コード	発生の理由
NOT MULTI-VALUED ATTRIBUTE	フィールド値が複数値属性です。それ自身が複数値であるフィールドではなく、複数値属性のコンポーネント・フィールドだけが値を受け取れます。
NOT NUMERIC	数値フィールドの値が数値ではありません。
DATE PARSE FAILED	日付フィールドの値を有効な日付として認識できません。
SERVER NOT FOUND	タイプ IT Resource のフィールドの値が、既存の IT リソース・インスタンスの名前として認識されませんでした。
FIELD NOT FOUND	イベントのフィールドの名前がリソースで定義されていません。
PARENT DATA LINK MISSING	親データ・フィールド（データ型は Multi-Value）がリコンシリエーション・フィールドに関連付けられていません。そのため、このコンポーネント・フィールドを子リコンシリエーション・フィールドにリンクできませんでした。

エラー・コード	発生理由
FIELD LINKAGE MISSING	対応するリコンシリエーション・フィールドが、関連付けられているリソースの「Reconciliation Fields」タブで定義されていません。
ATTRIBUTE LINKAGE MISSING	データ型が Multi-Value のフィールドにのみ適用されます。複数値フィールドのコンポーネント（子）フィールドの中に、データがリコンシリエーション・フィールドにリンクされていないものがあります。
TABLE ATTRIBUTE LINKAGE MISSING	データ型が Multi-Value のフィールドにのみ適用されます。データ型が Multi-Valued Attribute であるコンポーネント（子）フィールドの中に、データ型が Multi-Valued Attribute であるリコンシリエーション・フィールドにリンクされていないものがあります。

- 未処理フィールドがリソース・フィールドに正常にマップされている場合は、このイベント・フィールドがマップされているリソース・フィールドの名前。

未処理データ・フィールドは、たとえば次のように表示されます。

```
user_securityid = capital <Not Numeric>
```

注意： Oracle Identity Manager は、関連付けられているリソースの「Reconciliation Fields」タブで必須フィールドと設定されているすべてのフィールドが正常に処理されるまで、ターゲット・リソースのプロセス、または信頼できるソースのユーザーや組織の一致を試みません。

未処理フィールドのマッピングまたは修正

リコンシリエーション・イベントの未処理フィールドを修正したり、該当するリソースで定義されるとおりに、関連フィールドにマップするには、次の手順を使用します。

未処理フィールドをマップまたは修正するには、次の手順を実行します。

1. 未処理フィールドをダブルクリックします。

複数値フィールドの場合、適切な子プロセス・フォームにマップするか、個別のコンポーネント・フィールドをチェックする必要があることがあります。

複数値フィールドの場合、コンポーネント・フィールドをダブルクリックして修正します。

「Edit Reconciliation Field Data」ダイアログ・ボックスが表示されます。

注意： 未処理の複数値コンポーネント・フィールドを、関連付けられているリソースの「Reconciliation Fields」タブで定義されている複数値フィールドのいずれかにマップするには、「Linked to」フィールドをダブルクリックし、目的のフィールドを選択して、「OK」をクリックします。続いて「Save」をクリックして「Edit Reconciliation Field Data」ダイアログ・ボックスを閉じます。

2. 未処理フィールドを、関連付けられているリソースの「Reconciliation Fields」タブで定義されているフィールドのいずれかにマップするには、「Linked to」フィールドをダブルクリックし、目的のフィールドを選択して「OK」をクリックします。続いて「Save」をクリックして「Edit Reconciliation Field Data」ダイアログ・ボックスを閉じます。

未処理フィールドの値を修正するには、正しい値を「Corrected Value」フィールドに入力し、「Save」をクリックして、「Edit Reconciliation Field Data」ダイアログ・ボックスを閉じます。

フィールドのデータが正常に処理されると、「Unprocessed Data」ブランチのエントリはリンク先のフィールドを反映して更新されます。そのフィールドの新しいエントリが、「Processed Data」ブランチに追加されます。

リコンシリエーション・イベントの必須データ要素（該当するリソース定義の「Object Reconciliation」タブ）に「Reconciliation Data」タブで処理済のマークが付けられると、Oracle Identity Manager には次のように表示されます。

- 信頼できるソースの場合

該当するユーザーまたは組織に一致する、リソースに関連付けられているリコンシリエーション・ルール・ロジックで指定されているリコンシリエーション・イベントの関連データに一致するすべてのユーザー・レコードまたは組織レコード。これらの候補は、ソース所有者の可能性のあるユーザーがユーザー一致ルールの適用に基づいて Oracle Identity Manager に検出された（ユーザー更新）、信頼できるソース上のアカウントを表します。一致するユーザーが検出されなかった場合、リコンシリエーション・イベントは、信頼できるソースでの新規ユーザー・アカウントの作成（つまりユーザー作成）を表します。

- ターゲット・リソースの場合

すべてのキー・フィールドの値（該当するプロセス定義の「Reconciliation Field Mappings」タブで設定された値）がリコンシリエーション・イベントのすべてのキー・フィールドの値に一致するような、すべてのプロビジョニング・プロセス・フォーム・インスタンス。これは、一致している可能性があるアカウントが Oracle Identity Manager に検出された（アカウント更新）ターゲット・システム上のアカウントを表します。

これらの値に一致するプロセス・インスタンスがない場合、Oracle Identity Manager は該当するユーザーまたは組織に一致するリコンシリエーション・ルールを評価し、リコンシリエーション・イベントのデータと一致するユーザーまたは組織を表示します。これらの一致は、一致するアカウント・レコードが、リコンシリエーション・エンジンにより Oracle Identity Manager に検出されなかったターゲット・システム上のアカウントを表しています。つまり、Oracle Identity Manager は、ユーザーに対してそのシステム上のアカウントがプロビジョニングされていることを認識していないが、そのアカウントの所有者になる可能性のあるユーザーを検出しました（アカウント作成）。複数の一致候補が検出された場合は通常、レコードの調査と、Oracle Identity Manager アカウントのリンク先の決定を管理者に依頼します。一致が検出されない場合、信頼できるソースとターゲット・アプリケーションのデータに不一致があることがあります。このイベントは、ターゲット・システムのログ・アカウントを示しているか、既存の従業員に対してターゲット・システム上で新規アカウントがプロビジョニングされたことを示している可能性があります。ただし、Oracle Identity Manager はそのアカウントがどのユーザーに関連付けられているか判断できません。

プロセス一致ツリー（ターゲット・リソースのみ）

関連付けられているリソースの「Reconciliation Fields」タブで定義されているすべての必須フィールドの処理が完了すると、タブには、すべてのキー・フィールドの値がリコンシリエーション・イベントのすべてのキー・フィールドの値に一致するような、すべてのプロビジョニング・プロセス・フォーム・インスタンスが表示されます。

注意：これが発生するのは、ターゲット・リソースに関連付けられているリコンシリエーション・イベントのみです。信頼できるソースはユーザー・リソースまたは組織およびそのプロビジョニング・プロセスに関連付けられているため、カスタムのプロセス・フォームを持つことはできません。結果として、このタブにデータを移入するために必要な一致を所有することができません。信頼できるソースの場合、すべての必須フィールドが処理された後、Oracle Identity Manager はすぐにユーザーまたは組織の一致ルールの評価に進みます。

一致したプロビジョニング・プロセスには、次の内容が表示されます。

- リコンシリエーション・イベントのキー・フィールドの値に一致しているプロセス・フォーム・インスタンスに関連付けられているプロビジョニング・プロセスの名前（たとえば、**windows2000_prov**）。
- 個別のプロセス・インスタンスの数値 ID（たとえば、**445**）。
- このプロセス・インスタンスに関連付けられているユーザー ID（たとえば、**jd**oe）または組織名（たとえば、**Finance**）。これは、プロビジョニング・プロセスのそのインスタンスによってリソースにプロビジョニングされたユーザーです。

一致したプロビジョニング・プロセスは、たとえば次のように表示されます。

Windows2000_prov [445] for User=jd

このタブにリストされるプロビジョニング・プロセスがない場合、リコンシリエーション・イベントのキー・フィールドの値を、そのリソースに関連付けられたプロセス・フォーム・インスタンスのフィールドの値に一致させることができなかったことを意味します。この場合、Oracle Identity Manager は、リソースに対して定義されている、いずれかのユーザーまたは組織の一致ルールを適用するよう試みます。一致が検出されると、「**Matched Users or Matched Organizations**」タブに表示されます。

プロビジョニング・プロセス・インスタンスのリコンシリエーション・イベントへのリンク

プロビジョニング・プロセス・インスタンスをリコンシリエーション・イベントにリンクするには、次の手順を実行します。

1. リコンシリエーション・イベントにリンクするプロビジョニング・プロセス・インスタンスを決定したら、それを選択して、「**Establish Link**」をクリックします。
2. Oracle Identity Manager により、関連するプロビジョニング・プロセスで定義されたマッピングに従ってリコンシリエーション・イベントの情報が含まれている、関連のプロセス・フォーム・インスタンスが更新されます。

また、そのプロセスの「**Reconciliation Update Received**」タスクも挿入されます。

「Matched Users」タブ

このタブには、リソースのリコンシリエーション・ルールの基準で指定されたとおりに、リコンシリエーション・イベントの関連データに一致するユーザー・レコードが表示されます。

信頼できるソースの場合、Oracle Identity Manager はこれらのルールを評価し、すべての必須フィールド（関連付けられているリソースの「**Reconciliation Fields**」タブで定義）の処理が完了すると、一致しているユーザー・レコードをすべて表示します。

ターゲット・リソースの場合、Oracle Identity Manager はルールを評価し、すべての必須フィールド（関連付けられているリソースの「**Reconciliation Fields**」タブで定義）が処理され、一致が「**Processes Matched Tree**」タブに生成されなかった場合にかぎり、一致しているユーザー・レコードをすべて表示します。

一致している各レコードについては、Design Console はユーザー ID、名および姓を表示します。

注意：一致するレコードが「**Processes Matched Tree**」タブにある場合、「**Matched Users**」タブにはレコードが表示されません。プロセス一致は質が高く、正確である可能性が高いものとみなされます。

ユーザー・レコードのリコンシリエーション・イベントへのリンク

次の手順は、リコンシリエーション・イベントにユーザー・レコードをリンクする方法を説明しています。

注意： 次の手順では、レコードが存在するものと想定しています。信頼できるソースでは、リコンシリエーション・イベントが信頼できるソースでの新規ユーザーの作成であると判断した場合に、「**Create User**」ボタンをクリックします。これにより、リコンシリエーション・イベントの情報を使用して新規ユーザー・レコードが作成されます。

リコンシリエーション・イベントにユーザー・レコードをリンクするには、次の手順を実行します。

1. リコンシリエーション・イベントにリンクするユーザーを決定し、選択して、「**Link**」をクリックします。
2. 「**Link**」をクリックして、リコンシリエーション・イベントの対象がターゲット・リソースである場合、Oracle Identity Manager は次の操作を実行します。
 - 選択されたユーザーに対応するリソースのプロビジョニング・プロセスのインスタンスを作成し、プロセスのタスクに関連付けられているすべてのアダプタを非表示にし、プロセスを自動的に完了し、「**Reconciliation Insert Received**」タスクを挿入します。
 - プロビジョニング・プロセスで定義されたマッピングに従って、リコンシリエーション・イベントのデータを使用して、リソースのプロセス・フォームのインスタンスを作成します。

「**Link**」をクリックして、リコンシリエーション・イベントの対象が信頼できるソースである場合、Oracle Identity Manager は次の操作を実行します。

- ユーザー・プロビジョニング・プロセスで定義されたマッピングに従って、リコンシリエーション・イベントのデータを使用してユーザー・レコードを更新します。
- リコンシリエーション・イベントのリンク先のユーザー・レコードに対するユーザー・プロビジョニング・プロセスのインスタンスに「**Reconciliation Insert Received**」タスクを挿入します。

Matched Organizations

このタブには、リソースのリコンシリエーション・ルールで指定されたとおりに、リコンシリエーション・イベントのデータに一致する Oracle Identity Manager 組織レコードが表示されます。

信頼できるソースの場合、Oracle Identity Manager はこれらのルールを評価し、すべての必須フィールド（関連付けられているリソースの「**Reconciliation Fields**」タブで定義）の処理が完了すると、一致している組織レコードをすべて表示します。

ターゲット・リソースの場合、Oracle Identity Manager はルールを評価し、すべての必須フィールド（関連付けられているリソースの「**Reconciliation Fields**」タブで定義）が処理され、一致が「**Processes Matched Tree**」タブに生成されなかった場合にかぎり、一致している組織レコードをすべて表示します。

一致している各レコードについては、Oracle Identity Manager はユーザー ID、名および姓を表示します。

注意： 一致しているレコードが「**Processes Matched Tree**」タブにある場合、プロセス一致の方が質が高く、正確であると考えられるため、「**Matched Organizations**」タブに表示されるレコードはありません。

組織レコードのリコンシリエーション・イベントへのリンク

次の手順は、リコンシリエーション・イベントに組織レコードをリンクする方法を説明しています。

注意： 次の手順では、レコードがあらかじめ存在するものと想定しています。次の手順で、信頼できるソースでは、リコンシリエーション・イベントが信頼できるソースでの新規組織の作成であると判断した場合に、「**Create Organization**」 ボタンをクリックします。これにより、リコンシリエーション・イベントの情報を使用して新規組織レコードが作成されます。

リコンシリエーション・イベントに組織レコードをリンクするには、次の手順を実行します。

1. リコンシリエーション・イベントにリンクする組織を決定したら、選択して、「**Link**」 をクリックします。
2. リコンシリエーション・イベントの対象がターゲット・リソースである場合、Oracle Identity Manager は次の操作を実行します。
 - 選択された組織に対応するリソースのプロビジョニング・プロセスのインスタンスを作成し、プロセスのタスクに関連付けられているすべてのアダプタを非表示にし、プロセスを自動的に完了し、「**Reconciliation Insert Received**」 タスクを挿入します。
 - プロビジョニング・プロセスで定義されたマッピングに従って、リコンシリエーション・イベントのデータを使用して、リソースのプロセス・フォームのインスタンスを作成します。

リコンシリエーション・イベントの対象が信頼できるソースである場合、Oracle Identity Manager は次の操作を実行します。

- Oracle Identity Manager の組織プロビジョニング・プロセスで定義されたマッピングに従って、リコンシリエーション・イベントのデータを使用して組織レコードを更新します。
- リコンシリエーション・イベントのリンク先の組織レコードに対する Oracle Identity Manager 組織プロビジョニング・プロセスの既存のインスタンスに「**Reconciliation Insert Received**」 タスクを挿入します。

Reconciliation Event History

このタブには、このリコンシリエーション・イベントで実行されたアクションの履歴が表示されます。各アクションについて、アクションが実行された日付と時刻がリストされます。Oracle Identity Manager により、次のリコンシリエーション・イベント・アクションが追跡および記録されます。

- **Event Received:** このアクションは、Oracle Identity Manager がリコンシリエーション・イベントを受け取ったときに記録されます。
- **Data Sorted:** リコンシリエーション・イベントのデータが、処理フィールドおよび未処理フィールドにソートされたときにアクションが記録されます。
- **Rules Reapplied:** ユーザーが「**Re-apply Matching Rules**」 ボタンをクリックしたときにアクションが記録されます。
- **Processes Matched:** 1 つ以上のプロセスフォーム・インスタンスおよび関連付けられているプロビジョニング・プロセスが、リコンシリエーション・イベントのキー・フィールドの値に一致したときにアクションが記録されます。
- **Users Matched:** 1 件以上のユーザー・レコードが、ユーザーに一致するリコンシリエーション・ルールを使用してリコンシリエーション・イベントのデータに一致させられたときにアクションが記録されます。
- **Organization Matched:** 1 件以上の Oracle Identity Manager 組織レコードが、組織に一致するリコンシリエーション・ルールを使用してリコンシリエーション・イベントのデータに一致させられたときにアクションが記録されます。

- **Linked to User:** リコンシリエーション・イベントのデータが特定のユーザーにリンクされたときにアクションが記録されます。
- **Linked to Organization:** リコンシリエーション・イベントのデータが特定の組織にリンクされたときにアクションが記録されます。

リソース管理

この章では、Design Console のリソース管理について説明します。次の内容について説明します。

- 概要
- 「IT Resources Type Definition」 フォーム
- 「IT Resources」 フォーム
- 「Rule Designer」 フォーム
- 「Resource Objects」 フォーム
- サービス・アカウントの管理

概要

「Resource Management」フォルダには、システム管理者が Oracle Identity Manager リソースを管理するために使用するツールがあります。このフォルダには次のフォームがあります。

- **IT Resources Type Definition:** このフォームは、「IT Resources」フォームに参照値として出現するリソース・タイプを作成するために使用します。
- **IT Resources:** このフォームは、IT リソースの定義と管理のために使用します。
- **Rule Designer:** このフォームは、パスワード・ポリシー選択、自動グループ・メンバーシップ、プロビジョニング・プロセス選択、タスク割当て、およびアダプタへの事前移入に適用できるルールを作成するために使用します。
- **Resource Objects:** このフォームは、リソース・オブジェクトを作成および管理するために使用します。これらのオブジェクトは、ユーザーおよび組織に対して使用できるようにするリソースを表します。

関連資料: この章では、アダプタおよび Java タスクへの事前移入について説明します。アダプタおよびアダプタ・タスクの詳細は、『Oracle Identity Manager Tools リファレンス・ガイド』を参照してください。

「IT Resources Type Definition」フォーム

「IT Resources Type Definition」フォームは「Resource Management」フォルダにあります。「IT Resources Type Definition」フォームは、IT リソース・タイプ（たとえば、AD、MS Exchange、Solaris）を分類するために使用します。Oracle Identity Manager は、ユーザーと組織に対してプロビジョニングされるリソース・オブジェクトにリソース・タイプを関連付けます。

このフォームで定義した IT リソース・タイプは、リソースを定義する際に選択可能になります。タイプは「IT Resources」フォームの「Type」フィールドに表示されます。

IT リソース・タイプは、それを参照する IT リソース定義に対してはテンプレートの役を果します。IT リソース定義が IT リソース・タイプを参照する場合、リソースは IT リソース・タイプのパラメータと値をすべて継承します。IT リソース・タイプは、一般的な IT 分類（たとえば、Solaris）として使用されます。リソースは、このタイプのインスタンス（たとえば、Solaris for Statewide Investments）となります。

すべての IT リソース定義を IT リソース・タイプに関連付ける必要があります。

「IT Resources Type Definition」フォームを図 6-1 に示します。

図 6-1 「IT Resources Type Definition」フォーム

	Field Name	Default Field Value	Encrypted
1	Psswd	xelsysadm	<input checked="" type="checkbox"/>
2	Server Address	102.195.0.255	<input type="checkbox"/>
3	User Name	robert	<input type="checkbox"/>

次の表は、「IT Resources Type Definition」フォームのフィールドについて説明しています。

フィールド名	説明
Server Type	IT リソース・タイプの名前。
Insert Multiple	このチェック・ボックスは、この IT リソース・タイプが複数の IT リソースによって参照されることがあるかどうかを指定します。

注意： IT リソースが外部リソースにアクセスする必要があるが、ネットワークを使用してそのリソースに到達することができない場合、それをリモート・マネージャに関連付ける必要があります。詳細は、『Oracle Identity Manager Tools リファレンス・ガイド』を参照してください。

IT リソースのテンプレート（リソース・タイプ）の定義

次の手順は、IT リソース・タイプを定義する方法を説明しています。

IT リソース・タイプを定義するには、次の手順を実行します。

1. IT リソース・タイプの名前を「**Server Type**」フィールドに、たとえば、「Solaris」と入力します。
2. IT リソース・タイプを複数の IT リソースで使用できるようにするには、「**Insert Multiple**」チェック・ボックスを選択します。
3. 「**Save**」をクリックします。

IT リソース・タイプが定義されました。これは、「IT Resources」フォームで IT リソースを定義するときに、「**Type**」フィールドから選択できます。

「IT Resource Type Definition」フォームのタブ

新規 IT リソース・タイプの基本情報を保存すると、問合せで IT リソース・タイプが返されたとき、「IT Resources Type Definition」フォーム下方の領域のタブにあるフィールドが有効になります。

「IT Resources Type Definition」フォームには次のタブがあります。

- 「IT Resource Type Parameter」タブ
- 「IT Resources」タブ

「IT Resource Type Parameter」タブ

図 6-1 のように、「IT Resource Type Parameter」タブは、その IT リソース・タイプのすべての接続パラメータのデフォルト値と暗号化設定を指定するために使用します。このタブのパラメータと値は、この IT リソース・タイプを参照するすべての IT リソースによって継承されます。

新規パラメータを定義する場合、パラメータとその値、および暗号化設定が、現在の IT リソース・タイプ、およびこの IT リソース・タイプを参照する新規または既存の IT リソース定義に追加されます。該当するすべてのリソース定義で、新規パラメータは「IT Resources」フォームの「Parameters」タブに表示されます。

注意： これらのパラメータの値と暗号化設定は、各 IT リソース内でカスタマイズできます。

IT リソース・タイプへのパラメータの追加

次の手順は、IT リソース・タイプにパラメータを追加する方法を説明しています。

IT リソース・タイプにパラメータを追加するには、次の手順を実行します。

1. 「Add」をクリックします。
新しい行が「IT Resource Type Parameter」タブに表示されます。
2. 「Field Name」フィールドに、パラメータの名前を入力します。
3. 「Default Field Value」フィールドにデフォルト値を入力します。
この値は、この IT リソース・タイプを参照するすべての IT リソースによって継承されません。
4. 「Encrypted」チェック・ボックスを選択または選択解除します。
このチェック・ボックスにより、フォーム・フィールドでこのパラメータの値をマスクするか、つまり「****」と表示するかが決まります。
パラメータの値をマスクするには、このチェック・ボックスを選択します。
5. 「Save」をクリックします。

IT リソース・タイプからのパラメータの削除

次の手順は、IT リソース・タイプからパラメータを削除する方法を説明しています。

IT リソース・タイプからパラメータを削除するには、次の手順を実行します。

1. 削除するパラメータを強調表示します。
2. 「Delete」をクリックします。
パラメータおよびそれに関連付けられた値は、IT リソース・タイプや、このタイプを参照する IT リソース定義から削除されます。

「IT Resources」タブ

このタブには、選択された IT リソース・タイプを参照する IT リソースが表示されます。このタブのすべての IT リソースは同一のパラメータを共有しますが、値は各 IT リソースで一意的であるようにできます。

「IT Resource Type Definition」表

「IT Resource Type Definition」表には、次の情報が表示されます。

フィールド名	説明
Server Type	これは、「IT Resource Type Definition」フォームで定義された、リソース・アセット・タイプの名前です。
Insert Multiple	このチェック・ボックスは、この IT リソース定義の複数のインスタンスを作成できるかどうかを示します。

「IT Resources」 フォーム

「IT Resources」 フォームは「Resource Management」フォルダにあります。このフォームは、IT リソースを設定するために使用します。IT リソース定義は通常、ハードウェア（たとえば、1 つ以上のリソースがあるサーバーまたはコンピュータ）を表します。各 IT リソース定義が IT リソース・タイプのインスタンスを表します。

プロビジョニング・イベントでは、リソース・オブジェクトが IT リソース定義を参照します。その定義は、リソースがある場所と接続方法を指定しています。リソース・オブジェクトは、IT リソース定義に関連付けられる必要があります。

Oracle Identity Manager アダプタの変数は、IT リソースではどのパラメータの値にでもマップできます。そのパラメータは、ハードウェアについての情報（たとえば、サーバー・ドメイン名や、この IT リソースにアクセスするユーザーの ID）を表すことができます。

関連資料： アダプタおよびアダプタのマッピングの詳細は、『Oracle Identity Manager Tools リファレンス・ガイド』を参照してください。

次の表は、「IT Resources」フォームのフィールドについて説明しています。

フィールド名	説明
Name	IT リソースの名前。
Type	「IT Resources Type Definition」フォームで定義された、IT リソースの分類タイプ。
Remote Manager	リモート・マネージャを使用して IT リソースにアクセスできる場合、このフィールドにリモート・マネージャの名前が表示されます。そうでない場合は、このフィールドは空です。

IT リソースの定義

次の手順は、IT リソースを定義する方法を説明しています。

IT リソースを定義するには、次の手順を実行します。

1. 「Name」フィールドに IT リソースの名前を入力します。
2. 「Type」参照フィールドをダブルクリックして、「Lookup」ダイアログ・ボックスで IT リソース・タイプを選択し、この IT リソースに関連付けます。

「IT Resource Type definition」フォームを使用して IT リソース・タイプを定義します。

3. 「OK」をクリックします。
4. リモート・マネージャを使用して IT リソースにアクセスする場合、つまり、IT リソース・タイプがリモート・マネージャと定義された場合は、「Remote Manager」参照フィールドをダブルクリックし、「Lookup」ダイアログ・ボックスでリモート・マネージャを選択します。

リモート・マネージャを使用して IT リソースにアクセスしない場合は、手順 6 に進みます。

5. 「OK」をクリックします。
6. 「Save」をクリックします。

保存された IT リソースは、関連付けられている IT リソース・タイプ用の「IT Resources Type Definition」フォームの「IT Resource」タブに表示されます。IT リソース分類タイプのパラメータとデフォルト値は「Parameters」タブに表示されます。

7. オプションとして、「Parameters」タブ上のパラメータに IT リソース固有の値を指定するには、編集するパラメータの「Value」フィールドを選択し、新しい値を入力し、「Save」をクリックします。

IT リソース・インスタンス・パラメータへのアクセス権限の設定

「Administrators」タブは、管理グループのアクセス権限を設定し、IT Resources API のセキュリティ・レベルを設定するために使用します。

アクセス権限を設定するには、次の手順を実行します。

1. 「Administrators」タブをクリックします。

デフォルトでは、この IT リソース・インスタンスに関連付けられている管理者グループが表示されます。

2. 新規管理グループを追加するには「Assign」をクリックします。

たとえば、「ramone」IT リソース・インスタンスの管理グループとして「G2」を割り当てることができます。

3. 次の権限に対応するチェック・ボックスをクリックします。

権限	説明
Read	選択すると、「Group Name」で示された管理グループが、現在の IT リソース・インスタンスを読み取ることができます。
Write	選択すると、対応する「Group Name」は、現在の「IT Resource Instance」のパラメータ値を読み取りおよび変更できます。
Delete	選択すると、関連付けられている管理グループが現在の IT リソース・インスタンスを削除できます。

4. 「Save」ボタンをクリックします。

「Rule Designer」 フォーム

ルールとは、Oracle Identity Manager が条件を一致させたり、それに基づいて対処することを可能にする基準です。特定のリソース・オブジェクトまたはプロセスにルールを割り当てることも、すべてのリソース・オブジェクトまたはプロセスにルールを適用することもできます。

ルールの使用方法の例を次に示します。

- タイプが「Application」のリソース・オブジェクトに適用するパスワード・ポリシーを決定します。
- ユーザーをユーザー・グループに自動追加できるようにします。
- リソース・オブジェクトがリクエストに割り当てられた後で、そのリソース・オブジェクトに適用される承認およびプロビジョニング・プロセスを指定します。
- プロセス・タスクがどのようにユーザーに割り当てられるかを決定します。
- 指定されたフォーム・フィールドに対してどちらの事前移入アダプタが実行されるかを指定します。

ヒント：事前移入アダプタの詳細は、『Oracle Identity Manager Tools リファレンス・ガイド』を参照してください。

図 6-2 に示す「Rule Designer」フォームは「Resource Management」フォルダにあります。このフォームは、リソースとともに使用されるルールを作成および管理するために使用します。

図 6-2 「Rule Designer」 フォーム

ルールには 4 つのタイプがあります。

General: Oracle Identity Manager が自動的にユーザー・グループにユーザーを追加したり、リソース・オブジェクトに割り当てるパスワード・ポリシーを決定したりできるようにします。

Process Determination: リクエストの承認プロセスや、リソース・オブジェクトの承認およびプロビジョニング・プロセスを決定します。

Task Assignment: ユーザーまたはプロセス・タスクに割り当てられるユーザー・グループを指定します。

Prepopulate: フォーム・フィールドに対して実行される事前移入アダプタを決定します。

ルールには次の項目が含まれます。

ルール要素: 属性、演算子および値で構成されています。図 6-2 では、属性は **User Login**、演算子は **==**、値は **XELSYSADM** です。

ネストされたルール: ロジック上の理由で、1 つのルールを別のルールの内部に配置する必要がある場合、内部ルールはネストされたルールと呼ばれます。図 6-2 では、**Rule to Prevent Solaris Access** が **Rule for Solaris** 内にネストされています。

演算: ルールに複数のルール要素またはネストされたルールが含まれる場合、演算がコンポーネント間の関係を示します。図 6-2 では、**AND** 演算を選択すると、ルールに適合するには、**User Login==XELSYSADM** ルール要素と、ネストされたルール **Rule to Prevent Solaris Access** の両方が **true** になる必要があります。

次の表は、「Rule Designer」フォームのフィールドについて説明しています。

フィールド名	説明
Name	ルールの名前。
AND/OR	<p>これらのラジオ・ボタンでルールの演算を指定します。</p> <p>ルールに適合しているのは、すべての外部ルール要素およびネストされたルールが true のときだけであると規定するには、「AND」ラジオ・ボタンを選択します。ルールに適合しているのは、いずれかの外部ルール要素またはネストされたルールが TRUE のときであると規定するには、「OR」ラジオ・ボタンを選択します。</p> <p>重要: これらのラジオ・ボタンは、ネストされたルールの中に含まれるルール要素の演算を反映しません。図 6-2 で、AND 演算は User Login == XELSYSADM ルール要素と、ネストされたルール Rule to Prevent Solaris Access に適用されます。ただし、この演算は、Rule to Prevent Solaris Access ルール内部の Object Name == Solaris ルール要素には無関係です。</p>
Type	<p>ルールの分類ステータス。ルールは 4 つのタイプのいずれかに属することができます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ General: Oracle Identity Manager がユーザー・グループにユーザーを自動的に追加できるようにし、リソース・オブジェクトに割り当てられるパスワード・ポリシーを決定します。 ■ Process Determination: リクエストに関連付けられている標準承認プロセス、およびリソース・オブジェクトに対して選択されている承認およびプロビジョニング・プロセスを決定します。 ■ Task Assignment: プロセス・タスクに割り当てられるユーザーまたはユーザー・グループを決定します。 ■ Prepopulate: フォーム・フィールドで使用される事前移入アダプタを決定します。
Sub-Type	<p>タイプが Process Determination、Task Assignment または Prepopulate のルールは、4 つのサブタイプのいずれかに分類できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Organization Provisioning: ルールをプロビジョニング・ルールとして分類します。 <p>プロセスがプロビジョニングされているか、タスクが割り当てられているか、事前移入アダプタが適用された組織を決定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ User Provisioning: ルールをプロビジョニング・ルールとして分類します。 <p>プロセスがプロビジョニングされているか、タスクが割り当てられているか、または事前移入アダプタが適用されているユーザーを決定するために使用されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Approval: ルールを承認ルールとして分類します。 <p>ユーザーまたは組織へのリソースのプロビジョニングを承認するために使用されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Standard Approval: ルールを標準ルールとして分類します。 <p>リクエストを承認するために使用されます。</p> <p>ルール・タイプが Task Assignment または Prepopulate の場合、Approval 項目と Standard Approval 項目は「Sub-Type」ボックスに表示されません。「Sub-Type」ボックスは、「General」ルール・タイプに対しては無効になっています。</p>
Object	このルールが割り当てられたリソース・オブジェクト。
All Objects	このチェック・ボックスを選択すると、すべてのリソース・オブジェクトにルールを割り当てることができます。

フィールド名	説明
Process	このルールが割り当てられたプロセス。
All Processes	このチェック・ボックスを選択すると、すべてのプロセスにルールを割り当てることができます。
Description	ルールについての説明。

ルールの作成

次の手順は、ルールの作成方法について説明しています。

注意： 次の手順で、ネストされたルール内部のルール要素にはラジオ・ボタンが適用されないことに注意してください。たとえば、[図 6-2](#)で、AND 演算は **User Login==XELSYSADM** ルール要素と、ネストされたルール **Rule to Prevent Solaris Access** に適用されます。ただし、この演算は、**Rule to Prevent Solaris Access** ルール内部の **Object Name==Solaris** ルール要素には無関係です。

ルールを作成するには、次の手順を実行します。

1. 「Rule Designer」 フォームを開きます。
2. 「Name」 フィールドに、ルールの名前を入力します。
3. ルールに適合しているのは、すべてのルール要素またはネストされたルールが **true** のときだけであると規定するには、「AND」 ラジオ・ボタンを選択します。
 ルールに適合しているのは、いずれかのルール要素またはネストされたルールが **true** のときであると規定するには、「OR」 ラジオ・ボタンを選択します。
4. 「Type」 ボックスをクリックし、カスタム・メニューで、ルールに関連付ける分類ステータス（「General」、「Process Determination」、「Task Assignment」、または「Prepopulate」）を選択します。
Process Determination の場合は、「Sub-Type」 をクリックして、ルールに関連付ける分類ステータス（「Organization Provisioning」、「User Provisioning」、「Approval」 または「Standard Approval」）を選択します。
Task Assignment または **Prepopulate** の場合は、「Sub-Type」 をクリックして、ルールに関連付ける分類ステータス（「Organization Provisioning」 または「User Provisioning」）を選択します。
 「Type」 ボックスから「General」 を選択した場合は、手順 7 に進みます。
5. ルールを 1 つのリソース・オブジェクトに関連付けるには、「Object」 参照フィールドをダブルクリックし、「Lookup」 ダイアログ・ボックスでリソース・オブジェクトを選択します。
 ルールがすべてのリソース・オブジェクトにアクセスできるようにする場合、「All Objects」 チェック・ボックスを選択します。
6. ルールを 1 つのプロセスに割り当てるには、「Process」 参照フィールドをダブルクリックし、「Lookup」 ダイアログ・ボックスで、ルールに関連付けるプロセスを選択します。

注意： この Lookup ウィンドウに表示されるプロセスは、手順 5 で選択したリソース・オブジェクトに関連付けられたプロセスのみです。

ルールがすべてのプロセスにアクセスできるようにする場合、「All Processes」 チェック・ボックスを選択します。

注意：手順5で、「All Processes」チェック・ボックスを選択することによって1つのリソース・オブジェクトを選択した場合、このルールには、選択したリソース・オブジェクトに関連付けられたすべてのプロセスからアクセスできます。

7. 「Description」フィールドには、ルールに関する説明情報を入力します。
8. 「Save」をクリックします。
ルールが作成され、このフォームのタブが有効になります。

「Rule Designer」 フォームのタブ

「Rule Designer」フォームを起動してルールを作成すると、このフォームのタブが使用可能になります。

「Rule Designer」フォームには、次のタブが含まれます。

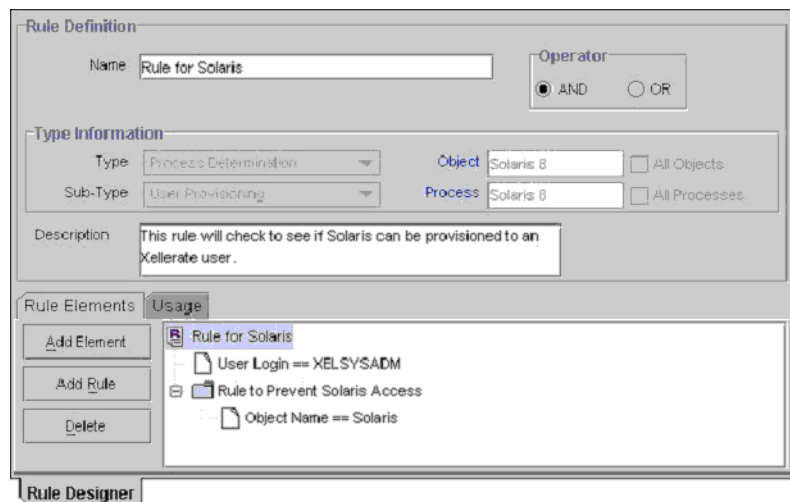
- 「Rule Elements」タブ
- 「Usage」タブ

それぞれのタブについて、次の各項で説明します。

「Rule Elements」タブ

このタブからは、ルールの要素やネストされたルールを作成および管理できます。たとえば、[図 6-3](#)で、**Rule for Solaris**には**User Login==XELSYSADM**ルール要素が含まれます。また、**Rule to Prevent Solaris Access**がネストされています。[図 6-3](#)は、「Rule Designer」フォームの「Rule Elements」タブを示しています。

図 6-3 「Rule Designer」 フォームの「Rule Elements」タブ



[図 6-3](#)のルールは、Solaris リソース・オブジェクトのプロビジョニング・プロセスに適用できます。このリソース・オブジェクトがリクエストに割り当てられると、ルールがトリガーされます。ターゲット・ユーザーのログインが **XELSYSADM** で、リソース・オブジェクトの名前が **Solaris** の場合、Solaris リソース・オブジェクトはユーザーに対してプロビジョニングされています。それ以外の場合、ユーザーは Solaris にアクセスできません。

ルール要素またはネストされたルールが有効でなくなったら、ルールから削除する必要があります。

その手順を次に示します。

- ルールにルール要素を追加します。
- ルールにネストされたルールを追加します。
- ルールからルール要素またはネストされたルールを削除します。

ルールへのルール要素の追加

次の手順は、ルールにルール要素を追加する方法について説明しています。

ルールにルール要素を追加するには、次の手順を実行します。

1. 「Add Element」をクリックします。

「Edit Rule Element」ダイアログ・ボックスが表示されます。

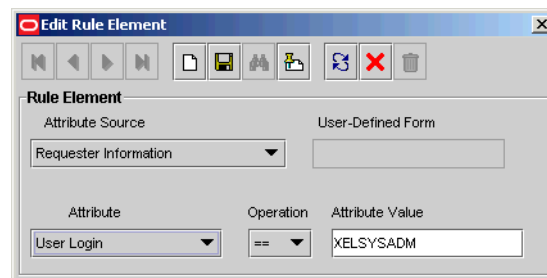
「Edit Rule Element」ダイアログ・ボックス上のボックスにあるカスタム・メニューは、「Rule Designer」フォームの「Type」ボックスと「Sub-Type」ボックスにある項目に対応しています。

次の表は、「Edit Rule Element」ダイアログ・ボックスのデータ・フィールドについて説明しています。

名前	説明
Attribute Source	このボックスから、属性のソースを選択します。たとえば、選択する属性が「Object Name」の場合、選択する属性ソースは「Object Information」になります。
User-Defined Form	このフィールドには、隣接したボックスに表示される属性ソースに関連付けられている、ユーザーが作成したフォームが表示されます。 注意： 「Attribute Source」ボックスに「Object Data」または「Process Data」が表示されない場合、「User-Defined Form」フィールドは空になります。
Attribute	このボックスから、ルールの属性を選択します。
Operation	このボックスから、属性と属性値の関係を選択します (== または !=)。
Attribute Value	このテキスト・ボックスで、属性の値を入力します。 注意： 属性の値では大 / 小文字が区別されます。

2. 図 6-4 に示すように、作成するルールのパラメータを設定します。

図 6-4 Edit Rule Element ウィンドウ - 入力済



この例で、ターゲット・ユーザーのログイン ID が XELSYSADM である場合、ルール要素は true になります。それ以外の場合は false です。

関連項目： 選択するパラメータの詳細は、6-10 ページの「[「Rule Elements」タブ](#)」を参照してください。

3. 「Edit Rule Element」 ダイアログ・ボックスのツールバーから、「Save」、「Close」の順にクリックします。
ルール要素が「Rule Designer」フォームの「**Rule Elements**」タブに表示されます。
4. メイン画面のツールバーから「Save」をクリックします。
ルール要素がルールに追加されます。

ルールへのネストされたルールの追加

次の手順は、ルール内部にルールをネストする方法について説明しています。

注意： 次の手順では、同一のタイプおよびサブタイプのルールだけが、親ルールとして **Select Rule** ウィンドウに表示されます。

ネストされたルールを追加するには、次の手順を実行します。

1. 「Add Rule」をクリックします。
「Select Rule」ダイアログ・ボックスが表示されます。
2. 目的のネストされたルールを選択して、「Save」をクリックします。
3. 「Close」をクリックします。
ネストされたルールが「Rule Designer」フォームの「**Rule Elements**」タブに表示されます。
4. メイン画面のツールバーから「Save」をクリックします。
ネストされたルールがルールに追加されます。

ルールからのルール要素またはネストされたルールの削除

次の手順は、ルール要素やネストされたルールを削除する方法について説明しています。

ルールからルール要素またはネストされたルールを削除するには、次の手順を実行します。

1. 削除するルール要素またはネストされたルールを強調表示します。
2. 「Delete」をクリックします。
ルール要素またはネストされたルールがルールから削除されます。

「Usage」 タブ

このタブは「Rule Designer」フォームに表示されます。「Usage」タブの情報は、ルールの分類タイプを反映しています。たとえば、ルール・タイプが **Pre-Populate** の場合、このルールが適用される、ユーザーが作成したフィールドが、このタブに表示されます。

図 6-5 に「Usage」タブを示します。

図 6-5 「Rule Designer」フォームの「Usage」タブ

The screenshot shows the 'Rule Designer' interface with the 'Usage' tab selected. The 'Rule Definition' section includes the name 'Rule to Approve Solaris' and the operator 'OR'. The 'Type Information' section shows 'Type' as 'Process Determination', 'Sub-Type' as 'Approval', 'Object' as 'Solaris Resource Object', and 'Process' as 'to Approve Solaris'. The description reads: 'This rule will determine whether the target user can approve the provisioning of the Solaris resource object.' The 'Usage' tab displays a table with the following data:

	Object	Process	Type	Priority
1	The Solaris Resource Object	Process to Approve Solaris	A	1

このタブには次の項目が表示されます。

- ルールに関連付けられているパスワード・ポリシー、リソース・オブジェクト、プロセス、プロセス・タスク、自動グループ・メンバーシップ基準、ユーザー・グループ、Oracle Identity Manager フォーム・フィールド、および事前移入アダプタ。
- ルールの分類タイプ (A=Approval (承認)、P=Provisioning (プロビジョニング)) を意味する 1 文字のコード。
このコードはプロセス決定ルールでのみ表示されます。
- ルールの優先順位番号。

図 6-5 で、「Rule to Approve Solaris」は「The Solaris Resource Object」と「Process to Approve Solaris」に割り当てられています。これは承認ルールなので、分類タイプは **A** です。このルールの優先順位は **1** で、対応するリソース・オブジェクトがリクエストに割り当てられたときに、Oracle Identity Manager により評価されるようにスケジュールされていたことを示しています。

「Rule Designer」 表

図 6-6 に示す「Rule Designer」表には、「Rule Designer」フォームで定義されている使用可能なすべてのルールが表示されます。

図 6-6 「Rule Designer」 表

Rule Name	Rule Type	Rule Sub-Type	Last Updated
User Self-Registration	Process Determination	General Approval	007-004-020704
User Self-Reg	Process Determination	Standard Approval	007-004-020704
Self-Reg Rule	Pre-Populate	User Provisioning	007-004-020704
User Self-Reg	Process Determination	User Provisioning	007-004-020704
Confirmation Rule	Process Determination	Standard Approval	007-004-020704
User Self-Reg	Pre-Populate	User Provisioning	007-004-020704
Self-Reg Process Test	Pre-Populate	User Provisioning	007-004-020704

「Rule Designer」表には、次の情報が表示されます。

フィールド名	説明
Rule Name	ルールの名前。
Rule Type	ルールは 4 つのタイプのいずれかに属することができます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ General: Oracle Identity Manager がユーザー・グループにユーザーを自動的に追加できるようにし、リソース・オブジェクトに割り当てられるパスワード・ポリシーを決定します。 ■ Process Determination: リクエストに関連付けられている標準承認プロセス、およびリソース・オブジェクトに対して選択されている承認およびプロビジョニング・プロセスを決定します。 ■ Task Assignment: プロセス・タスクに割り当てられるユーザーとユーザー・グループのいずれかまたは両方を決定します。 ■ Pre-Populate: 指定のフォーム・フィールドに対して実行される事前移入アダプタを決定します。
Rule Sub-Type	タイプが Process Determination 、 Task Assignment または Pre-Populate のルールは、4 つのサブタイプのいずれかに分類できます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ Organization Provisioning: ルールをプロビジョニング・ルールとして分類します。 これは、プロセスがプロビジョニングされているか、タスクが割り当てられているか、または事前移入アダプタが適用されている組織を決定するために使用します。 ■ User Provisioning: ルールをプロビジョニング・ルールとして分類します。 これは、プロセスがプロビジョニングされているか、タスクが割り当てられているか、または事前移入アダプタが適用されているユーザーを決定するために使用します。 ■ Approval: ルールを承認ルールとして分類します。 ユーザーまたは組織へのリソースのプロビジョニングを承認するために使用されます。 ■ Standard Approval: ルールを標準ルールとして分類します。 リクエストを承認するために使用されます。
Rule Operator	属性と属性値の関係 (== または !=)。
Description	ルールについての説明。
Last Updated	ルールが最後に更新された日付。

「Resource Objects」 フォーム

「Resource Objects」 フォームは「Resource Management」フォルダにあります。このフォームは、組織またはユーザーに対してプロビジョニングする Oracle Identity Manager リソースのリソース・オブジェクトを作成および管理するために使用します。リソース・オブジェクト定義は、リソースをプロビジョニングする際のテンプレートの役を果します。ただし、リソースがどのように承認およびプロビジョニングされるかは、リソース・オブジェクトにリンクする承認およびプロビジョニング・プロセスの設計により異なります。

注意： リクエストと、そのリソース・オブジェクトとの関係の詳細は、5-7 ページの「[Administrative Queues](#) フォーム」を参照してください。

次の表は、「Resource Objects」フォームのデータ・フィールドについて説明しています。

フィールド名	説明
Name	リソース・オブジェクトの名前。
Table Name	このリソースに関連付けられているリソース・オブジェクト・フォームの名前。(これは、実際にフォームを表す表の名前です。)
Order For User/Order For Organization	これらのラジオ・ボタンは、ユーザーまたは組織のためにリソース・オブジェクトをリクエストできるかどうかを指定するために使用します。 ユーザーのためにリソース・オブジェクトをリクエストするには、「Order For User」ラジオ・ボタンを選択します。組織のためにリソース・オブジェクトをリクエストするには、「Order For Organization」ラジオ・ボタンを選択します。
Auto Pre-Populate	このチェック・ボックスは、カスタム・フォームが Oracle Identity Manager とユーザーのどちらによって移入されるかを指定します。これは次の種類のフォームに適用されます。 <ul style="list-style-type: none"> リソース・オブジェクトに関連付けられているフォーム 事前移入アダプタがアタッチされているフィールドのあるフォーム <p>「Auto Pre-Populate」チェック・ボックスを選択すると、関連付けられているカスタム・フォームが表示され、事前移入アダプタが設定されているフィールドにデータが移入されます。</p> <p>このチェック・ボックスが選択解除されている場合、ツールバーの「Pre-Populate」ボタンをクリックすることによって、フィールドにデータを移入する必要があります。</p> <p>重要： この設定は、事前移入アダプタのトリガーを制御しません。関連付けられたフィールドにアダプタの実行により得られる内容を表示するのが、Oracle Identity Manager とユーザーのどちらであるかを指定します。</p> <p>事前移入アダプタの詳細は、『Oracle Identity Manager Tools リファレンス・ガイド』を参照してください。</p> <p>注意： このチェック・ボックスは、リソース・オブジェクトに関連付けられるフォームを作成した場合にのみ有効です。</p>

フィールド名	説明
Type	<p>リソース・オブジェクトの分類ステータス。リソース・オブジェクトは3つのタイプのいずれかに属することができます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Application: このリソース・オブジェクトをアプリケーションとして分類します。 ■ Generic: このタイプのリソース・オブジェクトにはビジネス関連のプロセスが含まれます。 ■ System: このタイプのリソース・オブジェクトは、Oracle Identity Manager により内部的に使用されます。 <p>システム・リソース・オブジェクトを変更する場合は、必ず事前にオラクル社にご相談ください。</p>
Allow Multiple	<p>リソースがユーザーまたは組織に複数回プロビジョニングされることがあるかどうかを指定します。選択すると、リソース・オブジェクトをユーザーまたは組織に複数回プロビジョニングできます。</p>
Auto Save	<p>このチェック・ボックスを選択すると、Oracle Identity Manager は、「Form Designer」 フォームを使用して作成されたリソース固有のすべてのフォームのデータを、事前にフォームを表示しないで保存します。</p> <p>このチェック・ボックスを選択する場合、システム・データ、ルール・ジェネレータ・アダプタまたはエンティティ・アダプタを提供して、フォームに必須データを移入する必要があります。ユーザーは Solaris にアクセスできなくなるので、これは必須です。</p> <p>注意: このチェック・ボックスは、リソース・オブジェクトのプロビジョニングのためにフォームを作成した場合にのみ有効です。</p>
Self Request Allowed	<p>このチェック・ボックスを選択すると、ユーザーも、システム管理者と同様、自身でリソース・オブジェクトをリクエストすることができます。</p> <p>注意: この機能は Oracle Identity Manager Design Console にのみ適用されます。Oracle Identity Manager 管理およびユーザー・コンソールには適用されません。</p>
Allow All	<p>このチェック・ボックスを選択すると、すべての Oracle ユーザーのためにリソース・オブジェクトをリクエストできます。この設定は、ユーザーが所属する組織で、ユーザーのためにリソースをリクエストすることが許可されているかどうかより優先されます。</p>
Auto Launch	<p>このチェック・ボックスは、オブジェクト作成時にデフォルトで選択されています。リソースの承認プロセスのステータスが「Completed」になると、Oracle Identity Manager により自動的にプロビジョニング・プロセスが開始されます。</p> <p>Oracle Identity Manager は、このチェック・ボックスの選択が解除されていても、すべてのリソース・オブジェクトを自動的に「Auto Launch」に設定します。</p>
Provision by Object Admin Only	<p>このチェック・ボックスは、「Auto Launch」チェック・ボックスが選択解除されている場合に、直接プロビジョニングを使用するか、手動で開始されたプロビジョニング・プロセスによって、このリソースをプロビジョニングできるユーザーを指定するために使用されます。</p> <p>このチェック・ボックスを選択すると、「Object Administrators」タブにリストされたグループのメンバーであるユーザーだけが（直接、またはリクエストから手動でプロビジョニング・プロセスを開始することによって）、このリソース・オブジェクトをプロビジョニングすることを許可されます。</p> <p>このチェック・ボックスの選択を解除すると、このリソースのプロビジョニングを指示するユーザーに制限はありません。</p>

リソース・オブジェクトの作成

次の手順は、リソース・オブジェクトの作成方法について説明しています。

リソース・オブジェクトを作成するには、次の手順を実行します。

1. 「Resource Objects」 フォームを開きます。
2. 「Name」 フィールドに、リソース・オブジェクトの名前を入力します。
3. 「Table Name」 参照フィールドをダブルクリックします。
「Lookup」 ダイアログ・ボックスから、リソース・オブジェクトに関連付けられるフォームを表す表を選択します。
4. ユーザーのためにリソース・オブジェクトをリクエストするには、「Order For User」 ラジオ・ボタンを選択します。

組織のためにリソース・オブジェクトをリクエストするには、「Order For Organization」 ラジオ・ボタンを選択します。

注意： リソース・オブジェクトは、1人のユーザーまたは1つの組織のためにリクエストできます。

5. カスタム・フォームがリソース・オブジェクトに関連付けられ、このフォームに含まれるフィールドに事前移入アダプタがアタッチされていて、Oracle Identity Manager がこれらのフィールドにデータを自動的に移入するようにする場合は、「Auto Pre-Populate」 チェック・ボックスを選択します。

このフォームのフィールドに手動でデータを移入する場合（ツールバーの「Pre-Populate」 ボタンをクリック）「Auto Pre-Populate」 チェック・ボックスの選択を解除します。

注意： リソース・オブジェクトに、関連付けられたカスタム・フォームがないか、このフォームのフィールドに事前移入アダプタがアタッチされていない場合は、「Auto Pre-Populate」 チェック・ボックスの選択を解除します。事前移入アダプタの詳細は、『Oracle Identity Manager Tools リファレンス・ガイド』を参照してください。

6. 「Type」 参照フィールドをダブルクリックします。
表示された「Lookup」 ダイアログ・ボックスから、リソース・オブジェクトに関連付ける分類ステータス（「Application」、「Generic」または「System」）を選択します。
7. リソース・オブジェクトの複数のインスタンスが、1人のユーザーまたは1つの組織のためにリクエストされるようにする場合は、「Allow Multiple」 チェック・ボックスを選択します。

それ以外の場合は手順 8 に進みます。

8. 「Form Designer」 フォームを使用して作成したリソース固有のフォームのデータが、Oracle Identity Manager によって、事前にフォームを表示しないで保存されるようにする場合は、「Auto Save」 チェック・ボックスを選択します。

それ以外の場合は手順 9 に進みます。

注意： このチェック・ボックスを選択する場合、ユーザーがフォームにアクセスできなくなるため、システム・データ、ルール・ジェネレータ・アダプタまたはエンティティ・アダプタを提供して、フォームに必須データを移入する必要があります。

このチェック・ボックスを選択するのは、リソース・オブジェクトをプロビジョニングするためにフォームを作成した場合だけにします。

9. システム管理者が自分のためにリソース・オブジェクトをリクエストできるようにする場合は、「**Self Request Allowed**」チェック・ボックスを選択します。
それ以外の場合は手順 10 に進みます。
10. ユーザーが所属する組織にリソース・オブジェクトが割り当てられているかどうかにかかわらず、すべてのユーザーのためにリソース・オブジェクトをプロビジョニングする場合は、「**Allow All**」チェック・ボックスを選択します。
それ以外の場合は手順 11 に進みます。
11. リソース・オブジェクトの承認プロセスのステータスが「**Completed**」になったときに、Oracle Identity Manager により自動的にプロビジョニング・プロセスが開始されるようにする場合は、「**Auto Launch**」チェック・ボックスを選択します。
それ以外の場合は手順 12 に進みます。

注意： Oracle Identity Manager は、このチェック・ボックスの選択が解除されていても、すべてのリソース・オブジェクトをデフォルトで自動的に「**Auto Launch**」に設定します。

12. グループこのリソース・オブジェクトにプロビジョニングできるユーザー・グループを、「Resource Objects」フォームの「**Object Authorizers**」タブで表示されるグループに限定するには、「**Provision by Object Admin Only**」チェック・ボックスを選択します。
これは、直接またはリクエストへの割当てによってプロビジョニングされたリソース・オブジェクトに適用されます。
それ以外の場合は手順 13 に進みます。
13. 「**Save**」をクリックします。
リソース・オブジェクトが作成されます。

「Resource Objects」 フォームのタブ

「Resource Objects」フォームを起動してリソース・オブジェクトを作成すると、このフォームのタブが使用可能になります。

「Resource Objects」フォームには、次のタブが含まれます。

- 「**Depends On**」タブ
- 「**Object Authorizers**」タブ
- 「**Process Determination Rules**」タブ
- 「**Event Handlers and Adapters**」タブ
- 「**Status Definition**」タブ
- 「**Administrators**」タブ
- 「**Password Policies Rule**」タブ
- 「**User-Defined Fields**」タブ
- 「**Process**」タブ
- 「**Object Reconciliation**」タブ

「Depends On」 タブ

このタブから、Oracle Identity Manager が、現在のリソース・オブジェクトをプロビジョニングする前にプロビジョニングする必要があるリソース・オブジェクトを選択できます。

「Depends On」タブに表示されているリソース・オブジェクトを先にプロビジョニングせずに現在のリソース・オブジェクトをプロビジョニングできる場合、タブからそのリソース・オブジェクトを削除する必要があります。

「Depends On」タブに関連するトピックには次のものがあります。

- 現在のリソース・オブジェクトが依存しているリソース・オブジェクトの選択
- 依存しているリソース・オブジェクトの削除

依存しているリソース・オブジェクトの選択

次の手順は、依存しているリソース・オブジェクトを選択する方法について説明しています。

依存しているリソース・オブジェクトを選択するには、次の手順を実行します。

1. 「Assign」をクリックします。
「Assignment」ダイアログ・ボックスが表示されます。
2. リソース・オブジェクトを選択し、リクエストに割り当てます。
3. 「OK」をクリックします。
依存しているリソース・オブジェクトが選択されました。

依存しているリソース・オブジェクトの削除

次の手順は、依存しているリソース・オブジェクトを削除する方法について説明しています。

依存しているリソース・オブジェクトを削除するには、次の手順を実行します。

1. 削除対象の、依存しているリソース・オブジェクトを強調表示します。
2. 「Delete」をクリックします。
リソース・オブジェクトが「Depends On」タブから削除されます。

「Object Authorizers」タブ

このタブは、このリソースの Object Authorizers であるユーザーグループを指定するために使用します。タスク割当てのターゲットとして、「Object Authorizers」グループのメンバーであるユーザーを選択できます。

「Object Authorizers」タブ上の各ユーザー・グループには優先順位番号があります。割当てのターゲットが **Object Authorizer user with highest priority** の場合、Oracle Identity Manager は優先順位番号を使用して、タスクに割り当てるユーザーを決定します。優先順位番号は、グループに割り当てられたタスクが対応されずにエスカレーションの対象になる場合にも、参照されることがあります。このタブでは、どのユーザー・グループの優先順位番号も変更できます。

たとえば、SYSTEM ADMINISTRATORS ユーザー・グループのメンバーを、Object Authorizers に設定する場合を考えます。また、このリソース・オブジェクトに関連付けられているプロセス・タスクにタスク割当てルールがアタッチされており、割当て基準が **Object Authorizer User with Highest Priority** であるとします。このプロセス・タスクを完了する権限がある最初のユーザーは、優先順位番号が 1 なので、SYSTEM ADMINISTRATORS ユーザー・グループに所属する中で最も優先順位が高いユーザーです。ユーザーによって指定された時間内にユーザーがプロセス・タスクを完了しなかった場合、Oracle Identity Manager は SYSTEM ADMINISTRATORS グループで次に優先順位が高いユーザーにタスクを再割当てします。

関連項目： 割当てルールとプロセス・タスクの詳細は、6-6 ページの「[「Rule Designer」フォーム](#)」、および 7-34 ページの「[「Editing Task ウィンドウの「Assignment」タブ](#)」を参照してください。

次に、これらのトピックについて説明します。

- リソース・オブジェクトへのユーザー・グループの割当て
- リソース・オブジェクトからのユーザー・グループの削除
- ユーザー・グループの優先順位番号の変更

リソース・オブジェクトへのユーザー・グループの割当て

次の手順は、リソース・オブジェクトにユーザー・グループを割り当てる方法について説明しています。

リソース・オブジェクトにユーザー・グループを割り当てるには、次の手順を実行します。

1. 「Assign」をクリックします。
「Assignment」ダイアログ・ボックスが表示されます。
2. ユーザー・グループを選択して、リソース・オブジェクトに割り当てます。
3. 「OK」をクリックします。
ユーザー・グループが選択されます。

リソース・オブジェクトからのユーザー・グループの削除

次の手順は、リソース・オブジェクトからユーザー・グループを削除する方法について説明しています。

リソース・オブジェクトからユーザー・グループを削除するには、次の手順を実行します。

1. 対象のユーザー・グループを強調表示します。
2. 「Delete」をクリックします。
ユーザー・グループが「Object Authorizers」タブから削除されます。

ユーザー・グループの優先順位番号の変更

次の手順は、ユーザー・グループの優先順位番号の変更について説明しています。

ユーザー・グループの優先順位番号を変更するには、次の手順を実行します。

1. 優先順位番号を変更するユーザー・グループを強調表示します。
2. 選択したユーザー・グループの優先順位番号を1つ上げるには、「Increase」をクリックします。
選択したユーザー・グループの優先順位番号を1つ下げるには、「Decrease」をクリックします。
ユーザー・グループの優先順位番号を、より大きく増減するには、該当するボタンを繰り返しクリックします。たとえば、ユーザー・グループの優先順位番号を2つ上げるには、「Increase」ボタンを2度クリックします。
3. 「Save」をクリックします。
ユーザー・グループの優先順位番号が、選択した値に変更されます。

「Process Determination Rules」 タブ

リクエストは、ユーザーまたは組織にリソースをプロビジョニングするメカニズムです。ユーザーは、ターゲットのユーザーまたは組織へのリソースのプロビジョニングを承認するリクエストを操作します。各リクエストは、リソース・オブジェクトを割り当てられる必要があります。各リソース・オブジェクトは、1つ以上のプロビジョニング・プロセスと、1つ以上の承認プロセスから構成されます。

リソース・オブジェクトは、ユーザーまたは組織にリソースをプロビジョニングする際のテンプレートとして機能します。このテンプレートは、複数の承認プロセスやプロビジョニング・プロセスにリンクできます。リソースがリクエストまたは直接プロビジョニングされると、Oracle Identity Manager はプロセス決定ルールを使用して承認プロセスとプロビジョニング・プロセスを選択します。

プロセス決定ルールには、次の基準があります。

- リソースがリクエストされたときに、どの承認プロセスおよびプロビジョニング・プロセスを選択するか
- リソースが直接プロビジョニングされたときに、どのプロビジョニング・プロセスを選択するか

通常、承認プロセスおよびプロビジョニング・プロセスに、それぞれプロセス決定ルールがあります。ルールおよびプロセスの組合せには、それぞれ優先順位番号があり、Oracle Identity Manager が評価する順序を表します。

ルールの条件が `false` の場合、Oracle Identity Manager は次に高い優先順位を持つルールを評価します。ルールが `true` の場合、Oracle Identity Manager はそれに関連付けられているプロセスを実行します。たとえば、リソースがリクエストまたは直接プロビジョニングされると、Oracle Identity Manager は **Rule to See if Solaris is Needed** および **Rule to Check Provisioning of Solaris for IT Dept** を評価します。どちらのルールも、最も高い優先順位を持っています。これらのルールの条件が `true` になると、Oracle Identity Manager はそれらに関連付けられたプロセス（この例では、「**Check if Solaris is Needed**」承認プロセスと、「**Provision Solaris for IT Dept**」プロビジョニング・プロセス）を実行します。

この例の変形として、リソースがリクエストまたは直接プロビジョニングされ、「**Rule to Check Provisioning of Solaris for IT Dept.**」ルールが `false` の場合、Oracle Identity Manager は「**Rule to Check Provisioning of Solaris for Developers**」ルールを評価します。このルールが `true` の場合、Oracle Identity Manager は、そのルールに関連付けられている「**Provision Solaris for Devel.**」プロビジョニング・プロセスを実行することになります。

リソース・オブジェクトへのプロセス決定ルールの追加

次の手順は、リソース・オブジェクトにプロセス決定ルールを追加する方法について説明しています。

リソース・オブジェクトにプロセス決定ルールを追加するには、次の手順を実行します。

1. 作成するルール / プロセスの組合せに応じて、「**Approval Processes**」または「**Provisioning Processes**」領域で「**Add**」をクリックします。
2. 表示される行から、「**Rules**」参照フィールドをダブルクリックします。
3. 表示される「**Lookup**」ダイアログ・ボックスでルールを選択し、リソース・オブジェクトに割り当てます（タイプが **Process Determination** のルールを選択できる場合のみ）。
4. 「**OK**」をクリックします。
5. 隣接する列で、「**Processes**」参照フィールドをダブルクリックします。
6. 「**Lookup**」ダイアログ・ボックスから目的のプロセスを選択し、ルールに割り当てます。
7. 「**OK**」をクリックします。
8. 「**Priority**」フィールドに数値を入力します。

これにより、Oracle Identity Manager がルールとプロセスの組合せを評価する順序が決定されます。

9. 「Save」 をクリックします。

ルールとプロセスの組合せがリソース・オブジェクトに追加されます。

リソース・オブジェクトからのプロセス決定ルールの削除

リソース・オブジェクトからプロセス決定ルールを削除するには、次の手順を実行します。

1. 目的のルールとプロセスの組合せを強調表示します。
2. 「Delete」 をクリックします。

ルールとプロセスの組合せがリソース・オブジェクトから削除されます。

「Event Handlers and Adapters」 タブ

リソース・オブジェクトが、特定の処理方法で処理する必要があるデータを持っていることがあります。たとえば、リソース・オブジェクトのプロビジョニング・プロセスが、自動的に完了する必要があるタスクを含んでいることがあります。

この場合、リソース・オブジェクトにイベント・ハンドラまたはアダプタを割り当てる必要があります。イベント・ハンドラは、この特殊な情報を処理するソフトウェア・ルーチンです。アダプタは、Java コードを生成する特殊なタイプのイベント・ハンドラで、Oracle Identity Manager が外部リソースと通信して情報をやり取りできるようにします。

イベント・ハンドラまたはリソース・オブジェクトに割り当てられたアダプタが有効でなくなったら、リソース・オブジェクトから削除する必要があります。

この例では、`adpAUTOMATEPROVISIONINGPROCESS` アダプタが Solaris リソース・オブジェクトに割り当てられています。このリソース・オブジェクトがリクエストに割り当てられると、Oracle Identity Manager によりアダプタがトリガーされ、関連付けられたプロビジョニング・プロセスが自動的に実行されます。

リソース・オブジェクトへのイベント・ハンドラまたはアダプタの割当て

次の手順は、アダプタまたはリソース・オブジェクトにイベント・ハンドラを割り当てる方法について説明しています。

リソース・オブジェクトにイベント・ハンドラまたはアダプタを割り当てるには、次の手順を実行します。

1. 「Assign」 をクリックします。
「Assignment」 ダイアログ・ボックスが表示されます。
2. イベント・ハンドラを選択して、リソース・オブジェクトに割り当てます。
3. 「OK」 をクリックします。

イベント・ハンドラがリソース・オブジェクトに割り当てられます。

リソース・オブジェクトからのイベント・ハンドラまたはアダプタの削除

リソース・オブジェクトからイベント・ハンドラまたはアダプタを削除するには、次の手順を実行します。

1. 対象のイベント・ハンドラを強調表示します。
2. 「Delete」 をクリックします。

イベント・ハンドラがリソース・オブジェクトから削除されます。

「Status Definition」 タブ

このタブは、リソース・オブジェクトのプロビジョニング・ステータスを設定するために使用します。プロビジョニング・ステータスは、リソース・オブジェクトがターゲット・ユーザーまたは組織にプロビジョニングされるまでのステータスを、ライフサイクルを通じて示します。「Currently Provisioned」タブの「Status」領域から、リソース・オブジェクトのプロビジョニング・ステータスを表示できます。

リソース・オブジェクトのプロビジョニング・ステータスはすべて、関連するプロビジョニング・プロセスのタスク・ステータスに関連付けられます。Oracle Identity Manager は、リソース・オブジェクトがリクエストに割り当てられるときに、プロビジョニング・プロセスを選択します。たとえば、「Provision for Developers」プロセスが選択されていて、このプロセスのステータスが「Completed」になると、対応するリソース・オブジェクトのステータスを「Provisioned」に設定できます。こうして、リソース・オブジェクトとプロビジョニング・プロセスの関連を、素早く簡単に確認できます。

リソース・オブジェクトには、あらかじめ定義された次のステータスがあります。

- **Waiting:** このリソース・オブジェクトは、まだプロビジョニングされていない他のリソース・オブジェクトに依存しています。
- **Revoked:** リソース・オブジェクトによって表現されるリソースが、リソースを使用して永久的にプロビジョニング解除されている、ターゲットのユーザーまたは組織に対してプロビジョニングされています。
- **Ready:** このリソース・オブジェクトが他のどのリソース・オブジェクトにも依存していないか、このリソース・オブジェクトが依存しているすべてのリソース・オブジェクトがプロビジョニングされています。

リソースがリクエストに割り当てられ、リソース・オブジェクトのステータスが「Ready」になると、Oracle Access Manager は、プロセス決定ルールを評価して承認プロセスとプロビジョニング・プロセスを決定します。これが実行されると、リソース・オブジェクトのステータスは「Provisioning」に変更されます。

- **Provisioning:** リソース・オブジェクトはリクエストに割り当てられ、承認プロセスおよびプロビジョニング・プロセスが選択されています。
- **Provisioned:** リソース・オブジェクトにより表現されたリソースが、ターゲット・ユーザーまたは組織にプロビジョニングされています。
- **Provide Information:** リソース・オブジェクトによって表現されるリソースがターゲットのユーザーまたは組織にプロビジョニングされるためには、追加の情報が必須です。
- **None:** このステータスはリソース・オブジェクトのプロビジョニング・ステータスを表しません。むしろ、Oracle Identity Manager が選択したプロビジョニング・プロセスに所属するタスクが、リソース・オブジェクトのステータスに対して影響しないことを示しています。
- **Enabled:** リソース・オブジェクトによって表現されるリソースが、ターゲットのユーザーまたは組織にプロビジョニングされており、これらのユーザーまたは組織がリソースへのアクセスを持っています。
- **Disabled:** リソース・オブジェクトによって表現されるリソースが、ターゲットのユーザーまたは組織にプロビジョニングされていますが、これらのユーザーまたは組織の、リソースへのアクセスは一時的に失われています。

それぞれのプロビジョニング・ステータスには、対応する「Launch Dependent」チェック・ボックスがあります。チェック・ボックスが選択され、リソース・オブジェクトがそのプロビジョニング・ステータスになると、Oracle Identity Manager により、依存するリソース・オブジェクトが独自のプロビジョニング・プロセスを起動できるようになります。

たとえば、「Exchange」リソース・オブジェクトでは、「Provisioned」および「Enabled」プロビジョニング・ステータスに対応する「Launch Dependent」チェック・ボックスが選択されています。このリソース・オブジェクトのプロビジョニング・ステータスが「Provisioned」および「Enabled」に変更されると、Oracle Identity Manager は、「Exchange」リソース・オブジェクトが依存している他のリソース・オブジェクトがないか確認します。ある場合、Oracle Identity Manager は、依存しているオブジェクトの承認プロセスとプロビジョニング・プロセ

スを起動します。続いて、「Exchange」の承認およびプロビジョニング・プロセスを選択します。

プロビジョニング・プロセスの各種のタスク・ステータスを反映するには、追加のプロビジョニング・ステータスをリソース・オブジェクトに追加する方法があります。たとえば、あるプロビジョニング・プロセスに所属するタスクのステータスが「Rejected」のとき、リソース・オブジェクトの対応するプロビジョニング・ステータスを「Revoked」に設定してもよいでしょう。

同様に、既存のプロビジョニング・ステータスが有効でなくなった場合は、リソース・オブジェクトからそのステータスを削除する必要があります。

次の項では、リソース・オブジェクトにプロビジョニング・ステータスを追加する方法と、リソース・オブジェクトからプロビジョニング・ステータスを削除する方法を説明します。

リソース・オブジェクトへのプロビジョニング・ステータスの追加

次の手順は、リソース・オブジェクトにプロビジョニング・ステータスを追加する方法について説明しています。

リソース・オブジェクトにプロビジョニング・ステータスを追加するには、次の手順を実行します。

1. 「Add」をクリックします。
2. 「Status」フィールドにプロビジョニング・ステータスを追加します。
3. 他の依存しているリソース・オブジェクトが、追加したプロビジョニング・ステータスになったときに、そのリソース・オブジェクトに自身の承認プロセスとプロビジョニング・プロセスを起動させたい場合は、「Launch Dependent」チェック・ボックスを選択します。

それ以外の場合は手順 4 に進みます。

4. 「Save」をクリックします。

プロビジョニング・ステータスがリソース・オブジェクトに割り当てられます。

リソース・オブジェクトからのプロビジョニング・ステータスの削除

次の手順は、リソース・オブジェクトからプロビジョニング・ステータスを削除する方法について説明しています。

リソース・オブジェクトからプロビジョニング・ステータスを削除するには、次の手順を実行します。

1. 対象のプロビジョニング・ステータスを強調表示します。
2. 「Delete」をクリックします。

プロビジョニング・ステータスがリソース・オブジェクトから削除されます。

「Administrators」 タブ

このタブは、現在のリソース・オブジェクトを表示、変更および削除できるユーザー・グループを選択するために使用されます。

「Write」チェック・ボックスを選択すると、それに対応するユーザー・グループが現在のリソース・オブジェクトを変更できます。「Delete」チェック・ボックスを選択すると、関連付けられているユーザー・グループが現在のリソース・オブジェクトを削除できます。

たとえば、「SYSTEM ADMINISTRATORS」ユーザー・グループは、Solaris リソース・オブジェクトの表示、変更および削除を行うことができます。OPERATORS ユーザー・グループは、このリソース・オブジェクトの表示および変更だけを行えます（「Delete」チェック・ボックスの選択が解除されています）。

次の項では、リソース・オブジェクトにユーザー・グループを割り当てる方法と、リソース・オブジェクトからユーザー・グループを削除する方法を説明します。

リソース・オブジェクトへのユーザー・グループの割当て

次の手順は、リソース・オブジェクトにユーザー・グループを割り当てる方法について説明しています。

リソース・オブジェクトにユーザー・グループを割り当てるには、次の手順を実行します。

1. 「Assign」をクリックします。
「Assignment」ダイアログ・ボックスが表示されます。
2. ユーザー・グループを選択して、リソース・オブジェクトに割り当てます。
3. 「OK」をクリックします。
ユーザー・グループが「Administrators」タブに表示されます。このグループのすべてのメンバーは、デフォルトで、アクティブなレコードを表示できます。
4. このユーザー・グループが現在のリソース・オブジェクトを変更できるようにする場合、対応する「Write」チェック・ボックスをダブルクリックします。
それ以外の場合は手順 5 に進みます。
5. このユーザー・グループが現在のリソース・オブジェクトを削除できるようにする場合、関連付けられている「Delete」チェック・ボックスをダブルクリックします。
それ以外の場合は手順 6 に進みます。
6. 「Save」をクリックします。
ユーザー・グループがリソース・オブジェクトに割り当てられます。

リソース・オブジェクトからのユーザー・グループの削除

次の手順は、リソース・オブジェクトからユーザー・グループを削除する方法について説明しています。

リソース・オブジェクトからユーザー・グループを削除するには、次の手順を実行します。

1. 削除するユーザー・グループを強調表示します。
2. 「Delete」をクリックします。
ユーザー・グループがリソース・オブジェクトから削除されます。

「Password Policies Rule」 タブ

タイプが「**Application**」のリソース・オブジェクトをユーザーまたは組織に対してプロビジョニングする場合、ユーザーまたは組織がパスワード基準に適合しないとリソース・オブジェクトにアクセスできないようにする場合があります。このパスワード条件は、パスワード・ポリシーのフォームで作成および管理されます。このポリシーは「**Password Policies**」フォームを使用して作成されます。

リソース・オブジェクト定義は、リソースのプロビジョニング方法を管理する単なるテンプレートであるため、**Oracle Identity Manager** は、実際の条件およびルールに基づいてリソースをどのようにプロビジョニングするかを決定する必要があります。これらの条件は、リソースが実際にリクエストされるまでわからないことがあります。このため、**Oracle Identity Manager** が、指定されたコンテキストでどれを起動するするかを決定できるように、ルールは、リソースに関連付けられている様々なプロセスやパスワード・ポリシーにリンクされる必要があります。

Oracle Identity Manager は、リソースのパスワード・ポリシー・ルールを評価し、適合している最初のルールに関連付けられているポリシーの基準を適用することによって個別ユーザーのアカウントを作成または更新する際に、どのパスワード・ポリシーをリソースに適用するか決定します。ルールには優先順位番号があり、**Oracle Identity Manager** が評価する順序を表します。

この例では、**Oracle Identity Manager** は「**Rule to Prevent Solaris Access**」ルールをトリガーします（優先順位が最も高いため）。このルールが **true** であれば、**Oracle Identity Manager** は「**Restrict Solaris**」パスワード・ポリシーの基準を、作成または更新されるアカウントのパスワードに適用することになります。

このルールが **false** なら、**Oracle Identity Manager** は、次に高い優先順位を使用してルールを評価します。このルールが **true** の場合、**Oracle Identity Manager** はそのルールに関連付けられているパスワード・ポリシーを、作成または更新されたアカウントのパスワードに適用します。

パスワード・ポリシー・ルールについて再確認した後、リソース・オブジェクトにパスワード・ポリシーを追加する方法について説明します。また、既存のルールが有効でなくなった場合に、リソース・オブジェクトから削除する方法も説明します。

リソース・オブジェクトへのパスワード・ポリシー・ルールの追加

次の手順は、リソース・オブジェクトにパスワード・ポリシー・ルールを追加する方法について説明しています。

リソース・オブジェクトにパスワード・ポリシー・ルールを追加するには、次の手順を実行します。

1. 「**Add**」をクリックします。
2. 表示される行から、「**Rule**」参照フィールドをダブルクリックします。
3. 表示される「**Lookup**」ダイアログ・ボックスからルールを選択し、リソース・オブジェクトに割り当てます。
4. 「**OK**」をクリックします。
5. 隣接する列で、「**Policy**」参照フィールドをダブルクリックします。
6. 表示される「**Lookup**」ダイアログ・ボックスから、関連付けられているパスワード・ポリシーを選択し、リソース・オブジェクトに割り当てます。
7. 「**OK**」をクリックします。
8. 「**Priority**」フィールドに数値を追加します。
このフィールドには、ルールの優先順位番号が含まれます。
9. 「**Save**」をクリックします。

パスワード・ポリシー・ルールがリソース・オブジェクトに追加されます。

リソース・オブジェクトからのパスワード・ポリシー・ルールの削除

次の手順は、リソース・オブジェクトからパスワード・ポリシーを削除する方法について説明しています。

リソース・オブジェクトからパスワード・ポリシー・ルールを削除するには、次の手順を実行します。

1. 対象のパスワード・ポリシー・ルールを強調表示します。
2. 「Delete」をクリックします。

パスワード・ポリシー・ルールがリソース・オブジェクトから削除されます。

「User-Defined Fields」 タブ

このタブは、「Resource Objects」フォームで作成されたユーザー定義フィールドを表示およびアクセスするために使用します。作成されたユーザー定義フィールドはこのタブに表示され、データを入出力することができます。

関連項目：既存の Oracle Identity Manager フォームでユーザー定義フィールドを作成する方法の詳細は、8-8 ページの「[User Defined Field Definition フォーム](#)」を参照してください。

「Process」 タブ

「Process」タブには、現在のリソース・オブジェクトに関連付けられているすべての承認およびプロビジョニング・プロセスが表示されます。このタブにある「Default」チェック・ボックスは、どの承認プロセスまたはプロビジョニング・プロセスがリソースのデフォルトであるかを示します。

注意：承認プロセスおよびプロビジョニング・プロセスを作成して、「Process Definition」フォームを使用してリソースに関連付けます。各プロセスは「Resource Object」フォームの「Process Determination Rules」タブを使用してプロセス決定ルールにリンクすることができます。

たとえば、Solaris リソース・オブジェクトに1つの承認プロセスと1つのプロビジョニング・プロセス（Provision Solaris for Devel.）が関連付けられている場合を考えます。Provision Solaris for Devel. は、このリソース・オブジェクトのデフォルトのプロビジョニング・プロセスに指定されています。

「Object Reconciliation」 タブ

このタブには、「Reconciliation Fields」と「Reconciliation Action Rules」の2つのサブタブがあります。

- 「Reconciliation Fields」タブは、Oracle Identity Manager の情報と調整される（マッピングなど）ターゲット・リソースまたは信頼できるソース上のフィールドを定義するために使用されます。
- 「Reconciliation Action Rules」タブは、個別の一致基準に適合したときに Oracle Identity Manager が実行するアクションを指定するために使用されます。

「Reconciliation Fields」 タブ

このタブは、Oracle Identity Manager の情報と調整される（マッピングなど）ターゲット・リソースまたは信頼できるソース上のフィールドを定義するために使用されます。ターゲット・システムまたは信頼できるソースの各フィールドには、次の情報がリストされます。

- Oracle Identity Manager でデータと調整されるターゲット・リソースまたは信頼できるソースの名前（たとえば、targetfield1）。
- フィールドに関連付けられているデータ型（たとえば、String）。可能な値は、Multi-Valued、String、Number、Date、IT resource です。
- 調整イベントでこのフィールドが必須かどうかを示すインジケータ。

注意： 必須に設定されたすべてのフィールドが「Reconciliation Manager」フォームの「Reconciliation Data」タブで処理されるまで、Oracle Identity Manager は可能なプロビジョニング・プロセス、ユーザーまたは組織の、調整イベントへの一致を開始しません。

ターゲット・システム定義は、たとえば次のように表示されます。

TargetField1 [String], Required

「Reconciliation」 フィールドの追加

次の手順を実行すると、ターゲット・システムまたは信頼できるソースから、Oracle Identity Manager の情報と調整したフィールドのリストに、フィールドが追加されます。信頼できるソースの場合、これはユーザー・リソース定義である必要があります。

注意： Oracle Identity Manager が外部ターゲット・リソースまたはターゲット・ソースとの調整を正常に実行できるためには、このタブで定義したフィールドが、リソースのデフォルト・プロビジョニング・プロセスの「Field Mappings」タブを使用して、適切な Oracle Identity Manager フィールドにマップされる必要があります。

調整フィールドを追加するには、次の手順を実行します。

1. 「Add Field」をクリックします。

「Add Reconciliation Field」ダイアログ・ボックスが表示されます。

2. ターゲット・リソースまたは信頼できるソース上のフィールドの名前を「Field Name」フィールドに入力します。

これは、Oracle Identity Manager でターゲット・リソースまたは信頼できるソースのフィールドを参照する際に使用する名前です。

3. 「Field Type」フィールドのメニューから、次の値の1つを選択します。
 - Multi-Valued（1つ以上のコンポーネント・フィールドを含むフィールドで使用）
 - String
 - Number
 - Date
 - IT resource（プロビジョニングされているマシンやユーザー・アカウントを参照するフィールドでのみ使用）
4. 「Required」チェック・ボックスを選択します。

このチェック・ボックスを選択する場合、このフィールドが「Reconciliation Manager」フォームの「Reconciliation Data」タブに所有されていないと、Oracle Identity Manager は、プロビジョニング・プロセスまたはユーザー / 組織を調整イベントに一致させる作業

を開始できません。このチェック・ボックスの選択が解除されている場合、調整イベントでこのフィールドを処理できなくても、一致作業は開始されます。

5. 「Save」をクリックします。

フィールドは、リソースのデフォルトのプロビジョニング・プロセスでのマッピングに使用できます。

調整フィールドの削除

次の手順を実行すると、ターゲットのシステム・フィールドが、Oracle Identity Manager の情報と調整されたフィールドのリストから削除されます。信頼できるソースの場合、これはユーザー・リソース定義である必要があります。

調整フィールドを削除するには、次の手順を実行します。

1. 削除するフィールドを選択します。
2. 「Delete Field」をクリックします。

選択されたフィールドが、Oracle Identity Manager がターゲット・システム上のデータと調整するフィールドのリストから削除されます（ターゲット・システム自体のデータには影響しません）。

「Reconciliation Action Rules」 タブ

このタブは、個別の一致基準に適合したときに Oracle Identity Manager が実行するアクションを指定するために使用されます。Oracle Identity Manager では、調整イベント・レコード内に複数の一致があるときに自動的に実行する処理を指定できます。このタブの各レコードは次の組合せです。

- 一致条件基準
- 実行するアクション

選択肢の条件とアクションは事前に定義されています。一致条件によって適用できないアクションがあります。使用できるオブジェクトの全リストを次に示します。

ルール条件	可能なルール・アクション
No matches found	None Assign to Administrator with Least Load Assign to Authorizer with Highest Priority Assign to Authorizer with Least Load Assign to User Assign to Group Create User（信頼できるソースでのみ使用可能）
One Process Match Found	None Assign to Administrator with Least Load Assign to Authorizer with Highest Priority Assign to Authorizer with Least Load Assign to User Assign to Group Establish Link

ルール条件	可能なルール・アクション
Multiple Process Matches Found	None
	Assign to Administrator with Least Load
	Assign to Authorizer with Highest Priority
	Assign to Authorizer with Least Load
	Assign to User
Assign to Group	
One Entity Match Found	None
	Assign to Administrator with Least Load
	Assign to Authorizer with Highest Priority
	Assign to Authorizer with Least Load
	Assign to User
	Assign to Group
Establish Link	
Multiple Entity Matches Found	None
	Assign to Administrator with Least Load
	Assign to Authorizer with Highest Priority
	Assign to Authorizer with Least Load
	Assign to User
Assign to Group	

関連項目： 前述の表に示したユーザーやグループの分類タイプの説明は、7-34 ページの「[Editing Task ウィンドウの「Assignment」タブ](#)」を参照してください。

調整アクション・ルールの追加

次の手順は、調整アクション・ルールの追加について説明しています。

調整アクション・ルールを追加するには、次の手順を実行します。

1. 「Add Field」をクリックします。
「Add a new Action Rule」ダイアログ・ボックスが表示されます。
2. 「Rule Condition」メニューから、設定する値を選択します。
これは、関連付けられた処理が実行されるようにする一致条件です。各一致条件は、1 つのルール・アクションにのみ割り当てることができます。
3. 「Rule Action」メニューから、設定する値を選択します。
これは、一致条件が満たされたときに実行されるアクションです。
4. 「Save」をクリックし、「Add a new Action Rule」ダイアログ・ボックスを閉じます。

調整アクション・ルールの削除

次の手順は、調整アクション・ルールの削除について説明しています。

調整アクション・ルールを削除するには、次の手順を実行します。

1. 削除する一致条件とアクションの組合せを選択します。
2. 「Delete」をクリックします。
調整アクション・ルールが削除され、条件に関連付けられているアクションが自動的に実行されなくなります。

サービス・アカウントの管理

Oracle Identity Manager では、サービス・アカウントがサポートされています。サービス・アカウントは、メンテナンス目的で使用される汎用の管理者アカウント（たとえば、`admin1`、`admin2`、`admin3` など）で、通常は複数のユーザーにより共有されます。サービス・アカウントの管理とプロビジョニングのモデルは、通常のプロビジョニングと多少異なります。

サービス・アカウントは、通常のアカウントと同様に、リクエスト、プロビジョニングおよび管理できます。また、通常のアカウントと同じリソース・オブジェクト、プロビジョニング・プロセス、およびプロセス・フォームとオブジェクト・フォームを使用します。サービス・アカウントは内部フラグで通常のアカウントと区別されます。

ユーザーに対してサービス・アカウントがプロビジョニングされると、Oracle Identity Manager はそのユーザーの ID からサービス・アカウントへのマッピングを管理します。リソースが失効するかユーザーが削除されても、サービス・アカウントのプロビジョニング・プロセスは取り消されません（取り消されると、取消しタスクが起動されます）。かわりに、プロビジョニング・プロセスにタスクが挿入されます（Oracle Identity Manager での「Disable」および「Enable」アクションの処理と同様です）。このタスクは、ユーザーからサービス・アカウントへのマッピングを削除し、サービス・アカウントを、使用できるアカウントのプールに戻します。

この管理機能は API を通じて公開されています。

プロセス管理

この章では、Design Console を使用したプロセス管理について説明します。次の内容について説明します。

- 概要
- 「Email Definition」 フォーム
- 「Process Definition」 フォーム

概要

「Process Management」フォルダには、システム管理者が Oracle Identity Manager プロセスを管理するために使用するツールと電子メール・テンプレートがあります。

このフォルダには次のフォームがあります。

- **Email Definition:** システム管理者は、このフォームを使用して電子メール通知のテンプレートを作成できます。
- **Process Definition:** このフォームは、承認プロセスとプロビジョニング・プロセスを作成および管理するために使用されます。また、ワークフロー定義をグラフィック表現で表示するワークフロー定義レンダラを起動することも可能になります。

「Email Definition」フォーム

図 7-1 に示す「Email Definition」フォームは「Process Management」フォルダにあります。このフォームは、電子メール通知のテンプレートを作成するために使用します。これらの通知は、次の場合にユーザーに送信されるように設定できます。

- タスクがユーザーに割り当てられた場合
- タスクが特定のステータスになった場合
- リクエストが承認された場合（標準承認プロセスのステータスは Completed になります）

図 7-1 「Email Definition」フォーム

The screenshot shows the 'Email Definition' form with the following details:

- Name:** Self Registration
- Type:** Request Related (selected)
- Variables:** Targets and Variables dropdowns
- Object Name:** (empty)
- Language:** en
- Process Name:** (empty)
- Region:** US
- From:** Requester (dropdown)
- User Login:** XE_SYSADM
- Subject:** Self-registration request received
- Body:** Thank you for registering yourself with Oracle Corporation. Your request number is <Request Information.Request ID>. Please use this to track your request.

「Process Definition」フォームの「Assignment」タブを使用して、電子メール定義を適用します。

図 7-1 では、電子メール定義が作成されています。**Request ID** 電子メール変数によって表されたリクエストが承認されると、電子メール通知が、ユーザー **SOLO** から、リクエストを作成したユーザーまたはリクエストに送信されます。

電子メール・サーバーの指定

「Email Definition」 フォームを使用するためには、Oracle Identity Manager がユーザーに電子メール通知を送るために使用する電子メール・サーバーのアドレスを指定する必要があります。

ヒント: 詳細は、8-15 ページの「[System Configuration](#)」フォーム、および 6-5 ページの「[IT Resources](#)」フォームを参照してください。

電子メール・サーバーを指定するには、次の手順を実行します。

1. 「System Configuration」 フォームを起動します。
2. **Email Server** プロパティを問い合せて、それが電子メール・サーバーを表すリソース・アセット・インスタンスの名前に設定されていることを確認します。
3. 「IT Resources」 フォームを開き、IT リソースの **Email Server**、またはメール・サーバーに関連付けられているリソース・アセットの別の名前を問い合せます。
4. この IT リソースが表示されたら、電子メール・サーバー IP アドレスと、このサーバーの使用を検証するユーザーの名前とパスワードを指定します。

「Email Definition」 フォーム

次の表は、「Email Definition」 フォームのフィールドについて説明しています。

フィールド名	説明
Name	電子メール定義の名前。
Type	この領域には、次の 3 つのラジオ・ボタンがあります。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 電子メール定義を、リクエスト関連とプロビジョニング・プロセス関連のどちらに分類するか。 ■ 電子メール定義の変数を、リクエストとプロビジョニング・プロセスのどちらに関連付けるか。 ■ 電子メール定義の変数を、一般プロセスに関連付けるか。 <p>電子メール定義をプロビジョニング定義に分類する場合、または電子メール変数をプロビジョニング・プロセスに関連付ける場合は、「Provisioning Related」ラジオ・ボタンを選択します。</p> <p>電子メール定義をリクエスト定義に分類する場合、または電子メール変数をリクエストに関連付ける場合は、「Request Related」ラジオ・ボタンを選択します。</p> <p>電子メール定義を一般通知に分類する場合は、「General」ラジオ・ボタンを選択します。</p>
Object Name	この参照フィールドから、電子メール定義が関連するプロビジョニング・プロセスに関連付けられているリソース・オブジェクトを選択します。 <p>注意: 電子メール定義を、すべてのリソース・オブジェクトで使用できるようにするには、この参照フィールドを空のままにしておきます。</p>
Process Name	この参照フィールドで、選択したリソース・オブジェクトに割り当てられているプロビジョニング・プロセスを選択します。これは電子メール定義が関連しているプロビジョニング・プロセスです。 <p>注意: 「Provisioning Related」ラジオ・ボタンが選択されていない場合、「Object Name」および「Process Name」参照フィールドは無効です。</p>

フィールド名	説明
Language	この参照フィールドで、電子メール定義に関連付けられている言語を選択します。
Region	この参照フィールドで、電子メール定義の言語に関連付けられているリージョンを選択します。
Targets	電子メール定義の変数のソースを選択します。たとえば、選択する変数が Request Name の場合、選択するソースは Request Information になります。 注意: このボックスに表示される項目は、「Type」領域で選択しているラジオ・ボタンにより変わります。
Variables	このボックスから、電子メール定義の変数（たとえば、 Request Name ）を選択します。このボックスに表示される変数は、「Targets」ボックスで選択している項目により変わります。 注意: 電子メール変数と、そのパラメータの詳細は、A-9 ページの「 電子メールの変数 」を参照してください。
From	現在、2つのタイプのユーザーをこのボックスから選択できます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ Requester: リクエストを作成したユーザー。 ■ User: 電子メール・アドレスを持つあらゆる Oracle ユーザー。「Users」フォームの「Contact Information」タブに表示されます。
User Login	電子メール通知の「From」領域のユーザーの ID。 注意: 「User」項目が「From」ボックスに表示されない場合、「 User Login 」フィールドは無効です。
Subject	電子メール定義のタイトル。
Body	電子メール定義の内容。

電子メール定義の作成

次の手順は、電子メール定義の作成について説明しています。

電子メール定義を作成するには、次の手順を実行します。

1. 「Email Definition」 フォームを開きます。
2. 「Name」 フィールドに、電子メール定義の名前を入力します。
3. 電子メール定義をプロビジョニング・プロセスで使用する場合、「**Provisioning Related**」ラジオ・ボタンを選択します。電子メール定義をリクエストに関連付ける場合は、「**Request Related**」ラジオ・ボタンを選択します。

重要: 「**Request Related**」ラジオ・ボタンを選択する場合は、電子メール・サーバーの名前が「System Configuration」フォームの **Email Server** プロパティの「**Value**」フィールドに表示されていることを確認します。

4. 「**Language**」参照フィールドをダブルクリックし、この電子メール定義に関連付ける言語を選択します。
5. 「**Region**」参照フィールドをダブルクリックし、この電子メール定義の言語に関連付けるリージョンを選択します。

注意: 電子メール通知は、最初に Oracle Identity Manager をインストールしたときに指定したロケールに基づきます。

6. 「Save」 をクリックします。

これで、「Email Definition」 フォームの、他のデータ・フィールドが有効になります。

7. この電子メール定義を個別のリソース・オブジェクトに関連付けるには、「Lookup」ダイアログ・ボックスで「Object Name」参照フィールドをダブルクリックし、この電子メール定義が関連しているプロビジョニング・プロセスに関連付けられているリソース・オブジェクトを選択します。

電子メール定義を、すべてのリソース・オブジェクトで使用できるようにするには、この参照フィールドを空のままにしておきます。

8. 「Process Name」参照フィールドをダブルクリックします。

参照フィールドで、手順7で選択したリソース・オブジェクトに割り当てられているプロビジョニング・プロセスを選択します。これは電子メール定義が関連しているプロビジョニング・プロセスです。

注意：「Provisioning Related」ラジオ・ボタンが選択されていない場合、「Object Name」および「Process Name」参照フィールドは無効です。

9. 「From」ボックスをクリックします。

表示されるカスタム・メニューから、電子メール通知の「From」領域に表示されるユーザーのタイプを選択します（「Requester」、「User」または「Manager of Provisioned User」）。

注意：手順3で「Provisioning Related」ラジオ・ボタンを選択しなかった場合、「Manager of Provisioned User」項目は「From」ボックスに表示されません。

10. (オプション) 「From」ボックスで「User」オプションを選択した場合、「User Login」参照フィールドをダブルクリックします。

「Lookup」ダイアログ・ボックスで、電子メール通知の「From」領域に表示されるユーザーのIDを選択します。

「From」ボックスで「User」項目を選択しなかった場合、「User Login」フィールドは無効です。

11. 「Subject」フィールドに情報を追加します。

このフィールドには電子メール定義のタイトルが含まれます。

12. 「Body」テキスト領域に情報を追加します。

このテキスト領域には電子メール定義の内容が含まれます。

13. 必要な場合には、「Subject」フィールドと「Body」テキスト領域に電子メール変数を移入します。

次の表は、電子メール定義でカスタマイズできる電子メール変数について説明しています。

名前	説明
Type	これらのラジオ・ボタンは、電子メール定義の変数がプロビジョニング・プロセスとリクエストのどちらに関連するかを指定します。 電子メール変数をプロビジョニング・プロセスに関連付ける場合、「Provisioning Related」ラジオ・ボタンを選択します。電子メール変数をリクエストに関連付ける場合、「Request Related」ラジオ・ボタンを選択します。
Targets	このボックスで、電子メール定義の変数のソースを選択します。たとえば、Request Name 変数を使用する場合、選択するソースは「Request Information」になります。
Variables	このボックスから、電子メール定義の変数（たとえば、Request Name）を選択します。

注意：「Targets」ボックスのカスタム・メニューで表示される項目は、「Provisioning Related」と「Request Related」のいずれのラジオ・ボタンを選択しているかにより異なります。同様に、「Variables」ボックスのカスタム・メニューで表示される項目は、「Targets」、「Location Types」および「Contact Types」ボックスに表示される項目に対応して変わります。

14. 「Subject」フィールドまたは「Body」テキスト領域に対応する電子メール変数を作成します。

Subject	<Request Information.Request ID> has been approved
Body	Hello, Nikita! <Request Information.Request ID> has been approved.

この例では、承認されているリクエストの番号（Request ID）が、「Subject」フィールドと「Body」テキスト領域の両方に表示されます。

15. 「Save」をクリックします。

電子メール定義が作成されます。

「Process Definition」 フォーム

プロセスは、Oracle Identity Manager で承認またはプロビジョニングの論理ワークフローを表すメカニズムです。プロセス定義は複数のタスクから構成されています。プロセス・タスクは、プロセスの目的を満たすために完了する必要がある手順を表します。たとえば、承認プロセスでは、タスクは、アクションを実行するために必須である個別の承認を表すことがあります。プロビジョニング・プロセスでは、タスクは、ユーザーまたは組織がターゲット・リソースにアクセスできるようにするために使用されます。

図 7-2 に示す「Process Definition」フォームは「Process Management」フォルダにあります。このフォームは、リソース・オブジェクトに関連付ける承認プロセスやプロビジョニング・プロセスを作成および管理するために使用します。

注意： このフォームは、「Request」オブジェクトに関連付けられている標準承認プロセスを管理するためにも使用できます。

図 7-2 「Process Definition」 フォーム

The screenshot shows the Oracle Identity Manager Design Console interface. The main window displays the 'Process Definition' form for a process named 'Solaris 8'. The form includes fields for Name, Type (Provisioning), Object Name, and Form Assignment (Table Name: UD_SOLARIS). Below these fields is a table with tabs for 'Tasks', 'Data Flow', 'Reconciliation Field Mappings', and 'Administrators'. The 'Tasks' tab is active, showing a list of tasks with columns for Task, Default Assign..., Event Handler/A..., Conditional, and Required for Co....

Task	Default Assign...	Event Handler/A...	Conditional	Required for Co...
1 Reconciliation Insert Receive			<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
2 Reconciliation Update Receive			<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
3 Reconciliation Delete Receive			<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
4 Service Account Alert			<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
5 Service Account Moved			<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
6 Service Account Changed			<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
7 User Attestation Event Occu			<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
8 Resource Attestation Event c			<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
9 System Validation			<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>

図 7-2 では、Solaris 8 プロビジョニング・プロセスが作成され、Solaris 8 リソース・オブジェクトに割り当てられています。

次の表は、「Process Definition」フォームのフィールドについて説明しています。

フィールド名	説明
Name	プロセスの名前。
Type	プロセス定義の分類タイプ。プロセス定義は、承認プロセスまたはプロビジョニング・プロセスに分類することができます。
Object Name	プロセスの割当て先リソース・オブジェクトの名前。

フィールド名	説明
Map Descriptive Field	このボタンは、インスタンスがリソース・オブジェクトに割り当てられた後、プロセス定義の識別子として使用されるフィールドを選択する場合にクリックします。
Render Workflow	このボタンは、Web ブラウザを起動し、ワークフロー・レンダラ・ツールを使用して現在のワークフローを表示する場合に使用します。
Default Process	<p>このチェック・ボックスは、現在のプロセスを、関連付けられているリソース・オブジェクトのデフォルトの承認プロセスまたはプロビジョニング・プロセスにするかどうかを決定します。</p> <p>プロセスを、割り当てられるリソース・オブジェクトの、デフォルトの承認プロセスまたはプロビジョニング・プロセスに設定するには、このチェック・ボックスを選択します。チェック・ボックスの選択を解除すると、プロセスはデフォルトでなくなります。プロセス選択ルールにより選択が発生する場合にのみ呼び出されることとなります。</p>
Auto Save Form	<p>このチェック・ボックスは、このプロビジョニング・プロセスに関連付けられているカスタム・フォームの表示を抑制するか、フォームを表示して、プロセスがインスタンス化されるたびにユーザーがデータを入力できるようにするかを指定します。</p> <p>カスタムのプロセス・フォームで、フォームを表示しないでデータを自動保存するにはこのチェック・ボックスを選択します。このチェック・ボックスを選択する場合、システム定義データを入力するか、確実にアダプタが必須データをフォームに移入するように設定する必要があります。これは、ユーザーがフォームにアクセスすることができなくなるためです。カスタムのプロセス・フォームを表示するには、このチェック・ボックスの選択を解除して、ユーザーがデータをフィールドに入力できるようにします。</p>
Auto Pre-Populate	<p>このチェック・ボックスは、カスタム・フォームのフィールドが、Oracle Identity Manager とユーザーのどちらによって移入されるかを指定します。この設定の対象は、次の 2 タイプのフォームです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ プロセスに関連付けられているフォーム ■ 事前移入アダプタがアタッチされているフィールドが含まれるフォーム <p>「Auto Pre-Populate」チェック・ボックスを選択した場合、関連付けられたフォームが表示されると、事前移入アダプタがアタッチされたフィールドにデータが移入されます。</p> <p>このチェック・ボックスの選択を解除する場合、ツールバーの「Pre-Populate」ボタンをクリックするか、手動でデータを入力して、ユーザーがフィールドにデータを移入する必要があります。</p> <p>重要：この設定は、事前移入アダプタのトリガーを制御しません。関連付けられたフォーム・フィールドにアダプタの実行により得られる内容を表示するのが、Oracle Identity Manager とユーザーのどちらかということだけが決定されます。</p> <p>事前移入アダプタの詳細は、『Oracle Identity Manager Tools リファレンス・ガイド』を参照してください。</p> <p>注意：このチェック・ボックスは、プロセスに関連付けられるプロセス・フォームを作成した場合にのみ有効で、事前移入アダプタがそのフォームとともに使用されます。</p>
Table Name	プロセス定義に関連付けられているフォームを表す表の名前。

プロセス定義の作成

次の手順は、プロセス定義の作成方法について説明しています。

プロセス定義を作成するには、次の手順を実行します。

1. 「Process Definition」 フォームを開きます。
2. 「Name」 フィールドに、プロセス定義の名前を入力します。
3. 「Type」 参照フィールドをダブルクリックします。
表示される「Lookup」 ダイアログ・ボックスから、プロセス定義の分類タイプ（承認またはプロビジョニング）を選択します。
4. 「Object Name」 参照フィールドをダブルクリックします。
表示される「Lookup」 ダイアログ・ボックスから、プロセス定義に関連付けられるリソース・オブジェクトを選択します。
5. (オプション) 割り当てられるリソース・オブジェクトの、デフォルトの承認プロセスまたはプロビジョニング・プロセスに設定するには、「Default Process」 チェック・ボックスを選択します。

現在のプロセス定義をデフォルトにしない場合は、手順 6 に進みます。

6. (オプション) プロビジョニング・プロセスのカスタム・フォームの表示を抑制して、そこにデータを自動保存するには、「Auto Save Form」 チェック・ボックスを選択します。

この設定は、プロビジョニング・プロセスにのみ適用されます。

プロビジョニング・プロセスのカスタム・フォームを表示して、ユーザーに情報の入力を促すには、このチェック・ボックスの選択を解除します。

重要: 「Auto Save Form」 チェック・ボックスを選択する場合は、関連するカスタムプロセス・フォームのすべてのフィールドに、アダプタが関連付けられていることを確認します。ただし、プロセス・フォームには、プロセス・データ・フロー・マッピングまたは組織デフォルトに対するデフォルトのデータまたはオブジェクトがあることがあります。

アダプタおよびそのカスタム・フォームのフィールドとの関係の詳細は、『Oracle Identity Manager Tools リファレンス・ガイド』を参照してください。

7. カスタム・フォームがプロセス定義に関連付けられ、このフォームに含まれるフィールドに事前移入アダプタがアタッチされていて、Oracle Identity Manager がこれらのフィールドにデータを自動的に移入するようにする場合は、「Auto Pre-Populate」 チェック・ボックスを選択します。

(ツールバーの「Pre-Populate」 ボタンをクリックして) このフォームのフィールドに手動でデータを移入する場合、「Auto Pre-Populate」 チェック・ボックスの選択を解除します。

注意: プロセス定義に、関連付けられたカスタム・フォームがないか、このフォームのフィールドに事前移入アダプタがアタッチされていない場合は、「Auto Pre-Populate」 チェック・ボックスの選択を解除します。事前移入アダプタの詳細は、『Oracle Identity Manager Tools リファレンス・ガイド』を参照してください。

8. 「Table Name」 参照フィールドをダブルクリックします。

表示される Lookup ウィンドウから、プロセス定義に関連付けられているフォームを表を選択します。

9. 「Save」 をクリックします。

プロセス定義が作成され、「Map Descriptive Field」 ボタンが有効になります。このボタンをクリックすると「Map Descriptive Field」 ダイアログ・ボックスが表示されます。

このウィンドウから、プロセスのインスタンスがリソース・オブジェクトに割り当てられる際にプロセス定義の識別子として使用されるフィールド（たとえば、「Organization Name」 フィールド）を選択できます。このフィールドとその値が「Reconciliation Manger」 フォームに表示されます。

注意： プロセスにカスタムのプロセス・フォームがアタッチされている場合、そのフォーム上のフィールドはこのウィンドウにも表示され、選択できます。

10. ワークフロー定義をグラフィック表現で表示するには「Render Workflow」 ボタンをクリックします。

ワークフロー・レンダラは、プロセス定義の開発を支援する強力なツールです。

注意： ワークフロー定義レンダラの使用の詳細は、『Oracle Identity Manager 管理およびユーザー・コンソール・ガイド』を参照してください。

「Process Definition」 フォームのタブ

「Process Definition」 フォームを起動してプロセス定義を作成すると、このフォームのタブが有効になります。

「Process Definition」 フォームには次のタブが含まれます。

- 「Tasks」 タブ
- 「Data Flow」 タブ
- 「Reconciliation Field Mappings」 タブ
- 「Administrators」 タブ

それぞれのタブについて、次の各項で説明します。

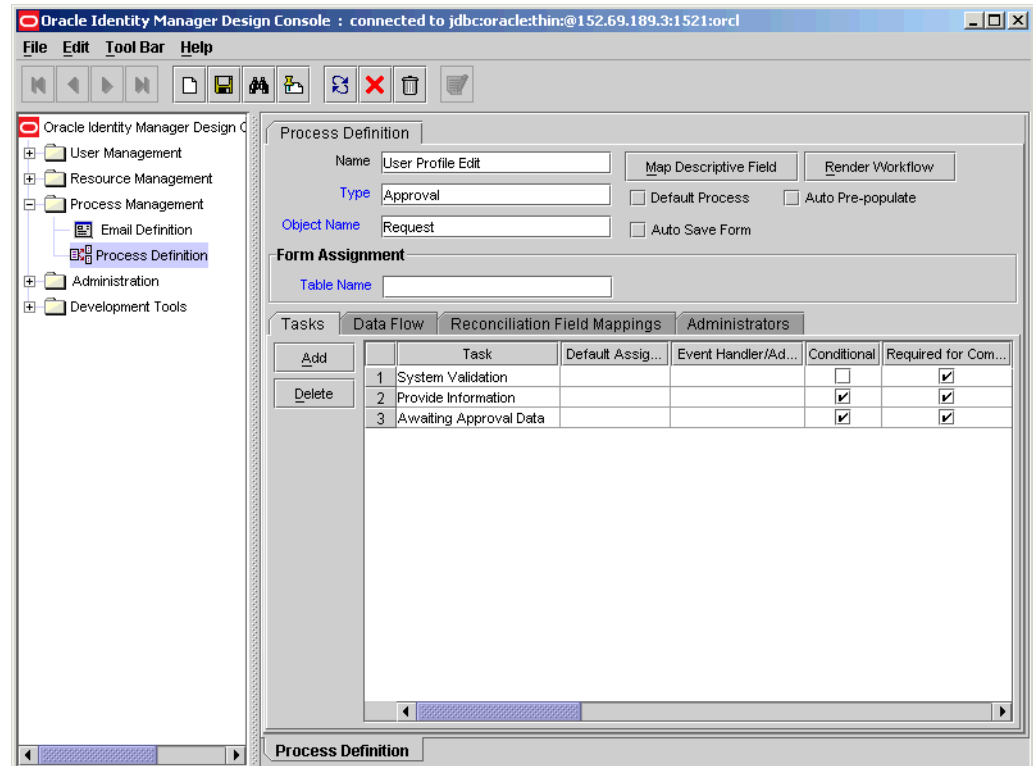
「Tasks」 タブ

このタブを使用して、次の操作を実行できます。

- 現在のプロセス定義を含むプロセス・タスクの作成と変更
- プロセス定義からのプロセス・タスクの削除（有効でなくなった場合）

図 7-3 に、「Process Definition」 フォームの「Tasks」 タブを示します。

図 7-3 「Process Definition」 フォームの「Tasks」 タブ



たとえば、「Solaris 8」プロセス定義には 15 のプロセス・タスクを含むことができます。

注意： プロセス・タスクの編集の詳細は、7-19 ページの「プロセス・タスクの変更」を参照してください。

プロセス・タスクの追加

プロセス・タスクは、プロセス内で完了する必要がある手順を表します。次の手順は、プロセス・タスクを追加する方法について説明しています。

プロセス・タスクを追加するには、次の手順を実行します。

1. 「Add」をクリックします。
「Creating New Task」ダイアログ・ボックスが表示されます。
2. 「Task Name」フィールドに、プロセス・タスクの名前を入力します。
3. Creating New Task ウィンドウのツールバーで、「Save」をクリックします。続いて、「Close」をクリックします。

プロセス・タスクがプロセス定義に追加されます。

プロセス・タスクの編集

プロセス・タスクの編集と設定の手順の詳細は、7-19 ページの「[プロセス・タスクの変更](#)」を参照してください。

プロセス・タスクの削除

プロセス・タスクを削除するには、次の手順を実行します。

1. 削除するプロセス・タスクを強調表示します。
2. 「Delete」をクリックします。

プロセス・タスクがプロセス定義から削除されます。

「Data Flow」タブ

このタブは、次の項目の間のデータ・フローを定義するために使用します。

- リソース・オブジェクト定義にアタッチされている親リソース・フォームのフィールドと、プロビジョニング・プロセス定義にアタッチされている親プロセス・フォームのフィールド
- 親リソース・フォームのフィールドと親プロセス・フォームの子のフィールド
- 子リソース・フォームのフィールドと子プロセス・フォームのフィールド

このタブは、親リソースとプロセス・オブジェクトにカスタムのリソース・フォームがアタッチされている場合にのみ有効です。

[図 7-4](#)に「Process Definition」フォームの「Data Flow」タブを示します。

図 7-4 「Process Definition」フォームの「Data Flow」タブ

	Source Object	Source Field	Sink Process	Sink Field
1	Solaris	Home Directory	Solaris	User's Home Directory
2		Child Form for Solaris Resource Object (Solaris)		Child Form for Solaris Process (Solaris)

親リソース・フォームのフィールドと子プロセス・フォームの間、または子リソース・フォームのフィールドと子プロセス・フォームの間に、データのフローをマッピングするには、カスタムのリソース・フォームに子リソース・フォームを割り当て、カスタム・プロセス・フォームに子プロセス・フォームを割り当てる必要があります。

関連項目： カスタムのプロセス・フォームやリソース・フォームと、親フォームへの子フォームの割当ての詳細は、9-3 ページの「[Form Designer フォーム](#)」を参照してください。

親リソース・オブジェクトのリソース・オブジェクト・フォームと、親プロビジョニング・プロセスのプロセス・フォームを定義して、各フォームに子フォームを割り当てると、フォーム・フィールドの間にマッピングを確立できますが、これには2つの制限があります。プロセス・フォームのフィールド値をリソース・フォーム・フィールドに逆マッピングすることはできません。また、子リソース・フォームのフィールド値は親プロセス・フォームのフィールドにマッピングできません。

図 7-4 に、2つのデータ・フローを示します。

- 最初のデータ・フローでは、親リソース・フォーム Solaris の「**Home Directory**」フィールドの値が、親プロセス・フォーム Solaris の「**User's Home Directory**」フィールドにマッピングされます。
- 2番目のデータ・フローでは、子リソース・フォーム Solaris の値が、子プロセス・フォーム Solaris の該当するフィールドにマッピングされます。

次の各項で、マッピング方法について説明します。

- 親プロセス・フォーム・フィールドへの親リソース・フォーム・フィールドのマッピング方法
- 子プロセス・フォーム・フィールドへの親リソース・フォーム・フィールドのマッピング方法
- 子プロセス・フォーム・フィールドへの子リソース・フォーム・フィールドのマッピング方法

また、2つのデータ・フィールドの間のマッピングを解除する方法も説明します。

プロセス・フォーム・フィールドへの親リソース・フォーム・フィールドのマッピング

次の手順は、プロセス・フォームのデータ・フィールドに親リソース・フォームのデータ・フィールドをマッピングする方法を説明しています。

親リソース・フォームのデータ・フィールドを、プロセス・フォームのデータ・フィールドにマッピングするには、次の手順を実行します。

1. 「**Add Field Map**」をクリックします。
「Define Data Flow」ダイアログ・ボックスが表示されます。
2. 「**Data Source**」ボックスから、親リソース・フォームにある、目的のデータ・フィールドを選択します。
3. 「**Data Sink**」ボックスから、親または子プロセス・フォームのターゲット・データ・フィールドを強調表示します。
4. ウィンドウのツールバーから「**Save**」をクリックし、続いて「**Close**」をクリックします。
これで、親リソース・フォームの選択されたデータ・フィールドが、手順3での選択に応じて、親または子プロセス・フォームのターゲット・データ・フィールドにマッピングされます。

子プロセス・フォーム・フィールドへの子リソース・フォーム・フィールドのマッピング

次の手順は、子リソース・フォームのデータを子プロセス・フォームのフィールドにマッピングする方法を説明しています。

子リソース・フォームから子プロセス・フォームにデータ・フィールドをマッピングするには、次の手順を実行します。

1. 「**Add Table Map**」をクリックします。
「Add Data Flow Table Mapping」ダイアログ・ボックスが表示されます。
2. 「**Resource Object Child Table**」ボックスから子リソース・フォームの表名を選択します。
3. 「**Process Child Table**」ボックスから、子プロセス・フォームのターゲット表名を強調表示します。
4. ウィンドウのツールバーから、「**Save**」をクリックし、続いて「**Close**」をクリックします。
これで、子リソース・フォームの選択された表名が、子プロセス・フォームのターゲット表名にマッピングされます。

5. 「Add Field Map」をクリックします。
「Define Data Flow」ダイアログ・ボックスが表示されます。
6. 「Table Mapping」ボックスから、子リソース・フォームの、目的の表名を選択します。
7. 「Data Source」ボックスから、子プロセス・フォームのデータ・フィールドを選択します。
8. 「Data Sink」ボックスから、子プロセス・フォームのターゲット・データ・フィールドを選択します。

リソース・オブジェクトのデータ・フィールドとプロセスの間のマッピングの解除

次の手順は、マッピングを解除する方法について説明しています。

マッピングを解除するには、次の手順を実行します。

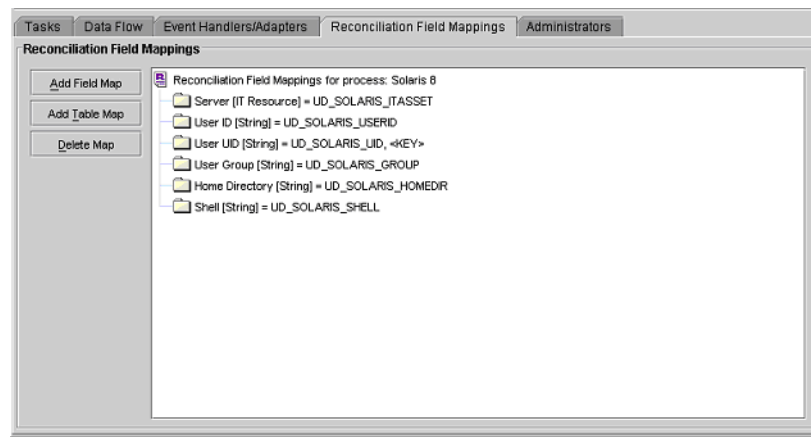
1. 解除するマッピングがあるデータ・フィールドを選択します。
2. 「Delete Map」をクリックします。

これで、リソース・オブジェクト・フォームの選択されたデータ・フィールドは、プロセス・フォームの強調表示されたデータ・フィールドとのマッピングが解除されました。

「Reconciliation Field Mappings」 タブ

図 7-5 に示す「Reconciliation Field Mappings」タブは、ターゲット・システムまたは信頼できるソースでのデータ要素と、Oracle Identity Manager のフィールドの間のリレーションシップを定義するために使用します。

図 7-5 「Process Definition」 フォームの「Reconciliation Field Mappings」 タブ



マッピングで選択できるのは、関連付けられたリソースの「Reconciliation Fields」タブで定義したフィールドのみです。これらのマッピングは、調整イベントを使用して、ターゲット・システムからの情報を、Oracle Identity Manager のどのフィールドに移入するかを決定します。ターゲット・リソース（信頼できないソース）では、このタブを使用して、どのフィールドがキー・フィールドかを示すことができます。キー・フィールドは、「Reconciliation Manager」フォームの「Processes Matched Tree」タブで一致を生成するために、プロセス・フォームと調整イベントのどの値が同じである必要があるかを決定します。

各マッピングについて、次の情報が表示されます。

- Oracle Identity Manager のデータとの間で調整されるターゲット・システムまたは信頼できるソースの、関連付けられているリソースの「**Reconciliation Fields**」タブで定義されているフィールドの名前。
- 関連付けられているリソースの「**Reconciliation Fields**」タブで定義されている、フィールドに関連付けられているデータ型。

可能な値は、**Multi-Valued**、**String**、**Number**、**Date**、**IT resource** です。

- **信頼できるソースの場合**：ユーザー検出の場合、信頼できるソース・フィールドのデータの、ユーザー・フォーム上のフィールドの名前へのマッピング。組織検出の場合、信頼できるソース・フィールドのデータの、「Oracle Identity Manager Organizations」フォームのフィールドの名前へのマッピング。

信頼できるソースでユーザー検出と組織検出を実行している場合、組織検出を先に実行する必要があります。

- **ターゲット・リソースの場合**：ターゲット・リソース・フィールドのデータがマッピングされる、リソースのカスタム（プロビジョニング）プロセス・フォーム上のフィールドの名前。
- **ターゲット・リソースの場合**：フィールドが、このターゲット・リソースの調整におけるキー・フィールドかどうかを示すインジケータ。

調整イベント・データに一致させるためのプロビジョニング・プロセスの場合は、プロセス・フォームのキー・フィールド値が、調整イベントのものと同じである必要があります。

ターゲット・リソース・フィールドの Oracle Identity Manager へのマッピング

関連付けられているリソース定義の「**Reconciliation Fields**」で定義されている、ターゲット・リソースまたは信頼できるソースのフィールドを、Oracle Identity Manager の該当するフィールドにマッピングすることができます。これらのマッピングにより、調整イベントで Oracle Identity Manager のどのフィールドが更新されるかが決まります。これらのマッピングが行われるのは、「Reconciliation Manager」フォームで次のいずれかをクリックするときです。

- 「**Create User**」または「**Create Organization**」ボタン
- 「**Matched Users**」または「**Matched Organizations**」タブの「**Link**」ボタン
- 「**Processes Matched Tree**」タブの「**Establish Link**」ボタン

信頼できるソースのユーザー検出では、**User** リソースから User プロビジョニング・プロセスのフィールドにマッピングされるフィールドを定義します。信頼できるソース・フィールドのマッピング先のフィールド（ユーザー属性）は、「Users」フォームから導出されます。

信頼できるソースの組織検出では、「**Oracle Identity Manager Organization**」リソースから「**Oracle Identity Manager Organization**」プロビジョニング・プロセスのフィールドにマッピングされるフィールドを定義します。信頼できるソース・フィールドのマッピング先のフィールド（組織属性）は、「Organizations」フォームから導出されます。

関連付けられているリソースのプロビジョニング・プロセス定義にアクセスし、「**Reconciliation Field Mappings**」タブを選択した後、後述の2つの手順の1つを使用します。

単一値フィールドのマッピング

次の手順では、単一値をマッピングする方法について説明します。

単一値フィールドをマッピングするには、次の手順を実行します。

1. 「Add Field Map」をクリックします。

「Add Reconciliation Field Mappings」ダイアログ・ボックスが表示されます。

2. 「Field Name」フィールドのメニューから、マッピングするターゲット・システムのフィールドを選択します。

Oracle Identity Manager は、関連付けられている「Resource Object」フォームの入力内容に基づいて、このフィールドのフィールド・タイプを自動的に設定します。

3. 信頼できるソースの場合

「User Attribute」メニューから値を選択して、「OK」をクリックします。手順 4 に進みます。

ターゲット・リソースの場合

「Process Data Field」をダブルクリックします。「Lookup」ダイアログ・ボックスから正しいマッピングを選択して、「OK」をクリックします。

4. 信頼できるソースのマッピングを定義している場合は、この手順をスキップします。

ターゲット・リソースの「Key Field for Reconciliation Matching」チェック・ボックスだけを設定します。このチェック・ボックスを選択すると、Oracle Identity Manager は、プロビジョニング・プロセス・フォームのこのフィールドの値が、調整イベントのフィールドの値に一致しているかどうかを評価します。一致したすべてのプロセスが、「Reconciliation Manager」フォームの「Processes Matched Tree」タブに表示されます。

このチェック・ボックスの選択が解除されている場合、Oracle Identity Manager では、プロセス一致の際に、このフィールドの値がプロセス・フォームや調整イベントと一致する必要はありません。

注意： フィールドをキー・フィールドに設定するには、該当するリソースの「Object Reconciliation」タブで必須に設定されている必要があります。

5. 「Save」をクリックします。

選択されたフィールドのマッピングは、ターゲット・リソースまたは信頼できるソースから次に調整イベントを受け取ったときに適用されます。

複数値フィールドのマッピング（ターゲット・リソースのみ）

複数値フィールドをマッピングするには、次の手順を実行します。

1. 「Add Table Map」をクリックします。

「Add Reconciliation Table Mappings」ダイアログ・ボックスが表示されます。

2. 「Field Name」フィールドのメニューから、マッピングするターゲット・システムの複数値フィールドを選択します。

Oracle Identity Manager は、関連付けられている「Resource Object」フォーム上のこのフィールドの入力内容に基づいて、フィールド・タイプを自動的に設定します。

3. 「Table Name」メニュー（子表のみ表示）から、ターゲット・リソースのプロセス・フォームで定義した子表を選択します。

4. 「Process Data Field」をダブルクリックし、「Lookup」ダイアログ・ボックスから正しいマッピングを選択して、「OK」をクリックします。

5. 保存して、「Add Reconciliation Table Mappings」ダイアログ・ボックスを閉じます。

6. 今マッピングした複数値フィールドを右クリックし、表示されるメニューから「Define a property field map」を選択します。

7. マッピングするコンポーネント（子）フィールドを選択します。

Oracle Identity Manager は、関連付けられている「Resource Object」フォーム上のこのフィールドの入力内容に基づいて、フィールド・タイプを自動的に設定します。

8. 「Process Data Field」をダブルクリックします。

「Lookup」ダイアログ・ボックスから正しいマッピングを選択して、「OK」をクリックします。

9. 「Key Field for Reconciliation Matching」チェック・ボックスを設定します。

このチェック・ボックスを選択すると、Oracle Identity Manager は、プロビジョニング・プロセスの子フォームのフィールド値と、調整イベントのフィールド値を比較します。一致したすべてのプロセスが、「Reconciliation Manager」フォームの「Processes Matched Tree」タブに表示されます。このチェック・ボックスの選択を解除すると、プロセス一致の際に、このフィールドの値がプロセス・フォームや調整イベントに一致する必要はありません。各複数値フィールドの少なくとも1つのコンポーネント（子）フィールドがキー・フィールドとして設定されていることを確認してください。これにより「Process Matched Tree」タブで生成される一致の質が向上します。

注意： キー・フィールドは、該当するリソースの「Object Reconciliation」タブで必須に設定されている必要があります。

10. 複数値フィールドで定義されている各コンポーネント（子）フィールドについて、手順6～9を繰り返します。

11. 「Save」をクリックします。

選択したフィールドのマッピングは、次にターゲット・リソースから調整イベントを受け取ったときに適用されます。

マッピングの削除

この手順は、Oracle Identity Manager のフィールドと、関連付けられているリソース定義の「Reconciliation Fields」タブ上で定義されているターゲット・システムまたは信頼できるソースのフィールドの間に確立されているマッピングを削除する際に使用します。

マッピングを削除するには、次の手順を実行します。

1. 関連付けられているリソースのプロビジョニング・プロセス定義にアクセスします。
2. 「Reconciliation Field Mappings」タブを選択します。
3. 削除するフィールド・マッピングを選択します。
4. 「Delete Map」をクリックします。

選択されたフィールドのマッピングが削除されます。

「Administrators」 タブ

このタブは、現在のプロセス定義を表示、変更および削除できるユーザー・グループを選択するために使用します。

このタブの「Write」チェック・ボックスを選択すると、それに対応するユーザー・グループは、現在のプロセス定義の読取りと変更ができます。「Delete」チェック・ボックスを選択すると、関連付けられているユーザー・グループが現在のプロセス定義を削除できます。

たとえば、「SYSTEM ADMINISTRATORS」ユーザー・グループは、Solaris プロセス定義の表示、変更および削除を行うように設定できます。

プロセス定義へのユーザー・グループの割当て

次の手順では、ユーザー・グループに権限を割り当てる方法について説明します。

ユーザー・グループを割り当てるには、次の手順を実行します。

1. 「Assign」をクリックします。
Groups ウィンドウが表示されます。
2. 未割当てのグループを選択して、プロセス定義に割り当てます。
3. 「OK」をクリックします。
ユーザー・グループが「Administrators」タブに表示されます。
4. このユーザー・グループが現在のプロセス定義に対して、表示または変更、あるいは表示と変更ができるようにする場合、対応する「Write」チェック・ボックスをダブルクリックします。
それ以外の場合は手順 5 に進みます。
5. このユーザー・グループが現在のプロセス定義を削除できるようにする場合、関連付けられている「Delete」チェック・ボックスをダブルクリックします。
それ以外の場合は手順 6 に進みます。
6. 「Save」をクリックします。
ユーザー・グループがプロセス定義に割り当てられます。

プロセス定義からのユーザー・グループの削除

次の手順では、ユーザー・グループの権限を削除する方法について説明します。

ユーザー・グループを削除するには、次の手順を実行します。

1. 削除するユーザー・グループを強調表示します。
2. 「Delete」をクリックします。
ユーザー・グループがプロセス定義から削除されます。

プロセス・タスクの変更

プロセス定義のプロセス・タスクを変更するには、その行ヘッダーをダブルクリックします。プロセス・タスクに関するその他の情報が **Editing Task** ウィンドウに表示されます。

Editing Task ウィンドウには、次のタブが含まれます。

- 「General」 タブ
- 「Integration」 タブ
- 「Task Dependency」 タブ
- 「Responses」 タブ
- 「Undo/Recovery」 タブ
- 「Notification」 タブ
- 「Task to Object Status Mapping」 タブ
- Editing Task ウィンドウの「Assignment」 タブ

「General」 タブ

このタブは、変更するタスクに関する高度な情報を設定するために使用します。この例では、Solaris 環境でユーザーを作成するために「**Create User**」タスクが使用されています。

図 7-6 に、「Editing Task」ダイアログ・ボックスの「General」タブを示します。

図 7-6 「Editing Task」ダイアログ・ボックスの「General」タブ

The screenshot shows the 'Editing Task: Create User' dialog box with the 'General' tab selected. The dialog contains the following fields and controls:

- Task Name:** Create User
- Task Description:** This task is used to create a user within Solaris
- Duration:** Days: 1, Hours: 6, Minutes: 30
- Task Properties:**
 - Conditional:
 - Disable Manual Insert:
 - Retry Period in Minutes: 30
 - Required for Completion:
 - Allow Cancellation while Pending:
 - Retry Count: 5
 - Constant Duration:
 - Allow Multiple Instances:
 - Task Effect: Enables Process Or Access To Application
 - Child Table: [Dropdown]
 - Trigger Type: [Dropdown]

次の表は、「General」フォームのフィールドについて説明しています。

フィールド名	説明
Task Name	プロセス・タスクの名前。
Task Description	プロセス・タスクに関する説明。
Duration	現在のプロセス・タスクの予定完了時刻。単位は日、時、分。
Conditional	<p>このチェック・ボックスは、プロセスに現在のプロセス・タスクを追加するために、ある条件を満たす必要があるかを指定します。</p> <p>条件が満たされないとプロセスにプロセス・タスクが追加されないようにするには、このチェック・ボックスを選択します。</p> <p>その条件が満たされることを、プロセスにプロセス・タスクが追加されるための必須条件にしない場合は、このチェック・ボックスの選択を解除します。</p>
Required for Completion	<p>このチェック・ボックスは、プロセスが完了するために、現在のプロセス・タスクが完了することが必要かどうかを指定します。</p> <p>プロセス・タスクのステータスが「Completed」にならないとプロセスを完了できないようにするには、このチェック・ボックスを選択します。</p> <p>プロセス・タスクのステータスがプロセスの完了ステータスに影響しないようにするには、このチェック・ボックスの選択を解除します。</p>
Constant Duration	N/A
Task Effect	<p>このボックスから、タスクに関連付けるプロセス・アクション（たとえば、無効化や有効化）を選択します。プロセスは、リソースへのユーザーのアクセスを有効化または無効化できます。無効化アクションを選択すると、無効化アクションに関連付けられているすべてのタスクが挿入されます。</p> <p>注意：プロセス・タスクを個別のプロセス・アクションに関連付けない場合、ボックスから「NONE」を選択します。</p>
Disable Manual Insert	<p>このチェック・ボックスは、現行のプロセス・タスクをユーザーがプロセスに手動で追加できるかどうかを指定します。</p> <p>プロセスにプロセス・タスクを手動で追加できないようにするには、このチェック・ボックスを選択します。</p> <p>ユーザーがプロセスにプロセス・タスクを追加できるようにするには、このチェック・ボックスの選択を解除します。</p>
Allow Cancellation while Pending	<p>このチェック・ボックスは、ステータスが「Pending」のときにプロセス・タスクを取り消せるかどうかを指定します。</p> <p>ステータスが「Pending」のときにプロセス・タスクを取り消せるようにするには、このチェック・ボックスを選択します。</p> <p>ステータスが「Pending」のときにプロセス・タスクを取り消せないようにするには、このチェック・ボックスの選択を解除します。</p>
Allow Multiple Instances	<p>このチェック・ボックスは、現在のプロセスにプロセス・タスクを複数回挿入できるかどうかを指定します。</p> <p>プロセスにプロセス・タスクのインスタンスを複数追加できるようにするには、このチェック・ボックスを選択します。</p> <p>プロセスにプロセス・タスクのインスタンスを1回のみ追加できるようにするには、このチェック・ボックスの選択を解除します。</p>

フィールド名	説明
Retry Period in Minutes	<p>プロセス・タスクが「Rejected」の場合、このフィールドは、「Pending」ステータスを持つタスクの新規インスタンスを Oracle Identity Manager が挿入するまでの時間間隔を指定します。</p> <p>7-19 ページの図 7-6 では、「Retry Period in Minutes」テキスト・ボックスに「30」と表示されています。「Create User」プロセス・タスクが却下された場合、Oracle Identity Manager は 30 分後にこのタスクの新規インスタンスを追加して、「Pending」ステータスを割り当てます。</p>
Retry Count	<p>却下されたタスクを Oracle Identity Manager が再試行する回数。</p> <p>7-19 ページの図 7-6 では、「Retry Count」テキスト・ボックスに「5」と表示されています。「Create User」プロセス・タスクが却下された場合、Oracle Identity Manager はこのタスクの新規インスタンスを追加して、「Pending」ステータスを割り当てます。このプロセス・タスクが 5 回目に却下されると、Oracle Identity Manager はそれ以降、新規インスタンスを挿入しません。</p>
Child Table/Trigger Type	<p>これらのボックスは、Oracle Identity Manager が、現在のプロセスに関連付けられているカスタム・フォームの子表（「Process Definition」フォームの「Table Name」フィールドに表示）で実行するアクションを指定します。</p> <p>「Child Table」ボックスから、Oracle Identity Manager がアクションを実行するカスタム・フォームの子表を選択します。</p> <p>「Trigger Type」ボックスから、Oracle Identity Manager が子表で実行するアクションを指定します。次のようなアクションがあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Insert. 子表の指定された列に新しい値を追加します。 ■ Update. 子表の対応する列の既存の値を変更します。 ■ Delete. 子表の指定された列から値を削除します。 <p>注意： カスタムのプロセス・フォームに子表が関連付けられていない場合、「Child Table」ボックスは空になります。また、「Trigger Type」ボックスは無効です。</p>

プロセス・タスクの一般情報の変更

次の手順は、プロセス・タスクの一般情報を変更する方法について説明しています。

プロセス・タスクの一般情報を変更するには、次の手順を実行します。

1. 変更するタスクの行ヘッダーをダブルクリックします。
「Editing Task」ダイアログ・ボックスが表示されます。
2. 「General」タブをクリックします。
3. 「Description」フィールドに、プロセス・タスクについての説明情報を入力します。
4. (オプション) 「Duration」領域に、プロセス・タスクの予定完了時刻を入力します（単位は日、時、分）。
5. プロセス・タスクが、ある条件を満たさないと「Process Instance」に追加されないようにするには、「Conditional」チェック・ボックスを選択します。

それ以外の場合は手順 6 に進みます。

重要： 「Conditional」チェック・ボックスを選択した場合は、タスクがプロセスに追加されるために満たす必要のある条件を指定する必要があります。

6. プロセスの完了ステータスがプロセス・タスクの完了ステータスに依存するようにするには、「**Required for Completion**」チェック・ボックスを選択します。
それにより、プロセス・タスクのステータスが「**Completed**」にならないと、プロセスを完了できないようになります。
プロセス・タスクのステータスがプロセスの完了ステータスに影響するようにしない場合は、手順 7 に進みます。
7. 現在実行中のプロセスのインスタンスに、ユーザーが手動でプロセス・タスクを追加できないようにする場合は、「**Disable Manual Insert**」チェック・ボックスを選択します。
それ以外の場合は手順 8 に進みます。
8. プロセス・タスクのステータスが「**Pending**」のときにそのプロセス・タスクをユーザーが取り消せるようにする場合は、「**Allow Cancellation while Pending**」チェック・ボックスを選択します。
それ以外の場合は手順 9 に進みます。
9. このタスクを単一のプロセス・インスタンスに複数回挿入できるようにするには、「**Allow Multiple Instances**」チェック・ボックスを選択します。
それ以外の場合は手順 10 に進みます。
10. 「**Task Effect**」ボックスをクリックします。
表示されるカスタム・メニューから、次のいずれかを選択します。
 - **Enable Process or Access to Application**。有効化機能を使用してリソースを再アクティブ化した場合、これが設定されているすべての機能がプロセスに挿入されます。このオプションを選択する場合、「**Allow Multiple Instances**」チェック・ボックスも選択する必要があります。
 - **Disable Process or Access to Application**。無効化機能を使用してリソースを非アクティブにした場合、これが設定されているすべての機能がプロセスに挿入されます。このオプションを選択する場合、「**Allow Multiple Instances**」チェック・ボックスも選択する必要があります。
 - **No Effect**。これは、すべてのタスクに関連付けられているデフォルトのプロセス・アクションです。このオプションを選択すると、条件付きでないタスクは、通常プロビジョニングのときにのみ挿入されます。
11. (オプション) プロセス・タスクが「**Rejected**」の場合、「**Pending**」ステータスを持つプロセス・タスクの新規インスタンスを挿入するように Oracle Identity Manager を設定する場合があります。
それには、「**Retry Period in Minutes**」フィールドに値を入力します。これは、このプロセス・タスク・インスタンスが追加されるまでに Oracle Identity Manager が待機する時間を分単位で示します。
「**Retry Count**」テキスト・ボックスに、却下されたタスクを Oracle Identity Manager が再試行する回数を入力します。たとえば、「**Retry Count**」テキスト・ボックスに「**3**」と表示されているとします。タスクが却下された場合、Oracle Identity Manager はこのタスクの新規インスタンスを追加して、「**Pending**」ステータスを割り当てます。このプロセス・タスクが 4 回目に却下されると、Oracle Identity Manager はそれ以降、プロセス・タスクの新規インスタンスを挿入しません。

注意: 「**Retry Period**」と「**Retry Count**」のいずれかを選択した場合、これらは相互に関連しているため、もう一方のオプションのパラメータも指定する必要があります。

12. 「Child Table」ボックスから、Oracle Identity Manager がアクションを実行するカスタム・フォームの子表を選択します。

「Trigger Type」ボックスから、Oracle Identity Manager が子表で実行するアクションを指定します。次のようなアクションがあります。

- **Insert**. 子表の指定された列に新しい値を追加します。
- **Update**. 子表の対応する列から既存の値を変更します。
- **Delete**. 子表の指定された列から値を削除します。

注意: カスタムのプロセス・フォームに子表が関連付けられていない場合、「Child Table」ボックスは空になります。また、「Trigger Type」ボックスは無効です。

13. 「Save」をクリックします。

プロセス・タスクの高度な情報に対する変更には、「General」タブで行った変更が反映されます。

「Integration」タブ

「Integration」タブでは、次の操作が可能です。

- イベント・ハンドラまたはタスク・アダプタをアタッチすることでプロセス・タスクを自動化します。
- タスク・アダプタの変数をマッピングします。これにより、アダプタがトリガーされたときに、Oracle Identity Manager が適切な情報を渡すことができます。これは、プロセス・タスクのステータスが「Pending」の場合に発生します。
- アダプタまたはイベント・ハンドラがプロセス・タスクに適用できなくなった場合に、アダプタ / イベント・ハンドラとプロセス・タスクの間のリンクを解除します。

たとえば、**adpSOLARISCREATEUSER** アダプタが「Create User」プロセス・タスクにアタッチされているとします。このアダプタには9つのアダプタ変数があります。そのすべてが、各変数名の前に付加されている「Y」が示しているように、適切にマッピングされています。

注意: イベント・ハンドラの先頭には、**tcCheckAppInstalled** のように、「tc」(Thor クラス) が付加されます。これらは、オラクル社が提供しているイベント・ハンドラです。顧客作成によるイベント・ハンドラは、名前の先頭に tc を付加することができません。アダプタの先頭には、**adpSOLARISCREATEUSER** のように、「adp」が付加されます。

関連項目: アダプタとイベント・ハンドラの詳細は、9-2 ページの「[Adapter Factory](#)」フォーム、および 10-2 ページの「[Event Handler Manager](#)」フォームを参照してください。

プロセス・タスクへのアダプタまたはイベント・ハンドラの割当て

次の手順は、プロセス・タスクにアダプタまたはイベント・ハンドラを割り当てる方法について説明しています。

重要： プロセス・タスクにアダプタを割り当てる場合、アダプタ変数を正しくマッピングするまで、アダプタは機能しません。詳細は、7-25 ページの「[アダプタ変数のマッピング](#)」を参照してください。

プロセス・タスクにアダプタまたはイベント・ハンドラを割り当てるには、次の手順を実行します。

1. イベント・ハンドラまたはアダプタを割り当てるプロセス・タスクの行ヘッダーをダブルクリックします。

Editing Task ウィンドウが表示されます。

2. 「Integration」 タブをクリックします。

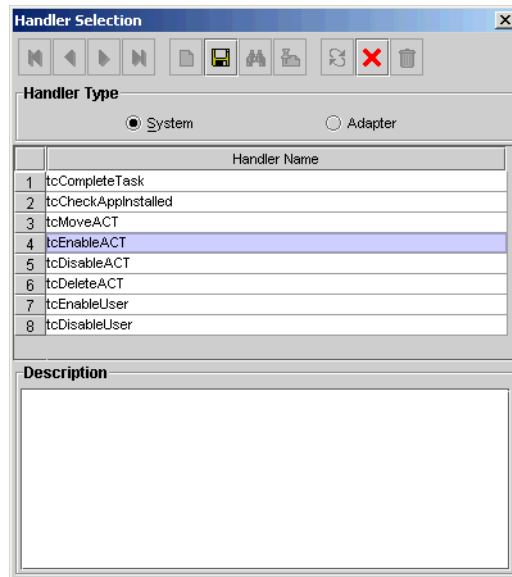
3. 「Add」 をクリックします。

「Handler Selection」 ダイアログ・ボックスが表示されます。図 7-7 を参照してください。

4. プロセス・タスクにイベント・ハンドラを割り当てるには、「System」 ラジオ・ボタンを選択します。

プロセス・タスクにアダプタを追加するには、「Adapter」 ラジオ・ボタンを選択します。プロセス・タスクに割当てできるイベント・ハンドラまたはアダプタのリストが「Handler Name」 領域に表示されます。

図 7-7 「Handler Selection」 ダイアログ・ボックス



5. プロセス・タスクに割り当てるイベント・ハンドラまたはアダプタを選択します。

6. Handler Selection ウィンドウのツールバーから、「Save」 をクリックします。

確認のダイアログ・ボックスが表示されます。

7. 「OK」 をクリックします。

イベント・ハンドラまたはアダプタがプロセス・タスクに割り当てられます。

アダプタ変数のマッピング

次の手順では、アダプタ変数をマッピングする方法について説明します。

ヒント：この手順で選択する項目の詳細は、『Oracle Identity Manager Tools リファレンス・ガイド』を参照してください。

注意：親フォーム・フィールドに対する変更が関連付けられているタスクをトリガーする場合、タスクの名前は「<field> Updated」である必要があります。ここで <field> は親フォーム・フィールドの名前です。タスクの名前がこの表記規則に従っていない場合、フィールドが更新されてもタスクはトリガーされません。

アダプタ変数をマッピングするには、次の手順を実行します。

1. マッピングするアダプタ変数を選択します。
2. 「Map」をクリックします。
Data Mapping for Variable ウィンドウが表示されます。
3. 「Map To」、「Qualifier」、「IT Asset Type」、「IT Asset Property」、「Literal Value」および「Old Value」の各フィールドを設定します。
4. Data Mapping for Variable ウィンドウのツールバーから「Save」をクリックします。
5. 「Close」をクリックします。
アダプタ変数のマッピング・ステータスが「N」から「Y」に変化します。これは、アダプタ変数がマッピングされたことを示します。

プロセス・タスクのアダプタまたはイベント・ハンドラの削除

次の手順は、プロセス・タスクからのアダプタまたはイベント・ハンドラの削除について説明しています。

プロセス・タスクからアダプタまたはイベント・ハンドラを削除するには、次の手順を実行します。

1. 「Remove」をクリックします。
確認のダイアログ・ボックスが表示されます。
2. 「OK」をクリックします。
イベント・ハンドラまたはアダプタがプロセス・タスクから削除されます。

「Task Dependency」 タブ

「Task Dependency」 タブは、プロセスでのプロセス・タスクの論理フローを決定するために使用します。このタブでは、次の操作が可能です。

- **先行タスク**をプロセス・タスクに割り当てます。
Oracle Identity Manager またはユーザーが現在のプロセス・タスクをトリガーできるためには、これらのタスクが「Completed」ステータスを持つ必要があります。
- **依存タスク**をプロセス・タスクに割り当てます。
現在のプロセス・タスクのステータスが「Completed」になって初めて、Oracle Identity Manager またはユーザーがこれらのタスクをトリガーできます。
- 現在のタスクがトリガーされることと先行タスクの完了ステータスに関係がなくなるように、先行タスクと現在のタスクの間のリンクを解除します。
- 現在のタスクの完了ステータスと依存タスクのトリガーに関係がなくなるように、現在のタスクと依存タスクの間のリンクを解除します。

たとえば、「Create User」プロセス・タスクには、先行タスクはありません。タスクがプロセスに挿入されると（たとえば、関連付けられているリソースがリクエストされた場合）、Oracle Identity Manager は常にこのタスクをトリガーします。Create User プロセス・タスクには、7つの依存タスクがあります。このプロセス・タスクが完了する前に、各依存タスクは「Waiting」ステータスをもちます。このタスクのステータスが「Completed」になると、これらのプロセス・タスクのそれぞれに「Pending」ステータスが割り当てられ、Oracle Identity Manager がそれをトリガーできるようになります。

先行タスクのプロセス・タスクへの割当て

次の手順は、プロセス・タスクに先行タスクを割り当てる方法について説明しています。

プロセス・タスクに先行タスクを割り当てるには、次の手順を実行します。

1. 先行タスクを割り当てるプロセス・タスクの行ヘッダーをダブルクリックします。
「Editing Task」ウィンドウが表示されます。
2. 「Task Dependency」タブをクリックします。
3. 「Preceding Tasks」領域から「Assign」をクリックします。
「Assignment」ウィンドウが表示されます。
4. このウィンドウから、先行タスクを選択し、プロセス・タスクに割り当てます。
5. 「OK」をクリックします。
これで、先行タスクがプロセス・タスクに割り当てられます。

プロセス・タスクからの先行タスクの削除

次の手順は、プロセス・タスクから先行タスクを削除する方法について説明しています。

プロセス・タスクから先行タスクを削除するには、次の手順を実行します。

1. 削除する先行タスクを強調表示します。
2. 「Preceding Tasks」領域から「Delete」をクリックします。
先行タスクがプロセス・タスクから削除されます。

プロセス・タスクへの依存タスクの割当て

次の手順は、プロセス・タスクに依存タスクを割り当てる方法について説明しています。

プロセス・タスクに依存タスクを割り当てるには、次の手順を実行します。

1. 依存タスクを割り当てるプロセス・タスクの行ヘッダーをダブルクリックします。
Editing Task ウィンドウが表示されます。
2. 「Task Dependency」タブをクリックします。
3. 「Dependent Tasks」領域から「Assign」をクリックします。
Assignment ウィンドウが表示されます。
4. このウィンドウから依存タスクを選択し、プロセス・タスクに割り当てます。
5. 「OK」をクリックします。これで、依存タスクがプロセス・タスクに割り当てられます。

プロセス・タスクからの依存タスクの削除

次の手順は、プロセス・タスクから依存タスクを削除する方法について説明しています。

プロセス・タスクから依存タスクを削除するには、次の手順を実行します。

1. 削除する依存タスクを強調表示します。
2. 「Dependent Tasks」領域から「Delete」をクリックします。
依存タスクがプロセス・タスクから削除されます。

「Responses」タブ

「Responses」タブで可能な作業は次のとおりです。

- 個別のプロセス・タスクの実行と組み合わせて受け取れるレスポンス・コードを定義します。レスポンス・コードは、ターゲット・システム上の特定の条件を表現するために使用できます。
- このプロセス・タスクの実行時にレスポンス・コードを受け取った場合に起動される条件付きタスクを定義します。このタスクを生成タスクと呼びます。
- プロセス・タスクからレスポンスを削除します。
- プロセス・タスクから生成タスクを削除します。

たとえば、「Create User」プロセス・タスクが「Completed」の場合、SUCCESS レスポンスがアクティブになります。このレスポンスは、ダイアログ・ボックスを開いてメッセージ「The user was created successfully」を表示します。また、Oracle Identity Manager は「Enable User」プロセス・タスクをトリガーします。

注意：デフォルトで、却下されたプロセス・タスクには UNKNOWN レスポンスが定義されています。このように、システム管理者がプロセス・タスクにレスポンスを追加しない場合でも、このタスクが却下されると、ユーザーにはダイアログ・ボックスでエラー・メッセージが通知されます。

プロセス・タスクへのレスポンスの追加

次の手順は、プロセス・タスクにレスポンスを追加する方法について説明しています。

プロセス・タスクにレスポンスを追加するには、次の手順を実行します。

1. レスポンスを追加するプロセス・タスクの行ヘッダーをダブルクリックします。
Editing Task ウィンドウが表示されます。
2. 「Responses」 タブをクリックします。
3. 「Responses」 領域で、「Add」 をクリックします。
レスポンス領域に空行が表示されます。
4. 「Response」 フィールドに情報を追加します。
このフィールドにはレスポンス・コード値が含まれます。このフィールドでは、大 / 小文字が区別されます。
5. 「Description」 フィールドに情報を追加します。このフィールドにはレスポンスについての説明情報が含まれます。
プロセス・タスクがレスポンスをトリガーすると、その情報がタスク情報ダイアログ・ボックスに表示されます。
6. 「Status」 参照フィールドをダブルクリックします。
表示される Lookup ウィンドウから、タスクのステータス・レベルを選択します。レスポンス・コードを受け取ると、それにより、タスクにこのステータスが設定されます。
7. 「Save」 をクリックします。
これで、追加したレスポンスに、入力した設定が反映されるようになります。

プロセス・タスクからのレスポンスの削除

次の手順は、プロセス・タスクからレスポンスを削除する方法について説明しています。

プロセス・タスクからレスポンスを削除するには、次の手順を実行します。

1. 削除するレスポンスを強調表示します。
2. 「Responses」 領域から 「Remove」 をクリックします。
レスポンスがプロセス・タスクから削除されます。

生成タスクのプロセス・タスクへの割当て

次の手順は、プロセス・タスクに生成タスクを追加する方法について説明しています。

プロセス・タスクに生成タスクを割り当てるには、次の手順を実行します。

1. 生成タスクを割り当てるプロセス・タスクの行ヘッダーをダブルクリックします。
Editing Task ウィンドウが表示されます。
2. 「Responses」 タブをクリックします。
3. 生成タスク（生成されるタスク）を割り当てるレスポンス・コードを選択します。
4. 「Tasks to Generate」 領域から 「Assign」 をクリックします。
Assignment ウィンドウが表示されます。
5. このウィンドウから、生成タスクを選択し、プロセス・タスクに割り当てます。
6. 「OK」 をクリックします。
これで、生成タスクがプロセス・タスクに割り当てられます。

プロセス・タスクからの生成タスクの削除

次の手順は、プロセス・タスクから生成タスクを削除する方法について説明しています。

プロセス・タスクから生成タスクを削除するには、次の手順を実行します。

1. 目的のレスポンス・コードを選択します。
2. 削除する生成タスクを強調表示します。
3. 「Tasks to Generate」領域から「Delete」をクリックします。
これで、生成タスクがプロセス・タスクから削除されます。

「Undo/Recovery」タブ

「Undo/Recovery」タブで可能な作業は次のとおりです。

- 現在のプロセス・タスクが取り消されたときにトリガーされるプロセス・タスクの定義。このプロセス・タスクは取消しタスクと呼ばれます。
- 有効でなくなった取消しタスクのプロセス・タスクからの削除。
- 現在のプロセス・タスクが却下されたときにトリガーされるプロセス・タスクの定義。このタスクをリカバリ・タスクと呼びます。
- プロセス・タスクからのリカバリ・タスクの削除。

たとえば、「Create User」プロセス・タスクが「Cancelled」の場合、「Delete User」取消しタスクがトリガーされます。同様に、「Create User」タスクが「Rejected」の場合、Oracle Identity Manager は「Enable User」リカバリ・タスクをトリガーします。

注意：現在のプロセス・タスクが却下されると、Oracle Identity Manager はプロセス・タスクに割り当てられるあらゆるリカバリ・タスクをトリガーします。「Complete on Recovery」チェック・ボックスを選択すると、生成されたすべてのリカバリ・タスクが完了したときに、現在のプロセス・タスクのステータスを「Rejected」から「Unsuccessfully Completed」に変更します。Oracle Identity Manager は、これによって、他の依存プロセス・タスクをトリガーできます。

次の各項では、現在のプロセス・タスクに取消しタスクやリカバリ・タスクを割り当てる方法、および現在のプロセス・タスクから取消しタスクやリカバリ・タスクを削除する方法を説明します。

取消しタスクのプロセス・タスクへの割当て

次の手順は、プロセス・タスクに取消しタスクを追加する方法について説明しています。

プロセス・タスクに取消しタスクを割り当てるには、次の手順を実行します。

1. 取消しタスクを割り当てるプロセス・タスクの行ヘッダーをダブルクリックします。
Editing Task ウィンドウが表示されます。
2. 「Undo/Recovery」タブをクリックします。
3. 「Undo Tasks」領域で、「Assign」をクリックします。
Assignment ウィンドウが表示されます。
4. このウィンドウから、取消しタスクを選択し、プロセス・タスクに割り当てます。
5. 「OK」をクリックします。これで、取消しタスクがプロセス・タスクに割り当てられます。

プロセス・タスクからの取消しタスクの削除

次の手順は、プロセス・タスクから取消しタスクを削除する方法について説明しています。

プロセス・タスクから取消しタスクを削除するには、次の手順を実行します。

1. 削除する取消しタスクを強調表示します。
2. 「Undo Tasks」領域から「Delete」をクリックします。
取消しタスクがプロセス・タスクから削除されます。

リカバリ・タスクのプロセス・タスクへの割当て

次の手順は、プロセス・タスクにリカバリ・タスクを追加する方法について説明しています。

プロセス・タスクにリカバリ・タスクを割り当てるには、次の手順を実行します。

1. リカバリ・タスクを割り当てるプロセス・タスクの行ヘッダーをダブルクリックします。
Editing Task ウィンドウが表示されます。
2. 「Undo/Recovery」タブをクリックします。
3. 「Recovery Tasks」領域から「Assign」をクリックします。
Assignment ウィンドウが表示されます。
4. このウィンドウから、リカバリ・タスクを選択し、プロセス・タスクに割り当てます。
5. 「OK」をクリックします。
これで、リカバリ・タスクがプロセス・タスクに割り当てられます。
6. (オプション) 生成されたすべてのリカバリ・タスクが完了したときに、Oracle Identity Manager が、現在のプロセス・タスクのステータスを「Rejected」から「Unsuccessfully Completed」に変更するようにする場合は、「Complete on Recovery」チェック・ボックスを選択します。
それ以外の場合は、このチェック・ボックスを空欄のままにしておきます。

プロセス・タスクからのリカバリ・タスクの削除

次の手順は、プロセス・タスクからリカバリ・タスクを削除する方法について説明しています。

プロセス・タスクからリカバリ・タスクを削除するには、次の手順を実行します。

1. 削除するリカバリ・タスクを強調表示します。
2. 「Recovery Tasks」領域から「Delete」をクリックします。
リカバリ・タスクがプロセス・タスクから削除されます。

「Notification」 タブ

このタブは、現在のプロセス・タスクが特定のステータスになったときに生成される電子メール通知を指定するために使用します。タスクが取り得る各ステータスに対して、別々の電子メール通知を生成できます。電子メール通知が有効でなくなったら、「Notification」タブから削除できます。

たとえば、「Create User」プロセス・タスクのステータスが「Completed」になると、Oracle Identity Manager は、リソースをプロビジョニングされているユーザーに対して電子メール通知「Process Task Completed」を送信します。「Create User」プロセス・タスクが却下されると、電子メール通知「Process Task Completed」が、ユーザーとその管理者に送信されます。

注意： Oracle Identity Manager が電子メール通知をユーザーに送信できるのは、「Email Definition」フォームを使用して電子メール・メッセージのテンプレートを先に作成しておいた場合のみです。

詳細は、7-2 ページの「[Email Definition](#) フォーム」を参照してください。

次の各項では、プロセス・タスクに電子メール通知を割り当てる方法と、プロセス・タスクから電子メール通知を削除する方法を説明します。

電子メール通知のプロセス・タスクへの割当て

次の手順は、プロセス・タスクに電子メール通知を追加する方法について説明しています。

プロセス・タスクに電子メール通知を割り当てるには、次の手順を実行します。

1. 電子メール通知を割り当てるプロセス・タスクの行ヘッダーをダブルクリックします。

「Editing Task」ダイアログ・ボックスが表示されます。

2. 「Notification」タブをクリックします。

3. 「Assign」をクリックします。

「Assignment」ダイアログ・ボックスが表示されます。

4. このウィンドウから、使用する電子メール・テンプレート定義を選択し、プロセス・タスクに割り当てます。

5. 「OK」をクリックします。

電子メール通知の名前が「Notification」タブに表示されます。

6. 「Status」参照フィールドをダブルクリックします。

表示される Lookup ウィンドウから、完了ステータス・レベルを選択します。プロセス・タスクがそのステータス・レベルに達すると、Oracle Identity Manager は、関連付けられている電子メール通知を送信します。

7. 電子メール通知を受信するユーザーを表すチェック・ボックスを選択します。

現在、電子メール通知は、次のユーザーに送信できます。

- **Assignee.** このユーザーは、関連付けられているプロセス・タスクの完了を担当します。
- **Requester.** このユーザーは、対応するプロセス・タスクが含まれるプロセスをリクエストしました。
- **User.** 関連付けられているプロセス・タスクが「Completed」になると、このユーザーはリソースにプロビジョニングされます。
- **User's Manager.** このユーザーはユーザーの監督者で、対応するプロセス・タスクが「Completed」になると、リソースにプロビジョニングされます。

8. 「Save」をクリックします。

これで、電子メール通知がプロセス・タスクに割り当てられます。

プロセス・タスクからの電子メール通知の削除

次の手順は、プロセス・タスクから電子メール通知を削除する方法について説明しています。

プロセス・タスクから電子メール通知を削除するには、次の手順を実行します。

1. 削除する電子メール通知を強調表示します。
2. 「Delete」をクリックします。

電子メール通知がプロセス・タスクから削除されます。

「Task to Object Status Mapping」 タブ

リソース・オブジェクトには、リソースをユーザーやアプリケーションにプロビジョニングするために使用されたデータが含まれます。このデータには、承認プロセスとプロビジョニング・プロセスが含まれます。

また、リソース・オブジェクトには、事前定義されたプロビジョニング・ステータスが提供されます。リソース・オブジェクトはターゲットのユーザーまたは組織にプロビジョニングされているため、このステータスは、ライフサイクルを通じて各種のステータスを表します。

「Resource Objects」 フォームの「Currently Provisioned」タブにアクセスすることによって、そのリソース・オブジェクトのプロビジョニング・ステータスをいつでも表示できます。これらの値は「Users」および「Organizations」 フォームの「Object Process Console」タブにも表示されます。

注意： プロビジョニング・ステータスは、「Resource Objects」 フォームの「Status Definition」タブで定義されています。

リソース・オブジェクトのプロビジョニング・ステータスは、関連付けられている承認プロセスやプロビジョニング・プロセスと、それらのプロセスを含むタスクのステータスによって決まります。このため、プロセス・タスクのステータスと、それが割り当てられているリソース・オブジェクトのプロビジョニング・ステータスの間にリンクを提供する必要があります。

「Task to Object Status Mapping」タブは、このリンクを作成するために使用されます。また、この接続が関連性を失ったり、プロセス・タスクを、リソース・オブジェクトの別のプロビジョニング・ステータスに関連付けたりする場合は、その時点で存在するリンクを解除する必要があります。

この例では、プロセス・タスクのステータスとリソース・オブジェクトのプロビジョニング・ステータスの間に5つのマッピングがあります。「Create User」プロセス・タスクのステータスが「Completed」になると、関連付けられているリソース・オブジェクトには「Provisioned」というプロビジョニング・ステータスが割り当てられます。ただし、このタスクが取り消されると、そのリソース・オブジェクトのプロビジョニング・ステータスは「Revoked」になります。「None」は、プロセス・タスクがそのステータスに達しても、リソース・オブジェクトのプロビジョニング・ステータスに何の影響もないことを示しています。

次の各項では、プロビジョニング・ステータスにプロセス・タスク・ステータスをマッピングする方法と、プロビジョニング・ステータスからプロセス・タスク・ステータスのマッピングを解除する方法を説明します。

プロビジョニング・ステータスへのプロセス・タスク・ステータスのマッピング

次の手順は、プロビジョニング・ステータスにプロセス・タスク・ステータスをマッピングする方法について説明しています。

プロセス・タスク・ステータスをプロビジョニング・ステータスにマッピングするには、次の手順を実行します。

1. リソース・オブジェクトのプロビジョニング・ステータスにマッピングするステータスがあるプロセス・タスクの行ヘッダーをダブルクリックします。
Editing Task ウィンドウが表示されます。
2. 「Task to Object Status Mapping」 タブをクリックします。
3. 対象のプロセス・タスク・ステータスを強調表示します。
4. 「Object Status」 参照フィールドをダブルクリックします。
表示される Lookup ウィンドウから、プロセス・タスク・ステータスをマッピングするリソース・オブジェクトのプロビジョニング・ステータスを選択します。
5. 「OK」 をクリックします。
選択したプロビジョニング・ステータスが、「Task to Object Status Mapping」 タブに表示されます。
6. 「Save」 をクリックします。
プロセス・タスク・ステータスがプロビジョニング・ステータスにマッピングされました。

プロビジョニング・ステータスからのプロセス・タスク・ステータスのマッピング解除

次の手順は、プロビジョニング・ステータスからプロセス・タスク・ステータスのマッピングを解除する方法について説明しています。

プロビジョニング・ステータスからプロセス・タスク・ステータスのマッピングを解除するには、次の手順を実行します。

1. 対象のプロセス・タスク・ステータスを強調表示します。
2. 「Object Status」 参照フィールドをダブルクリックします。
表示される Lookup ウィンドウから、「None」 を選択します。「None」 は、プロセス・タスクがそのステータスに達しても、リソース・オブジェクトのプロビジョニング・ステータスに何の影響もないことを示しています。
3. 「OK」 をクリックします。
プロビジョニング・ステータス「None」 が、「Task to Object Status Mapping」 タブに表示されます。
4. 「Save」 をクリックします。
プロセス・タスク・ステータスの、プロビジョニング・ステータスへのマッピングが解除されました。

Editing Task ウィンドウの「Assignment」 タブ

このタブは、現在のプロセス・タスクの割当てルールを指定するために使用されます。ルールは、プロセス・タスクの割当て方法を定めます。

注意： 多くの場合、タスク割当てルールは承認プロセスのタスクに関連付けられません。これらのタスクは通常、手動で完了されるためです。その一方、プロビジョニング・プロセスに所属するタスクは、通常、自動化されています。結果的に、タスク割当てルールは必要とされません。

たとえば、プロセスに「**Create User**」プロセス・タスクが挿入された場合、優先順位の値が1である **Solaris Process Tasks - User** ルールが評価されます。そのルールの基準が満たされると、タスクは **RLAVA** という名前のユーザーに割り当てられ、600,000 ミリ秒（10 分）後にエスカレーションされるようにマークが付けられます。

Solaris Process Tasks - User ルールの基準が満たされない場合、**Oracle Identity Manager** は **Solaris Process Tasks - Group** ルールの基準を評価します。そのルールの基準が満たされると、タスクは **SYSTEM ADMINISTRATORS** ユーザー・グループに割り当てられ、10 分後にエスカレーションされるようにマークが付けられます。

注意： プロセス・タスクに割り当てられることができるのは、分類タイプが「**Task Assignment**」のルールのみです。ルールの分類タイプ指定の詳細は、6-6 ページの「**Rule Designer**」フォームを参照してください。さらに、**Oracle Identity Manager** には事前定義のデフォルト・ルールがあります。このルールは常に **true** と評価されます。このため、他のルールがすべて失敗しても、少なくとも1つの事前定義のタスク割当てが実行されることを保証する安全策として使用できます。

ルールと、そのプロセス・タスクとの関係を再確認した後、「Assignment」タブのデータ・フィールドについて説明します。次の表は、このタブのフィールドについて説明しています。

フィールド名	説明
Rule	評価するタスク割当てルールの名前。
Target Type	<p>現在のプロセス・タスクの完了を担当するユーザーまたはユーザー・グループの分類タイプ。現在、プロセス・タスクの可能な割当て先は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ User。Oracle Identity Manager のユーザー。 ■ Group。ユーザー・グループ。 ■ Group User with Highest Priority。最も高い優先順位番号を指定されたユーザー・グループのメンバー。 ■ Group User with Least Load。メンバーに割り当てられるプロセス・タスクの数を最も少なく指定されたユーザー・グループのメンバー。 ■ Request Target User's Manager。リソースをプロビジョニングされている、ユーザーの監督者。 ■ Object Authorizer User with Highest Priority。最も高い優先順位番号を持つユーザー・グループ（リソースの「Object Authorizer」ユーザー・グループに指名されているグループ）のメンバー。 ■ Object Authorizer User with Least Load。メンバーに割り当てられるプロセス・タスクの数が最も少ないユーザー・グループ（リソースの「Object Authorizer」ユーザー・グループに指名されているグループ）のメンバー。 ■ Object Administrator。関連付けられているリソース・オブジェクトの管理者と定義されているユーザー・グループ。 ■ Object Administrator User with Least Load。メンバーに割り当てられるプロセス・タスクの数が最も少ないユーザー・グループ（「Object Administrator」ユーザー・グループに指名されているグループ）のメンバー。 <p>注意：「Object Authorizer」および「Object Administrator」ユーザー・グループは、それぞれ「Resource Objects」フォームの「Object Authorizers」および「Administrators」タブで定義されています。</p>
Adapter	アダプタの名前。すべての既存のアダプタのための参照フォームを入力するには、このフィールドをダブルクリックします。
Adapter Status	アダプタのステータス。
Group	現在のプロセス・タスクが割り当てられているユーザー・グループ。
User	現在のプロセス・タスクが割り当てられているユーザー。
Email Unmentioned Email	「Email Name」参照フィールドから電子メール通知を選択し、「Send Email」チェック・ボックスを選択することにより、現在のプロセス・タスクが割り当てられると、Oracle Identity Manager はユーザーまたはユーザー・グループに電子メール通知を送信します。
Escalation Time	Oracle Identity Manager がトリガーするルールに関連付けられている、ユーザーまたはユーザー・グループがプロセス・タスクを完了する必要がある時間の長さ（単位はミリ秒）。このプロセス・タスクが割り当てられた時間内に完了しなかった場合、Oracle Identity Manager により、別のユーザーまたはユーザー・グループに再割当てされます。エスカレーション・ルールは、ターゲット・タイプ・パラメータで定義された順序を厳守します。
Priority	現在のプロセス・タスクに関連付けられているルールの優先順位番号。この番号は、Oracle Identity Manager がルールを評価する順序を示します。

次の各項では、プロセス・タスクへのタスク割当てルールの追加と、プロセス・タスクからそれを削除する方法を説明します。

プロセス・タスクへのルールの追加

次の手順は、プロセス・タスクにルールを追加する方法について説明しています。

プロセス・タスクにルールを追加するには、次の手順を実行します。

1. ルールを追加するタスクの行ヘッダーをダブルクリックします。
Editing Task ウィンドウが表示されます。
2. 「Assignment」 タブをクリックします。
3. 「Add」 をクリックします。
「Assignment」 タブに空行が表示されます。
4. 「Rule」 参照フィールドをダブルクリックします。
表示される Lookup ウィンドウから、プロセス・タスクに追加するルールを選択します。「OK」 をクリックします。
5. 「Target Type」 参照フィールドをダブルクリックします。
表示される Lookup ウィンドウから、プロセス・タスクの完了を担当するユーザーまたはユーザー・グループの分類タイプ (**User**、**Group**、**Group User with Highest Priority**、**Group User with Least Load**、**Request Target User's Manager**、**Object Authorizer User with Highest Priority**、**Object Authorizer User with Least Load**、**Object Administrator**、**Object Administrator User with Least Load**) を選択します。「OK」 をクリックします。
6. 「Group」 参照フィールドをダブルクリックします。
表示される Lookup ウィンドウから、プロセス・タスクの完了を担当するユーザー・グループを選択します。この設定が必要なのは、「Target Type」 フィールドで「Group」、**「Group User with Highest Priority」** または **「Group User with Least Load」** を選択した場合のみです。「OK」 をクリックします。

または
「User」 参照フィールドをダブルクリックします。表示される Lookup ウィンドウから、プロセス・タスクの完了を担当するユーザーを選択します。この設定が必要なのは、「Target Type」 フィールドで「User」を選択した場合のみです。「OK」 をクリックします。
7. 「Email Name」 フィールドをダブルクリックします。
表示される Lookup ウィンドウから、タスクが割り当てられたときに、対応するユーザーまたはユーザー・グループに送信される電子メール通知を選択します。「OK」 をクリックします。続いて、「Send Email」 チェック・ボックスを選択します。

タスクが割り当てられたときに Oracle Identity Manager が電子メール通知を送信するように設定しない場合は、手順 8 に進みます。
8. 「Escalation Time」 フィールドに、選択されたユーザーまたはユーザー・グループがプロセス・タスクを完了するための時間を入力します (単位はミリ秒)。

プロセス・タスクに追加するルールに時間制限を関連付けない場合は、「Escalation Time」 フィールドを空欄のままにして、手順 10 に進みます。
9. 「Priority」 フィールドに、プロセス・タスクに追加するルールの優先順位番号を入力します。
10. 「Save」 をクリックします。
ルールがプロセス・タスクに追加されました。

プロセス・タスクからのルールの削除

次の手順は、プロセス・タスクからルールを削除する方法について説明しています。

プロセス・タスクからルールを削除するには、次の手順を実行します。

1. 削除するルールを強調表示します。
2. 「Delete」をクリックします。

ルールがプロセス・タスクから削除されます。

Design Console を使用した Oracle Identity Manager の管理

この章では、Design Console を使用して Oracle Identity Manager を管理する方法について説明します。次の内容について説明します。

- 概要
- 「Form Information」 フォーム
- 「Lookup Definition」 フォーム
- 「User Defined Field Definition」 フォーム
- 「System Configuration」 フォーム
- 「Remote Manager」 フォーム
- 「Password Policies」 フォーム
- 「Task Scheduler」 フォーム

概要

Design Console の「Administration」フォルダには、システム管理者が Oracle Identity Manager 管理機能を管理するためのツールがあります。このフォルダには次のフォームがあります。

- **Form Information:** このフォームは、特定の Oracle Identity Manager フォームと関連付けるクラス名、フォーム・ラベル、フォーム・タイプ、メニュー項目、グラフィック・アイコンおよびオンライン・ヘルプ・トピックを指定するために使用します。
また、このフォームを使用して、Design Console エクスプローラに表示されるフォルダおよびフォルダ項目を変更することもできます。
- **Lookup Definition:** このフォームは、参照定義を作成および管理するために使用します。参照定義は、参照フィールドと、その参照フィールドからアクセスできる値を表します。
- **User Defined Field Definition:** このフォームは、ユーザー定義フィールドを作成および管理するために使用します。
ユーザー定義フィールドを使用すると、Design Console フォームの追加情報を格納できます。
- **System Configuration:** このフォームは、クライアントまたはサーバー（あるいはその両方）の動作を制御するプロパティの値を定義および設定するために使用します。
プロパティ値を適用するユーザーとユーザー・グループを指定することも、値をすべてのユーザーに適用するように指定することもできます。
- **Remote Manager:** このフォームは、Oracle Identity Manager がサード・パーティのプログラムとの通信に使用するサーバーの情報を表示するために使用します。
これらのサーバーはリモート・マネージャと呼ばれます。
- **Task Scheduler:** このフォームは、どのような場合にスケジュール済タスクを実行するかを決定するスケジュールを設定するために使用します。

「Form Information」フォーム

図 8-1 に示す「Form Information」フォームは、Design Console の「Administration」フォルダにあります。このフォームは、クラス名、Design Console エクスプローラに表示するラベル、フォーム・タイプ、フォーム・アイコン、および Oracle Identity Manager フォームに関連付けるヘルプを指定するために使用します。また、このフォームを使用して、Design Console エクスプローラに表示されるフォルダおよびフォルダ項目を変更することもできます。

図 8-1 「Form Information」フォーム

次の表は、このフォームのデータ・フィールドについて説明しています。

フィールド名	説明
Key	フォームまたはフォルダのシステム生成 ID。
Class Name	フォームまたはフォルダに関連付けられたクラス名。Oracle Identity Manager とともに事前インストールされているフォームおよびフォルダの場合、これは Thor クラスになります。
Description	Oracle Identity Manager エクスプローラで表示される、このフォームまたはフォルダのラベル。「childform」タイプのフォームの場合、この値は親フォームの名前を含み、<parent_form_name>.<child_form_name> というネーミング規則に準じている必要があります。
Type	フォームまたはフォルダに関連付けられたフォーム・タイプ。フォルダの場合、これは「folder」である必要があります。選択できる値は、 folder 、 export 、 processform 、 childform 、 javaform 、 import または menuitem です。
Graphic Filename	Design Console エクスプローラでフォームまたはフォルダの横のアイコンとして表示されるグラフィック・ファイルの名前。
Context Sensitive Help URL	このフォームがアクティブになっているときにユーザーが [F1] を押すと表示される、オンライン・ヘルプ・トピックの URL。

Oracle Identity Manager のフォームまたはフォルダの追加

次の手順は、フォームまたはフォルダを追加する方法について説明しています。

Oracle Identity Manager のフォームまたはフォルダを追加するには、次の手順を実行します。

1. 「Form Information」 フォームにアクセスします。
2. 「Class Name」 フィールドに、フォームのレンダリングに使用するクラスの名前を入力します。
3. 「Description」 フィールドに、Design Console エクスプローラに表示するフォームまたはフォルダ用のラベルを入力します。

タイプが「childform」のフォームの場合、この値は親フォームの名前を含み、<parent_form_name>.<child_form_name> というネーミング規則に準じている必要があります。

4. 「Type」 ボックスから目的の項目を選択します。
 - フォルダの場合は、「folder」を選択します。
 - エクスポート手順に関連するフォームの場合は、「export」を選択します。
 - プロセスに関連するフォームの場合は、「processform」を選択します。
 - 他のフォームに表示されるタブ、または他のフォーム内にネストされたフォームの場合は、「childform」を選択します。
 - 汎用フォームの場合は、「javaform」を選択します。
 - インポート手順に関連するフォームの場合は、「import」を選択します。
 - Oracle Identity Manager 管理およびユーザー・コンソールに関連付けられたメニュー項目の場合は、「menuitem」を選択します。

ヒント： Oracle Identity Manager の管理およびユーザー・コンソールの詳細は、『Oracle Identity Manager 管理およびユーザー・コンソール・ガイド』を参照してください。

5. 「**Graphic Filename**」 フィールドに、**Design Console** エクスプローラでフォームまたはフォルダ用に使用されるアイコンまたはグラフィック・イメージ・ファイルの名前を入力します。
6. 「**Context Sensitive Help URL**」 フィールドに、フォームのオンライン・ヘルプ・トピックの URL を入力します。
フォームがアクティブになっているときにユーザーが **[F1]** を押すと、このファイルが表示されます。
7. 「**Save**」 をクリックします。
フォームが追加され、「**Key**」 フィールドにフォームまたはフォルダ用のシステム生成 ID が表示されます。

Design Console エクスプローラの変更

Design Console エクスプローラと、そのフォルダおよびフォルダ項目のレイアウトは、様々なユーザー・グループ・レベルに基づいて変更できます。

注意： フォルダを開いてフォルダ項目を表示する場合はプラス記号 (+) をクリックし、フォルダ項目を非表示にする場合はマイナス記号 (-) をクリックします。

ユーザーがアクセスできるフォルダおよびフォルダ項目は、そのユーザーがメンバーとなっているユーザー・グループに基づいています。たとえば、**IT DEPARTMENT** というユーザー・グループは「**System Configuration**」フォームを開くことができ、**HR DEPARTMENT** というユーザー・グループは「**Lookup Definition**」フォームを起動できるとします。この両方のユーザー・グループに属しているユーザーは、「**System Configuration**」フォームと「**Lookup Definition**」フォームにアクセスできます。

「Lookup Definition」 フォーム

参照定義は次のいずれかを表します。

- テキスト・フィールドの名前と説明
- 参照フィールドと、その参照フィールドをダブルクリックすることによってアクセス可能な値
- ボックスと、そのボックスから選択可能なコマンド

これらの項目は参照値と呼ばれ、テキスト・フィールド、参照フィールドまたはボックスに関連する情報を含みます。ユーザーは、次の 2 つのいずれかの場所から参照定義にアクセスできます。

- Oracle Identity Manager とともにパッケージ化されているフォームまたはタブ
- 「**Form Designer**」 フォームを使用して作成されたユーザー作成フォームまたはタブ

図 8-2 に示す「Lookup Definition」フォームは、Design Console の「Administration」フォルダにあります。このフォームは、参照定義を作成および管理するために使用します。

図 8-2 「Lookup Definition」 フォーム

次の表は、「Lookup Definition」フォームのデータ・フィールドについて説明しています。

フィールド名	説明
Code	参照定義の名前。
Field	テキスト・フィールド、参照フィールドまたはボックス・フィールドにアクセスできるフォームまたはタブの表の列名。
Lookup Type/Field Type	<p>これらのラジオ・ボタンは、参照定義がテキスト・フィールド、参照フィールドまたはボックスのいずれを表すかを指定します。</p> <p>「Field Type」ラジオ・ボタンを選択した場合、参照定義はテキスト・フィールドを表します。</p> <p>「Lookup Type」ラジオ・ボタンを選択した場合、参照定義は参照フィールドまたはボックスのいずれかを表し、さらにその参照フィールドまたはボックスからアクセス可能な値を表します。</p> <p>注意: Oracle Identity Manager とともにパッケージ化されているフォームまたはタブの場合、参照定義は参照フィールドまたはボックスのいずれかとしてすでに設定されています。これを変更することはできません。ただし、参照フィールドまたはボックスからアクセスできる値を追加または変更することはできます。</p> <p>ユーザーが定義したフォームまたはタブの場合、ユーザーが「Form Designer」フォームの「Additional Columns」タブを使用して、参照定義が参照フィールドまたはボックスのいずれを表すかを指定します。</p> <p>参照定義のデータ型指定の詳細は、9-6 ページの「Additional Columns」タブを参照してください。</p>
Required	このチェック・ボックスを選択すると、参照定義が必須として指定されます。その結果、その参照定義が表すフィールドまたはボックスにデータが入力されるまで、Oracle Identity Manager では対応するフォームまたはタブの内容の保存が許可されません。
Group	参照定義を表示する Oracle Identity Manager フォームまたはユーザー定義フォームの名前。

次の項では、参照定義を作成する方法について説明します。

参照定義の作成

参照定義を作成するには、次の手順を実行します。

1. 「Lookup Definition」 フォームを開きます。
2. 「Code」 フィールドに、参照定義の名前を入力します。
3. 「Field」 フィールドに、テキスト・フィールド、参照フィールドまたはボックス・フィールドにアクセスできる Oracle Identity Manager またはユーザー作成のフォームまたはタブの表の列名を入力します。
4. 参照定義が参照フィールドまたはボックスを表す場合は、「Lookup Type」 ラジオ・ボタンを選択します。

詳細は、この項の前半に示してある表を参照してください。

参照定義がテキスト・フィールドを表す場合は、「Field Type」 ラジオ・ボタンを選択します。

5. (オプション) 参照定義が表すフィールドまたはボックスにデータが入力されたときのみ、このフォームまたはタブの内容を保存するには、「Required」 チェック・ボックスを選択します。

それ以外の場合は手順 6 に進みます。

6. 「Group」 フィールドに、参照定義を表示する Oracle Identity Manager フォームまたはユーザー定義フォームの名前を入力します。

「Code」、 「Field」 および 「Group」 テキスト・ボックスに入力するテキストは、ネーミング規則に準じている必要があります。

ヒント: ネーミング規則の詳細は、8-4 ページの「[「Lookup Definition」 フォーム](#)」を参照してください。

7. 「Save」 をクリックします。

参照定義が作成されます。関連付けられたテキスト・フィールド、参照フィールドまたはボックスが、指定した Oracle Identity Manager またはユーザー定義のフォームまたはタブに表示されます。

「Lookup Code Information」 タブ

「Lookup Code Information」 タブは、「Lookup Definitio」 フォームの下半分にあります。このタブは、選択した参照定義の詳細情報を作成および管理するために使用します。この情報には、参照定義に関連する値の名前、説明、言語コードおよび国コードが含まれます。これらの項目は**参照値**と呼ばれます。

次の手順は、参照値を作成、変更および削除する方法について説明しています。

参照値の作成と変更

次の手順は、参照値を作成および変更する方法について説明しています。

注意：国際化の目的で、参照値には言語コードと国コードの両方を指定する必要があります。

新しい参照定義を作成する場合は、参照定義を保存してから参照値を追加してください。

参照値を作成または変更するには、次の手順を実行します。

1. 「Lookup Definition」 フォームを開きます。
2. 参照定義にアクセスします。
3. 参照値を作成する場合は、「Add」をクリックします。
「Lookup Code Information」 タブに空白が表示されます。
参照値を変更する場合は、編集する参照値を選択します。
4. 「Code Key」 フィールドで情報を追加または編集します。
このフィールドには参照値の名前が含まれます。
また、「Lookup Type」 ラジオ・ボタンが選択されている場合、このフィールドは、ユーザーが選択を行ったときに参照フィールドまたはボックスに表示される内容も表します。
5. 「Decode」 フィールドで情報を追加または編集します。
このフィールドには参照値の説明が含まれます。
また、「Lookup Type」 ラジオ・ボタンが選択されている場合、このフィールドは次のいずれかも表します。
 - ユーザーが対応する参照フィールドをダブルクリックした後に参照ウィンドウに表示される項目
 - 関連付けられたボックスに表示されるコマンド
6. 「Language」 フィールドで情報を追加または編集します。
このフィールドには、参照値の 2 文字の言語コードが含まれます。
7. 「Country」 フィールドで情報を追加または編集します。
このフィールドには、参照値の 2 文字の国コードが含まれます。
8. 「Save」 をクリックします。
これで、作成または変更した参照値に、入力した設定が反映されます。

参照値の削除

参照値を削除するには、次の手順を実行します。

1. 「Lookup Definition」 フォームを開きます。
2. 参照定義にアクセスします。
3. 削除する参照値を選択します。
4. 「Delete」 をクリックします。選択した参照値が削除されます。

「User Defined Field Definition」 フォーム

デフォルトで Oracle Identity Manager により提供されるフィールドに補足する必要があることがあります。様々な Oracle Identity Manager フォームに対して新しいフィールドを作成したり、追加することができます。これらのフィールドは**ユーザー定義フィールド**と呼ばれます。

ユーザー定義フィールドは、「**Form Name**」データ・フィールドに示されたフォームの「**User Defined Fields**」タブに表示されます。たとえば、[図 8-3](#) では、「Organizations」フォームの「**User Defined Fields**」タブに「**Access Code Number**」ユーザー定義フィールドが追加されています。

[図 8-3](#) に示す「User Defined Field Definition」フォームは、Design Console の「Administration」フォルダにあります。このフォームは、「Organizations」、「Users」、「Requests」、「Resource Objects」、「User Groups」および「Form Designer」フォームのユーザー定義フィールドを作成および管理するために使用します。

図 8-3 「User Defined Field Definition」 フォーム

Form Information								
Form Name	Organizations			<input type="checkbox"/> Auto pre-population				
Description	Organizations - User Defined Fields							
User Defined Columns								
Add								
	1	Access Code Number	String	25	ACT_UDF_ACN	1	TextField	0
Delete								

次の表は、「User Defined Field Definition」フォームのデータ・フィールドについて説明しています。

フィールド名	説明
Form Name	ユーザー定義フィールドを含むフォームの名前。これらのフィールドは、「 User Defined Columns 」タブに表示されます。 重要: ユーザーのユーザー定義フィールドはユーザーのプロファイル情報に関連しているため、「 Users 」フォームの「 User Profile 」タブに表示されます。
Description	ユーザー定義フィールドに関する追加情報。
Auto Pre-Population	このチェック・ボックスは、事前移入アダプタがアタッチされたフォームのユーザー定義フィールドが Oracle Identity Manager とユーザーのどちらによって移入されるかを指定します。 これらのフィールドを Oracle Identity Manager によって移入する場合は、「 Auto Pre-Population 」チェック・ボックスを選択します。 これらのフィールドを、ユーザーがツールバーの「 Pre-Populate 」ボタンをクリックするか、手動でデータを入力することによって移入する場合は、このチェック・ボックスの選択を解除します。 重要: この設定は、事前移入アダプタのトリガーを制御しません。関連付けられたユーザー定義フィールドにアダプタの実行により得られる内容を表示するのが、Oracle Identity Manager とユーザーのどちらであるかを指定するのみです。 事前移入アダプタの詳細は、『Oracle Identity Manager Tools リファレンス・ガイド』を参照してください。 注意: このチェック・ボックスは、ユーザー定義フィールドを作成し、そのフィールドに事前移入アダプタが関連付けられている場合にのみ有効です。

次の項では、ユーザー定義フィールドのターゲット・フォームを選択する方法について説明します。

ユーザー定義フィールドのターゲット・フォームの選択

次の手順は、ユーザー定義フィールドのターゲット・フォームを選択する方法について説明しています。

ユーザー定義フィールドのターゲット・フォームを選択するには、次の手順を実行します。

1. 「User Defined Field Definition」 フォームを開きます。
2. 「Form Name」 参照フィールドをダブルクリックします。
表示される Lookup ウィンドウから、作成するユーザー定義フィールドが表示される Oracle Identity Manager フォーム（「Organizational Defaults」、「Policy History」、「Group Entitlements」、「Resource Objects」または「Form Designer」）を選択します。
3. 「Query」 をクリックします。
ユーザー定義フィールドの追加先のフォームが選択されます。

「User Defined Field Definition」 フォームのタブ

「User Defined Field Definition」 フォームを起動し、ユーザー定義フィールドのターゲット・フォームを選択すると、このフォームのタブが有効になります。

「User Defined Field Definition」 フォームには次のタブが含まれます。

- 「User Defined Columns」 タブ
- 「Properties」 タブ
- 「Administrators」 タブ

これらのタブについては、以降の項でそれぞれ詳しく説明します。

「User Defined Columns」 タブ

このタブは、次のことを行うために使用します。

- ユーザー定義フィールドを作成します。
- ユーザー定義フィールドの変数タイプ、長さおよびフィールド・タイプを設定します。
- ターゲット・フォームの「User Defined Fields」 タブに表示されるユーザー定義フィールドの順序を指定します。
フィールドの順序番号によって、ユーザー定義フィールドがフォームに表示される順序が決まります。図 8-4 では、「Access Code Number」ユーザー定義フィールドの順序番号が 1 なので、「Organizations」フォームの「User Defined Fields」タブにはこのフィールドが最初に表示されます。
- ユーザー定義フィールドに関連付けられた情報をクライアントとサーバー間で交換するときに暗号化するかどうかを指定します。
- ユーザー定義フィールドを削除します。

図 8-4 は、「User Defined Field Definition」フォームの「User Defined Columns」タブを示しています。

図 8-4 「User Defined Field Definition」フォームの「User Defined Columns」タブ

The screenshot shows the 'User Defined Field Definition' form with the 'User Defined Columns' tab selected. The 'Form Information' section at the top shows 'Form Name' as 'Organizations' and 'Description' as 'Organizations - User Defined Fields'. Below this is a table with columns: Label, Variant Type, Length, Column Name, Order, Field Type, and Encrypted. One row is visible with the following values: 1, Access Code Number, String, 25, ACT_UDF_ACN, 1, TextField, 0. There are 'Add' and 'Delete' buttons to the left of the table. The 'User Defined Columns' tab is highlighted, and other tabs like 'Properties' and 'Administrators' are visible.

	Label	Variant Type	Length	Column Name	Order	Field Type	Encrypted
1	Access Code Number	String	25	ACT_UDF_ACN	1	TextField	0

次の項では、Oracle Identity Manager フォームにユーザー定義フィールドを追加する方法と、Oracle Identity Manager フォームからユーザー定義フィールドを削除する方法について説明します。

Oracle Identity Manager フォームへのユーザー定義フィールドの追加

次の手順は、フォームにユーザー定義フィールドを追加する方法について説明しています。

ユーザー定義フィールドを追加するには、次の手順を実行します。

1. 「Add」をクリックします。

図 8-5 に示すように、「User Defined Fields」ダイアログ・ボックスが表示されます。

図 8-5 「User Defined Fields」ダイアログ・ボックス

The screenshot shows the 'User Defined Fields' dialog box. It has a title bar with the text 'User Defined Fields' and standard window controls. Below the title bar is a toolbar with icons for back, forward, save, print, refresh, delete, and close. The main area is titled 'User Defined Fields' and contains several input fields: 'Label' (text box), 'DataType' (dropdown menu), 'Field Size' (text box), 'Field Type' (dropdown menu), 'Column Name' (text box), 'Default Value' (text box), 'Encrypted' (checkbox), and 'Sequence' (text box with the value '2').

フィールド名	説明
Label	<p>ユーザー定義フィールドのラベル。このラベルは、ターゲット・フォームの「User Defined Fields」タブのユーザー定義フィールドの隣に表示されます。</p> <p>ラベルの最大長は 30 文字です。</p>
Data Type	<p>このボックスで、ユーザー定義フィールドのデータ型を次のうちから 1 つ選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ String。ユーザーはこのフィールドに英数字の文字列を入力できます。 ■ Date。ユーザーがこのフィールドをダブルクリックすると、「Date and Time」ダイアログ・ボックスが表示されます。 ■ Integer。ユーザーは、このユーザー定義フィールドに小数点なしの数字（たとえば、3 など）を入力できます。 ■ Boolean。ユーザーは、このフィールドに「True (1)」または「False (0)」の 2 つの値を入力できます。 ■ Double。ユーザーは、このフィールドに倍精度浮動小数点数（double 数値）を入力できます。
Field Size	<p>「Field Size」テキスト・フィールドは、「String」データ型の場合のみ有効です。</p> <p>このフィールドには、ユーザーがフィールドに入力できる数字または文字の最大数を入力します。</p>
Field Type	<p>このボックスで、ユーザー定義フィールドのフィールド・タイプを次のうちから 1 つ選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Text Field。フィールドは、テキスト・フィールドとしてのターゲット・フォームの「User Defined Fields」タブに表示されます。 ■ Lookup Field。フィールドは、参照フィールドとしてのターゲット・フォームの「User Defined Fields」タブに表示されます。 ■ Combo Box。フィールドは、ボックスとしてのターゲット・フォームの「User Defined Fields」タブに表示されます。 ■ Text Area。フィールドは、テキスト領域としてのターゲット・フォームの「User Defined Fields」タブに表示されます。 ■ Password Field。フィールドは、テキスト・フィールドとしてのターゲット・フォームの「User Defined Fields」タブに表示されます。このテキスト・フィールドから、ユーザーは（一連のアスタリスク [*] として表される）暗号化パスワードを問い合わせるか、フィールドに暗号化パスワードを移入するかして、その暗号化パスワードをデータベースに保存できます。 ■ Check Box。フィールドは、チェック・ボックスとしてのターゲット・フォームの「User Defined Fields」タブに表示されます。 ■ Date Field with Dialog。このフィールドは、参照フィールドとしてのターゲット・フォームの「User Defined Fields」タブに表示されます。ユーザーがこの参照フィールドをダブルクリックすると、Date & Time ウィンドウが表示されます。すると、ユーザーがこのウィンドウから選択した日付と時刻が、Oracle Identity Manager によってデータ・フィールドに移入されます。 <p>注意: このボックスに表示されるフィールド・タイプは、「Data Type」ボックスに表示されているデータ型を反映しています。</p>

フィールド名	説明
Column Name	データベースによって認識されるユーザー定義フィールドの名前。 注意: この名前は、接頭辞 <TABLE NAME_UDF_> と、ユーザー定義フィールドに関連付けられたラベルで構成されます。 たとえば、「Organizations」フォームの「Table Name」フィールドが ACT であり、データ・フィールドの名前が ACN の場合、データベースによって認識されるユーザー定義フィールドの名前は ACT_UDF_ACN になります。 重要: 「Column Name」フィールド内の名前にスペースを含めることはできません。
Default Value	この値は、ターゲット・フォームのユーザー定義フィールドに表示されます。
Encrypted	このチェック・ボックスは、関連付けられたユーザー定義フィールドに表示される情報をクライアントとサーバー間で交換するときに暗号化するかどうかを指定します。 ユーザー定義フィールドに表示される情報を暗号化する場合は、このチェック・ボックスを選択します。 ユーザー定義フィールドに表示される情報を暗号化しない場合は、このチェック・ボックスの選択を解除します。
Sequence	このフィールドは、フォームにユーザー定義フィールドが表示される順序を表します。たとえば、「Sequence」フィールドに 2 が表示されている場合、このフィールドが、1 の順序番号が付いたユーザー定義フィールドの下に表示されます。

2. [図 8-6](#) に示すように、フォームに追加するユーザー定義フィールドのパラメータを設定します。

図 8-6 値が入力された「User Defined Fields」ダイアログ・ボックス

[図 8-6](#) では、「Access Code Number」ユーザー定義フィールドが、「Organizations」フォームの「User Defined Fields」タブの最初に表示されます。このフィールドのデータ型は「String」であり、ユーザーはこのフィールドに最大 25 桁を入力できます。

3. このウィンドウから「Save」をクリックします。
4. 「Close」をクリックします。

ユーザー定義フィールドが、「User Defined Columns」タブに表示されます。ターゲット・フォームが起動されると、通常、このユーザー定義フィールドがそのフォームの「User Defined Fields」タブに表示されます。ユーザーのユーザー定義フィールドはユーザーのプロファイル情報に関連しているため、「Users」フォームの「User Profile」タブに表示されます。

Oracle Identity Manager フォームからのユーザー定義フィールドの削除

次の手順は、ユーザー定義フィールドを削除する方法について説明しています。

ユーザー定義フィールドを削除するには、次の手順を実行します。

1. 目的のユーザー・グループを選択します。
2. 「Delete」をクリックします。

ユーザー定義フィールドが削除されます。

「Properties」タブ

このタブは、様々な Oracle Identity Manager フォームの「User Defined Fields」タブに表示されるデータ・フィールドにプロパティおよびプロパティ値を割り当てるために使用します。

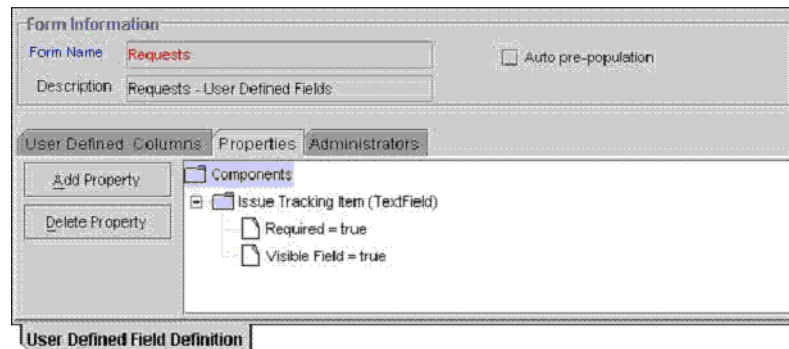
この例では、「Requests form」の「User Defined Fields」タブに、「Issue Tracking Item」という1つのデータ・フィールドが表示されます。このデータ・フィールドには次のプロパティが含まれます。

- **Required:** 「Requests」フォームを保存するためにデータ・フィールドへの移入が必要かどうかを指定します。「Requests」プロパティのデフォルト・プロパティ値は **false** です。
- **Visible Field:** 「Requests」フォームにデータ・フィールドを表示するかどうかを設定します。「Visible Field」プロパティのデフォルト・プロパティ値は **true** です。

このデータ・フィールドでは「Required」プロパティと「Visible Field」プロパティの値は **true** であるため、「Requests」フォームが起動されると、「User Defined Fields」タブに「Issue Tracking Item」データ・フィールドが表示されます。また、フォームを保存するためには、このフィールドにデータを移入する必要があります。

図 8-7 は、「User Defined Field Definition」フォームの「Properties」タブを示しています。

図 8-7 「User Defined Field Definition」フォームの「Properties」タブ



次の項では、データ・フィールドにプロパティおよびプロパティ値を追加する方法と、データ・フィールドからこれらを削除する方法について説明します。

注意: データ・フィールドにプロパティおよびプロパティ値を追加する方法と、データ・フィールドからこれらを削除する方法は、9-3 ページの「[「Form Designer」フォーム](#)」を参照してください。

「Administrators」 タブ

図 8-8 は、「User Defined Field Definition」 フォームの「Administrators」 タブを示しています。

図 8-8 「User Defined Field Definition」 フォームの「Administrators」 タブ

	Group Name	Write	Delete
1	SYSTEM ADMINISTRATORS	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
2	OPERATORS	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

このタブは、「User Defined Field Definition」フォームの現在のレコードに対する管理権限を持つユーザー・グループを指定するために使用します。このフォームの「Write」および「Delete」チェック・ボックスは、これらの管理グループが、現在のユーザー定義フィールド (UDF) 定義に関する情報の変更または削除、あるいはその両方を行えるかどうかを指定します。

次の項では、UDF 定義のユーザー・グループに管理権限を割り当てる方法と、UDF 定義のユーザー・グループから管理権限を削除する方法について説明します。

UDF 定義のユーザー・グループへの管理権限の割当て

次の手順は、UDF 定義のユーザー・グループに管理権限を割り当てる方法について説明しています。

管理権限を割り当てるには、次の手順を実行します。

1. 「Assign」をクリックします。
「Assignment」ダイアログ・ボックスが表示されます。
2. ユーザー・グループを選択して、UDF 定義に割り当てます。
3. 「OK」をクリックします。
ユーザー・グループが「Administrators」タブに表示されます。
4. このユーザー・グループが現在の定義に関する情報を表示および変更できるようにする場合、対応する「Write」チェック・ボックスをダブルクリックします。
それ以外の場合は手順 5 に進みます。
5. このユーザー・グループが現在の定義の情報を削除できるようにする場合、関連付けられている「Delete」チェック・ボックスをダブルクリックします。
それ以外の場合は手順 6 に進みます。
6. 「Save」をクリックします。
ユーザー・グループが UDF 定義に割り当てられます。

UDF 定義のユーザー・グループからの管理権限の削除

次の手順は、UDF 定義のユーザー・グループから管理権限を削除する方法について説明しています。

管理権限を削除するには、次の手順を実行します。

1. 削除するユーザー・グループを強調表示します。
2. 「Delete」をクリックします。

ユーザー・グループが UDF 定義から削除されます。グループのメンバーは、定義に対する管理権限を持たなくなります。

「System Configuration」 フォーム

図 8-9 に示す「System Configuration」フォームは、Design Console の「Administration」フォルダにあります。このフォームは、Oracle Identity Manager の動作を制御するプロパティの値を定義および設定するために使用します。プロパティ値を適用するユーザーとユーザー・グループを指定することも、プロパティ値をすべてのユーザーに適用するように指定することもできます。

図 8-9 「System Configuration」 フォーム

次の表は、このフォームのデータ・フィールドについて説明しています。

フィールド名	説明
Key	プロパティ定義の 1 つのインスタンスのシステム生成 ID。定義のインスタンスが複数存在する場合もあります。たとえば、システム管理者用のインスタンスが 1 つと、すべてのユーザー用のインスタンスが 1 つ存在することがあります。
System	<p>このチェック・ボックスは、プロパティ定義のこのインスタンスを Oracle Identity Manager のすべてのユーザーに適用する（つまり、システムワイドなインスタンスにする）か、選択したユーザーとユーザー・グループにのみ適用するかを指定します。</p> <p>この設定をすべてのユーザーに適用する場合は、このチェック・ボックスを選択します。「Users」タブと「Groups」タブは無効になります。</p> <p>プロパティのインスタンスを特定のユーザーとグループに適用するように指定する場合は、このチェック・ボックスの選択を解除します。</p> <p>注意：（次に示す）「Server」ラジオ・ボタンが選択されている場合、「System」チェック・ボックスは無効になります。</p>

フィールド名	説明
Client Client/Server Server (ラジオ・ボタン)	これらのラジオ・ボタンは、プロパティ定義のこのインスタンスをクライアント、サーバー、その両方のいずれに適用するかを指定します。 クライアントのみにプロパティ値を適用する場合は、「Client」ラジオ・ボタンを選択します。 クライアントとサーバーの両方にプロパティ値を適用する場合は、「Client/Server」ラジオ・ボタンを選択します。 サーバーのみにプロパティ値を適用する場合は、「Server」ラジオ・ボタンを選択します。このオプションを選択すると、「System」チェック・ボックスが無効になります。システムワイドな設定はサーバーに適用されません。
Name	プロパティの名前。これは、プロパティが制御する内容の直観的な説明にする必要があります。一意である必要はありません。
Keyword	プロパティの一意の ID。 これは、このプロパティのインスタンスごとに同じである必要があります。たとえば、「Record Read Limit」プロパティ（ユーザーの間合せて取得できるレコードの最大数）を 2 つの異なるユーザーに対して別々に設定する場合、このプロパティ定義のインスタンスを 2 つ作成する必要があります。 注意： クライアントおよびサーバーに設定できる様々なプロパティの詳細は、A-17 ページの「システム・プロパティ」を参照してください。
Value	プロパティ定義のこのインスタンスの値。インスタンスがすべてのユーザーに適用されることを示す「System」チェック・ボックスが選択されていない場合、この値は、プロパティのこのインスタンスに割り当てられているユーザーおよびグループに適用されます。

次の項では、プロパティ定義のインスタンスを定義する方法、これらのインスタンスにユーザーまたはグループを割り当てる方法、およびこのインスタンスからユーザーまたはグループを削除する方法について説明します。

プロパティ定義のインスタンスの作成と編集

次の手順は、プロパティ定義を作成または編集する方法について説明しています。

プロパティ定義の新しいインスタンスを作成する、または既存のインスタンスを編集するには、次の手順を実行します。

1. 「System Configuration」フォームにアクセスします。
2. プロパティ定義の新しいインスタンスを作成する場合は、ツールバーの「New」をクリックします。

「Name」および「Keyword」フィールドの値が、このプロパティ定義のすべてのインスタンスについて同じであることを確認します（たとえば、「Record Read Limit」、「XL.READ_LIMIT」）。

注意：入力エラーを回避するため、これらの値は、このプロパティ定義の他のインスタンスからコピーすることをお勧めします。

プロパティ定義の既存のインスタンスを編集する場合は、プロパティ定義を問い合わせます。

3. 「Client」、「Client/Server」または「Server」ラジオ・ボタンを選択します。
4. プロパティ定義のこのインスタンスをすべてのユーザーに適用するか、それとも選択したユーザーとユーザー・グループのみに適用するかを、「System」チェック・ボックスを選択または選択解除することによって指定します。

注意：手順 3 で「Server」ラジオ・ボタンを選択した場合、「System」チェック・ボックスは無効になります。この場合は手順 5 に進みます。

5. 「Value」フィールドに目的の値を入力します。
これが、定義のこのインスタンスのプロパティ値になります。
6. 「Save」をクリックします。
プロパティ定義のインスタンスが作成または変更されます。

次の項では、このインスタンスにユーザーおよびグループを割り当てる方法について説明します。

プロパティ定義のインスタンスへのユーザーまたはグループの割当て

次の手順は、プロパティ定義にユーザーまたはグループを割り当てる方法について説明しています。

注意：これがシステムワイドなインスタンスである場合（つまり、「System」チェック・ボックスが選択されている場合）、すべてのユーザーおよびグループに適用されます。このため、インスタンスを特定のユーザーまたはグループに割り当てる必要はありません。

プロパティ定義のインスタンスにユーザーまたはグループを割り当てるには、次の手順を実行します。

1. 「System Configuration」フォームにアクセスします。
2. ユーザーまたはグループに割り当てるプロパティ定義のインスタンスを問い合わせます。

ヒント：ユーザーおよびグループを割り当てることのできる様々なプロパティ定義の詳細は、A-17 ページの「システム・プロパティ」を参照してください。
3. このプロパティ定義のインスタンスの適用先をクライアントのみ、クライアントとサーバーの両方、サーバーのみのいずれにするかに応じて、「Client」、「Client/Server」または「Server」ラジオ・ボタンを選択します。
4. プロパティ・インスタンスを 1 人以上のユーザーに割り当てるには、「Users」タブをクリックします。

あるいは、プロパティ・インスタンスを 1 つ以上のユーザー・グループに割り当てるには、「Groups」タブをクリックします。
5. 「Assign」をクリックします。
「Assignment」ダイアログ・ボックスが表示されます。
6. 目的のユーザーまたはグループを選択して割り当て、「OK」をクリックします。
7. 「Save」をクリックします。

プロパティ定義のインスタンスが、手順 6 で選択したユーザーまたはグループ（あるいはその両方）に割り当てられます。

プロパティ定義のインスタンスからのユーザーまたはグループの削除

プロパティ定義のインスタンスからユーザーまたはグループを削除した場合、そのプロパティとユーザーまたはグループとの関連はなくなります。

プロパティ定義のインスタンスからユーザーまたはグループを削除するには、次の手順を実行します。

1. 「System Configuration」 フォームにアクセスします。
2. ユーザーまたはグループを削除するプロパティ定義のインスタンスを問い合わせます。
3. 目的のユーザーまたはグループを（それぞれ「Users」または「Groups」から）選択します。
4. 「Delete」 をクリックします。

ユーザーまたはグループがプロセス定義のインスタンスから削除されます。

「Remote Manager」 フォーム

Remote Manager は軽量のネットワーク・サーバーで、ネットワークで通信できない API を持つターゲット・システムや、ネットワーク対応であってもセキュアではないターゲット・システムとの統合を可能にします。Remote Manager はターゲット・システム上でサーバーとして動作し、Oracle Identity Manager サーバーはそのクライアントとして動作します。Oracle Identity Manager サーバーは Remote Manager のリクエストを送信して、ターゲット・システム自体でターゲット・システム API をインスタンス化し、ターゲット・システムにかわってメソッドを起動します。

図 8-10 に示す「Remote Manager」フォームは、Design Console の「Administration」フォルダにあります。このフォームには次の情報が表示されます。

- Oracle Identity Manager と通信するリモート・マネージャの名前および IP アドレス
- リモート・マネージャが稼働しているかどうか
- リモート・マネージャが Oracle Identity Manager で使用できる IT リソースを表しているかどうか

図 8-10 「Remote Manager」 フォーム

	Service	Host	Running	IT Resource
1	Australia Server	215.0.255.192	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
2	UKSERVER	192.168.0.45	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

この例では、Oracle Identity Manager と通信できる 2 つのリモート・マネージャ（「Australia Server」と「UKSERVER」）を定義します。

「Australia Server」というリモート・マネージャの IP アドレスは、215.0.255.192 です。このリモート・マネージャは Oracle Identity Manager とハンドシェイクできますが、「Running」チェック・ボックスの選択が解除されているため、リモート・サーバーは停止しています。最後に、「IT Resource」チェック・ボックスが選択されています。これは、このリモート・マネージャが Oracle Identity Manager で使用できる IT リソースを表していることを示します。

「UKSERVER」というリモート・マネージャの IP アドレスは、192.168.0.45 です。「Running」チェック・ボックスが選択されているため、リモート・サーバーは稼働しています。しかし、「IT Resource」チェック・ボックスの選択が解除されているため、このリモート・マネージャは Oracle Identity Manager で使用できる IT リソースを表していません。

注意：「Remote Manager」フォームを他の Oracle Identity Manager フォームとともに使用する方法は、『Oracle Identity Manager Tools リファレンス・ガイド』を参照してください。

「Password Policies」 フォーム

図 8-11 に示す「Password Policies」フォームは、Design Console の「Administration」 / 「Policies」フォルダにあります。このフォームは次の目的に使用できます。

- パスワードの制限を設定します（たとえば、パスワードの最小長と最大長の定義など）。
- パスワード・ポリシーと関連付けられたルールおよびリソース・オブジェクトを参照します。

図 8-11 「Password Policies」 フォーム

次の表は、「Password Policies」フォームのデータ・フィールドについて説明しています。

フィールド名	説明
Policy Name	パスワード・ポリシーの名前
Policy Description	パスワード・ポリシーに関する説明

次の項では、パスワード・ポリシーを作成する方法について説明します。

パスワード・ポリシーの作成

次の手順は、パスワード・ポリシーを作成する方法について説明しています。

注意：パスワード・ポリシーを作成した後は、そのパスワード・ポリシーに基準を指定し、リソースを関連付ける必要があります。パスワード・ポリシーに基準を指定するには、このフォームの「**Policy Rules**」タブを使用します。パスワード・ポリシーをリソースと関連付けるには、「**Resource Object**」フォームの「**Password Policies Rule**」タブを使用して、リソース上でアカウントが作成または更新されたときに評価されるパスワード・ポリシーとルールを組み合わせを作成します。そのルールの基準が満たされると、パスワード・ポリシーが起動されて適用されます。複数のリソースが各パスワード・ポリシーを使用できます。

パスワード・ポリシーを作成するには、次の手順を実行します。

1. 「Password Policies」フォームを開きます。
2. 「Policy Name」フィールドに、パスワード・ポリシー 3 の名前を入力します。
3. 「Policy Description」フィールドに、パスワード・ポリシーに関する説明を入力します。
4. 「Save」をクリックします。

パスワード・ポリシーが作成されます。

「Password Policies」フォームのタブ

「Password Policies」フォームを起動してパスワード・ポリシーを作成すると、このフォームのタブが有効になります。

「Password Policies」フォームには、次のタブが含まれます。

- 「Policy Rules」タブ
- 「Usage」タブ

次の項で、これらのタブについて説明します。

「Policy Rules」タブ

このタブは、パスワード・ポリシーの基準（たとえば、パスワードの最小長と最大長）を指定するために使用します。

パスワードの制限を設定するには、次のいずれか（または両方）の方法を使用できます。

- 適切なテキスト・ボックスに情報を入力するか、目的のチェック・ボックスを選択します。たとえば、パスワードの最小長を 4 文字にする必要があることを指定する場合は、「**Minimum Length**」テキスト・ボックスに 4 を入力します。あるいは、Oracle Identity Manager でユーザーの名前を有効なパスワードとして受け入れないようにする場合は、「**Disallow First Name**」チェック・ボックスを選択します。
- 「**Password File**」テキスト・ボックスに、パスとファイル名（たとえば、`c:\xellerate\userlimits.txt`）を入力します。このファイルには、パスワードとして許可されない事前定義の語が含まれています。これらの語は、「**Password File Delimiter**」フィールド内に指定されたデリミタによって区切られます。

図 8-12 は、「Password Policies」フォームの「Policy Rules」タブを示しています。

図 8-12 「Password Policies」フォームの「Policy Rules」タブ

次の項では、「Policy Rules」タブのデータ・フィールドについて説明します。これらは、パスワード制限を指定するフィールドです。

次の表は、「Policy Rules」タブのデータ・フィールドについて説明しています。

注意： データ・フィールドが空の場合、パスワードが有効になるためにそのフィールドの基準を満たす必要はありません。たとえば、「**Minimum Numeric Characters**」および「**Maximum Numeric Characters**」データ・フィールドが空の場合、Oracle Identity Manager では、パスワードの桁数にかかわらずパスワードが受け入れられます。

フィールド名	説明
Minimum Length	パスワードが有効になるための最小文字数。 たとえば、「 Minimum Length 」テキスト・ボックスに 4 を入力した場合、パスワードが受け入れられるためには 4 文字以上である必要があります。
Maximum Length	パスワードが有効になるための最大文字数。 たとえば、「 Maximum Length 」テキスト・ボックスに 8 を入力した場合、 9 文字以上のパスワードは受け入れられません。
Minimum Alphabet Characters	パスワードが有効になるための最小文字数。 たとえば、「 Minimum Alphabet Characters 」テキスト・ボックスに 2 を入力した場合、 2 字未満のパスワードは受け入れられません。
Minimum Numeric Characters	パスワードが有効になるための最小桁数。 たとえば、「 Minimum Numeric Characters 」テキスト・ボックスに 1 を入力した場合、パスワードには少なくとも 1 つの数字が含まれる必要があります。

フィールド名	説明
Minimum Alphanumeric Characters	パスワードが有効になるための字または桁の最小数。 たとえば、「Minimum Alphanumeric Characters」テキスト・ボックスに 6 を入力した場合、パスワードには少なくとも 6 つの字または数字が含まれる必要があります。
Minimum Special Characters	パスワードが有効になるための英数字以外の文字（たとえば、#、%、& など）の最小数。 たとえば、「Minimum Special Characters」テキスト・ボックスに 1 を入力した場合、パスワードには英数字以外の文字が少なくとも 1 つ含まれる必要があります。
Maximum Special Characters	パスワードが有効になるための英数字以外の文字の最大数。 たとえば、「Maximum Special Characters」テキスト・ボックスに 3 を入力した場合、英数字以外の文字が 4 つ以上含まれるパスワードは受け入れられません。
Maximum Repeated Characters	パスワードが有効になるための重複文字の最大数。 たとえば、「Maximum Repeated Characters」テキスト・ボックスに 2 を入力した場合、3 つ以上の文字が繰り返されているパスワードは受け入れられません。たとえば、 RL112211 は、パスワードの 3 文字が繰り返されているため無効です。
Minimum Unique Characters	パスワードが有効になるための非重複文字の最小数。 たとえば、「Minimum Unique Characters」テキスト・ボックスに 1 を入力した場合、すべての文字が 1 回以上繰り返されているパスワードは受け入れられません。たとえば、 1a23a321 は、パスワードの各文字が繰り返されているため無効です。
Minimum Uppercase Characters	パスワードが有効になるための大文字の最小数。 たとえば、「Minimum Uppercase Characters」テキスト・ボックスに 8 を入力した場合、大文字が 8 文字未満のパスワードは受け入れられません。
Minimum Lowercase Characters	パスワードが有効になるための小文字の最小数。 たとえば、「Minimum Lowercase Characters」テキスト・ボックスに 8 を入力した場合、小文字が 8 文字未満のパスワードは受け入れられません。
Expires After (Days)	パスワードを有効にする最大日数。 たとえば、「Expires After (Days)」テキスト・ボックスに 30 を入力した場合、11 月 1 日に作成されたパスワードは 12 月 1 日（31 日経過後）に無効になります。
Warn After (Days)	パスワードが指定の日付に期限切れになるという通知をユーザーが受け取るまでの経過日数。 たとえば、「Expires After (Days)」テキスト・ボックスに 30 を入力し、「Warn After (Days)」テキスト・ボックスに 10 を入力したとします。パスワードが 11 月 1 日に作成された場合、11 月 11 日に、パスワードが 12 月 1 日に期限切れになることがユーザーに通知されます。
Characters Required	パスワードが有効になるために含まれる必要のある文字。 たとえば、「Characters Required」テキスト・ボックスに x を入力した場合、「x」を含むパスワードのみが受け入れられます。
Characters Not Allowed	パスワードが有効になるために禁止される文字。 たとえば、「Characters Not Allowed」テキスト・ボックスに ! を入力した場合、「!」を含むパスワードは受け入れられません。

フィールド名	説明
Characters Allowed	パスワードが有効になるために許可される文字。 たとえば、「 Characters Allowed 」テキスト・ボックスに % を入力した場合、「%」を含むパスワードは受け入れられます。
Substrings Not Allowed	パスワードが有効になるために禁止される英数字の連続文字列。 たとえば、「 Substrings Not Allowed 」テキスト・ボックスに IBM を入力した場合、パスワードに「I」、「B」および「M」が連続して使用されていると、そのパスワードは受け入れられません。
Start With Character	このチェック・ボックスは、パスワードを文字で開始するかどうかを指定します。 このチェック・ボックスを選択すると、パスワードが有効になるためには文字で開始されている必要があります。 このチェック・ボックスの選択を解除した場合、文字で開始されていないパスワードも受け入れられます。
Disallow First Name	このチェック・ボックスは、パスワードの全部または一部としてユーザーの名前を受け入れるかどうかを指定します。 このチェック・ボックスを選択すると、「 Password 」フィールドにユーザーの名前が入力された場合、パスワードは無効になります。 このチェック・ボックスの選択を解除した場合、ユーザーの名前が含まれるパスワードも受け入れられます。
Disallow User ID	このチェック・ボックスは、パスワードの全部または一部としてユーザー ID を受け入れるかどうかを指定します。 このチェック・ボックスを選択すると、「 Password 」フィールドにユーザー ID が入力された場合、パスワードは無効になります。 このチェック・ボックスの選択を解除した場合、ユーザー ID が含まれるパスワードも受け入れられます。
Disallow Last Name	このチェック・ボックスは、パスワードの全部または一部としてユーザーの姓を受け入れるかどうかを指定します。 このチェック・ボックスを選択すると、「 Password 」フィールドにユーザーの姓が入力された場合、パスワードは無効になります。 このチェック・ボックスの選択を解除した場合、ユーザーの姓が含まれるパスワードも受け入れられます。
Password File	パスワードとして許可されない事前定義の語が含まれたファイルのパスと名前。 注意: 「 Policy Rules 」タブの設定がパスワード・ファイル内の指定と異なる場合、Oracle Identity Manager ではタブの設定が優先されます。
Password File Delimiter	パスワード・ファイル内の語の区切りに使用される文字。 たとえば、「 Password File Delimiter 」テキスト・ボックスに「,」が表示されている場合、パスワード・ファイルの語はカンマで区切られます。

次の項では、パスワード・ポリシーの基準（またはルール）を指定する方法について説明します。

パスワード・ポリシーの基準の設定

次の手順は、パスワード・ポリシーの基準を設定する方法について説明しています。

パスワード・ポリシーの基準を設定するには、次の手順を実行します。

1. 目的のパスワード・ポリシー定義にアクセスします。
2. 「Policy Rules」タブをクリックします。
3. 適切なテキスト・ボックスに情報を入力します。
または目的のチェック・ボックスを選択します（あるいはその両方）。
4. 「Save」をクリックします。
パスワード・ポリシーのルールが設定されます。

「Usage」タブ

このタブは、現在のパスワード・ポリシーに関連付けられているルールおよびリソース・オブジェクトを表示するために使用します。

たとえば、[図 8-13](#) は、「Solaris」というパスワード・ポリシーを示しています。「Password Validation Rule」が「The Solaris Resource Object」に割り当てられています。

[図 8-13](#) は、「Password Policies」フォームの「Usage」タブを示しています。

図 8-13 「Password Policies」フォームの「Usage」タブ

	Rule	Object
1	Password Validation Rule	The Solaris Resource Object

ヒント: パスワード・ポリシーとリソース・オブジェクトの関係の詳細は、[6-26 ページの「Password Policies Rule」タブ](#)を参照してください。

「Task Scheduler」 フォーム

図 8-14 に示す「Task Scheduler」フォームは、「Administration」 / 「Job Scheduling Tools」フォルダにあります。このタブは、次のことを定義するために使用します。

- どのような場合にタスクがスケジュール実行されるか
- これらのスケジュール済タスクの属性

図 8-14 「Task Scheduler」 フォーム

注意： 前述のように、「Task Scheduler」フォームは、どのような場合にタスクがスケジュール実行されるかを指定するために使用します。ただし、このタスクの実行をトリガーする Oracle Identity Manager プログラムは **スケジューラ・デーモン** と呼ばれます。

スケジューラ・デーモンが稼働していない場合は、指定された機能を実行できないため、スケジューラ・デーモンがアクティブになっていることを確認する必要があります。

システム・プロパティの値変更の詳細は、8-15 ページの「[「System Configuration」 フォーム](#)」を参照してください。

次の表は、「Task Scheduler」フォームのデータ・フィールドのリストとその説明を示しています。

フィールド名	説明
Scheduled Task	スケジュール実行されるタスクの名前。
Class Name	スケジュール済タスクを実行する Java クラスの名前。 重要： スケジューラ・デーモンによってスケジュール済タスクの実行がトリガーされます。実際にタスクを実行するのは Java クラスです。

フィールド名	説明
Status	<p>タスクのステータス。現在、スケジュール済タスクには次の4つのステータス・レベルがあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ INACTIVE。スケジュール済タスクは実行されていません。また、タスクの実行が正常に完了した場合も、タスクのステータスは「INACTIVE」になり、「Next Start Time」フィールドに指定された日時に) 再び実行されるように設定されます。 ■ RUNNING。スケジュール済タスクは実行中です。 ■ COMPLETED。スケジュール済タスクの実行は正常に完了しました。タスクは再び実行されません（「Once」ラジオ・ボタンが選択されています）。 ■ ERROR。タスクの実行中に問題が発生しました。
Max Retries	<p>タスクが完了していない場合、Oracle Identity Manager によってタスクの完了が試行される回数。この回数を超えると、タスクに「ERROR」ステータスが割り当てられます。</p>
Disabled	<p>このチェック・ボックスは、スケジューラ・デーモンがスケジュール済タスクをトリガーするかどうかを指定するために使用します。</p> <p>このチェック・ボックスを選択した場合、「Start Time」または「Next Start Time」フィールドに示された日時が現在の日時と一致していても、スケジューラ・デーモンはタスクをトリガーしません。</p> <p>このチェック・ボックスの選択が解除されている場合、「Start Time」または「Next Start Time」フィールドに示された日時が現在の日時と一致すると、スケジューラ・デーモンはタスクをトリガーします。</p>
Stop Execution	<p>このチェック・ボックスは、スケジューラ・デーモンが「RUNNING」ステータスのスケジュール済タスクを停止できるかどうかを指定するために使用します。</p> <p>このチェック・ボックスを選択した場合、タスクのステータスが「RUNNING」であると、スケジューラ・デーモンはタスクの実行を停止します。また、タスクのステータスは「INACTIVE」に変わります。</p> <p>このチェック・ボックスの選択を解除した場合、スケジューラ・デーモンは、ステータスが「RUNNING」のタスクの実行を停止しません。</p>
Start Time	<p>タスクが最初にスケジュール実行される日時。</p> <p>注意: タスクを2回以上実行するように設定した場合、スケジューラ・デーモンは、「Next Start Time」フィールドに示された日時を参照します。</p>
Last Start Time	<p>タスクの実行が開始された最後の日時。</p>
Last Stop Time	<p>タスクの実行が停止された最後の日時。</p>
Next Start Time	<p>タスクが次にスケジュール実行されている日時。</p> <p>注意: タスクを1回のみ実行するように設定した場合、スケジューラ・デーモンは、「Start Time」フィールドに示された日時を参照します。</p>
Daily, Weekly, Monthly, Yearly	<p>これらのラジオ・ボタンは、タスクをそれぞれ毎日、毎週、毎月または毎年実行するように指定するために使用します。</p> <p>これらのラジオ・ボタンの1つを選択した場合、スケジューラ・デーモンは、「Start Time」フィールドに指定された日時に、関連付けられたタスクを1日、1週間、1か月または1年に1回トリガーします。</p> <p>これらのラジオ・ボタンをすべて選択解除した場合、スケジューラ・デーモンが、関連付けられたタスクを毎日、毎週、毎月または毎年トリガーすることはありません。</p>

フィールド名	説明
Recurring Intervals	<p>このラジオ・ボタンは、固定の繰り返しペースでタスクを実行するように指定するために使用します。</p> <p>このラジオ・ボタンを選択した場合、スケジューラ・デーモンは関連付けられたタスクを繰り返しペースでトリガーします。</p> <p>このラジオ・ボタンの選択を解除した場合、スケジューラ・デーモンが関連付けられたタスクを繰り返しペースでトリガーすることはありません。</p> <p>注意: 「Recurring Intervals」ラジオ・ボタンを選択した場合、ラジオ・ボタンの下のテキスト・フィールドに値を入力し、隣のボックスから測定単位を選択することにより、間隔を設定する必要があります。</p>
Once	<p>このラジオ・ボタンは、タスクを1回のみ実行するように指定するために使用します。</p> <p>このラジオ・ボタンを選択した場合、スケジューラ・デーモンは、「Start Time」フィールドに指定された日時に、関連付けられたタスクを1回トリガーします。</p> <p>このラジオ・ボタンの選択を解除した場合、スケジューラ・デーモンは関連付けられたタスクを2回以上トリガーします。</p>

スケジュール済タスクの作成

スケジュール済タスクに属性が必要な場合は、タスクを作成するだけでなく、タスクを設定する必要があります。そうしない場合、スケジュール済タスクは機能しません。

既存のタスク属性が不要になった場合は、スケジュール済タスクからその属性を削除する必要があります。

次の手順は、スケジュール済タスクを作成する方法について説明しています。その後の手順は、スケジュール済タスクに属性を追加する方法と、スケジュール済タスクからタスク属性を削除する方法を示しています。

スケジュール済タスクを作成するには、次の手順を実行します。

1. 「Task Scheduler」フォームにアクセスします。
2. 「Scheduled Task」フィールドに、スケジュール済タスクの名前を入力します。
3. 「Class Name」フィールドに、スケジュール済タスクを実行する Java クラスの名前を入力します。
4. 「Max Retries」フィールドに数字を入力します。この数字は、Oracle Identity Manager によって「ERROR」のステータスがタスクに割り当てられるまでにタスクの完了が試行される回数を表します。
5. 「Disabled」および「Stop Execution」チェック・ボックスの選択が解除されていることを確認します。
6. 「Start Time」フィールドをダブルクリックします。

表示される Date & Time ウィンドウから、タスクをスケジュール実行する日時を設定します。（「Recurring Intervals」ラジオ・ボタンを選択して）繰り返しペースでタスクを実行するように指定した場合、このフィールドに表示された日時が参照されて、関連付けられたタスクの次の実行日時が判断されます。

7. (「Interval」 リージョンで) スケジューリング・パラメータを設定します。
 - 繰り返しペースでタスクを実行するように設定するには、「Daily」、「Weekly」、「Monthly」または「Yearly」ラジオ・ボタンを選択します。
 - タスクを1回のみ実行するように設定するには、「Once」ラジオ・ボタンを選択します。
 - 固定の繰り返しペースでタスクを実行するように設定するには、「Recurring Intervals」ラジオ・ボタンを選択し、ラジオ・ボタンの下のテキスト・フィールドに値を入力して間隔を設定してから、隣のボックスから測定単位を選択します。
8. 「Save」をクリックします。

スケジュール済タスクが作成されます。さらに、タスクは現在実行中でないため、「Status」フィールドに「INACTIVE」が表示されます。ただし、手順6で設定した日時が現在の日時に一致した時点で、スケジューラ・デーモンはスケジュール済タスクをトリガーします。

タスク属性の追加

次の手順は、タスク属性を作成する方法について説明しています。

タスク属性を追加するには、次の手順を実行します。

1. 「Add」をクリックします。
2. 「Attribute Name」フィールドにタスク属性の名前を入力します。
3. 「Attribute Value」フィールドに属性の値を入力します。
4. ツールバーから「Save」をクリックします。

タスク属性がスケジュール済タスクに追加されます。

タスク属性の削除

次の手順は、タスク属性を削除する方法について説明しています。

タスク属性を削除するには、次の手順を実行します。

1. 削除するタスク属性を選択します。
2. 「Delete」をクリックします。属性がスケジュール済タスクから削除されます。

カスタム・スケジュール済タスクの削除

この項では、カスタム・スケジュール済タスクを削除する方法について説明します。

注意： パスワード期限切れタスクなど、Oracle Identity Manager とともにインストールされている内部のスケジュール済タスクは削除できません。

スケジュール済タスクを削除するには、次の手順を実行します。

1. 「Task Scheduler」フォームにアクセスします。
2. 「Scheduled Task」フィールドにスケジュール済タスクの名前を入力し、双眼鏡ボタンをクリックするか、[Ctrl] キーを押しながら [Q] キーを押します。「Task Definition」フォーム内にスケジュール済タスクが開きます。
3. 「Task Definition」フォームで、8-28 ページの「タスク属性の削除」の手順に従って既存のタスク属性を削除します。
4. ツールバーの「Delete」ボタンをクリックするか、[Ctrl] キーを押しながら [D] キーを押します。現在のレコードが削除されることを通知する警告メッセージが表示されます。
5. 「OK」をクリックして、スケジュール済タスクを削除します。

この章では、Design Console のすべての開発ツールについて説明します。次の内容について説明します。

- 概要
- 「Adapter Factory」フォーム
- 「Adapter Manager」フォーム
- 「Form Designer」フォーム
- 「Error Message Definition」フォーム

概要

Design Console には一連の開発ツールが含まれており、管理者や開発者は、これらのツールを使用して Oracle Identity Manager をカスタマイズできます。このフォルダには次のフォームがあります。

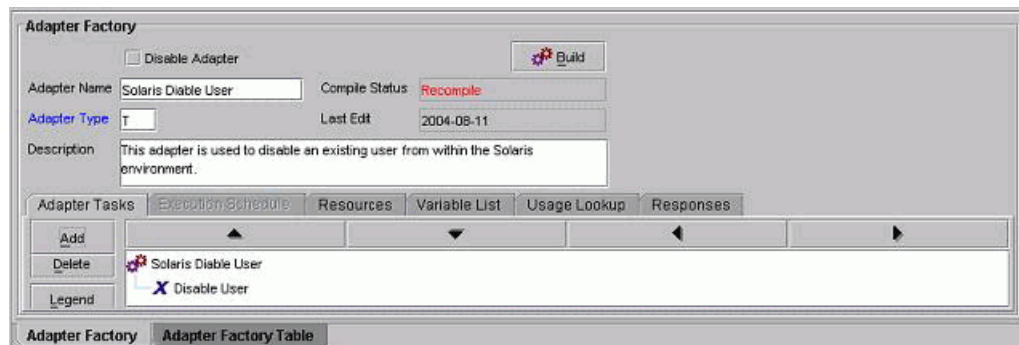
- **Adapter Factory:** このフォームでは、Oracle Identity Manager が IT リソースの API に接続し、そのリソースと通信できるようにするためのコードの作成と管理を行います。
このコードはアダプタと呼ばれます。
- **Adapter Manager:** このフォームでは、複数のアダプタを同時にコンパイルできます。
- **Form Designer:** このフォームでは、Oracle Identity Manager に同梱されていないプロセス・フォームおよびリソース・オブジェクト・フォームを作成できます。
- **Error Message Definition:** このフォームでは、Oracle Identity Manager の使用中に特定の問題が発生した場合にダイアログ・ボックスに表示されるエラー・メッセージを作成できます。
また、システム管理者や開発者は、このフォームを使用することで、ユーザーが「Adapter Factory」フォームでエラー・ハンドラ・タスクを作成するときにアクセスできる、エラー・メッセージを定義できます。
- **「Development Tools」 / 「Business Rule Definition」 フォルダ:** このフォルダは、システム管理者および開発者が使用できる、Oracle Identity Manager のイベント・ハンドラおよびデータ・オブジェクトを管理するためのツールを提供します。
このフォルダには次のフォームがあります。
 - **Event Handler Manager:** このフォームでは、Oracle Identity Manager で使用されるイベント・ハンドラの作成と管理を行います。
 - **Data Object Manager:** このフォームでは、データ・オブジェクトの定義、定義したデータ・オブジェクトへのイベント・ハンドラとアダプタの割当て、および関連付けられているアダプタ変数のマップを行います。
- **Reconciliation Rules:** このフォームでは、Oracle Identity Manager のリコンシリエーション・ルールの作成および管理を行います。

「Adapter Factory」 フォーム

アダプタは、Oracle Identity Manager の内部ロジックおよび機能を拡張します。また、IT リソースの API に接続して、このリソースとのインタフェース接続を行います。

Adapter Factory は、Oracle Identity Manager に含まれるコード生成ツールです。これを使用することで、ユーザーはアダプタと呼ばれる Java クラスを作成できます。図 9-1 に、「Adapter Factory」フォームを示します。

図 9-1 「Adapter Factory」 フォーム

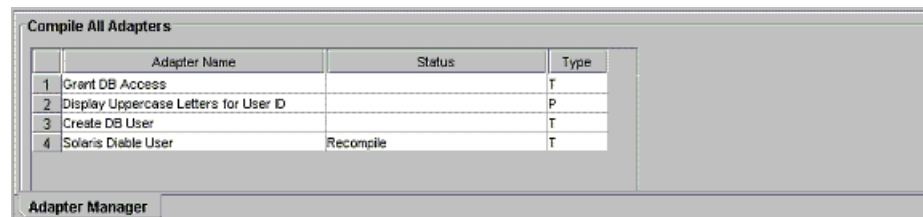


ヒント: アダプタまたは Adapter Factory の詳細は、『Oracle Identity Manager Tools リファレンス・ガイド』を参照してください。

「Adapter Manager」 フォーム

「Adapter Manager」 フォームは、「Development Tools」フォルダにあります。このフォームは、[図 9-2](#) に示すように、複数のアダプタを同時にコンパイルするために使用します。

図 9-2 「Adapter Manager」 フォーム



「Form Designer」 フォーム

ターゲットのユーザーまたは組織にリソースをプロビジョニングする際に必要な情報が、既存の Oracle Identity Manager フォームから取得できない場合もあります。「Development Tools」フォルダにある「Form Designer」フォームを使用すると、関連情報を含むフィールドが組み込まれたフォームを作成できます。フォームを作成したら、ユーザーまたは組織にプロビジョニングするリソースに関連付けられている、プロセスまたはリソース・オブジェクトに割り当てます。[図 9-3](#) は、「Form Designer」フォームを示しています。

次に、ユーザーが「Form Designer」フォームで作成するリソース・オブジェクト・フォームまたはプロセス・フォームが、Oracle Identity Manager によって表示される理由を、重要度の高い順に示します。

1. リソース・オブジェクト・フォームがリクエストされたリソース・オブジェクトにアタッチされており、「Requests」フォームの「Process Console」タブからそのリソース・オブジェクトを右クリックして、「Launch Object Form」メニュー・コマンドが選択されている。
2. リソース・オブジェクト・フォームが、直接プロビジョニングされたリソース・オブジェクトにアタッチされている。
3. プロセス・フォームが標準の承認プロセスにアタッチされており、「Requests」フォームの「Process Console」タブから右クリックして「Launch Form」メニュー・コマンドが選択されている。
4. プロセス・フォームが適切なプロビジョニング・プロセスにアタッチされており、「Organizations」フォームまたは「Users」フォームの「Object Process Console」タブから右クリックして「Launch Form」メニュー・コマンドが選択されている。

たとえば、Oracle Identity Manager またはそのいずれかのユーザーがリソース・オブジェクトまたはプロセスを完了させようとする、割り当てられたフォームがトリガーされます。このとき、Oracle Identity Manager またはユーザーによって、このフォームのフィールドに値が移入されます。データが保存されると、対応するプロセスまたはリソース・オブジェクトが、「Completed」ステータスをアーカイブできるようになり、Oracle Identity Manager は、ターゲットの組織またはユーザーに対して適切なリソースをプロビジョニングできるようになります。

図 9-3 「Form Designer」 フォーム

たとえば、**Solaris** フォーム（「Table Name」フィールドでは **UD_SOLARIS** という名前で示されている）は、すでに作成済で、**Solaris** のリソース・オブジェクトおよびプロビジョニング・プロセスの両方に割り当てられています。

注意： 表名は、フォーム名の前に接頭辞 **UD_** を付けて表します。たとえば、この場合はフォーム名が **SOLARIS** のため、表名は **UD_SOLARIS** になります。

次の表では、「Form Designer」フォームのデータ・フィールドについて説明します。

フィールド名	説明
Table Name	このフォームに関連付けられているデータベース表の名前です。 注意： 表名は、フォーム名の前に接頭辞 UD_ を付けて表します。つまり、フォーム名が SOLARIS の場合、表名は UD_SOLARIS になります。
Description	フォームに関する説明的な情報です。 重要： 「Description」フィールドに表示されるテキストは、フォームの名前です。
Preview Form	このボタンをクリックすると、フォームが表示されます。これにより、フォームをアクティブ化する前に、フォームの外観と機能を確認できます。
Form Type	これらのラジオ・ボタンを使用して、プロセス・オブジェクトとリソース・オブジェクトのどちらにフォームを割り当てるかを指定します。 「Process」ラジオ・ボタンを選択した場合、フォームは承認プロセスまたはプロビジョニング・プロセスに関連付けられます。「Object」ラジオ・ボタンを選択した場合、フォームはリソース・オブジェクトに割り当てられます。
Object Name	プロビジョニングできるリソースの名前（データベース、サーバー、ソフトウェア・アプリケーション、ファイル、ディレクトリ・アクセスなど）です。リソース・オブジェクト名とも呼ばれます。 このフィールドをダブルクリックすると、使用可能なリソース・オブジェクト名が表示されます。
Latest Version	フォームの最新バージョンです。

フィールド名	説明
Active Version	指定されたプロセスまたはリソース・オブジェクトで使用されるフォームのバージョンです。 注意: 各バージョンのフォームは、一度「Active Version」フィールドに表示されると変更できなくなります。
Current Version	これは、現在表示中の、情報を格納しているフォームのバージョンで、「Form Designer」フォームの様々なタブで表示されます。
Create New Version	このボタンをクリックすると、フォームの既存のバージョンに追加の名前を割り当てることができます。こうすることで、フォームの元のバージョンに影響を与えずに、このバージョンを変更できます。 注意: フォームの新しいバージョンを作成して「Refresh」をクリックすると、このバージョンに対して指定した名前が「Current Version」ボックスに表示されます。
Make Version Active	このボタンをクリックすると、フォームの現在のバージョンがプロセスまたはリソース・オブジェクトに割り当てられるように指定できます。つまり、このバージョンがアクティブになります。 注意: 各バージョンのフォームは、一度アクティブ化されると変更できなくなります。かわりに、「Create New Version」ボタンをクリックして) フォームの追加のバージョンを作成する必要があります。

次の項では、フォームの作成方法について説明します。

フォームの作成

次の手順は、フォームの作成方法を示しています。

フォームを作成するには、次のようにします。

1. 「Form Designer」フォームを開きます。
2. 「Table Name」フィールドに、フォームに関連付けられているデータベース表の名前を入力します。

注意: 表名は、フォーム名の前に接頭辞 **UD_** を付けて表します。つまり、フォーム名が **SOLARIS** の場合、表名は **UD_SOLARIS** になります。

3. 「Description」フィールドに、フォームに関する説明的な情報を入力します。
4. フォームを承認プロセスまたはプロビジョニング・プロセスに割り当てる場合は、「Process」ラジオ・ボタンを選択します。
フォームをリソース・オブジェクトに割り当てる場合は、「Object」ラジオ・ボタンを選択します。
5. 「Save」をクリックします。

フォームが作成されます。「Latest Version」フィールドに「Initial Version」と表示されます。これは、「Form Designer」フォームのタブに情報を移入することで、割り当てられたプロセスまたはリソースを使用してフォームを機能させることができることを意味します。

「Form Designer」 フォームのタブ

「Form Designer」 フォームを起動してフォームを作成すると、このフォームのタブが使用可能になります。「Form Designer」 フォームには、次のタブが含まれます。

- 「Additional Columns」 タブ
- 「Child Table(s)」 タブ
- 「Object Permissions」 タブ
- 「Properties」 タブ
- 「Administrators」 タブ
- 「Usage」 タブ
- 「Pre-Populate」 タブ
- 「Default Columns」 タブ
- 「User Defined Fields」 タブ

それぞれのタブについて、次の各項で説明します。

「Additional Columns」 タブ

このタブを使用して、データ・フィールドの作成と管理を行います。これらのデータ・フィールドは、「Form Designer」 フォームで作成された、関連付けられているフォームに表示されません。

図 9-4 は、「Form Designer」 フォームの「Additional Columns」 タブを示しています。

図 9-4 「Form Designer」 フォームの「Additional Columns」 タブ

	Name	Variant Type	Length	Field Label	Field Type	Default Value	Order	Application Profile	Encrypted
1	UD_SOLARIS_UID	String	20	UUID	TextField		1	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
2	UD_SOLARIS_USER	String	20	User ID	TextField		2	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
3	UD_SOLARIS_PASS	String	20	Password	PasswordField		3	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
4	UD_SOLARIS_SHELL	String	20	Shell	TextField	/usr/bin/sh	4	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
5	UD_SOLARIS_HOME	String	20	Home Directory	TextField	/export/home	5	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
6	UD_SOLARIS_GROUP	String	20	User Group	TextField	other	6	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
7	UD_SOLARIS_ITAS	long		IT Asset	LookupField		7	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

次の表に、データ・フィールドの説明を示します。

名前	説明
Name	<p>データベースに表示され、Oracle Identity Manager によって認識されるデータ・フィールドの名前です。</p> <p>注意: この名前は、データ・フィールド名の前に接頭辞 <TABLENAME_> を付けて表します。</p> <p>たとえば、「Form Designer」フォームの「Table Name」フィールドの名前が UD_PASSWORD で、データ・フィールドの名前が USERNAME の場合、データベースに表示され Oracle Identity Manager で認識されるデータ・フィールド名は、UD_PASSWORD_USERNAME になります。</p>
Variant Type	<p>この参照フィールドから、データ・フィールドの変数型を選択します。変数型は、フィールドで受け入れられるデータ型を示します。</p> <p>このデータ・フィールドは、Byte、Double、Date、Byte Array、Boolean、Long、String、Short、Integer の 9 つの変数型のいずれかにする必要があります。</p>
Length	<p>データ・フィールドの長さ（文字数）です。</p>
Field Label	<p>データ・フィールドに関連付けられるラベルです。このラベルは、Oracle Identity Manager によって生成されたフォームのデータ・フィールドの横に表示されます。</p>

名前	説明
Field Type	<p data-bbox="444 233 1312 281">この参照フィールドから、データ・フィールドのデータ型を選択します。データ型は、フィールドでのデータの表示方法を表します。</p> <p data-bbox="444 296 1289 321">このデータ・フィールドは、次の9つのデータ型のいずれかにする必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li data-bbox="444 336 1349 384">■ Text Field: このデータ・フィールドは、生成されたフォームにテキスト・フィールドとして表示されます。 <p data-bbox="492 405 1349 480">テキスト・フィールドが表示専用（フィールド内のテキストが赤色で表示される）の場合、ユーザーは、問合せの実行のみにこのフィールドを使用できます。表示専用でない場合は、フィールドに情報を移入し、データベースに保存することもできます。</p> <li data-bbox="444 495 1349 543">■ Lookup Field: このデータ・フィールドは、生成されたフォームに参照フィールドとして表示されます。 <p data-bbox="492 564 1349 640">この参照フィールドが表示専用の場合、ユーザーは問合せの実行のみにこのフィールドを使用できます。表示専用でない場合は、関連付けられている参照ウィンドウの値をこのフィールドに移入し、データベースに値を保存することもできます。</p> <li data-bbox="444 655 1349 703">■ Text Area: このデータ・フィールドは、生成されたフォームにテキスト領域として表示されます。 <p data-bbox="492 724 1349 800">このテキスト領域が表示専用の場合、ユーザーは、テキスト領域に表示されている情報の読取りのみを行えます。表示専用でない場合は、テキスト領域にデータを移入し、その情報をデータベースに保存することもできます。</p> <li data-bbox="444 814 1349 890">■ IT Resource Lookup Field: このデータ・フィールドは、生成されたフォームに参照フィールドとして表示されます。ユーザーは、この参照フィールドから IT リソースを表す参照値を選択し、その値をデータベースに保存できます。 <p data-bbox="492 911 1349 987">重要: このデータ・フィールドを選択した場合は、「Property Value」テキスト・ボックスに表示されるボックスから、IT リソースのサーバー・タイプを指定する必要があります。</p> <p data-bbox="492 1005 1349 1054">データ・フィールドへのプロパティ値の追加方法は、9-16 ページの「データ・フィールドへのプロパティおよびプロパティ値の追加」を参照してください。</p> <li data-bbox="444 1068 1349 1117">■ Date Field: このデータ・フィールドは、生成されたフォームにテキスト・フィールドとして表示されます。 <p data-bbox="492 1138 1349 1186">このテキスト・フィールドが表示専用の場合、ユーザーは問合せの実行のみにこのフィールドを使用できます。</p> <p data-bbox="492 1205 1349 1281">表示専用でない場合は、（このフィールドをダブルクリックすると表示される Date & Time ウィンドウから日付と時間を選択して）このフィールドに日付と時間を移入することもできます。また、移入した日付と時間をデータベースに保存できます。</p> <li data-bbox="444 1295 1349 1344">■ Check Box: このデータ・フィールドは、生成されたフォームにチェック・ボックスとして表示されます。 <p data-bbox="492 1365 1349 1440">このチェック・ボックスが表示専用の場合、ユーザーはチェック・ボックスが選択されているかどうかの確認のみを行えます。表示専用でない場合は、チェック・ボックスを選択または選択解除して、その設定をデータベースに保存することもできます。</p> <li data-bbox="444 1455 1349 1503">■ Password Field: このデータ・フィールドは、生成されたフォームにテキスト・フィールドとして表示されます。 <p data-bbox="492 1524 1349 1600">ユーザーは、このテキスト・フィールドから暗号化された（一続きのアスタリスク (*) として表示される）パスワードを問い合わせたり、暗号化されたパスワードを移入してデータベースに保存できます。</p> <li data-bbox="444 1614 1349 1663">■ Radio Button: このデータ・フィールドは、生成されたフォームにラジオ・ボタンとして表示されます。 <p data-bbox="492 1684 1349 1732">ユーザーは、ラジオ・ボタンを選択または選択解除して、その設定をデータベースに保存できます。</p> <li data-bbox="444 1747 1349 1795">■ Combo box: このデータ・フィールドは、生成されたフォームにボックス（コンボ・ボックス）として表示されます。 <p data-bbox="492 1816 1349 1843">ユーザーは、ボックスから項目を選択して、その選択をデータベースに保存できます。</p>

名前	説明
Default Value	<p>この値は、フォームが生成され、次に示すシナリオから他のデフォルト値が指定されていない場合に、関連付けられているデータ・フィールドに表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ フォーム・フィールドにアタッチされている事前移入アダプタが実行されている。 ■ リソース・オブジェクトに割り当てられたカスタム・フォームのフィールドと、プロセスに割り当てられたカスタム・フォームのフィールドとの間に、データ・フローが存在する。 ■ 1つのプロセスに割り当てられたカスタム・フォームのフィールドと、別のプロセスに割り当てられたカスタム・フォームのフィールドとの間に、データ・フローが存在する。 ■ 組織に関してリクエストされたリソース・オブジェクトに、カスタム・フォームがアタッチされている。その上で、このカスタム・フィールドの1つにデフォルト値が関連付けられている。
Order	<p>生成されたフォームでのデータ・フィールドの位置を表す順序番号です。</p> <p>たとえば、順序番号2のデータ・フィールドは、順序番号1のデータ・フィールドの下に表示されます。</p>
Application Profile	<p>このチェック・ボックスは、「Users」フォームに関連付けられているリソースがユーザーにプロビジョニングされ、「Enabled」ステータスがアーカイブされた後に、このフォームの「Object Profile」タブにこのフィールドの最新の値が表示されるかどうかを指定します。</p> <p>このチェック・ボックスが選択されている場合、このフィールドのラベルおよび値が、そのリソースがプロビジョニングされたユーザーの「Users」フォームの「Object Profile」タブに表示されます。</p> <p>このチェック・ボックスが選択されていない場合、このフィールドの値は、そのリソースがプロビジョニングされたユーザーの「Users」フォームの「Object Profile」タブに表示されません。</p>
Encrypted	<p>このチェック・ボックスは、関連付けられているデータ・フィールドに表示される情報がサーバーとクライアントの間で転送される際に暗号化されるかどうかを決定します。</p> <p>このチェック・ボックスが選択されている場合、データ・フィールドに表示される情報は、サーバーとクライアントの間で転送される際に暗号化されます。</p> <p>このチェック・ボックスが選択されていない場合、データ・フィールドに表示される情報は、サーバーとクライアントの間で転送される際に暗号化されません。</p>

次の各項では、フォームへのデータ・フィールドの追加方法について説明します。また、データ・フィールドが有効でなくなった場合に、フォームから削除する方法も説明します。

データ・フィールドへのフォームの追加

次の手順は、フォームにデータ・フィールドを追加する方法を説明しています。

重要：「Encrypted」オプションを選択してテキスト（フィールド・タイプ）のデータ・フィールドを作成すると、管理およびユーザー・コンソールで値がクリアテキストとして表示され、データベースではデータが暗号化されません。

「Encrypted」オプションを選択してパスワード（フィールド・タイプ）のデータ・フィールドを作成すると、管理およびユーザー・コンソールで値が一続きのアスタリスク（*）として表示され、データベースではデータが暗号化されます。

データ・フィールドをフォームに追加するには、次のようにします。

1. 「Add」をクリックします。

「Additional Columns」タブに空の行が表示されます。

2. データベースに表示され、Oracle Identity Manager によって認識されるデータ・フィールドの名前を「Name」フィールドに入力します。

注意：この名前は、データ・フィールド名の前に接頭辞 <TABLENAME_> を付けて表します。

たとえば、「Table Name」フィールドに表示される名前が **UD_PASSWORD** で、データ・フィールドの名前が **USERNAME** の場合、データベースに表示され Oracle Identity Manager で認識されるデータ・フィールド名は、**UD_PASSWORD_USERNAME** になります。

3. 「Variant Type」参照フィールドをダブルクリックします。

表示された参照ウィンドウから、データ・フィールドの変数型を選択します。

現時点では、データ・フィールドとして **Byte**、**Double**、**Date**、**Byte Array**、**Boolean**、**Long**、**String**、**Short**、**Integer** の9つの変数型のいずれかを指定できます。

4. 「Length」フィールドに、データ・フィールドの長さ（文字数）を入力します。

5. 「Field Label」フィールドに、データ・フィールドに関連付けられるラベルを入力します。

このラベルは、Oracle Identity Manager によって生成されたフォームのデータ・フィールドの横に表示されます。

6. 「Field Type」参照フィールドをダブルクリックします。

表示された「Lookup」ダイアログ・ボックスで、データ・フィールドのデータ型を選択します。現時点では、データ・フィールドに、Text Field、Lookup Field、Text Area、IT Resource Lookup Field、Date Field、Check Box、Password Field、Radio Button および Combo box の9つのデータ型のいずれかを指定できます。

ヒント：データ型の詳細は、この項の前半に示してある表を参照してください。

7. 「Default Value」フィールドに、関連付けられているデータ・フィールドに表示される値を入力します。この値は、フォームが生成された後、他のデフォルト値が指定されていない場合に表示されます。

ヒント：どのような場合にデフォルト値が設定されているかを示すシナリオは、この項の前半に示してある表を参照してください。

8. 「Order」フィールドに順序番号を入力します。この番号は、生成されたフォームでのデータ・フィールドの位置を表します。

たとえば、順序番号 2 のデータ・フィールドは、順序番号 1 のデータ・フィールドの下に表示されます。

9. 特定の組織またはユーザーの値を「Default Value」フィールドに表示される値より優先させるには、「Application Profile」チェック・ボックスを選択します。それ以外の場合は手順 10 に進みます。
10. データ・フィールドに表示される情報が、クライアントとサーバーの間で転送される際に暗号化されるようにするには、「Encrypted」チェック・ボックスを選択します。
それ以外の場合は手順 11 に進みます。
11. 「Save」をクリックします。
データ・フィールドがフォームに追加されます。

フォームからのデータ・フィールドの削除

次の手順は、フォームからデータ・フィールドを削除する方法を示しています。

データ・フィールドをフォームから削除するには、次のようにします。

1. 9-20 ページの「データ・フィールドからのプロパティおよびプロパティ値の削除」の手順に従って、削除するデータ・フィールドに関連付けられているすべてのプロパティを削除します。
2. 削除するデータ・フィールドを選択します。
3. 「Delete」をクリックします。データ・フィールドがフォームから削除されます。

「Child Table(s)」 タブ

状況によっては、「Form Designer」フォームで作成された複数のフォームに、同じデータ・フィールドを追加する必要が出てきます。これを行う方法は、次の 2 通りです。

- それぞれのフォームの「Additional Columns」タブを使用して、データ・フィールドをフォームごとに手動で追加する。
- データ・フィールドを 1 つのグループにして 1 つのフォーム名で保存する。その後、これらのデータ・フィールドが要求される各フォームに、このフォームを割り当てる。

このフォームには、別のフォームで要求されるデータ・フィールドが含まれます。このようなフォームは子表と呼ばれます。

子表をフォームに割り当てると、ユーザーの作業効率が向上します。子表を使用しない場合は、データ・フィールドが要求されるすべてのフォームについて、フィールドごとのパラメータを設定する必要があります。たとえば、5 つのフォームで同一のデータ・フィールドが要求される場合、このフィールドのパラメータを 5 回（フォームごとに 1 回ずつ）設定する必要があります。

1 つのフォームの子表を使用している場合は、Design Console を介して後で別のフォームにこの子表を適用できます。単純に、最初のフォームから子表を削除してターゲットのフォームに割り当てただけです。この方法で、1 つのフォームに割り当てた子表を、「Form Designer」フォームで作成されたすべてのフォームに再利用できます。

Oracle Identity Manager を構成して、子表の列で次のいずれかのアクションを実行できます。

- **Insert:** 子表の指定された列に新しい値を追加します。
- **Update:** 子表の対応する列にある既存の値を変更します。
- **Delete:** 子表の指定された列から値を削除します。

図 9-5 は、「Form Designer」フォームの「Child Table(s)」タブを示しています。

図 9-5 「Form Designer」フォームの「Child Table(s)」タブ

Assign	Parent Table	Parent Version	Child Table	Child Version
Delete	1 UD_SOLARIS	Initial Version	UD_DBACCESS	Initial Version

注意： 子表の列での値の挿入、編集または削除に関する Oracle Identity Manager の設定は、7-7 ページの「[「Process Definition」フォーム](#)」を参照してください。

たとえば、子表 UD_SOUTH が Results of 1Q 2004 Sales フォーム（表名は UD_SALES2）に割り当てられているとします。このフォームが起動されると、子表 UD_SOUTH に含まれるデータ・フィールドがフォームに表示されます。

次の各項では、フォームに子表を割り当てる方法、およびフォームから削除する方法について説明します。

重要： 子表で表されるフォームは、アクティブ化されていないと親フォームに割り当てられません。

フォームへの子表の割当て

次の手順は、フォームに子表を割り当てる方法を示しています。

重要： 子表で表されるフォームは、アクティブ化されていないと Assignment ウィンドウに表示されません。そのため、親フォームに割り当てることができません。

フォームに子表を割り当てるには、次のようにします。

1. 「Assign」をクリックします。
Assignment ウィンドウが表示されます。
2. このウィンドウから子表を選択し、フォームに割り当てます。
3. 「OK」をクリックします。
選択した子表がフォームに割り当てられます。

フォームからの子表の削除

フォームから子表を削除するには、次のようにします。

1. 削除する子表を選択します。
2. 「Delete」をクリックします。

フォームから子表が削除されます。

「Object Permissions」 タブ

このタブを使用して、カスタム・フォームがインスタンス化される際にこのフォームの情報を追加、変更および削除できるユーザー・グループを選択します。

「Allow Insert」チェック・ボックスが選択されている場合、対応するユーザー・グループは、ユーザーが作成したフォームのフィールドに情報を追加できます。このチェック・ボックスが選択されていない場合、ユーザー・グループはこのフォームのフィールドに値を移入できません。

「Allow Update」チェック・ボックスが選択されている場合、関連付けられているユーザー・グループは、ユーザーが作成したフォームのフィールドにある既存の情報を変更できます。このチェック・ボックスが選択されていない場合、ユーザー・グループはこのフォームのフィールドを編集できません。

「Allow Delete」チェック・ボックスが選択されている場合、対応するユーザー・グループは、ユーザーが作成したフォームのインスタンス化されたデータを削除できます。このチェック・ボックスが選択されていない場合、ユーザー・グループはこのフォームのフィールドから（データがインスタンス化されたときに）データを削除できません。

図 9-6 は、「Form Designer」フォームの「Object Permissions」タブを示しています。

図 9-6 「Form Designer」フォームの「Object Permissions」タブ

Assign	Group Name	Allow Insert	Allow Update	Allow Delete
	1 SYSTEM ADMINISTRATORS	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
Delete	2 Web Client Group	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
	3 Sales Engineer Group	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
	4 Project L7 Admin Group	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
	5 ALL USERS	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>

たとえば、ユーザー・グループ **SYSTEM ADMINISTRATORS**（「Table Name」フィールドでは **UD_SALES2** という名前）が **Results of 1Q 2004 Sales** フォームに表示される情報の作成、変更および削除を行えるとします。ユーザー・グループ **IT DEPARTMENT** は、このフォームのレコードを削除することのみ可能です（「Allow Insert」および「Allow Update」の各チェック・ボックスは選択されていません）。ユーザー・グループ **HR DEPARTMENT** は、**Results of 1Q 2004 Sales** フォーム内での情報の作成と変更を行えます。ただし、「Allow Delete」チェック・ボックスが選択されていないため、このユーザー・グループは情報を削除できません。

次の項では、ユーザーが作成したフォームにユーザー・グループを割り当てる方法、およびユーザーが作成したフォームからユーザー・グループを削除する方法を説明します。

ユーザーが作成したフォームへのユーザー・グループの割当て

ユーザーが作成したフォームにユーザー・グループを割り当てるには、次のようにします。

1. 「Assign」をクリックします。
「Assignment」ダイアログ・ボックスが表示されます。
2. ユーザー・グループを選択し、ユーザーが作成したフォームに割り当てます。
3. 「OK」をクリックします。
ユーザー・グループが「Object Permissions」タブに表示されます。
4. このユーザー・グループに、ユーザー作成フォームのレコードに情報を追加させない場合は、対応する「Allow Insert」チェック・ボックスをダブルクリックします。
それ以外の場合は手順 5 に進みます。
5. このユーザー・グループに、ユーザー作成フォームのレコードの情報を変更させない場合は、関連付けられている「Allow Update」チェック・ボックスをダブルクリックします。
それ以外の場合は手順 6 に進みます。
6. このユーザー・グループに、ユーザー作成フォームのレコードを削除させない場合は、対応する「Allow Delete」チェック・ボックスをダブルクリックします。
それ以外の場合は手順 7 に進みます。
7. 「Save」をクリックします。
ユーザーが作成したフォームにユーザー・グループが割り当てられます。

ユーザーが作成したフォームからのユーザー・グループの削除

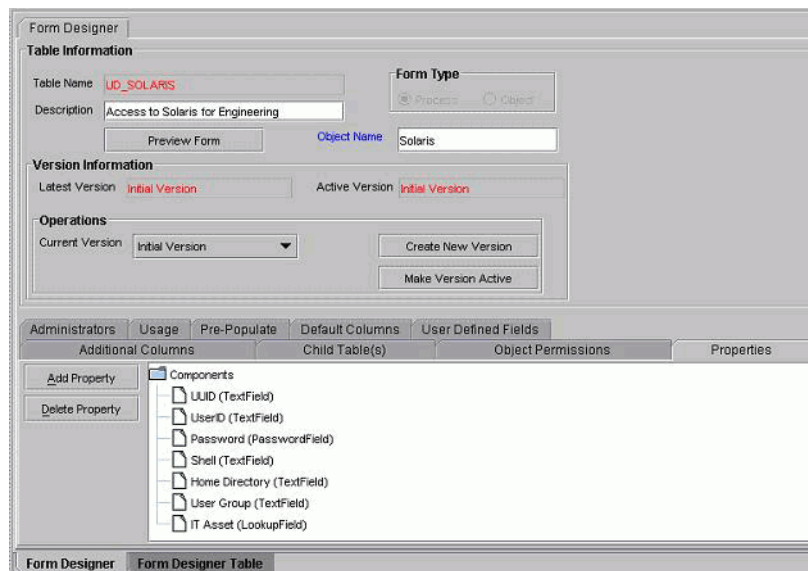
ユーザーが作成したフォームからユーザー・グループを削除するには、次のようにします。

1. 削除するユーザー・グループを強調表示します。
2. 「Delete」をクリックします。
ユーザーが作成したフォームからユーザー・グループが削除されます。

「Properties」 タブ

図 9-7 は、「Form Designer」フォームの「Properties」タブを示しています。このタブを使用して、「Form Designer」フォームで作成されたフォームに表示されるデータ・フィールドに、プロパティおよびプロパティ値を割り当てます。

図 9-7 「Form Designer」フォームの「Properties」タブ



たとえば、**Results of 1Q 2004 Sales** フォームに「**User Name**」および「**Password**」の2つのデータ・フィールドがあるとします。また、各データ・フィールドには次のプロパティが含まれます。

- **Required**。生成されたフォームを保存するには、そのデータ・フィールドに値を移入する必要があるかどうかを決定します。「Required」プロパティのデフォルト値は **false** です。
- **Visible Field**。Oracle Identity Manager によってフォームが生成された後、そのデータ・フィールドがフォームに表示されるかどうかを決定します。「Visible Field」プロパティのデフォルト値は **true** です。

ここでは、両方のデータ・フィールドの「**Required**」プロパティおよび「**Visible Field**」プロパティが **true** に設定されているため、**Results of 1Q 2004 Sales** フォームが生成されると、これらのデータ・フィールドが両方とも表示されます。また、両方のフィールドに値を移入しないと、フォームは保存されません。

次の各項では、プロパティおよびプロパティ値をデータ・フィールドに追加する方法、およびデータ・フィールドから削除する方法を説明します。

注意：

「Properties」タブは、「Additional Columns」タブを使用してフォームのデータ・フィールドを作成するまでは使用できません。

選択できるプロパティおよびプロパティ値の詳細は、A-12 ページの「[データ型](#)」を参照してください。

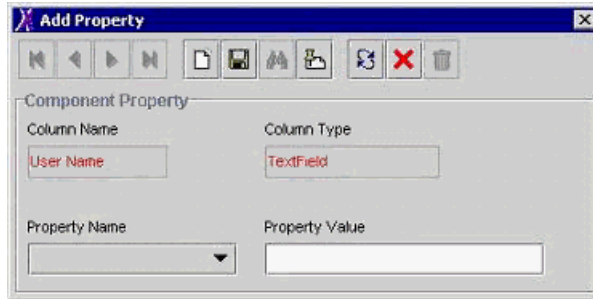
データ・フィールドへのプロパティおよびプロパティ値の追加

データ・フィールドにプロパティおよびプロパティ値を追加するには、次のようにします。

1. プロパティおよびプロパティ値を追加するデータ・フィールドを選択します。
2. 「Add Property」をクリックします。

図 9-8 のように、「Add Property」ダイアログ・ボックスが表示されます。

図 9-8 「Add Property」ダイアログ・ボックス



注意：「Column Name」および「Column Type」の各テキスト・ボックスは、選択したデータ・フィールドの名前と型を示しています。

この例では、「User Name」テキスト・フィールドが選択されています（「Column Name」フィールドに「User Name」と表示されています）。また、このフィールドのデータ型はテキスト・フィールドです。

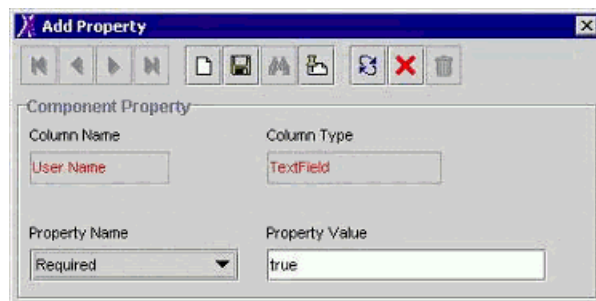
「Add Property」ダイアログ・ボックスの各領域の説明を、次の表に示します。

名前	説明
Column Name	データ・フィールドの名前です。
Column Type	データ・フィールドのデータ型です。
Property Name	このボックスから、データ・フィールドのプロパティを選択します。
Property Value	このテキスト・ボックスにプロパティ値を入力します。この値は、「Property Name」ボックスに表示されるプロパティに関連付けられます。

注意：「Property Name」ボックスに表示されるメニュー項目は、選択されているデータ・フィールドのデータ型を示します。

3. データ・フィールドに追加するプロパティおよびプロパティ値のパラメータを設定します。
図 9-9 は、値が入力された「Add Property」ダイアログ・ボックスを示しています。

図 9-9 値が入力された「Add Property」ダイアログ・ボックス



この例では、「User Name」データ・フィールドの「Required」プロパティの値が true に設定されているため、このフィールドに値を移入する必要があります。移入しなければフォームを保存できません。

注意： 選択できるパラメータおよびプロパティ値の詳細は、A-12 ページの「データ型」を参照してください。

4. Add Property ウィンドウのツールバーから「Save」をクリックします。
5. 「Close」をクリックします。

プロパティおよびプロパティ値がデータ・フィールドに追加されます。

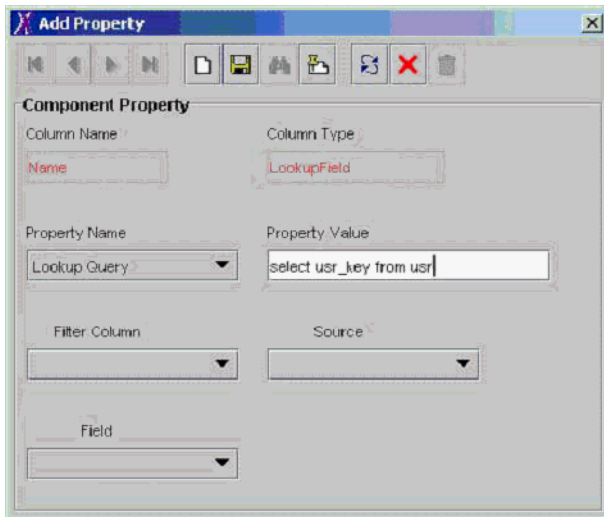
カスタマイズされた参照問合せのプロパティおよびプロパティ値の追加

カスタマイズされた参照問合せのプロパティおよびプロパティ値を追加するには、次のようにします。

1. プロパティおよびプロパティ値を追加するデータ・フィールドを選択します。
2. 「Add Property」をクリックします。

図 9-10 のように、「Add Property」ダイアログ・ボックスが表示されます。

図 9-10 「Add Property」ダイアログ・ボックス



注意：「Column Name」および「Column Type」の各テキスト・ボックスに表示されるテキストは、「Form Designer」の「Properties」タブから）選択したデータ・フィールドの名前と型を示しています。

この例では、「Name」データ・フィールドが選択されています（「Column Name」フィールドに「Name」と表示されています）。また、このフィールドのデータ型は参照フィールドです。

「Add Property」ダイアログ・ボックスの各ボックスは、カスタム参照問合せの WHERE 句の作成に使用できます。（ドロップダウン・メニューから）各ボックスの値を選択すると、カスタム参照問合せに WHERE 句が追加されます（「WHERE」という語は自動的に追加されません）。

次の表では、「Add Property」ダイアログ・ボックスの各領域について説明します。すべてのフィールドの初期状態は無効です。Lookup Query を定義して「Save」をクリックすると、フィールドがアクティブになります。

名前	説明
Column Name	データ・フィールドの名前です。
Column Type	データ・フィールドのデータ型です。
Property Name	このボックスから、データ・フィールドのプロパティを選択します。
Property Value	このテキスト・ボックスにプロパティ値を入力します。この値は、「Property Name」ボックスに表示されるプロパティに関連付けられます。 参照問合せの場合は、問合せで参照され、データベースによって認識される Oracle Identity Manager のフォームとフィールドの両方を指定する必要があります。 たとえば、Oracle Identity Manager がユーザーのログインを参照する場合は、「Property Value」フィールドに「select usr_key fromusr」のように入力します。「Save」ボタンをクリックすると、表のすべての列で「Filter Column」がアクティブになります。

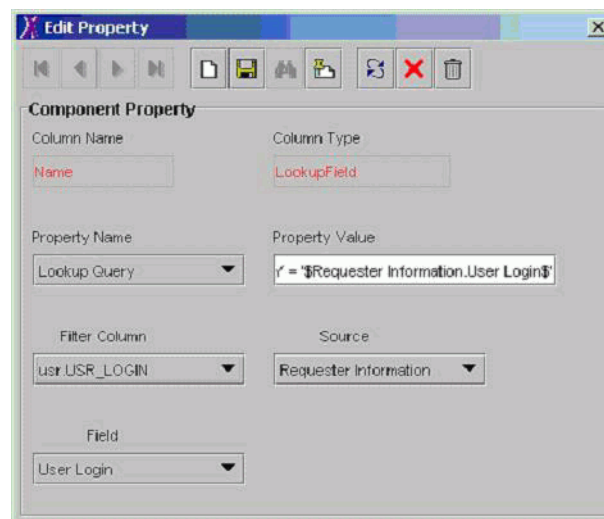
名前	説明
Filter Column	<p>これは、参照問合せの際に参照され、データベースによって認識される、Oracle Identity Manager フォームのフィールドです。このフィールドには、「Property Value」フィールドで指定された表のすべての列が移入されます。問合せに複数の表が使用される場合は、すべての表が表示されます。</p> <p>たとえば、「usr.USR_LOGIN」は、Oracle Identity Manager が参照問合せで「Users」フォームの「User Login」フィールドを参照することを意味します。</p>
Source	<p>「Filter Column」変数が選択されると、その値のソースの可能性のあるすべてのソースが「Source」フィールドに移入されます。このフィールドの値のリストは、参照フィールドがどのフォーム・タイプに対して定義されているかによって異なります。たとえば、参照問合せがオブジェクト・フォームやプロセス・フォーム用の場合には、表示されるリストは異なります。「Source」フィールドは、「Filter Column」ボックスに表示される値の、ユーザーにわかりやすい名前です。</p> <p>たとえば、「Requester Information」は、「Filter Column」値のusr.USRの部分を示しています。</p>
Field	<p>このフィールドは、「Source」フィールドで選択された値に基づいて移入されます。このフィールドは、列名に必要な SELECT 文の作成に使用します。</p> <p>たとえば、「User Login」は「Filter Column」値の_LOGINの部分に対応します。</p>

注意：「Property Name」ボックスに表示されるメニュー項目は、選択されているデータ・フィールドのデータ型を示します。

また、「Add Property」ダイアログ・ボックスの「Source」ボックスおよび「Field」ボックスは、「Lookup Query」が「Property Name」に表示されている場合のみ適用可能です。

3. データ・フィールドに追加するプロパティおよびプロパティ値のパラメータを設定します。

図 9-11 「Add Property」ダイアログ・ボックス



データ・フィールドからのプロパティおよびプロパティ値の削除

データ・フィールドからプロパティおよびプロパティ値を削除するには、次のようにします。

1. 削除するプロパティおよびプロパティ値を選択します。
2. 「Delete Property」をクリックします。

データ・フィールドから、プロパティおよび関連付けられている値が削除されます。

「Administrators」 タブ

このタブを使用して、「Form Designer」フォームでユーザーが作成したフォームの現在のレコードを表示、変更および削除することができるユーザー・グループを選択します。

「Write」チェック・ボックスが選択されている場合は、対応するユーザー・グループが、フォームの現在のレコードの情報を表示および変更できます。このチェック・ボックスが選択されていない場合、そのユーザー・グループはこのレコードの情報を表示および編集できません。

「Delete」チェック・ボックスが選択されている場合は、関連付けられているユーザー・グループが、フォームの現在のレコードの情報を削除できます。このチェック・ボックスが選択されていない場合、そのユーザー・グループはこのレコードの情報を削除できません。

図 9-12 は、「Form Designer」フォームの「Administrators」タブを示しています。

図 9-12 「Form Designer」フォームの「Administrators」タブ

Assign	Delete	Group Name	Allow Insert	Allow Update	Allow Delete
		1 SYSTEM ADMINISTRATORS	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
		2 Web Client Group	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
		3 Sales Engineer Group	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
		4 Project L7 Admin Group	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
		5 ALL USERS	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>

次の各項では、ユーザーが作成したフォームのレコードの管理権限をユーザー・グループに割り当てる方法、およびユーザー・グループから削除する方法について説明します。

ユーザー作成フォームの記録に関する管理権限のユーザー・グループへの割当て

ユーザーが作成したフォームの記録の管理権限をユーザー・グループに割り当てるには、次のようにします。

1. 「Assign」をクリックします。
「Assignment」ダイアログ・ボックスが表示されます。
2. ユーザー・グループを選択し、ユーザーが作成したフォームの記録に割り当てます。
3. 「OK」をクリックします。
ユーザー・グループが「Administrators」タブに表示されます。
4. ユーザーが作成したフォームの現在の記録に関する情報の作成または変更、もしくはその両方を、ユーザー・グループが行えるようにする場合は、対応する「Write」チェック・ボックスをダブルクリックします。
それ以外の場合は手順 5 に進みます。
5. ユーザーが作成したフォームの現在の記録に関する情報の削除をユーザー・グループが行えるようにする場合は、対応する「Delete」チェック・ボックスをダブルクリックします。それ以外の場合は手順 6 に進みます。
6. 「Save」をクリックします。
ユーザーが作成したフォームの当該記録の管理権限が、そのユーザー・グループに付与されます。

ユーザー作成フォームの記録に関するユーザー・グループ権限の削除

ユーザーが作成したフォームの記録の管理権限をユーザー・グループから削除するには、次のようにします。

1. 削除するユーザー・グループを強調表示します。
2. 「Delete」をクリックします。
そのユーザー・グループが持っていた、ユーザー作成フォームの当該記録の管理権限が失われます。

「Usage」 タブ

このタブでは、現在のフォームが割り当てられているリソース・オブジェクトまたはプロセス、もしくはその両方を確認できます。

図 9-13 は、「Form Designer」 フォームの「Usage」 タブを示しています。

図 9-13 「Form Designer」 フォームの「Usage」 タブ

The screenshot shows the 'Form Designer' application interface. The 'Usage' tab is selected. The 'Table Information' section contains the following fields: 'Table Name' (UD_SOLARIS), 'Description' (Access to Solaris for Engineering), 'Form Type' (Process), and 'Object Name' (Solaris). The 'Version Information' section shows 'Latest Version' and 'Active Version' both set to 'Initial Version'. There are buttons for 'Preview Form', 'Create New Version', and 'Make Version Active'. Below the main form area, there are tabs for 'Administrators', 'Usage', 'Pre-Populate', 'Default Columns', 'User Defined Fields', 'Additional Columns', 'Child Table(s)', 'Object Permissions', and 'Properties'. A table at the bottom shows 'Resource Object' and 'Process' columns with 'Solaris' listed in both.

たとえば、**Solaris** フォーム（「Table Name」フィールドでは **UD_SOLARIS** という名前で示されている）は、すでに作成済で、**Solaris** のリソース・オブジェクトおよびプロビジョニング・プロセスの両方に割り当てられています。

注意： 表名は、フォーム名の前に接頭辞 **UD_** を付けて表します。たとえば、この場合はフォーム名が **Solaris** のため、表名は **UD_SOLARIS** になります。

「**Make Version Active**」 ボタンをクリックして、フォームをリソース・オブジェクトまたはプロビジョニング・プロセスにアタッチするまでは、このタブに情報が移入されません。

「Pre-Populate」 タブ

このタブは、次の目的に使用できます。

- 事前移入アダプタをユーザーが作成したフォームのデータ・フィールドにアタッチする。
- 指定されたデータ・フィールドに情報を移入するために、そのアダプタが起動されるかどうかを決定するルールを選択する。
- 選択されたルールに優先順位番号を設定する。
- 事前移入アダプタのアダプタ変数をそれぞれに適した場所にマップする。

注意： 事前移入アダプタ、ユーザーが作成したフォームのフィールドへの事前移入アダプタのアタッチ、および事前移入アダプタの変数のマッピングの詳細は、『Oracle Identity Manager Tools リファレンス・ガイド』を参照してください。

「Default Columns」 タブ

「Form Designer」 フォームで作成されたフォームは、次の 2 種類のデータ・フィールドで構成されます。

- （「Additional Columns」 タブを使用して）ユーザーが作成したデータ・フィールド
- Oracle Identity Manager によって作成され、フォームの作成後にフォームに追加されたデータ・フィールド

「Default Columns」 タブでは、ユーザーが作成したフォームにデフォルトで追加されるデータ・フィールドの名前、変数型および長さを確認できます。これらのデータ・フィールドを参照することで、SQL*Plus や同様のデータベース・アプリケーションを起動せずに、その型のフォームのデータ・フィールドをすべて確認できます。

「User Defined Fields」 タブ

このタブでは、「Form Designer」 フォームに対して作成されたユーザー定義フィールドを表示し、それらのフィールドにアクセスできます。作成されたユーザー定義フィールドは、このタブに表示され、データの受入れと供給が可能になります。

注意： ユーザー定義フォームのフィールドの作成方法は、8-8 ページの「[「User Defined Field Definition」 フォーム](#)」を参照してください。

フォームの追加バージョンの作成

フォームを作成し、そのフォームが割り当てられているプロセスやリソース・オブジェクトを使用して動作するように「Form Designer」フォームに情報を移入する際に、フォームの別のバージョンを作成できます。こうすることで、フォームの元のバージョンに影響を与えずに、このバージョンを変更できます。

フォームの追加のバージョンを作成するには、次のようにします。

1. 「Form Designer」フォームを開きます。
2. 異なるバージョンを作成する特定のフォームを問い合わせます。
3. 「Current Version」ボックスをクリックします。
ドロップダウン・メニューが表示されたら、追加のバージョンを作成するフォームのバージョンを選択します。
4. 「Create New Version」ボタンをクリックします。
Create a New Version ウィンドウが表示されます。
5. 「Label」フィールドに、フォームの追加バージョンの名前を入力します。
6. Create a New Version ウィンドウのツールバーから「Save」をクリックします。
7. このツールバーから「Close」をクリックします。

フォームの追加のバージョンが作成されます。「Current Version」ボックスをクリックすると、手順 5 で「Label」フィールドに入力したバージョン名が表示されます。このバージョンを選択すると、「Form Designer」フォームのタブに情報を移入できます。フォームの元のバージョンには影響はありません。

「Error Message Definition」 フォーム

図 9-14 に示す「Error Message Definition」フォームは、「Development Tools」フォルダにあります。このフォームは次の目的に使用できます。

- 特定の問題が発生したときにダイアログ・ボックスに表示されるエラー・メッセージを作成する。
- 「Adapter Factory」フォームでエラー・ハンドラ・タスクを作成する際にユーザーがアクセスできるエラー・メッセージを定義する。

注意： エラー・ハンドラ・タスクの作成に関する詳細は、『Oracle Identity Manager Tools リファレンス・ガイド』を参照してください。

図 9-14 「Error Message Definition」 フォーム

The screenshot shows a web-based form for defining error messages. It includes a 'Key' field with the value '401', a 'Code' field with 'P.DUPLICATE_ADAPTER_INSTANCE', and a 'Reset Count' button. The 'Description' field contains the text 'There has already been an adapter created with this name'. The 'Remedy' field contains 'Please enter a new name into the Adapter Name field.'. The 'Help URL' field contains 'http://kemo01-w2kaddc/docs/70/adapterfactory/create_an_adapter.htm'. The 'Action' field contains 'R' and the 'Severity' field contains 'H'. A 'Note' field at the bottom contains a detailed explanation of the error condition.

次の表は、「Error Message Definition」フォームのデータ・フィールドについて説明しています。

フィールド名	説明
Key	システムで生成された、エラー・メッセージの一意の ID 番号です。
Code	エラー・メッセージ定義を表すコードです。
Reset Count	このボタンをクリックすると、Oracle Identity Manager によって、このエラー・メッセージの表示回数のカウンタが 0 にリセットされます。
Description	エラー・メッセージの説明です。
Remedy	エラー・メッセージが表示される原因となっている状態の修正方法です。
Help URL	そのエラー・メッセージのオンライン・ヘルプ・トピックが含まれる URL へのリンクです。
Action	エラー・メッセージが表示される原因となった状態の重大度を示す、1 文字のコードです。 エラー・メッセージの重大度のレベルには、Error (E)、Rejection (R)、Fatal Rejection (F) の 3 つがあります。
Severity	エラー・メッセージを表示させる原因となる状態の重大度は、カテゴリごとにさらに詳しく分類できます。 エラー・メッセージの重大度には、6 つのサブレベルがあります。それらは、None (N)、Low (L)、Medium (M)、High (H) および Crash (C) です。
Note	エラー・メッセージに関する説明的な情報です。

次の項では、エラー・メッセージの作成方法について説明します。

エラー・メッセージの作成

エラー・メッセージを作成する際には、Oracle Identity Manager によって、「**Key**」フィールドに一意の ID 番号が移入されます。エラー・メッセージを表示させる状態が発生した場合は、ダイアログ・ボックスに「**Description**」フィールドのテキストが表示されます。

次の手順は、エラー・メッセージの作成方法を示しています。

ヒント: エラー・メッセージ定義を作成した後、エラー・メッセージの表示回数のカウンタをリセットするには、「**Reset Count**」ボタンをクリックします。クリックすると、カウンタが 0 にリセットされます。

エラー・メッセージを作成するには、次のようにします。

1. 「Error Message Definition」フォームを開きます。
2. 「Code」フィールドに、エラー・メッセージ定義を表すコードを入力します。
3. 「Description」フィールドに、エラー・メッセージを入力します。
4. 「Remedy」フィールドに、エラー・メッセージを表示させる原因となる状態の修正方法を入力します。
5. 「Help URL」フィールドに、そのエラー・メッセージのオンライン・ヘルプ・トピックが含まれる URL へのリンクを入力します。

6. (オプション) 「Action」 参照フィールドをダブルクリックします。

「Lookup」 ダイアログ・ボックスが表示されたら、エラー・メッセージを表示させる原因となる状態の重大度を表すコードを選択します。次に、これらのコードを（重大度の低いものから順に）示します。

 - **Error (E)**。Oracle Identity Manager によってエラー・メッセージが格納され、関連するすべての操作のトリガーが停止されます。その上で、前の操作にロールバックされます。
 - **Rejection (R)**。Oracle Identity Manager によって拒否メッセージが格納されますが、後続の操作は実行可能です。
 - **Fatal Rejection (F)**。Oracle Identity Manager によって拒否メッセージが格納され、後続の操作のトリガーはすべて停止されます。ただし、致命的な拒否が発生するまでに実行されたすべての操作は保持されます。
7. (オプション) 「Severity」 参照フィールドをダブルクリックします。「Lookup」 ダイアログ・ボックスが表示されたら、コード (None (N)、Low (L)、Medium (M)、High (H) または Crash (C)) を選択します。このコードは、「Action」 参照フィールドに表示されるコードの詳細な分類を表します。
8. 「Note」 フィールドに、エラー・メッセージに関する説明的な情報を入力します。
9. 「Save」 をクリックします。

エラー・メッセージが作成されます。

10

ビジネス・ルール定義

この章では、Design Console のビジネス・ルール定義について説明します。次の内容について説明します。

- [概要](#)
- [「Event Handler Manager」フォーム](#)
- [「Data Object Manager」フォーム](#)
- [「Reconciliation Rules」フォーム](#)

概要

「Development Tools」 / 「Business Rule Definition」 フォルダは、システム管理者および開発者が使用できる、Oracle Identity Manager のイベント・ハンドラおよびデータ・オブジェクトを管理するためのツールを提供します。

このフォルダには次のフォームがあります。

- **Event Handler Manager:** このフォームでは、Oracle Identity Manager で使用されるイベント・ハンドラの作成と管理を行います。
- **Data Object Manager:** このフォームでは、データ・オブジェクトの定義、定義したデータ・オブジェクトへのイベント・ハンドラとアダプタの割当て、および関連付けられているアダプタ変数のマップを行います。

「Event Handler Manager」 フォーム

このフォームは、「Development Tools」 / 「Business Rule Definition」 フォルダ内に表示されます。このフォームでは、ユーザー定義のアクションまたは自動生成されたアクション（またはイベント）を処理する Java クラスを管理できます。これらのクラスはイベント・ハンドラと呼ばれます。新しいイベント・ハンドラを Oracle Identity Manager に追加する際には、Oracle Identity Manager が認識できるように、最初にこのフォームで登録する必要があります。

イベント・ハンドラには次の 2 種類があります。

- 「Adapter Factory」 フォームを介して作成されるイベント・ハンドラ。"adp" で始まります。これらはアダプタと呼ばれます。
- 最初に Oracle Identity Manager で作成されたイベント・ハンドラ。"tc" で始まります。これらは、システム・イベント・ハンドラと呼ばれます。

「Event Handler Manager」 フォームを介して、Oracle Identity Manager にいつイベント・ハンドラをトリガーさせるかを指定できます。イベント・ハンドラの実行は、次のようにスケジュールできます。

- **Pre-Insert:** データベースに情報が追加される前
- **Pre-Update:** データベースで情報が変更される前
- **Pre-Delete:** データベースから情報が削除される前
- **Post-Insert:** データベースに情報が追加された後
- **Post-Update:** データベースで情報が変更された後
- **Post-Delete:** データベースから情報が削除された後

図 10-1 は、「Event Handler Manager」 フォームを示しています。

図 10-1 「Event Handler Manager」 フォーム

表 10-1 に、「Event Handler Manager」 フォームのデータ・フィールドを示します。

表 10-1 データ・フィールド

フィールド名	説明
Event Handler Name	イベント・ハンドラの名前です。
Package	イベント・ハンドラが所属する Java パッケージです。
Pre-Insert	このチェック・ボックスを選択すると、データベースに情報が追加される前に、Oracle Identity Manager によってイベント・ハンドラがトリガーされます。
Pre-Update	このチェック・ボックスを選択すると、データベースで情報が変更される前に、Oracle Identity Manager によってイベント・ハンドラがトリガーされます。
Pre-Delete	このチェック・ボックスを選択すると、データベースから情報が削除される前に、Oracle Identity Manager によってイベント・ハンドラがトリガーされます。
Post-Insert	このチェック・ボックスを選択すると、データベースに情報が追加された後に、Oracle Identity Manager によってイベント・ハンドラがトリガーされます。
Post-Update	このチェック・ボックスを選択すると、データベースで情報が変更された後に、Oracle Identity Manager によってイベント・ハンドラがトリガーされます。
Post-Delete	このチェック・ボックスを選択すると、データベースから情報が削除された後に、Oracle Identity Manager によってイベント・ハンドラがトリガーされます。
Notes	イベント・ハンドラに関する追加情報です。

次の各項では、イベント・ハンドラの作成および変更の方法について説明します。

注意： イベント・ハンドラを使用するには、「Data Object Manager」フォームを使用して、イベント・ハンドラをデータ・オブジェクトにアタッチする必要があります。イベント・ハンドラのデータ・オブジェクトへの割当ての詳細は、10-5 ページの「「Data Object Manager」 フォーム」を参照してください。

注意： "adp" で始まるイベント・ハンドラは、すべてアダプタに関連付けられているため、変更できません。ただし、システム・イベント・ハンドラは変更可能です。システム・イベント・ハンドラは "tc" で始まります。

イベント・ハンドラの追加または変更

イベント・ハンドラを追加または変更するには、次のようにします。

1. 「Event Handler Manager」 フォームを開きます。
2. Oracle Identity Manager にイベント・ハンドラを追加するには、「Event Handler Name lookup」 フィールドにイベント・ハンドラの名前を入力します。

イベント・ハンドラを変更するには、「Event Handler Name lookup」 フィールドをダブルクリックします。

「Lookup」 ダイアログ・ボックスが表示されたら、編集するイベント・ハンドラを選択します。
3. 「Package」 フィールドを使用して、イベント・ハンドラが所属する Java パッケージの名前を追加または編集します。
4. それぞれのチェック・ボックスを選択または選択解除して、Oracle Identity Manager でイベント・ハンドラをトリガーさせるときとアクティブ化しないときを指定します。

イベント・ハンドラは、挿入前、更新前、削除前、挿入後、更新後および削除後に実行されるようにスケジュールできます。

重要： チェック・ボックスを選択しても、イベント・ハンドラがその時点で（たとえば挿入前に）トリガーされるわけではありません。これは、その時点でのイベント・ハンドラの実行が可能であることを意味しています。
5. 「Notes」 領域を使用して、イベント・ハンドラに関する説明的な情報を追加するか、情報を編集します。
6. 「Save」 をクリックします。

イベント・ハンドラが追加または変更されます。

「Data Object Manager」 フォーム

「Data Object Manager」 フォームは、「Development Tools」 / 「Business Rule Definition」 フォーム内に表示されます。このフォームは、次の目的に使用できます。

- データベースのデータを追加、変更または削除できるオブジェクトに、ルール・ジェネレータ・アダプタ、エンティティ・アダプタまたはイベント・ハンドラを割り当てる。

このタイプのオブジェクトはデータ・オブジェクトと呼ばれます。

スケジュール（挿入前、更新前、削除前、挿入後、更新後または削除後）に従って実行されるように、アダプタまたはイベント・ハンドラのスケジュールを設定します。

同じ実行スケジュールに属するアダプタまたはイベント・ハンドラがどの順番で Oracle Identity Manager によってトリガーされるかを構成します。

現在のデータ・オブジェクトを追加、変更および削除できるユーザー・グループを表示します。

アダプタの変数を適切なソースの場所およびターゲットの場所にマップします。

ヒント： アダプタ変数、ルール・ジェネレータ・アダプタおよびエンティティ・アダプタの詳細は、『Oracle Identity Manager Tools リファレンス・ガイド』を参照してください。

図 10-2 は、「Data Object Manager」 フォームを示しています。

図 10-2 「Data Object Manager」 フォーム

Assign	Event Handler Name	Pre-Insert Seq
	odpCONVERTTOLOWERCASE	1
	odpSOLARISHMDSTRINGGEN	2
	odpSETSOLARISASSET	3
	odpSETPASSWORDFROMMAIN	4

表 10-2 に、「Data Object Manager」 フォームのデータ・フィールドを示します。

表 10-2 データ・フィールド

フィールド	説明
Form Description	このデータ・オブジェクトに関連付けられているフォームの名前。
Data Object	イベント・ハンドラ、ルール・ジェネレータ・アダプタまたはエンティティ・アダプタを割り当てるデータ・オブジェクトの名前。

次の項では、ルール・ジェネレータ・アダプタ、エンティティ・アダプタまたはイベント・ハンドラが割り当てられるターゲット・データ・オブジェクトの選択方法を説明します。

ターゲット・データ・オブジェクトの選択

ターゲット・データ・オブジェクトを選択するには、次のようにします。

1. 「Data Object Manager」 フォームを開きます。
2. 「Form Description」 フィールドをダブルクリックします。
「Lookup」 ダイアログ・ボックスが表示されたら、イベント・ハンドラ、ルール・ジェネレータ・アダプタまたはエンティティ・アダプタを割り当てるデータ・オブジェクトに関連付けられているフォームの名前を選択します。
フォームを選択すると、対応するデータ・オブジェクトの名前が「Data Object」 フィールドに表示されます。
3. 「Save」 をクリックします。
ターゲット・データ・オブジェクトが選択されます。これで、ルール・ジェネレータ・アダプタ、エンティティ・アダプタおよびイベント・ハンドラにルールを割り当てるための準備が完了しました。

「Data Object Manager」 フォームのタブ

「Data Object Manager」 フォームを起動してターゲット・データ・オブジェクトを選択すると、フォームのタブが機能するようになります。

「Data Object Manager」 フォームには、次のタブが含まれます。

- Attach Handlers
- Map Adapters

それぞれのタブについて、次の各項で説明します。

「Attach Handlers」 タブ

このタブを使用して、データ・オブジェクトに割り当てる、もしくはデータ・オブジェクトから削除するルール・ジェネレータ・アダプタ、エンティティ・アダプタまたはイベント・ハンドラを選択します。その際には、次の手順も行います。

- 割り当てられたイベント・ハンドラまたはアダプタが、Oracle Identity Manager によって（挿入前、更新前、削除前、挿入後、更新後または削除後の）いつトリガーされるかを指定します。
- 同じ実行スケジュールに属するアダプタまたはイベント・ハンドラがどの順番で Oracle Identity Manager によってトリガーされるかを設定します。

Oracle Identity Manager によるトリガーが不要になったイベント・ハンドラ、ルール・ジェネレータ・アダプタまたはエンティティ・アダプタは、データ・オブジェクトから削除する必要があります。

たとえば、adpCONVERTTOLOWERCASE、adpSOLARISHMDSTRINGGEN、adpSETSOLARISASSET および adpSETPASSWORDFROMMAIN の各アダプタが、挿入前に Oracle Identity Manager によってトリガーされるとします。これらのアダプタの順序番号に基づいて、Oracle Identity Manager は、最初に adpCONVERTTOLOWERCASE アダプタ、続いて adpSOLARISHMDSTRINGGEN、adpSETSOLARISASSET および adpSETPASSWORDFROMMAIN の各アダプタをそれぞれトリガーします。

注意：現在のデータ・オブジェクトの追加、変更および削除を行えるユーザー・グループを表示するには、「Insert Permissions」、「Update Permissions」または「Delete Permissions」の各タブをそれぞれクリックします。

次の各項では、これらの手順について説明します。

- データ・オブジェクトへのイベント・ハンドラ、ルール・ジェネレータ・アダプタまたはエンティティ・アダプタの割当て
- イベント・ハンドラまたはアダプタの実行スケジュールの構成
- データ・オブジェクトからのイベント・ハンドラ、ルール・ジェネレータ・アダプタまたはエンティティ・アダプタの削除

データ・オブジェクトへのイベント・ハンドラまたはアダプタの割当て

イベント・ハンドラまたはアダプタを割り当てるには、次のようにします。

1. アダプタまたはイベント・ハンドラをいつトリガーさせるかに応じて、「Data Object Manager」フォームのタブを選択します。
たとえば、挿入前にアダプタをアクティブ化する場合は、「Pre-Insert」タブを選択します。
2. 選択したタブから「Assign」をクリックします。
「Assignment」ダイアログ・ボックスが表示されます。
3. イベント・ハンドラまたはアダプタを選択し、データ・オブジェクトに割り当てます。
4. 「OK」をクリックします。
イベント・ハンドラまたはアダプタがデータ・オブジェクトに割り当てられます。

イベント・ハンドラまたはアダプタの実行スケジュールの構成

実行スケジュールを構成するには、次のようにします。

1. 実行スケジュールを変更するイベント・ハンドラまたはアダプタを選択します。
2. 「Assign」をクリックします。
「Assignment」ダイアログ・ボックスが表示されます。
3. イベント・ハンドラまたはアダプタを選択します。
4. 「Up」をクリックすると、選択したイベント・ハンドラまたはアダプタの位置と順序番号が、その前のイベント・ハンドラまたはアダプタと入れ替わります。
「Down」をクリックすると、選択したイベント・ハンドラまたはアダプタの位置と順序番号が、その次のイベント・ハンドラまたはアダプタと入れ替わります。
5. すべてのイベント・ハンドラとアダプタの順序番号が適切に設定されるまで、手順3と4を繰り返します。
6. 「OK」をクリックします。
これ以降は、イベント・ハンドラおよびアダプタが、実行スケジュールまたは独自に構成したスケジュールの適切な順序でトリガーされます。

データ・オブジェクトからのイベント・ハンドラまたはアダプタの削除

イベント・ハンドラまたはアダプタを削除するには、次のようにします。

1. 目的のイベント・ハンドラまたはアダプタを選択します。
2. 「Delete」をクリックします。
イベント・ハンドラまたはアダプタが削除されます。

「Map Adapters」 タブ

「Map Adapters」タブは、ルール・ジェネレータ・アダプタまたはエンティティ・アダプタをデータ・オブジェクトに割り当てた後のみ機能します。

このタブを使用して、ルール・ジェネレータ・アダプタまたはエンティティ・アダプタの変数を、それぞれに適したソースおよびターゲットの場所にマップできます。たとえば、**adpSOLARISUSERIDGENERATOR** アダプタに `firstname`、Adapter return value および `lastname` の3つの変数があるとします。各アダプタ変数の「Mapped」列に「Y」が表示されている場合は、3つの変数がすべて正しい場所にマップされており、アダプタのステータスが「Ready」に変わります。

注意： アダプタのステータスは、次の3つのいずれかになります。

- **Ready:** このアダプタは正常にコンパイルされており、すべての変数が正しくマップされています。
 - **Mapping Incomplete:** このアダプタは正常にコンパイルされていますが、正しくマップされていない変数が少なくとも1つあります。
-

アダプタのコンパイルおよびアダプタ変数のマッピングの詳細は、『Oracle Identity Manager Tools リファレンス・ガイド』を参照してください。

注意： データ・オブジェクトにアダプタが割り当てられていない場合は、「Map Adapters」タブが無効になります。

「Reconciliation Rules」 フォーム

このフォームは「Development Tools」フォルダにあります。このフォームを使用して、次のような場合に起動するルールを定義します。

- 信頼するソースへの変更に関連付けられているユーザーまたは組織のレコードを Oracle Identity Manager が判別する場合。これらのルールは、「Reconciliation Manager」フォームの「Reconciliation Data」タブで、リコンシリエーション・イベントのすべての必須フィールドが処理されると同時に評価されます。
- (たとえば、システムで変更が検出されたことを受けて) どのユーザー・レコードまたは組織レコードがターゲット・ソースで検出されたアカウントの所有者かを Oracle Identity Manager が判別する場合。これらのルールは、「Reconciliation Manager」フォームの「Reconciliation Data」タブで、リコンシリエーション・イベントのすべての必須フィールドが処理され、同フォームの「Processes Matched Tree」タブのイベントと一致するプロセスがなかった場合のみ評価されます。

前述のように、このフォームで定義されたルールは、信頼されるソースまたはターゲットのリソースでの変更に関連付けられているユーザーまたは組織のどちらかの一致に使用されます。これらのタイプのルールは、それぞれユーザー一致ルールまたは組織一致ルールと呼ばれます。これらのルールは、「Rule Designer」フォームで定義するルールと似ていますが、「Reconciliation Rules」フォームで作成されたルールは、(単一のターゲット・リソースに関連するため) リソース・オブジェクト固有で、リコンシリエーション関連の機能のみに影響します。

リコンシリエーション・ルールの定義

次の手順は、リコンシリエーション・ルールの定義方法について説明しています。

注意： 次の手順の中で、必ず「**Active**」チェック・ボックスが選択されていることを確認してください。このチェック・ボックスが選択されていない場合は、リソースに関連するリコンシリエーション・イベントの処理時に、Oracle Identity Manager のリコンシリエーション・エンジンによってルールが評価されません。ただし、このチェック・ボックスを選択できるのは、Oracle Identity Manager によって「**Valid**」システム・チェック・ボックスが選択されている場合のみです。「**Valid**」チェック・ボックスは、少なくとも1つのルール要素が作成され、そのルール要素のロジックが有効であると Oracle Identity Manager によって判断された後でなければ選択されません。

ユーザーの一致または組織の一致用にリコンシリエーション・ルールを定義するには、次のようにします。

1. 「Reconciliation Rules」フォームにアクセスします。
2. 「Name」フィールドにルールの名前を入力します。
3. 「Object」フィールドで、このルールを関連付けるターゲット・リソースを選択します。
4. 「Description」フィールドにルールの説明を入力します。

ルールに使用する **And** 演算子または **Or** 演算子を選択します。「**And**」を選択した場合は、ルールのすべての要素（およびルールがネストされている場合はそれらのルール）が一致しなければ、ルールが **true** と評価されません。「**Or**」を選択した場合は、ルールのいずれかの要素（またはルールがネストされている場合はそのいずれか）が一致すれば、**true** と評価されます。

5. 「Save」をクリックします。

ルール定義が保存されます。次に、このルールのルール要素を作成する必要があります。

ルール要素の追加

リコンシリエーション・ルールの個々の要素を定義するには、次のようにします。

1. 要素を追加するルール定義にアクセスします。
2. 「Rule Elements」タブの「Add Rule Element」をクリックします。
「Add Rule Element」ダイアログ・ボックスが表示されます。
3. 「Rule Element」タブをクリックします。
4. 「User Data」メニューからユーザー関連のデータ項目を選択します。

ここで選択した項目が、ルール要素の評価時に Oracle Identity Manager によって調査されるユーザー・データ要素になります。このメニューには、「Oracle Users」フォームのすべてのフィールド（作成済のユーザー定義フィールドを含む）が表示されます。

注意： 定義するルールが組織一致用の場合は、データの変数とメニューの名前の両方が、ユーザーではなく組織に関連します。

5. 「Operator」メニューから演算子を選択します。

これは、ルール要素の評価時に、選択したデータ項目の属性に Oracle Identity Manager によって適用される条件です。有効な演算子は次のとおりです。

- **Equals:** このオプションを選択した場合、ユーザーまたは組織のレコードのデータ要素は、選択された属性と完全に一致する必要があります。
- **Contains:** このオプションを選択した場合、ユーザーまたは組織のレコードのデータ要素は、選択された属性を含むのみで、完全には一致しない必要があります。
- **Start with:** このオプションを選択した場合、ユーザーまたは組織のレコードのデータ要素は、選択された属性で始まる必要があります。
- **End with:** このオプションを選択した場合、ユーザーまたは組織のレコードのデータ要素は、選択された属性で終わる必要があります。

6. 「Attribute」メニューから値を選択します。このメニューに含まれる値は、ルールに関連付けられているリソースに対して、「Reconciliation Fields」タブで定義されたフィールドです。そのリソースのリコンシリエーション・フィールドが指定されていない場合は、使用できる値が表示されません。

注意: (信頼できるソースとは対照的に) ターゲット・リソースのルール要素を定義する際には、リソースのカスタム・プロセス・フォームの親表に関連付けられているフィールドのみが、「Attribute」フィールドで選択可能になります。

7. 「Attribute」フィールド内のデータに対して (演算子を適用する前に) 特定の変換処理が実行されるようにするには、「Transform」メニューから目的の変換処理を選択します。

注意: このメニューで「None」以外の値を選択した場合は、Oracle Identity Manager によって変換処理が適切に実行されるように、「Save」をクリックした後でタブをクリックし、適切なプロパティを設定する必要があります。

表 10-3 に、実行できる変換処理を示します。

表 10-3 変換プロパティ

変換	「Rule Element Properties」タブで設定するプロパティ
Substring	Start Point、End Point
Endstring	Start Point
Tokenize	Delimiters、Token Number、Space Delimiter

8. 「Case-Sensitive」チェック・ボックスを設定します。

このチェック・ボックスを選択した場合、ルール要素が条件と一致するには、「Attribute」フィールドで選択された値の大 / 小文字が、リコンシリエーション・イベント・レコードで評価される値と完全に一致する必要があります。このチェック・ボックスを選択しなかった場合、「Attribute」フィールドで選択された値の大 / 小文字は、リコンシリエーション・イベント・レコードで評価される値と一致する必要はありません。

9. 「Save」をクリックします。

10. 「Transform」メニューで (「None」以外の) 値が選択されていても、変換処理のプロパティが設定されていなければ、「Properties Set」チェック・ボックスは選択されません。

その場合は、「Rule Element Properties」タブを選択し、適切なプロパティを設定して、再度「Save」をクリックする必要があります。

ルール要素がルールに追加されます。

11. この手順全体を、ルールに追加するルール要素ごとに繰り返します。

注意: 「Active」 チェック・ボックスが選択されていることを確認してください。

ルールへのルールのネスト

ルールの中に既存のルールをネストできます。Oracle Identity Manager では、ルールの他の要素と同じ方法で、ネストされたルールの条件が評価されます。

注意: ダイアログ・ボックスで選択できるのは、同じリソース・オブジェクトに関連付けられているリコンシリエーション関連のルールのみです。

ルールの中にルールをネストするには、次のようにします。

1. 別のルールを追加するルールにアクセスします。
2. 「Rule Elements」 タブの「Add Rule」をクリックします。
3. 「Rule Choice」 参照ダイアログ・ボックスが表示されます。
目的のルールの場所を特定し、選択します。
4. 「OK」をクリックします。
選択したリコンシリエーション・ルールがルールに追加されます。
5. ルールにネストさせるルールごとに、手順 2 ~ 4 を繰り返します。

ルール要素またはルールの削除

ルール要素またはルールを削除するには、次のようにします。

1. 要素を削除するルールにアクセスします。
2. 「Rule Elements」 タブで、削除するルール要素またはルールを選択します。
3. 「Delete」をクリックします。

Oracle Identity Manager のロギング機能

この章では、Oracle Identity Manager のロギング機能について説明します。次の内容について説明します。

- [概要](#)
- [ログ・レベルの設定](#)

概要

Oracle Identity Manager には、アプリケーションで実行されるアクティビティに関連するログ・ファイルの作成機能があらかじめインストールされています。これらのログ・ファイルに記録される情報のレベル、ログ・ファイルの場所、およびログ・ファイルへの情報のアーカイブ頻度は、構成ファイルでカスタマイズできます。また、Oracle Identity Manager では、標準のエラーおよび標準の出力メッセージを含むファイルも提供しています。

Oracle Identity Manager で作成されるログ・ファイルを使用して、アプリケーションの様々なモジュール（Adapter Factory や Task Scheduler など）で実行されるアクティビティを追跡したり、エラー・メッセージやデータベースに対して実行される問合せを監視できます。このような追跡と監視のアクティビティは、発生の可能性がある問題のトラブルシューティングや、予測されるアプリケーションの動作のテストに役立ちます。

制御可能な項目は次のとおりです。

- 情報のレベル。このレベルによって、ログに書き込まれる詳細情報の量が決まります。
- ログを定期的にアーカイブするかどうか。また、アーカイブの基準をユーザー指定の時間範囲と最大ファイル・サイズのどちらにするか。
- ログ・ファイルを置く場所。

ログ・ファイルの場所とそのプロパティは、<XL_DC_HOME>/xlclient/config/ ディレクトリにある log.properties というプロパティ・ファイルによって制御されます。

ログ・レベルの設定

Oracle Identity Manager では、ロギングに log4j が使用されます。Design Console のロギング・レベルは、<XL_DC_HOME>%xlclient%config ディレクトリにあるロギング・プロパティ・ファイル log.properties で構成されます。デフォルトでは、すべての Oracle Identity Manager コンポーネントは警告レベルでログが出力されるように構成されています。ログ・レベルの変更は、すべてのコンポーネントに対して行うことも、個別のコンポーネント（Design Console など）に対しても行うこともできます。

Oracle Identity Manager コンポーネントは、<XL_DC_HOME>%xlclient%config%log.properties ファイルの XELLERATE セクションにリストされています。次に例を示します。

```
log4j.logger.XELLERATE=WARN
log4j.logger.XELLERATE.DDM=DEBUG
log4j.logger.XELLERATE.ACCOUNTMANAGEMENT=DEBUG
log4j.logger.XELLERATE.SERVER=DEBUG
log4j.logger.XELLERATE.RESOURCEMANAGEMENT=DEBUG
log4j.logger.XELLERATE.REQUESTS=DEBUG
log4j.logger.XELLERATE.WORKFLOW=DEBUG
log4j.logger.XELLERATE.WEBAPP=DEBUG
log4j.logger.XELLERATE.SCHEDULER=DEBUG
log4j.logger.XELLERATE.SCHEDULER.Task=DEBUG
log4j.logger.XELLERATE.ADAPTERS=DEBUG
log4j.logger.XELLERATE.JAVACLIENT=DEBUG
log4j.logger.XELLERATE.POLICIES=DEBUG
log4j.logger.XELLERATE.RULES=DEBUG
log4j.logger.XELLERATE.DATABASE=DEBUG
log4j.logger.XELLERATE.APIS=DEBUG
log4j.logger.XELLERATE.OBJECTMANAGEMENT=DEBUG
log4j.logger.XELLERATE.JMS=DEBUG
log4j.logger.XELLERATE.REMOTEMANAGER=DEBUG
log4j.logger.XELLERATE.CACHEMANAGEMENT=DEBUG
log4j.logger.XELLERATE.ATTESTATION=DEBUG
log4j.logger.XELLERATE.AUDITOR=DEBUG
```


Design のログ・レベルを設定するには、<XL_DC_HOME>%xlclient%\config\log.properties ファイルを次のように編集します。

1. <XL_DC_HOME>%xlclient%\config\log.properties ファイルをテキスト・エディタで開きます。このファイルには、Oracle Identity Manager の共通設定と、Oracle Identity Manager を構成するコンポーネントやモジュールごとの設定が含まれています。

次に示すように、デフォルトでは Oracle Identity Manager は警告レベルでログが出力されるように構成されています。

```
log4j.logger.XELLERATE=WARN
```

これは Oracle Identity Manager の共通の値です。個別のコンポーネントやモジュールは、プロパティ・ファイル内のこの共通値の後にリストされています。コンポーネントやモジュールごとに異なるログ・レベルを設定することもできます。特定のコンポーネントに設定したログ・レベルは共通設定よりも優先されます。

2. 共通値を目的のログ・レベルに設定します。サポートされているログ・レベルは次のとおりです。記録される情報量が多い順に並んでいます（最も多いのが DEBUG、最も少ないのが FATAL）。
 - DEBUG
 - INFO
 - WARN
 - ERROR
 - FATAL
3. コンポーネントやモジュールにはそれぞれ異なるログ・レベルを設定できます。たとえば、Design Console のログ・レベルを DEBUG にするには、次の値を設定します。

```
log4j.logger.XELLERATE=WARN
log4j.logger.XELLERATE.ACCOUNTMANAGEMENT=INFO
log4j.logger.XELLERATE.JAVACLIENT=DEBUG
```

4. 変更を保存します。
5. Design Console を再起動して変更を反映させます。

A

リファレンス

この付録では、Design Console の各種の表を示します。

表

後述の表は、次のものを示しています。

- ルールのルール要素の追加または変更時に選択できるパラメータ
- 電子メール定義の作成または編集時に設定するパラメータおよび変数
- Oracle Identity Manager フォームの作成に使用できるデータ型
- Oracle Identity Manager に対して設定できるシステム・プロパティ

ルール要素

次の表は、「**Rule Designer**」フォームを使用して Oracle Identity Manager ルールを作成するときに使用できるルール要素のリストを示しています。

タイプ	サブタイプ	属性ソース	
General	N/A	User Profile Data	Email
			End Date
			First Name
			Identity
			Last Name
			Manager Full Name
			Manager Login
			Middle Name
			Organization Name
			Role
General	N/A	User Profile Data	Start Date
			Status
			User Group Name
			User Login
			Oracle Identity Manager Type
			Email
			「Users」フォームの「User Profile」タブの「User Defined Fields」リージョンに表示されるフィールド

タイプ	サブタイプ	属性ソース	
Process Determination	Organization Provisioning	Requester Information	Email
			End Date
			First Name
			Identity
			Last Name
			Location Name
			Manager Full Name
			Manager Login
			Middle Name
			Organization Name
			Role
			Start Date
			State
			Status
			User Group Name
		User Login	
		Oracle Identity Manager Type	
		「Users」 フォームの「User Profile」 タブの「User Defined Fields」 リージョンに表示されるフィールド	
		Object Information	Object Name
			Object Type
		Request Target Information	Organization Customer Type
			Organization Name
			Organization Status
Parent Organization			
Object Data Information	「Organizations」 フォームの「User Defined Fields」 タブに表示されるフィールド		
	リソース・オブジェクトに関連付けられているカスタム・フォームの「Form Designer」 フォームの「Additional Columns」 タブに表示されるフィールド		
Process Data Information	プロセスに関連付けられているカスタム・フォームの「Form Designer」 フォームの「Additional Columns」 タブに表示されるフィールド		

タイプ	サブタイプ	属性ソース	
	User Provisioning	Requester Information;	Additional Address Info Email
		Request Target Information	End Date First Name Identity Last Name Manager Full Name Manager Login Middle Name Organization Name Role Start Date Status User Group Name User Login Oracle Identity Manager Type
Process Determination	User Provisioning	Requester Information; Request Target Information	「Users」フォームの「User Profile」タブの「User Defined Fields」リージョンに表示されるフィールド
		Object Information	Object Name Object Type
		Object Data Information	リソース・オブジェクトに関連付けられているカスタム・フォームの「Form Designer」フォームの「Additional Columns」タブに表示されるフィールド
		Process Data Information	プロセスに関連付けられているカスタム・フォームの「Form Designer」フォームの「Additional Columns」タブに表示されるフィールド

タイプ	サブタイプ	属性ソース	
	Approval; Standard Approval	Requester Information	Email End Date First Name Identity Last Name Manager Full Name Manager Login Middle Name Organization Name Role Start Date Status User Group Name User Login Oracle Identity Manager Type 「Users」フォームの「User Profile」タブの「User Defined Fields」リージョンに表示されるフィールド
		RequestInformation	Request Creation Date Request ID Request Object Action Request Priority Requestor
Process Determination	Approval	Object Information	Object Name Object Type
		Object Data Information	リソース・オブジェクトに関連付けられているカスタム・フォームの「Form Designer」フォームの「Additional Columns」タブに表示されるフィールド
		Process Data Information	プロセスに関連付けられているカスタム・フォームの「Form Designer」フォームの「Additional Columns」タブに表示されるフィールド

タイプ	サブタイプ	属性ソース
Task Assignment	Organization Provisioning; User Provisioning	Task Information <ul style="list-style-type: none"> Allow Cancellation while Pending Allow Multiple Instances Assign Task to Manager Disable Manual Insert Task Conditional Task Data Label Task Default Assignee Task Name Task Required for Completion Task Sequence Process Information <ul style="list-style-type: none"> Object Name Process Name Process Type Object Information <ul style="list-style-type: none"> Object Name Object Type Requester Information <ul style="list-style-type: none"> Email End Date First Name Identity

タイプ	サブタイプ	属性ソース	
Task Assignment	Organization Provisioning; User Provisioning	Requester Information	Last Name
			Manager Full Name
			Manager Login
			Middle Name
			Organization Name
			Role
			Start Date
			State
			Status
			User Group Name
User Login			
Oracle Identity Manager Type			
			「 Users 」 フォームの「 User Profile 」 タブの「 User Defined Fields 」 リージョンに表示されるフィールド
	Object Data Information		リソース・オブジェクトに関連付けられているカスタム・フォームの「 Form Designer 」 フォームの「 Additional Columns 」 タブに表示されるフィールド
	Process Data Information		プロセスに関連付けられているカスタム・フォームの「 Form Designer 」 フォームの「 Additional Columns 」 タブに表示されるフィールド
Pre-Populate	Organization Provisioning; User Provisioning	Requester Information	Email
			End Date
			First Name
			Identity
			Last Name
			Manager Full Name
			Manager Login
			Middle Name
			Organization Name

タイプ	サブタイプ	属性ソース		
Pre-Populate	Organization Provisioning; User Provisioning	Requester Information	Role	
			Start Date	
			Status	
			User Group Name	
			User Login	
			Email	
				「Users」 フォームの「User Profile」 タブの「User Defined Fields」 リージョンに表示されるフィールド
		Request Information	Request Creation Date	
			Request ID	
			Request Object Action	
			Request Priority	
		Object Information	Requestor	
Object Name				
Object Data Information	Object Type			
	リソース・オブジェクトに関連付けられているカスタム・フォームの「Form Designer」 フォームの「Additional Columns」 タブに表示されるフィールド			
Process Data Information	プロセスに関連付けられているカスタム・フォームの「Form Designer」 フォームの「Additional Columns」 タブに表示されるフィールド			
Organization Provisioning	Request Target Information	Organization Customer Type		
		Organization Name		
		Organization Status		
		Parent Organization		
		「Organizations」 フォームの「User Defined Fields」 タブに表示されるフィールド		
		User Provisioning	Request Target Information	Email
				End Date
				First Name
				Identity
				Last Name
				Manager Full Name
		Manager Login		

タイプ	サブタイプ	属性ソース
Pre-Populate	User Provisioning	Request Target Information
		Middle Name
		Organization Name
		Province
		Region
		Role
		Start Date
		Status
		User Group Name
		User Login
		Oracle Identity Manager Type
		Email
		「Users」 フォームの「User Profile」 タブの「User Defined Fields」 リージョンに表示されるフィールド

電子メールの変数

次の表は、「Email Definition」 フォームを使用して電子メール・テンプレートを作成するときに使用できる変数のリストを示しています。

タイプ	ターゲット	場所のタイプ	宛先タイプ	変数
Provisioning Related	User Profile Information; Assignee Profile Information	N/A	N/A	First Name
				Identity
				Last Name
				Manager Login
				Middle Name
				Role
				Status
				User End Date
				User Group Name
				User Login
				User Manager
User Start Date				
Oracle Identity Manager Type				
Provisioning Related	User Profile Information; Assignee Profile Information	N/A	N/A	「Users」 フォームの「User Profile」 タブの「User Defined Fields」 リージョンに表示されるフィールド
				Object Information
	Object Information	N/A	N/A	Object Name
				Object Target Type

タイプ	ターゲット	場所のタイプ	宛先タイプ	変数
	Process Information	N/A	N/A	Object Type Object Name Process Name Process Type
	Object Data Information	N/A	N/A	リソース・オブジェクトに関連付けられているカスタム・フォームの「 Form Designer 」フォームの「 Additional Columns 」タブに表示されるフィールド
	Process Data Information	N/A	N/A	プロセスに関連付けられているカスタム・フォームの「 Form Designer 」フォームの「 Additional Columns 」タブに表示されるフィールド
Request Related	Requester Information	N/A	N/A	First Name Identity Email Address Manager Login Middle Name Role Status User End Date User Group Name User Login User Manager User Start Date Oracle Identity Manager Type 「 Users 」フォームの「 User Profile 」タブの「 User Defined Fields 」リージョンに表示されるフィールド
Request Related	Request Information	N/A	N/A	First Name Identity Last Name Email Address Manager Login Role Status

タイプ	ターゲット	場所のタイプ	宛先タイプ	変数
				User End Date User Group Name User Login User Manager User Start Date Oracle Identity Manager Type 「Users」 フォームの「User Profile」 タブの「User Defined Fields」 リージョンに表示されるフィールド
Request Related	Request Information	N/A	N/A	List of objects being requested List of targets being provisioned Request Creation Date Request ID Request Name Request Object Action Request Priority Requestor Number
General	User Profile Information	N/A	N/A	First Name Identity Last Name Email Address Manager Login Middle Name Role Status User End Date User Group Name User Login User Manager User Start Date Oracle Identity Manager Type 「Users」 フォームの「User Profile」 タブの「User Defined Fields」 リージョンに表示されるフィールド

データ型

次の表は、「Form Designer」フォームを使用して Oracle Identity Manager フォームを作成するときに使用できるデータ型のリストとその説明を示しています。

注意：データ・フィールドの変数タイプが「Long」、「Short」、「Double」または「Integer」の場合、「Property Name」ボックスが選択されると、「Minimum Numeric Value」と「Maximum Numeric Value」の2つの選択項目が追加で表示されます。これらの項目を使用すると、データ・フィールドの数値範囲を設定できます。

たとえば、データ・フィールドの変数タイプが「Integer」の場合、「Minimum Numeric Value」を10、「Maximum Numeric Value」を15に設定すると、データ・フィールドに表示できる有効なエントリは10、11、12、13、14 および 15 のみになります。

データ型	データ・プロパティ	説明
Text Field	Required	フォームを保存するためにこのテキスト・フィールドへの移入を必要にする場合は、対応する「Property Value」テキスト・ボックスに「true」を入力します。それ以外の場合は、このテキスト・ボックスに「false」を入力します。 注意： このデータ・プロパティのデフォルト値は false です。
	Is Visible	Oracle Identity Manager でのフォーム生成時にこのテキスト・フィールドを表示する場合は、対応する「Property Value」テキスト・ボックスに「true」を入力します。それ以外の場合は、このテキスト・ボックスに「false」を入力します。 注意： このデータ・プロパティのデフォルト値は true です。
Lookup Field	Auto Complete	対応する「Property Value」テキスト・ボックスに「true」を入力すると、Oracle Identity Manager によって「Lookup」フィールドがフィルタリングされます。このため、ユーザーは、「Lookup」フィールドに文字を追加してからダブルクリックできます。これを行うことにより、Lookup ウィンドウにはこれらの文字と一致する参照値のみが表示されます。 たとえば、「State」参照フィールドに対して、ユーザーはフィールドに「new」を入力できます。この場合、ユーザーが「Lookup」フィールドをダブルクリックすると、「new」という文字で始まる州（たとえば、New Hampshire、New Jersey、New Mexico、New York など）のみが Lookup ウィンドウに表示されます。Oracle Identity Manager により「Lookup」フィールドのフィルタリングが行われないようにする場合は、関連付けられた「Property Value」テキスト・ボックスに「false」を入力します。 「Auto Complete」プロパティのデフォルト・プロパティ値は false です。
	Column Captions	対応する「Property Value」テキスト・ボックスに、ユーザーが「Lookup」フィールドをダブルクリックすると Lookup ウィンドウに表示される列ヘッダーの名前を入力します。Lookup ウィンドウに複数の列がある場合は、「Property Value」テキスト・ボックスに各列ヘッダーをカンマで区切って入力します（例：Organization Name, Organization Status）。

データ型	データ・プロパティ	説明
Lookup Field	Column Names	<p>対応する「Property Value」テキスト・ボックスに、Lookup ウィンドウに表示する列キャプションを表すデータベース列の名前を入力します。</p> <p>Lookup ウィンドウに複数の列がある場合は、「Property Value」テキスト・ボックスに各データベース列をカンマで区切って入力します。</p>
	Column Widths	<p>対応する「Property Value」テキスト・ボックスに、Lookup ウィンドウに表示される列の幅を入力します。</p> <p>Lookup ウィンドウに複数の列がある場合は、「Property Value」テキスト・ボックスに各列の幅をカンマで区切って入力します（例：20,20）。</p>
	Lookup Column Name	<p>対応する「Property Value」テキスト・ボックスに、（データベース内に表示される）「Lookup」列の名前を入力します。これには、Lookup ウィンドウの列ヘッダーの下に表示する必要のあるエントリを含めます。</p> <p>Lookup ウィンドウに複数の列がある場合は、「Property Value」テキスト・ボックスに各データベース列をカンマで区切って入力します（例：org_name,org_status）。</p>
	Lookup Query	<p>対応する「Property Value」テキスト・ボックスに、ユーザーが「Lookup」フィールドをダブルクリックすると実行される SQL 問合せの名前を入力します。その結果、Lookup ウィンドウに適切な「Lookup」列が表示されます。</p> <p>問合せから返されたデータを正しく表示するには、xlWebAdmin_locale.properties ファイルに lookupfield.header プロパティを追加する必要があります。たとえば、select usr_status from usr という SQL 問合せを考えてみます。この問合せから返されたデータを表示するには、xlWebAdmin_locale.properties ファイルに次のエントリを追加する必要があります。</p> <pre>lookupfield.header.users.status=User Status</pre> <p>指定した問合せの lookupfield.header プロパティが xlWebAdmin_locale.properties ファイルに含まれていない場合、対応する参照アイコンをクリックすると、管理およびユーザー・コンソールに参照ウィンドウが表示されます。</p> <p>lookupfield.header プロパティの構文は次のとおりです。</p> <pre>lookupfield.header.column_code=display value</pre> <p>エントリの column_code の部分は小文字にし、スペースはアンダースコア (_) で置き換える必要があります。</p> <p>デフォルトでは、システム・リソース・バンドル内で、参照フィールド列ヘッダーに対する次のエントリがすでに使用可能になっています。</p> <pre>lookupfield.header.lookup_definition.lookup_code_information .code_key=Value lookupfield.header.lookup_definition.lookup_code_information .decode=Description lookupfield.header.users.manager_login=User ID lookupfield.header.organizations.organization_name=Name lookupfield.header.it_resources.key=Key lookupfield.header.it_resources.name=Instance Name lookupfield.header.users.user_id=User ID lookupfield.header.users.last_name=Last Name lookupfield.header.users.first_name=First Name lookupfield.header.groups.group_name=Group Name lookupfield.header.objects.name=Resource Name lookupfield.header.access_policies.name=Access Policy Name</pre>

データ型	データ・プロパティ	説明
Lookup Field	Lookup Code	<p>対応する「Property Value」テキスト・ボックスに、参照定義コードを入力します。このコードには、参照値や、参照値を選択したときに参照フィールドとともに表示されるテキストなど、参照フィールドに関連するすべての情報が含まれます。</p> <p>重要: 「Lookup Code」データ・プロパティは、「Column Captions」、「Column Names」、「Column Widths」、「Lookup Column Name」および「Lookup Query」プロパティのかわりに使用できます。さらに、「Lookup Code」プロパティに含まれる情報は、この5つのデータ・プロパティに設定されている値より優先されます。</p> <p>ヒント: 参照コードを入力する簡単な方法は、「Lookup Definition」フォームを起動して目的のコードを問い合わせ、このコードをクリップボードにコピーして「Lookup Code」フィールドに貼り付けることです。</p> <p>注意: 参照定義コードの分類タイプは「Lookup Type」である必要があります（「Lookup Definition」フォームの「Lookup Type」ラジオ・ボタンが選択されている必要があります）。</p>
	Required	<p>フォームを保存するために「Lookup」フィールドへの移入を必要にする場合は、対応する「Property Value」テキスト・ボックスに「true」を入力します。それ以外の場合は、このテキスト・ボックスに「false」を入力します。</p> <p>注意: このデータ・プロパティのデフォルト値は false です。</p>
	Visible Field	<p>Oracle Identity Manager でのフォーム生成時にこの「Lookup」フィールドを表示する場合は、対応する「Property Value」テキスト・ボックスに「true」を入力します。それ以外の場合は、このテキスト・ボックスに「false」を入力します。</p> <p>注意: このデータ・プロパティのデフォルト値は true です。</p>
Text Area	Number of Rows	<p>対応する「Property Value」テキスト・ボックスに、テキスト領域の行の長さを入力します。したがって、テキスト領域の長さを5行にする場合は、「Property Value」テキスト・ボックスに「5」を入力します。</p>
	Required	<p>フォームを保存するためにこのテキスト領域への移入を必要にする場合は、対応する「Property Value」テキスト・ボックスに「true」を入力します。それ以外の場合は、このテキスト・ボックスに「false」を入力します。</p> <p>注意: このデータ・プロパティのデフォルト値は false です。</p>
	Visible Field	<p>Oracle Identity Manager でのフォーム生成時にこのテキスト領域を表示する場合は、対応する「Property Value」テキスト・ボックスに「true」を入力します。それ以外の場合は、このテキスト・ボックスに「false」を入力します。</p> <p>注意: このデータ・プロパティのデフォルト値は true です。</p>
IT Resource Lookup Field	Type	<p>このデータ・プロパティを選択すると、「Property Value」テキスト・ボックス内にボックスが表示されます。このボックスから、IT リソースのサーバーのタイプを選択します。</p> <p>重要: このプロパティは必須です。</p>
	Required	<p>フォームを保存するためにこの「Lookup」フィールドへの移入を必要にする場合は、対応する「Property Value」テキスト・ボックスに「true」を入力します。それ以外の場合は、このテキスト・ボックスに「false」を入力します。</p> <p>注意: このデータ・プロパティのデフォルト値は false です。</p>
	Visible Field	<p>Oracle Identity Manager でのフォーム生成時にこの「Lookup」フィールドを表示する場合は、対応する「Property Value」テキスト・ボックスに「true」を入力します。それ以外の場合は、このテキスト・ボックスに「false」を入力します。</p> <p>注意: このデータ・プロパティのデフォルト値は true です。</p>

データ型	データ・プロパティ	説明
Date Field (Display Only)	Visible Field	Oracle Identity Manager でのフォーム生成時にこのテキスト・フィールドを表示する場合は、対応する「Property Value」テキスト・ボックスに「true」を入力します。それ以外の場合は、このテキスト・ボックスに「false」を入力します。 注意: このデータ・プロパティのデフォルト値は true です。
Check Box (Display Only)	Visible Field	Oracle Identity Manager でのフォーム生成時にこのチェック・ボックスを表示する場合は、対応する「Property Value」テキスト・ボックスに「true」を入力します。それ以外の場合は、このテキスト・ボックスに「false」を入力します。 注意: このデータ・プロパティのデフォルト値は true です。
Text Area (Display Only)	Number of Rows	対応する「Property Value」テキスト・ボックスに、テキスト領域の行の長さを入力します。したがって、テキスト領域の長さを 5 行にする場合は、「Property Value」テキスト・ボックスに「5」を入力します。
	Visible Field	Oracle Identity Manager でのフォーム生成時にこのテキスト領域を表示する場合は、対応する「Property Value」テキスト・ボックスに「true」を入力します。それ以外の場合は、このテキスト・ボックスに「false」を入力します。 注意: このデータ・プロパティのデフォルト値は true です。
Date and Time Window	Required	フォームを保存するためにこのテキスト・フィールドへの移入を必要にする場合は、対応する「Property Value」テキスト・ボックスに「true」を入力します。それ以外の場合は、このテキスト・ボックスに「false」を入力します。 注意: このテキスト・フィールドにデータを移入するには、このテキスト・フィールドをダブルクリックし、表示される Date & Time ウィンドウから日付と時刻を選択します。 注意: このデータ・プロパティのデフォルト値は false です。
	Visible Field	Oracle Identity Manager でのフォーム生成時にこのテキスト・フィールドを表示する場合は、対応する「Property Value」テキスト・ボックスに「true」を入力します。それ以外の場合は、このテキスト・ボックスに「false」を入力します。 注意: このデータ・プロパティのデフォルト値は true です。
Password Field	Required	フォームを保存するためにこのテキスト・フィールドへの移入を必要にする場合は、対応する「Property Value」テキスト・ボックスに「true」を入力します。それ以外の場合は、このテキスト・ボックスに「false」を入力します。 注意: このデータ・プロパティのデフォルト値は false です。
	Visible Field	Oracle Identity Manager でのフォーム生成時にこのテキスト・フィールドを表示する場合は、対応する「Property Value」テキスト・ボックスに「true」を入力します。それ以外の場合は、このテキスト・ボックスに「false」を入力します。 注意: このデータ・プロパティのデフォルト値は true です。
Radio Button	Button Labels	対応する「Property Value」テキスト・ボックスに、ラジオ・ボタンのラベルを入力します。複数のラジオ・ボタンの場合、このラベルは、各ラジオ・ボタンが含まれるグループ・ボックスのヘッダーを表します。 複数のラジオ・ボタンにラベルを適用する場合は、「Property Value」テキスト・ボックスに各ラベルをカンマで区切って入力します (例: Sun, Microsoft)。Oracle Identity Manager によってフォームが生成されると、これらのラジオ・ボタンがグループ・ボックスで囲まれ、各ボタンが互いに関連付けられていることが示されます。
	Button Values	対応する「Property Value」テキスト・ボックスに、ラジオ・ボタンの値を入力します。ユーザーがラジオ・ボタンを選択すると、この値がデータベースに送られます。 複数のラジオ・ボタンの場合は、「Property Value」テキスト・ボックスに各ラベルをカンマで区切って入力します (例: on, off)。

データ型	データ・プロパティ	説明
Radio Button	Required	<p>フォームを保存するためにラジオ・ボタンの選択を必要にする場合は、対応する「Property Value」テキスト・ボックスに「true」を入力します。それ以外の場合は、このテキスト・ボックスに「false」を入力します。</p> <p>注意: このデータ・プロパティのデフォルト値は false です。</p>
	Visible Field	<p>Oracle Identity Manager でのフォーム生成時にこのラジオ・ボタン（またはラジオ・ボタンのグループ）を表示する場合は、対応する「Property Value」テキスト・ボックスに「true」を入力します。それ以外の場合は、このテキスト・ボックスに「false」を入力します。</p> <p>注意: このデータ・プロパティのデフォルト値は true です。</p>
Check Box	Required	<p>フォームを保存するためにこのチェック・ボックスの選択を必要にする場合は、対応する「Property Value」テキスト・ボックスに「true」を入力します。それ以外の場合は、このテキスト・ボックスに「false」を入力します。</p> <p>注意: このデータ・プロパティのデフォルト値は false です。</p>
	Visible Field	<p>Oracle Identity Manager でのフォーム生成時にこのチェック・ボックスを表示する場合は、対応する「Property Value」テキスト・ボックスに「true」を入力します。それ以外の場合は、このテキスト・ボックスに「false」を入力します。</p> <p>注意: このデータ・プロパティのデフォルト値は true です。</p>
Combo box	Lookup Code	<p>対応する「Property Value」テキスト・ボックスに、参照定義コードを入力します。このコードには、ボックス項目や、参照値を選択したときにボックスとともに表示されるテキストなど、ボックスに関連するすべての情報が含まれます。</p> <p>重要: 「Lookup Code」データ・プロパティは、「Column Captions」、「Column Names」、「Column Widths」、「Lookup Column Name」および「Lookup Query」プロパティのかわりに使用できます。さらに、「Lookup Code」プロパティに含まれる情報は、この5つのデータ・プロパティに設定されている値より優先されます。</p> <p>ヒント: 参照コードを入力する簡単な方法は、「Lookup Definition」フォームを起動して目的のコードを問い合わせ、このコードをクリップボードにコピーして「Lookup Code」フィールドに貼り付けることです。</p> <p>注意: 参照定義コードの分類タイプは「Lookup Type」である必要があります（「Lookup Definition」フォームの「Lookup Type」ラジオ・ボタンが選択されている必要があります）。</p>
	Required	<p>フォームを保存するためにこのボックス・フィールドからの項目の選択を必要にする場合は、対応する「Property Value」テキスト・ボックスに「true」を入力します。それ以外の場合は、このテキスト・ボックスに「false」を入力します。</p> <p>注意: このデータ・プロパティのデフォルト値は false です。</p>
	Visible Field	<p>Oracle Identity Manager でのフォーム生成時にこのボックスを表示する場合は、対応する「Property Value」テキスト・ボックスに「true」を入力します。それ以外の場合は、このテキスト・ボックスに「false」を入力します。</p> <p>注意: このデータ・プロパティのデフォルト値は true です。</p>
Text Field (Display Only)	Visible Field	<p>Oracle Identity Manager でのフォーム生成時にこのテキスト・フィールドを表示する場合は、対応する「Property Value」テキスト・ボックスに「true」を入力します。それ以外の場合は、このテキスト・ボックスに「false」を入力します。</p> <p>注意: このデータ・プロパティのデフォルト値は true です。</p>

データ型	データ・プロパティ	説明
Lookup Field (Display Only)	Auto Complete	<p>対応する「Property Value」テキスト・ボックスに「true」を入力すると、Oracle Identity Manager によって「Lookup」フィールドがフィルタリングされます。このため、ユーザーは、「Lookup」フィールドに文字を追加してからダブルクリックできます。これを行うことにより、Lookup ウィンドウにはこれらの文字と一致する参照値のみが表示されます。</p> <p>たとえば、「State」参照フィールドに対して、ユーザーはフィールドに「new」を入力できます。この場合、ユーザーが「Lookup」フィールドをダブルクリックすると、「new」という文字で始まる州（たとえば、New Hampshire、New Jersey、New Mexico、New York など）のみが Lookup ウィンドウに表示されます。</p> <p>Oracle Identity Manager により「Lookup」フィールドのフィルタリングが行われないようにする場合は、関連付けられた「Property Value」テキスト・ボックスに「false」を入力します。</p> <p>「Auto Complete」プロパティのデフォルト・プロパティ値は false です。</p>
	Visible Field	<p>Oracle Identity Manager でのフォーム生成時にこの「Lookup」フィールドを表示する場合は、対応する「Property Value」テキスト・ボックスに「true」を入力します。それ以外の場合は、このテキスト・ボックスに「false」を入力します。</p> <p>注意: このデータ・プロパティのデフォルト値は true です。</p>

システム・プロパティ

次の表は、Oracle Identity Manager のシステム・プロパティのリストとその説明を示しています。

名前	説明	キーワード	値	S*	実行される場所
Organization Process Inheritance	組織に対して許可されたプロセスをサブ組織が継承するかどうかを指定します。	XL.Organization ProcessInherit	TRUE	v	S
Organization Process Restriction	組織に対して使用可能なプロセスを、親組織の使用可能なプロセス（親組織のサブセットではない）に限定するかどうかを指定します。	XL.Organization ProcessRestrict	FALSE	v	S
Base Help URL	オンライン・ヘルプ・ファイルの場所。	XL.BaseHelpUrl	//docs/thortech.com/72/	v	C
Pending Cancelled Tasks	このプロパティを TRUE に設定した場合、プロセス内の 1 つのタスクが取り消されると、そのプロセスの他のすべてのタスクも取り消されます。	XL.PendingCancelled	True	v	S
Automator Polling Interval	ジョブ・スケジューラの頻度（分）を設定し、スケジュール済のジョブ・タスクを確認します。	AUTOMATOR.INTERVAL	2	v	C
Maximum Connection Count	接続プール内に作成できるデータベース接続の最大数を設定します。	XL.MAX_CONN_CNT	50	v	S

名前	説明	キーワード	値	S*	実行される場所
Connection ratio	接続プール内のデータベース接続を共有できるユーザーの数を設定します。	XL.DB_RATIO	2	v	S
Initial Connection Count	ユーザーが共有できるデータベース接続の初期数を設定します。	XL.INITIAL_CO NN_CNT	1	v	S
Connection Test Interval	接続プール内に接続障害がないか確認する頻度を設定します。	XL.TEST_INTER VAL	900,000	v	S
Pool Shrink Interval	接続率と現在のユーザー数に基づいて、接続を閉じ、プールを縮小することができます。	XL.SHRIK_IN TERVAL	900,000	v	S
Record Read Limit	問合せ結果セットに表示できるレコードの最大数を設定します。	XL.READ_LIMI T	500	v	C
Number of Questions	ユーザーがユーザーのパスワードをリセットするために Web アプリケーションを使用して完了する必要がある質問の数を設定します。	PCQ.NO_OF_Q UES	3	v	C
Use of Default Questions	Web アプリケーションで定義された質問に答えることをユーザーに要求するか、あるいは、ユーザーが独自の質問を指定できるかを指定します。	PCQ.USE_DEF_ QUES	TRUE	v	C
Force to set questions at startup	ユーザーは、初めて Web アプリケーションにログインするとき、パスワードをリセットするためのデフォルトの質問を設定する必要があります。	PCQ.FORCE_SE T_QUES	TRUE	v	C
Orbix IDL Compiler Location	フォームを生成する場合は、このプロパティを設定する必要があります。これは Orbix IDL コンパイラの場所を示します。	SDK.IDL_COMP ILER	C:\IONA\BIN		C
IDL Files Location	フォームを生成する場合は、このプロパティを設定する必要があります。これは IDL ファイルの場所を示します。	SDK.IDL_SOUR CE_PATH	C:\DEVEL\JA VA		C
JavaDoc Executable Location	フォームを生成する場合は、このプロパティを設定する必要があります。これは JavaDoc 実行可能ファイルの場所を示します。	SDK.JAVADOC_ CMD	C:\JDK1.3\BIN \JAVADOC		C

名前	説明	キーワード	値	S*	実行される場所
Compiled JAR File Location	フォームを生成する場合は、このプロパティを設定する必要があります。これは、Oracle Identity Manager が JAR ファイルを配置する場所を示します。	SDK.JAR_LOCATION	C:\DEVEL\JAVA		C
User Id reuse property	削除されたユーザー・アカウントを再利用できるかどうかを指定します。削除されたユーザー・アカウントを再利用するには、このプロパティに TRUE の値を割り当て、USR 表の USR_LOGIN 列に対する一意の索引を削除し、一意でない索引を作成します。ユーザー・アカウントを再利用できなくするには、このプロパティに FALSE の値を割り当てます。	XL.UserIDReuse	FALSE		C
Organization Self-Serviceable	プロセスのデフォルト値がセルフサービス可能か、および設定されているかどうかを指定します。	ORG.SELF_SERVICEABLE_DEFAULT	FALSE		C
Allow application-password change for web application	ユーザーに各アプリケーション・パスワードの変更が許可されるか、あるいは Oracle Identity Manager パスワードの変更のみが許可されるかを指定します。	PWR.ENABLE_PASSWORD_CHANGE	FALSE		C
Property dictates whether database name appears		XL.TOOLBAR_DBNAME_DISPLAY	FALSE	v	C
Direct Provisioning vs Request for Access Policy Conflicts		XL.DirectProvision	FALSE		S
Organization Delete/Disable Action		ORG.DisableDeleteActionEnabled	FALSE		S
Show TAME in the Adapter Factory selection task list		AF.TAME_DISPLAY	TRUE	v	C
Email Server		XL.MailServer	localhost		S
User Language		user.language		v	C
User Region		user.region	US	v	C
User Variant		user.variant		v	C

名前	説明	キーワード	値	S*	実行される場所
Database Maximum Connection Count	これは、オープンする接続の最大数です。この制限に達すると、接続を要求しているスレッドは、接続が利用可能になるまでキューに配置されます。	XL.DB_MAX_C ONN_CNT	25		S
Database Idle Connection Timeout	これは、接続が未使用状態であることのできる最大秒数です。この秒数を超えると、接続がクローズされます。	XL.DB_IDLE_TI MEOUT	900		S
Database Forced Connection Timeout	これは、スレッドが接続をチェックアウトできる最大回数です。この回数を超えると、スレッドはクローズされてプールに戻されます。タイムアウトはスレッドの廃棄を回避する保護策であり、これによって接続は無期限にチェックアウト状態になります。	XL.DB_FORCED _TIMEOUT	10800		S
Database maximum Connection Usage	この値がゼロ (0) より大きい場合、接続がクローズされるまで、接続をその回数チェックアウトできます。これは、ResultSet.close() と Statement.close() をコールしない場合に発生するカーソル・リークを回避するための保護策として使用されます。	XL.DB_MAX_C ONN_USAGE	9000		S
Database Trace Enabled	このパラメータは、トレースのオンとオフを切り替えるために使用します。オンにした場合、プールに関する verbose メッセージが STDERR に出力されません。	XL.DB_TRACE_ ENABLED	FALSE		S
Request Email		Request.Approval Email			S
Scheduler Polling Interval		Scheduler.PollingInterval	300000		S
Number of Correct Answers	この値は、ユーザーがパスワードをリセットするために正解する必要がある質問の数を表します。	PCQ.NO_OF_C ORRECT_ANS WERS	3	v	C

名前	説明	キーワード	値	S*	実行される場所
Maximum Number of Login Attempts	<p>この値は、ユーザーが Oracle Identity Manager へのログインを連続して試行できる回数を表します。この回数を超えても成功しない場合、Oracle Identity Manager に よってユーザーのアカウントがロックされます。</p> <p>注意: ユーザーのアカウントがロックされると、ユーザーは、パスワードのリセットに関連付けられたチャレンジ質問をリセットすることにより、アカウントのロックを解除できます。</p>	XL.MaxLoginAttempts	3	v	C
Maximum Number of Password Reset Attempts	<p>この値は、ユーザーがパスワードのリセットを連続して試行できる回数を表します。この回数を超えても成功しない場合、Oracle Identity Manager に よってユーザーのアカウントがロックされます。</p> <p>重要: ユーザーのアカウントがロックされた後、ユーザーがアカウントのロックを解除することはできません。アカウントがロックされた場合は、システム管理者に連絡してください。</p>	XL.MaxPasswordResetAttempts	3	v	
Self Registration Email From Address		XL.SelfRegistrationEmailFromAddress	selfreg@xlselfreg.com	v	
Profile Edit Email From Address		XL.ProfileEditEmailFromAddress	selfreg@xlselfreg.com	v	S
Is Self-Registration Allowed		XL.SelfRegistrationAllowed	TRUE	v	C
Does user have to provide challenge information during registration		PCQ.PROVIDE_CHALLENGE_DURING_SELFREGISTRATION	TRUE	v	C

B

サービス・アカウントの管理

この付録では、Oracle Identity Manager のサービス・アカウントを変更および管理する方法について説明します。次の内容について説明します。

- B-2 ページの「[概要](#)」

概要

サービス・アカウントは、メンテナンス用に使用される全体的な管理アカウント（たとえば `admin1`、`admin2`、`admin3` など）です。通常、これらのアカウントは、(1人のユーザーではなく) 1つのシステムが別のシステムと対話するのを許可するために使用されます。サービス・アカウントの管理とプロビジョニングのモデルは、通常のプロビジョニングと多少異なります。

サービス・アカウントは、通常のアカウントと同様に、リクエスト、プロビジョニングおよび管理できます。また、通常のアカウントと同じリソース・オブジェクト、プロビジョニング・プロセス、およびプロセス・フォームとオブジェクト・フォームを使用します。通常のアカウントと異なるのは、ライフサイクルの管理方法、およびライフサイクルに対して行われる処理です。

サービス・アカウントは内部フラグで通常のアカウントと区別されます。ユーザーに対してサービス・アカウントがプロビジョニングされると、**Oracle Identity Manager** はそのユーザーの ID からサービス・アカウントへのマッピングを管理します。このユーザーは、サービス・アカウントの所有者とみなされます。

ここでは、次の内容について説明します。

- B-2 ページの「[サービス・アカウントの変更](#)」
- B-2 ページの「[サービス・アカウント・アラート](#)」
- B-3 ページの「[移動したサービス・アカウント](#)」
- B-3 ページの「[API](#)」
- B-3 ページの「[サービス・アカウント管理の動作](#)」

サービス・アカウントの変更

ユーザー（管理者）は、既存の通常のアカウントをサービス・アカウントに変更したり、既存のサービス・アカウントを通常のアカウントに変更できます。このような変更を行うと、プロビジョニング・プロセスに「**Service Account Change**」タスクが挿入され、「**Process Definition**」の「**Tasks**」タブでアクティブになります。このプロビジョニング・プロセスに関連付けられているすべてのアダプタが実行されます。アダプタが関連付けられていない場合は、事前定義済みのレスポンス・コードが添付されます。

この機能の関連 API は次のとおりです。

- `tcUserOperations.changeFromServiceAccount`
- `tcUserOperations.changeToServiceAccount`

サービス・アカウント・アラート

サービス・アカウントのリンク先ユーザーに対するライフサイクル・イベントが発生すると、そのサービス・アカウント・インスタンスのプロビジョニング・プロセスに、「**Service Account Alert**」タスクが挿入されます。ユーザー（管理者）は、ユーザーに対して発生したイベントに対応するために、このタスクを使用して適切なアクションを開始できます。

条件に合うユーザーのライフサイクル・イベントは、ユーザーの無効化または削除です。このような場合、サービス・アカウント・インスタンスで発生する唯一のアクションは、「**Service Account Alert**」タスクの挿入です。

この動作は、(明示的にサービス・アカウントを無効化するなどして) 直接サービス・アカウントのイベントに対して行われることはありません。

移動したサービス・アカウント

ユーザー（管理者）は、サービス・アカウントの所有権を1人のユーザーから別のユーザーへ移すことができます。その結果、新しい所有者のリソース・プロファイルにプロビジョニング・インスタンスが表示され、古いユーザーのリソース・プロファイルには表示されなくなります。アカウントを移動すると、リソース・インスタンスのプロビジョニング・プロセスに、「Service Account Moved」タスクが挿入されます。このプロビジョニング・プロセスに関連付けられているすべてのアダプタが起動します。アダプタが関連付けられていない場合は、事前定義済みのレスポンス・コードが添付されます。

サービス・アカウントの移動に使用する API メソッドは、`tcUserOperationsIntf.moveServiceAccount` です。

API

次のメソッドによってフラグが設定されます。

- `tcRequestOperations.addRequestObject`
- `tcRequestOperations.setRequestObjectAsServiceAccountFlag`
- `tcUserOperations.changeFromServiceAccount`
- `tcUserOperations.changeToServiceAccount`
- `tcUserOperations.provisionObject`
- `tcUserOperations.moveServiceAccount`
- `tcObjectOperations.getServiceAccountList`

サービス・アカウント管理の動作

サービス・アカウント管理に関して、次のようなデータ・ポイントがあります。

- サービス・アカウントは、通常のアカウントと同様に、リクエスト、プロビジョニングおよび管理できます。サービス・アカウントと通常のアカウントは、同じリソース・オブジェクト、プロビジョニング・プロセスおよびプロセス・フォームとオブジェクト・フォームを使用することで共通しています。サービス・アカウントと通常のアカウントは、フラグでのみ識別されます。このフラグは、リソースをリクエストするユーザーまたはリソースを直接プロビジョニングする管理者によって設定されます（つまり、API で公開および処理されます）。
- サービス・アカウントは、ライフサイクルの中で通常のアカウントに変更することができ、同様に、通常のアカウントはサービス・アカウントに変更可能です。このような変更が発生すると、「Service Account Changed」タスクがトリガーされます。
- ユーザーが削除されても、リソースは失効しないため（サービス・アカウントのプロビジョニング・プロセスは取消しできません）、取消しタスクは起動しません。かわりに、「Service Account Alert」タスク機能がトリガーされます。
- ユーザーが無効化されても、リソースは無効化されません（無効化のタスクはサービス・アカウント・インスタンスのプロビジョニング・プロセスに挿入されません）。かわりに、「Service Account Alert」タスク機能がトリガーされます。
- （直接またはリクエスト経由の）サービス・アカウント・インスタンスの明示的な無効化、有効化および失効は、通常のアカウントと同様に管理され、動作します。
- Oracle Identity Manager API を使用して、プロビジョニングされたサービス・アカウントのリソース（プロビジョニング・プロセス、プロセス・フォーム・エントリなど）をユーザーからユーザーへ移動できます。このような移動が発生すると、「Service Account Move」タスク機能がトリガーされます。

フォーム・バージョン制御ユーティリティ

この付録では、フォーム・バージョン制御ユーティリティの有効範囲、コンテンツおよび説明を示します。次の内容について説明します。

- [FVC ユーティリティの有効範囲](#)
- [FVC ユーティリティのコンテンツ](#)
- [FVC ユーティリティの説明](#)
- [リリース・ノート](#)

FVC ユーティリティの有効範囲

次の表に、このユーティリティで実装される機能の有効範囲を示します。

機能	実装 (○/×)	コメント
プロセス・フォーム・バージョンのアップグレード	○	ターゲット・フォーム・バージョンが存在し、かつアクティブなフォーム・バージョンであることを確認してください。
子フォーム・バージョンのアップグレード	○	子フォーム・バージョンは、アクティブな親フォームに属する子フォームに、自動的にアップグレードされます。
親フォームの値のアップグレード	○	ターゲット・フォーム・バージョンが存在し、かつアップグレード対象の値を持つフィールドが含まれていることを確認してください。
子フォームの値のアップグレード	○	ターゲット子フォームが存在し、かつユーザーに対してその子フォームがプロビジョニングされていることを確認してください。
子フォームの値の挿入	○	アクティブな親フォームに属する子フォーム・バージョンに、挿入対象のフィールドが存在することを確認してください。

FVC ユーティリティのコンテンツ

次の表に、FVC ユーティリティを構成するファイルの名前とパス、および説明を示します。

ファイル名 (パス付き)	説明
<XLCLIENT_HOME>%lib%\xlFvcUtil.jar	この jar ファイルには、フォーム・バージョン制御ユーティリティを実行するのに必要な、このユーティリティのクラスが含まれます。
<XLCLIENT_HOME>%xlFvcUtil.ear	この ear ファイルには、フォーム・バージョン制御ユーティリティを実行するのに必要な、このユーティリティのクラスが含まれます。この ear ファイルは、WebSphere launchClient ユーティリティの実行用に同梱されています。
<XLCLIENT_HOME>%fvc.properties	このファイルには、ソースおよびターゲットのフォーム・バージョン、それらのフィールドと値、および子フォームの情報に関するすべての構成プロパティが含まれます。
<XLCLIENT_HOME>%fvcutil.cmd	これらのファイルは、Windows システムでフォーム・バージョン制御ユーティリティを実行するための cmd スクリプトおよびシェル・スクリプトです。fvcutil.cmd を実行する場合、コマンドライン引数として Oracle Identity Manager データベースの管理者パスワードを指定する必要があります。
<XLCLIENT_HOME>%fvcutil_websphere.cmd	

FVC ユーティリティの説明

フォーム・バージョン制御ユーティリティは、カスタム・プロセス・フォームのバージョン番号フィールドおよび追加のプロセス・フォーム・フィールドのデータを更新するために設計されています。このユーティリティは、コマンド・コンソールから起動され、ログイン用のコマンドライン・パラメータおよびプロパティ・ファイルを使用して動作します。ユーザーは、Oracle Identity Manager データベースの管理者パスワードを入力するように求められます。このパラメータのプロパティおよびユーザーのログインとパスワードの妥当性が検証され、エラーが発生した場合には、それを通知する適切なエラー・メッセージが作成されます。

リリース・ノート

- システム要件に従い、ユーティリティは、ステータスが「Revoked」でないオブジェクトのプロセス・フォームのみを更新します。
- このユーティリティには、フォーム・フィールド値を更新する必要があるにもかかわらずフォーム・バージョンを変更できない場合の、特別なプロビジョニングが含まれています。この場合は、<version to> パラメータと <version from> パラメータが同じであることが必要です。エラーが作成されるかわりに、指定したバージョンのフィールド値が更新され、バージョン値自体は変更されません。
- このユーティリティには、子レコードの挿入を許可する機能は含まれていません。1つの子表レコードは、単一の子表フィールドとみなされます。たとえば、fvc.properties ファイルに次のエントリが存在するとします。

```
Child;UD_CF3_FIELD7;tiger;Insert
```

```
Child;UD_CF3_FIELD8;mad;Insert
```

```
Child;UD_CF3_FIELD9;me2;Insert
```

この場合は、3つのフィールドに対して前述の値を持つ単一の子レコードが作成および挿入されるかわりに、子表に3つの異なる行が作成されます。

- fvc.properties ファイルの ToVersion プロパティに「Active Version」の値が割り当てられている場合は、カスタム・プロセス・フォームの更新のみに、このユーティリティを使用できます。
- 新しいフィールドのデフォルト値は、プロパティ・ファイルで定義する必要があります。

索引

A

Action, 9-25
Adapter Factory, 9-2
「Adapter Factory」フォーム, 9-2
Adapter Manager, 9-2
「Adapter Manager」フォーム, 9-3
「Administrative Queues」フォーム, 5-7
Assignment ウィンドウ, 4-6

B

Base Help URL, A-17

C

Close, 3-4
Code, 9-25
Column Name, 8-12
Context Sensitive Help URL, 8-3
[Ctrl], 4-6

D

Data Object Manager, 9-2, 10-2
Data Type, 8-11
Date, 4-3
Default Value, 8-12
Delete, 6-6
Dependency, 7-26
 Task, 7-26
Description, 9-25

E

「Edit」メニュー, 3-3
「Email Definition」フォーム, 7-2
Encrypted, 8-12
End-Users, 5-3
Error Message Definition, 9-2
Event Handler Manager, 9-2
「Event Handler Manager」フォーム, 10-2
Exit, 3-3

F

Field Size, 8-11
Field Type, 8-11

「File」メニュー, 3-3
First, 3-4
Form Designer, 9-2
「Form Designer」フォーム, 9-3
Form Information, 8-2
FVC ユーティリティのコンテンツ, C-2
FVC ユーティリティの説明, C-3
FVC ユーティリティの有効範囲, C-2

G

General, 7-19
「Group Entitlements」フォーム, 5-5

H

Help URL, 9-25
「Help」メニュー, 3-4

I

Integration, 7-23
IT Resource Type Definition, 6-2
「IT Resources Type Definition」フォーム, 6-2
IT リソース, 6-2

K

Key, 9-25

L

Label, 8-11
Last, 3-4
Login, 3-3
Lookup, 3-6
Lookup Definition, 8-2
Lookup Query, A-13
「Lookup」フィールド, 4-2

N

New, 3-4
Next, 3-4
Note, 9-25
Notes, 3-5
Notes ウィンドウ, 4-4
Notification, 7-31

O

Oracle Identity Manager エクスプローラ, 3-7
Oracle Identity Manager エクスプローラの変更, 8-4
Oracle Identity Manager の起動, 2-2
Oracle Identity Manager のショートカット, 3-6
Oracle Identity Manager メニュー・バー, 3-3
Oracle Identity Manager ワークスペース, 3-8
Organization Provisioning, A-3
「Organizational Defaults」フォーム, 5-2

P

「Policy History」タブ, 5-4
「Policy History」フォーム, 5-3
Previous, 3-4
「Process Definition」フォーム, 7-7

R

「Reconciliation Manager」フォーム, 5-11
Remedy, 9-25
Remote Manager, 8-2
Reset Count, 9-25
Resource Objects, 6-2
Rule Designer, 6-2

S

Sequence, 8-12
Severity, 9-25
System Configuration, 8-2

T

Task Scheduler, 8-2
Time, 4-3
「Toolbar」メニュー, 3-4

U

UDDI, 1-2
User Defined Columns, 8-9
User Defined Field Definition, 8-2, 8-8

W

Web ベースのユーザー・セルフサービス, 1-2

あ

アプリケーション・サーバー, 1-4

い

移動したサービス・アカウント, B-3
イベント・ハンドラ, 6-22

え

エンドユーザー管理者, 5-3

お

オートメータ, A-17

か

監査証跡アカウンティングの詳細レポート機能, 1-2

き

行ヘッダー, 3-9

く

クライアント, 1-3
黒色のラベル, 4-2

け

継承, A-17
結果セット制限超過, 4-9
検索問合せの作成, 4-7
検索の実行, 4-8

こ

広範なユーザー管理, 1-2
コンボ・ボックス, 4-4

さ

サービス・アカウント・アラート, B-2
サービス・アカウント管理の動作, B-3
サービス・アカウントの変更, B-2
作成, 7-9
 プロセス定義, 7-9

す

スケーラブル・アーキテクチャ, 1-2

せ

接続数, A-17
接続プーリング, 1-4

て

定義, 6-3
 IT リソース, 6-3
データ・フィールド, 4-2
データベース, 1-4
電子メール通知, 7-31
 割当て, 7-31
電子メール通知の削除, 7-32

と

問合せ機能, 4-6
問合せ結果セット, 4-8
問合せのパフォーマンス最適化, 4-9

ひ

表, A-2
表ビュー, 3-9

ふ

フォーム・タブ, 4-5
フォーム・ビュー, 3-8
プロセス・エンジン, 1-2
プロセス・タスクの変更, 7-19

め

メタデータ, 1-4

り

リリース・ノート, C-3

れ

列ヘッダー, 3-9

わ

ワークフロー定義レンダラ, 7-10
ワイルドカード, 4-7
割当て, 6-22
 イベント・ハンドラまたはアダプタ, 6-22

